Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-21

日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究　ーフィラーの定義と個々の形式の使い分けについてー

大工原，勇人

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2010-03-25
(Date of Publication)
2014-04-04
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲4831
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004831

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

博士論文

日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究
―フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて―

審査委員：　石黒　圭　准教授

定延　利之　教授

水野　マリ子　教授

平成 22 年 1 月

神戸大学大学院国際文化学研究科

大工原　勇人

目次

第１章　序 ……1

1.1　はじめに ……1

1.2　フィラーの定義 ……3

1.3　本論文の構成 ……13

第１部　本研究の背景 ……14

第２章　日本語教育におけるフィラーの指導の必要性と課題 ……14

2.1.　フィラーの指導の必要性 ……14

2.1.1　フィラーと談話管理 ……15

2.1.2　その他の発話効果 ……15

2.1.3　フィラーと自然さ ……16

2.1.4　本当にフィラーの指導は必要か？ ……17

2.2.　フィラーの指導の方法論 ……20

2.3.　日本語教科書・参考書に見るフィラーの指導の現状 ……22

2.3.1　日本語教科書におけるフィラー ……23

2.3.1.1　初級日本語教科書におけるフィラー ……23

2.3.1.2　中級日本語教科書におけるフィラー ……26

2.3.2　上級・超級学習者・教師用参考書におけるフィラー ……28

2.3.3　教科書・参考書におけるフィラーの扱いの問題点 ……30

2.4.　効果的なフィラー指導の実現ために解決すべき課題 ……31

第３章　日本語のフィラーに関する先行研究の概観 ……33

3.1.　日本語のフィラーに関する先行研究 ……33

3.1.1.　外部観察的アプローチによる研究 ……33

3.1.1.1.　フィラー全体を対象とした談話分析的な研究 ……33

3.1.1.2.　個々のフィラーを対象とした談話分析的研究 ……36

3.1.1.3.　フィラーについての計量的研究 …… 37
3.1.2.　認知主義的アプローチによる研究 …… 40
3.2.　先行研究の成果と残された課題 …… 44
第２部　個々のフィラーの用法の記述 …… 46
第４章　本研究の目的と方法 …… 46
4.1　本研究の目的 …… 46
4.2　本研究の方法・データ …… 47
4.2.1　認知主義的アプローチ …… 47
4.2.2　本研究のデータ …… 50
4.3　理論的前提 …… 53
4.3.1　心内情報処理機構 …… 54
4.3.2　話し手はフィラーを「用いる」のか？ …… 56
第５章　言語形式製作に関わるフィラー …… 60
5.1　先行研究・問題の所在 …… 60
5.2　指示詞系フィラーと心内行動 …… 61
5.2.1　仮説：指示詞系フィラーと指示詞との連続性 …… 61
5.2.2　検証１:「その（ー)」とソ系指示詞の連続性 …… 63
5.2.3　検証２:「あの（ー)」とア系指示詞の連続性 …… 66
5.3　指示詞系フィラーのコミュニケーション上の効果 …… 68
5.4　フィラー「その（ー)」と連体詞「この（ー)」の間 …… 71
5.5　まとめ …… 74
第６章　課題解決行動に関わるフィラー …… 75
6.1　課題解決行動とフィラー …… 75
6.2　「えーと」と「うーん」 …… 77
6.2.1　先行研究の問題点 …… 77
6.2.2　解決の見通し説 …… 79

6.2.3　仮説の検証 …… 80
6.2.4　「えーと」・「うーん」の表現効果 …… 83
6.3　「そー（ですねー）」 …… 85
6.3.1　先行研究の問題点 …… 86
6.3.2　「選択」か「意見・判断」か …… 87
6.3.3　「そー（ですねー）」と対人コミュニケーション …… 88
6.3.4　「そー（ですねー）」と他のフィラーの組み合わせ …… 90
6.4　フィラー的な空気すすり …… 91
6.4.1　先行研究の問題点 …… 91
6.4.2　課題解決の責任 …… 92
6.4.3　仮説の検証 …… 93
6.4.4　空気すすりと他のフィラーの組み合わせ …… 96
6.4.5　フィラー的な空気すすりを「フィラー」に含めるべきか？ …… 96
6.5　「と」問題 …… 100
6.6　まとめ …… 106
第７章　「なんか」とエビデンシャリティ …… 107
7.1　考察対象 …… 107
7.2　先行研究とその問題点 …… 108
7.2.1　「なんか雨降ってきたよ」の「なんか」はどんな意味か？ …… 108
7.2.2　「なんか明日は雨が降るだろう」はなぜ不自然か？ …… 109
7.2.3　「なんかー，窓を開けてください」はなぜ不自然か？ …… 110
7.2.4　特殊な韻律の「『なーん’かうさんくさいなー」はどんな意味か？ …… 110
7.3　エビデンシャル仮説 …… 111
7.3.1　前提：認知者と環境とのインタラクション …… 111
7.3.2　副詞「なんか」・「どうも」の意味 …… 112
7.3.2.1　「なんか」の意味 …… 112
7.3.2.2　「どうも」の意味 …… 114
7.3.3　副詞「なんか」・「どうも」の生起環境 …… 114

7.3.3.1　経験命題 ……115
7.3.3.1.1　視聴覚命題 ……115
7.3.3.1.2　体感命題 ……115
7.3.3.1.3　推定命題 ……116
7.3.3.2　自明の命題 ……117
7.3.3.3　疑問・仮説 ……118
7.3.3.4　行為遂行的発話 ……118
7.4　反復認知仮説 ……119
7.5　「なんか」のフィラー化を認めるべきか？ ……121
7.6 まとめ ……126
第８章　「まあ」と「内心のわだかまり」 ……128
8.1.　考察対象 ……128
8.2.　問題の所在 ……130
8.2.1　但し書き的用法と強調的用法の相違 ……130
8.2.3　「まあ」の生起環境 ……131
8.2.3.1　「まあ」の共起制限 ……131
8.2.3.2　「まあ」の生起位置 ……133
8.2.4　「まあ」は副詞か感動詞か？ ……135
8.3　但し書き的用法 ……135
8.3.1　「まあ」の意味の相対性 ……136
8.3.2　明示的但し書きと非明示的但し書き ……139
8.3.1.1　明示的但し書き ……139
8.3.1.2　非明示的但し書き ……141
8.3.3　但し書きを加えるのが自然か否か ……143
8.3.4　なだめの「まあ」 ……145
8.3.5　「まあ」の品詞論 ……147
8.3.5.1　但し書き的「まあ」となだめの「マア」の品詞論 ……147
8.3.5.2　フィラーの「まあ」？ ……149

8.3.6　「まあ」と英語の下降上昇調との対照 ……152
8.4　強調的用法 ……155
8.4.1　「まぁー」の音声的特徴 ……155
8.4.2　「まぁー」の構文的特徴 ……156
8.4.3　「まぁー」と発話行為 ……158
8.4.4　「まぁー」と体験 ……159
8.4.5　「まぁー」の品詞論 ……160
8.5.　まとめ ……162
第９章　結論 ……164
9.1　各章のまとめ ……164
9.2　「話し言葉の文法」にむけて ……167
謝辞 ……173
【参考文献】 ……174
【学術論文・著書】 ……174
【日本語教科書・教材等】 ……183

第１章　序

1.1　はじめに

従来，文章や談話[1]の研究では，文章や談話を言語記号の一種とみなし，その構造や機能を問題とする研究が主流であった。たとえば，文章や談話を合成的な単位のように捉えてその内部構造や構成原理の解明を目指す研究（Schegloff 1968，van Dijk 1972，Halliday and Hasan 1976，ザトラウスキー 1993，Langacker 2001 など）や，談話を言語記号の使用レベル（パロール，トークン）の問題と捉えて具体的な文脈における文や語の意味・機能などを記述，理論化する研究である（Austin 1962，Searle 1969，Grice 1975，Brown and Levinson 1987，メイナード 1993 など）。しかし，近年では，文章・談話をコミュニケーション活動・行動として捉える視点からの研究も活発化しつつある。これは，言語記号やその意味を所与のものとせず，話し手（書き手）・聞き手（読み手）が刻々と流れる時間の中に身をおいて心身行動として文章・談話を織りなす活動そのもの，すなわち，話し手（書き手）の言語製作行動や聞き手（読み手）の理解行動に注目した研究である（Chafe 1994，定延 2000，串田・定延・伝［編］ 2005，2007，2008，石黒 2008a など）[2]。

言語を行為・活動として捉えた場合，その特質の一つとして時間的な制約を挙げることができる。行為的言語観の先駆者，時枝（1950:15-16）が「言語は言語主体の行為，実践としてのみ成立する。そして，それは常に時間の上に展開する。時間的事実であるということは，言語の根本的性格である」と述べたように，行為としての言語は常に時間に制約されている。そして，その時間的制約は話し言葉においてより顕著である。なぜなら，話し言葉においては，特別な場合を除いて，話し手による発話の産出と聞き手による理解との間に時空間的な隔たりがなく，発話の産出や理解といった行為を相手の目の前で瞬時に行わなければならないからである。

われわれが日常経験する話し言葉の難しさや失敗は，この時間的な制約に起因する場合が少なくない。たとえば，会社で上司に話しかけられたが，とっさに適切な敬語が出てこずに失礼な言葉遣いをしてしまったとか，会議で意見を求められたがどう答えるべきか思案している間に他の者に発話権が移ってしまったとか，事前に準備できるプレゼンテーションには自信があるが準備のできない質疑応答には自信がないとか，第二言語である英語

[1] 本研究では「文章」（テクスト，text）という用語を文字を媒体とした言語表現，「談話」（ディスコース，discourse）という用語を音声を媒体とした言語表現という意味で用いることにする。
[2] 両向性は必ずしも対立するわけではなく，また，完全に分離することもできないが，言語研究の動向をつかむ上では，「構造・機能」か，「過程・行為」かという区分は有効だろう。

で論文を読むのには不自由はないが日常会話には苦労する，などというような失敗や困難は多くの人が経験するところであろう。このように，話し言葉という活動を遂行する上で話し手や聞き手が時間的制約への対処という課題に直面することは少なくない。

話し手が，発話産出過程における時間的制約に対処する主要な言語的手段の 1 つだと考えられるのが，「ええと」，「あのー」，「うーん」などの，いわゆる「フィラー」である。フィラー（filler, pause filler, filled pause 等）は，字義通りには「発話の間を埋めるもの」というような意味で，Yngve（1970）や Brown（1977）を起源に持つと言われる[3]。この用語は，1990 年頃から日本語研究・日本語教育研究などにおいても用いられはじめ，日本語のフィラーに関する研究も徐々に蓄積されてきている。これまでの研究では，フィラーは，沈黙を回避しコミュニケーションの途絶を防ぐ，発話権を獲得・維持する（山根 2002 など），自力で発話を続けることが困難な場合に聞き手からの助け舟を得る（串田 1999），心内における情報処理作業を支援する（定延・田窪 1995），後続節の複雑さや長さについての予測を聞き手に与える（渡辺他 2006），などの働きが指摘されている。

発話産出行為における時間的制約への対処は，母語を話す場合以上に，第二言語を話す場合により切実な問題になると考えられ，外国語教育の分野においてフィラーは早くから注目されてきた[4]。日本語教育においても，1980 年代のコミュニカティブ・アプローチの出現以来，フィラーの適切な使用は，円滑な音声コミュニケーションを行う上で重要な「文法，語彙以外のコミュニケーション能力（畠 1982:64）」の 1 つとして位置づけられ，学習者にフィラーを指導する必要性が繰り返し主張されてきている（尾崎 1981, 畠 1982, 1988, 堀口 1995，庄司 1998，定延 2004，山内 2005b，2009）。

しかし，指導の必要性が活発に主張されてきた一方で，実際にフィラーを指導する方法については，今日まで具体的な提言があまりなされていない。たとえば，「初級段階から正しい用法をしっかり教えていくことによって，大きな効果が得られる（山内 2005:151）」といった大まかな方針がを示されることはあっても，その「正しい用法」とはどういうもので，それを学習者にどう教えればよいのかといった点については，ほとんど言及されることがない。山下（1990:116）が，「（フィラーは）話し言葉を指導する上で重要なポイントと思われるが，指導の方法は論じられず現在に至っている（括弧内引用者）」と指摘した状況は，この指摘から 20 年を経た今日においてもあまり変わっていないように思われる。

[3] フィラーという用語の来歴については林編著（2008:131-138）における山根の記述を参照されたい。
[4] 詳しくは，山根（2002）を参照されたい。

その最大の要因は，日本語のフィラーそのものについての基礎的研究の遅れであると考えられる。つまり，日本語学習者がフィラーを適切に使用できるように指導することが重要だと主張され，認識される一方，肝心の「日本語のフィラーを適切に使用する」ということが一体どういうことなのかが十分に明らかにされてきていないのである[5]。

本研究の目的は，日本語教育においてフィラーを効果的に指導するために必要とされる具体的な詳細を部分的ながら埋めることである。そのために本研究では個々のフィラーの用法の記述を行う。日本語のフィラーには，「ええと」，「あのー」，「そのー」などさまざまな形式があり，これら個々の形式は決して無秩序に発せられているわけではなく，それぞれに使い分けがあることが分かってきている（定延・田窪 1995 など）。しかし，こうしたフィラーの使い分けに関する研究はいまだ少なく，得られた知見も部分的・散発的なものに留まっている。本研究は，個々のフィラーがどのように使い分けられているのかをある程度体系的に記述することを通じて，「日本語のフィラーを適切に使用する」ということがどういうことなのかを明らかにし，日本語教育におけるフィラーの効果的な指導の実践に貢献することを目指す。

1.2　フィラーの定義

本研究は，日本語の「フィラー」を研究対象とし，個々の形式の用法を記述することを目的としている。そのための準備として，本節では，本研究におけるフィラーの定義を述べ，考察対象の範囲を画定する。しかし，あらかじめ述べておけば，フィラーの定義は，本節で簡単に決着がつくようなものではなく，それ自体が本研究全体，あるいは，今後の研究において取り組むべき大きな問題でもある。

前述のように，現在，日本語学・日本語教育学等の分野において「フィラー」（filler, pause filler, filled pause 等）という用語は広く浸透し，用いられている。しかし，その定義について明確な合意があるわけではない。多くの場合，はっきりと定義されないまま，「えーと」，「あのー」を典型とする語群といった程度の漠然としたイメージで用いられているのが現状であろう。もちろん，フィラーの定義を明示的に試みた先行研究も，多くはないが存在

[5] このような問題意識は工学においても共通のようである。広瀬啓吉氏は，Watanabe（2009）に寄せた序文において，「最近，ロボットなどが登場して，人間らしさを与えるにはフィラーが重要な役割を担っていることが段々分かってきました」。しかし，「適切なフィラーを入れればいいといってもどうすればいいか，工学者は困っていました。フィラーに関する研究は，特に日本語では本格的なものが全くありませんでした（Watanabe 2009:xiii）」と述べている。

する。そうした定義は大きく２つのタイプに分けることができる。１つは，フィラーという用語を「間つなぎ」,「言いよどみ」といった意味で用いるタイプ（小磯他 2004，川田 2008）であり，もう 1 つは，フィラーを命題内容に関わりを持たない発話というように定義し,「はい」,「うん」,「ほら」,「ね」など必ずしも間つなぎ・言いよどみ的でない要素までも含めた広い意味で用いるタイプ（Maynard 1989，野村 1996，山根 2002 など）である。以下，それぞれの定義の代表として小磯（2004）と山根（2002）を取り上げて検討する。

小磯他（2004）は，国立国語研究所他（2004）の『日本語話し言葉コーパス』(『The Corpus of Spontaneous Japanese』，以下，『CSJ』）の文字化・タグ付けの原則を解説したものである。小磯他（2004:9）は，フィラーを「場繋ぎ的な機能を持つ表現」と定義し，次の（1.1）の語彙の中で場繋ぎ的機能を有するものを「感情表出系感動詞」（驚いた時や落胆した時などに発する感動詞）や「応答表現」とは区別して,「フィラー」と呼んでいる[6]。なお，この定義は，Watanabe（2009）などでも採用されている。

（1.1）あ（ー），い（ー），う（ー），え（ー），お（ー），ん（ー），と（ー），ま（ー），う（ー）ん，あ（ー）（ん）の（ー），そ（ー）（ん）の（ー），う（ー）ん（ー）（っ）と（ー），あ（ー）（っ）と（ー），え（ー）（っ）と（ー），ん（ー）（っ）と（ー）

※　括弧内は任意。また，（1.1）と「～ですね」「～っすね」などが組み合わさった形式も，フィラーであるとされる。

小磯他（2004）は,「場繋ぎ的」とはどういうことなのかを全く説明していないが，字義通りに解釈すれば，沈黙回避，対人コミュニケーションにおける時間稼ぎといった意味だと推測される。しかし，そうだとすれば，直感的に「場繋ぎ的機能を持つ」と言えそうな表現は，（1.1）のほかにもいくつかあるように思われる。たとえば，次の（1.2）のような「そうですね」は，多くの日本語教科書において「場繋ぎ的」要素として扱われ，直感的にも（1.1）に挙げられた語彙と大きな違いはないように思われる。

[6] 『CSJ』のトランスクリプトには（F）というタグが付されており，文献によっては，”sounds which has a gap filling function are defined as “fillers”, and are given “F” tags int the transcripts in CSJ(Watanabe 2009:37)”といった説明もなされているため，(F) タグはフィラーを意味するように誤解するかもしれない。しかし,『CSJ』において（F）というタグは必ずしもフィラーを意味するわけではない。小磯他（2004）の説明によれば，（F）のタグは,「感情表出系感動詞」,「フィラー」,「応答表現」の３種に付される「感動詞」を意味するタグであり,「フィラー」だけに付されるわけではない。

（1.2）　A：日本の生活についてどう思いますか。

B：そうですね。便利ですが，物価が高いと思います。

（『みんなの日本語 初級Ⅰ 本冊』p.177，表記一部改変）

また，たとえば，次の（1.3）のような「なんか」を「場繋ぎ的」（フィラー）とみなす先行研究も少なくない（川上 1992，鈴木 2000，エメット 2001）。

（1.3）で，何か，あーのー，何年も前に，何か初めて，フランスに，あの一人で留学ーした時，に，フランスに行った時よりも何か新大阪の駅に，降りた時の方が，凄い怖くて，何か，えーと多分，何か，日本語だということで，後テレビとかでも，あーのー大阪弁とか流れてるんで，何か，ん身構えーがなかったからかもしれませんけれど，何か言われたこと自体は，別に，えー，字面としてはそんな大したこと言われてないんですけど，何かあーのー，物凄く，何か怒られたような感じで，で何か，ちょっとあーのー，いまだに何か大阪はちょっと，えー，偏見が抜けてません

（『日本語話し言葉コーパス』S05F1041，表記一部改変）

小磯他（2004:9）は，（1.1）に挙げた表現以外はたとえ場繋ぎ的機能を有するものであってもフィラーとはしないと述べており，上の「そうですね」や「なんか」はフィラーから除外されているが，なぜだろうか。そもそも（1.1）は，どのような基準によって選定されたのだろうか。小磯他はこうした点について何も説明しておらず，疑問が残る。

他方，山根（2002:49-51）は，フィラーを「それ自身命題内容を持たず，かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にない，発話の一部分を埋める音声現象」と定義している。山根の分類をまとめると次の（1.4）のようになる。

（1.4）（A）母音型：母音「ア（ー）」「イ（ー）」「ウ（ー）」「エ（ー）」「オ（ー）」。

（B）あいまい母音型：文字化しがたいあいまいな母音。長短 2 種類ある。

（C）エート型：「エート」「エートー」「エット」「エットネ」など。

（D）コーソー型：「コ(ー)」「コーネ」「ソ(ー)」「ソーネ」など。

（E）コソア型：指示的機能を持たない「コノ(ー)」「ソノ(ー)」「アノ(ー)」など。

（F）ナンカ型：「ナニ」「ナンカ(ー)」「ナンテユーノ」「ドーユーカ」など。

（G）ネー型：「ネ」「イヤ」「ハイ」など，話し手が聞き手の注目を集めようとして用いるもの。

（H）ハイ型：「ハイ」「ウン」「ホン」「フン」など，相づちと同じ言語形式だが，

相手に対して打たれるのではなく，納得したり理解したりしたときに自分めあてに打つもの。長音が挿入されるものも含む。

（I）マー型：「マ(ー)」「マーネ」など。

（J）モー型：「モ(ー)」「モーネ」など。

（K）ンー型：「ン(ー)」「ンートネ」「ウーン」「ウーント」など。

山根（2002）の定義の問題は，フィラーと感情表出や応答（あいづち）との境界が必ずしも明確でないことである。たとえば，山根は，「『まあ　きれい』のように感動や驚きを表す『まあ』は含めない（p.51）」と述べる一方，次の（1.5）のような「モー」は「心情の高まりを示す（p.148）」フィラーであると説明している。

（1.5）　モー　ほんとに救いがないっていいましょうか　モ　逃げ場がないって言いましょうか　（山根 2002:148，傍線引用者）

しかし，感動や驚きを表す「まあ」はフィラーではなく，心情の高まりを示す「モー」はフィラーであるとは，どういうことだろうか。境界が分かりにくいように思われる。

さらに，山根（2002）は，次の（1.6）の 02～04 行目の「ア」をフィラーとする一方，06 行目の「あ」はフィラーではないとしている。また，05 行目の「あら」もフィラーではない。しかし，こうした扱いもそれほど分かりやすいものではないだろう。なぜ同じ「あ」を別々に扱わなければならないのか，「ア」をフィラーとし，「あら」をフィラーとしない基準は何なのか，といった疑問が生じる。

（1.6）　01A：もしもし

02B：ア　もしもし

03B：ア　××（名字）さんのお宅ですか　（はい　そうです）

04B：ア　山根ですけど

05A：あら　智恵ちゃん

06A：あ　うん　わたしわたし　ウン　（山根 2002:249　表記一部改定）

このように，山根の定義は信頼性（すなわち，山根の規定する内包にしたがえば，誰もがある任意の要素 a について，それがフィラーであるか否かを安定して判定できるかどうか）において疑問が残る。

以上をまとめると，まず，小磯他（2004）と山根（2002）の定義は，フィラーを感動詞

のサブカテゴリーとして設定している点で共通している[7]。両者の違いは，小磯他（2004）が感動詞の中で「場繋ぎ的機能を持つ」ものを取り出す定義であるのに対し，山根（2002）は感動詞の中で感情表出や応答・あいづちではないものという消去法的な定義だという点である。フィラーというカテゴリーを設けること自体は，感動詞という大まかな分類を見直し，整理し直そうとする一つの試みとして評価できるだろうし，こうした整理の必要性・妥当性について，漠然とであれ，多くの研究者や教育者が同意しているからこそ，今日，フィラーという用語が広く用いられているのだと考えられる。また，小磯他（2004）と山根（2002）のフィラーの内包の違いもどちらかが正しくどちらかが間違っているといったものではないだろう。すなわち，「フィラーとは何か」という問いは，あらかじめ正解があるようなものではなく，むしろ，「フィラーという用語をどのように定義するのが，言語研究や言語教育などにおいて有用か」という利便性の問いであり，小磯他（2004）と山根（2002）の定義はそれぞれの立場からの提案として受けとめるべきものだと思われる。

むしろ問題とすべきなのは，どちらの定義も「どこまでをフィラーとするか」という外延の問いへの応答において論理性を欠くように思われることである。すなわち，上で指摘してきたように，「場繋ぎ的か否か」，「感情表出か否か」，「応答か否か」といった判定の基準が明らかでなく，線引きが独断的な印象を受ける。さらに言えば，「フィラーか否か」を認定する作業の前提にある「感動詞か否か」という判定の基準も不透明である。たとえば，小磯他（2004）は「まあ」を感動詞（フィラー），「なんか」を感動詞（フィラー）でないとする一方，山根（2002）は両者を感動詞（フィラー）としており，判断が分かれている。また，他の先行研究では加藤重広（2006）のように両者を副詞とする立場や，田窪（2005）や川田（2007）のように副詞的用法と感動詞的用法が併存するという立場もある。しかし，いずれの立場においても，その根拠を明確に論じているとは言いがたい。さらに，フィラーの特徴として「『意味』をもっているとは言えない（田窪 2005:20）」，「発話内容には一切影響を与えない（川田 2007:185）」のような主旨の記述がなされることがある。しかし，意味の有無がどうすれば判定できるのかは必ずしも明らかではない[8]。

---

[7] ただし，山根（2002：238）は，「おー」，「うー」やあいまい母音型を「言語形式」ではなく，「音声現象」とみなしており，山根の言うフィラーがすべて単純に感動詞の下位類とみなせるわけではない。しかし，一方で山根は，「フィラーの出現頻度で最も多いものは単語形式のフィラーである」とも述べており，本研究のまとめ方は山根の主張を大きく損なうものではないと思われる。

[8] 「実質的な意味を持たず，癖のように頻繁に用いられる」（川上 1994:77）のような言い方もしばしば目にするが，「実質的な意味」とはどういう意味だろうか。また，その有無をどう判断するのだろうか。加藤重広（2004:225）も，フィラーの定義について，「『伝達上重要な意味を持たない』とどう判断するのかが問題になります」と，その難しさを述べている。

フィラーの認定に関わるこうした判断が曖昧なまま，トップダウンに「これがフィラーだ」と提示されてもなかなか満足できないのではないだろうか。それは，「なぜ a をフィラーと認定したのか」，「なぜ b はフィラーではないのか」という質問に対して，「a はフィラーだからだ」，「b はフィラーでないからだ」と答えるようなものであるように思われる。今後，日本語においてフィラーというカテゴリーの輪郭を理論的に精緻なものにするためには，「a はフィラーだ」，「b はフィラーではない」といった判断を安直に行ってしまうのではなく，そもそも，そのような判断が困難であることをきちんと問題として受けとめ，定義を入念に検討していく必要があるのではないだろうか。

以上の先行研究の検討から明らかなように，現時点でトップダウンに「どこまでをフィラーとするか」を厳密に決めることにはかなりの無理が伴う。そこで，本研究ではフィラーというカテゴリーが理論的に未熟であることを認めた上で，それを育てていく作業を行いたい。より具体的に言えば，本研究は，先行研究とは逆に，フィラーというカテゴリーをボトムアップに作っていくことを試みたい。すなわち，個々の形式の検討に先立って，いきなりフィラーの範囲を断定してしまうのではなく，ひとまず曖昧さを承知で「フィラーらしきもの」や「フィラーかどうかの判断が微妙なもの」を集めておいて，それらの形式の性質・用法を一つ一つ吟味しながら，どこまでを同一カテゴリーに帰属させるのが妥当なのか，感動詞や副詞といった他のカテゴリーとの関係はどうなっているのかといった問題を検討していき，漸進的にフィラーの内包と外延を精緻化していくという方針をとりたい。

まず，「フィラーとは何か」という内包の問いに対して，本研究は基本的に，小磯他（2004）の立場を継承・発展させる方針をとる。すなわち，「場をつないでいる」，「間をつないでいる」，「時間を稼いでいる」，「言いよんでいる」，「考え中である」，「言葉を選んでいる」といった印象・直感と結びついた形式をフィラーと呼び[9]，その内包を次の（1.7）のように定義する。

（1.7）　フィラーとは，「考える」，「思い出す」，「言葉を選ぶ」など，話し手が何らか

[9] そのような印象・直感にどの程度の信頼性があるのかはなお問題になり得る点である。もちろん，実際の談話を対象にしたコーディングを完全に行うのは困難だと思われるが，（1.7）を作業仮説として維持できる程度には安定して可能だと考えている。たとえば，本論 5 章において，筆者は『日本語話し言葉コーパス』の「その（一）」について，（F）タグの信頼性を測るために，筆者自身が音声を聞いて直感的にコーディングしたものと比較したが，その結果は完全に一致した。これは，タグ付けをした作業者と筆者の印象が一致したということである。また，本研究では主に，曖昧さの生じる余地がないと思われる典型例や理想発話をデータとするため，さしあたり信頼性はそれほど大きな問題にはならないと思われる。

の情報処理的な心身行動を行っている最中に典型的に発話される感動詞の下位類である。

この規定について，小磯他（2004）の規定と何が異なるのかという疑問が生じるだろう。小磯他（2004）が「場繋ぎ」という概念を説明していないため，はっきりとは言えないのだが，本研究があえて「場繋ぎ」という対人的機能ではなく，「何らかの情報処理的な心身行動を行っている最中」という認知的な側面に注目したのは，たとえば，独り言で「えーと，鍵，鍵っと…」と言う場合の「えーと」や，「あのー，すみません」と相手に話しかける場合の「あのー」など，字義通りの「場繋ぎ」（対人コミュニケーションにおける時間稼ぎ）という記述が必ずしもなじまないケースをカバーするためである。また「典型的に」という留保を付けたのは，フィラーは，必ずしも心身行動に伴って発せられるわけではなく，表現効果目当てに使われる場合があるからである（定延 2005b など）。その最たるものは書き言葉に出現するフィラーだろう。たとえば，次の（1.8）を見てほしい。

（1.8）　そういえば，『はしか』って英語で何ていうんだろう？うーん，知らない

（黒田龍之助『語学はやり直せる！』角川書店，2008 年，下線は引用者）

（1.8）において，当然のことながら，書き手は実際に英語で「はしか」を何と言うかを考えながら「うーん」と書いているわけではない。こうした純粋に表現効果目当ての使用も考察対象に含めたい。というのも，こうしたフィラーの「使用」は，くだけた文体の書籍やインターネットの文章などに頻繁に見られ，現象として決して珍しいものではないからである。また，第 4 章で詳しく述べるように，ある特定のフィラーの表現効果を明らかにしようとする場合，このように意識的に「使われるフィラー」[10]を観察するのが有望な方策となる。

一方，「どこまでをフィラーとするか」という外延の問いに対して，本研究では，現行の日本語教材・参考書を調査し（調査の詳細は 2.3 節に示す），そこにおいて「言いよどみ」，「考え中」，「言葉探し」，「場つなぎ」，「時間稼ぎ」といった説明がなされている次の 9 形式を暫定的に「フィラー」と呼ぶことにする。

（1.9）　「あの（ー）」，「その（ー）」，「えー（と）」，「うーん（と）」，「さー」，「そー（ですねー）」，「まあ」，「なんか」，フィラー的な空気すすり

各形式の概略は以下の通りである（より詳細な定義は各章を参照されたい）。

[10] 川田（2008:153）は，「フィラーには『現れるフィラー』と『使われるフィラー』の二種の側面があると考える。『現れるフィラー』は話し手の意図とは無関係に表出されるのに対し，『使われるフィラー』は，話し手が『現れるフィラー』の特性を利用して聞き手に特定の意図を伝える目的を持つ」と述べている。

「あの（ー)」,「その（ー)」とは，たとえば「あのー，ちょっとお聞きしたいんですが」や「神戸と言えば，やっぱりそのー，夜景が有名ですよね」などにおける「あのー」や「そのー」で，主に平坦な音調で発せられる。バリエーション（異形態）として「あんのー」,「あのねー」,「そのですねー」などを認める。実際には，こうしたバリエーションにも使い分けがあり，たとえば，年上の先輩に向かって「あのねー」などと言うのは無礼であり，「あのー」や「あのですねー」にすべきだといったニュアンス（改まり度）の違いがある。もちろん，こうした違いも重要だが，本研究ではひとまず,「あの（ー)」系列,「その（ー)」系列という大まかなレベルでの使い分けを論じ,「ね」や「ですね」の付加や音便化といった現象についての考察は別の機会に論じることにしたい。

「えー（と)」,「うーん（と)」とは，たとえば「えーと，８時半にお願いします」や「えー，本日はご来場ありがとうございます」,「この中だとー，うーんと，この人が一番かっこいいんじゃない？」や「うーん，そうかなぁ」などにおける「えーと」・「えー」・「うーんと」・「うーん」で，主に平坦な音調で延伸を伴って発せられる。「えー（と)」には,「えっと」,「えーとですね」などのバリエーションを認める。「うーん（と)」は，定延（2002b）において「迷いの『ん～』」,「フィラーの『ん～』」と呼ばれたものにおおむね相当し,「うーん」,「んー」,「うーむ」,「ふーむ」などのバリエーションを認める。

「えー（と)」・「うーん（と)」については，音便化や「ね」,「ですね」の付加のほかに,「と」の有無による違いが問題になる。たとえば直感的に,「と」が付いた「えーと」・「うーんと」は,「と」の付いていない「えー」・「うーん」よりも子どもっぽい印象があるし,「ですね」,「ね」などの成分が「えーと」「うーんと」には付加し得るが,「えー」,「うーん」には直接付かないといった違いもある。本研究ではひとまず，日常会話での使用頻度が高く，内省が効きやすい「えーと」と「うーん」に代表させて両者の異同を論じ，その後,「と」の付加に関する問題を補足的に取り上げることにする。

「さー」は,「さー，どうでしょう」,「さー，交番ねー，ちょっとわかりませんねー（定延 2005b:16)」などにおける「さー」で,「『検討しても，うまくいかない』場合専用（定延 2005b:17)」のフィラーである。本研究では「さー」の用法を主題的に論じることはないが,「うーん」との比較などにおいて部分的に取り上げる。なお,「さーねー」などをバリエーションとして認める。

「そー（ですねー)」は,「夜景っていうと，そーですねー，六甲山あたりだとよく見えるんじゃないですかねぇ」や「来週の，そう（ねえ)，火曜に来てもらいましょうか（定延

2002b:92)」における「そーですねー」や「そー」や「そうだねー」で，主に平坦な音調で延伸を伴って発せられる。主に下降調で発せられ，同意などを表す「そう（ですね)」や，上昇調で疑問を呈する「そう？」などとは異なる。

以上の「あの（ー)」,「その（ー)」,「えー（と)」,「うーん（と)」「さー」,「そー（ですねー)」の６形式は，一般的（学校文法的）な感動詞の定義，すなわち，自立語で活用がなく，主語・述語・修飾語にならない他の文節から独立した語という基準を満たしており，これらを感動詞とみなすこと（それゆえ，その下位類たるフィラーに帰属させること）に，ほとんど異論の余地はないように思われる（これらが副詞だという説は管見においてない)。

一方，残る３形式,「なんか」,「まあ」，フィラー的な空気すすりは，そもそもこれを感動詞（フィラー）とみなすか否かについて意見が分かれ得る。本研究では，そのこと自体を検討の俎上にあげるために，あえて作業仮説的にこれらをフィラーに含めた。

まず，本研究が考察対象とする「なんか」,「まあ」とは，たとえば，次の（1.10)，(1.11）のようなものである（なお,「なんかさ」,「まあね」などをバリエーションとして認める。より詳細な規定は各論を参照されたい)。

（1.10）a.　なんかこれおいしそうだね。

b.　なんか責任重大だなー。

（1.11）a.　日本でリンゴといったら，まあ，青森ですね。

b.　日本でリンゴといったら青森ですね。まあ，長野や岩手も有名ですけど。

「なんか」・「まあ」については，先述のように，①すべて副詞とする立場，②すべて感動詞（フィラー）とする立場，③副詞と感動詞（フィラー）が混在しているとする立場がある。しかし，いずれの立場においてもその根拠が明確には示されておらず，これら①～③のどの立場が妥当かを明らかにする必要がある。

一方，フィラー的な空気すすりとは，定延（2005，2007）が指摘しているもので,「考えをまとめるために，会話よりも心内での考え事（思い出し，計算など）に集中する時の空気すすり（定延 2007:131)」である。たとえば「なにさんだっけ。シー（定延 2005:201)」における【シー】がそれにあたる。フィラー的な空気すすりは,「首かしげ」や「視線そらし」「眉ひそめ」といった「考え事に集中している」と思える行動と共に生じやすい（定延 2007:132）という点が認定の基準になる。なお,【スシュー】,【シュー】,【シー】など摩擦音の質の違いにはこだわらないことにする。

フィラー的な空気すすりについての問題は，これを感動詞に含めるか否かである。おそ

らく，空気すすりは，非言語行動であって単語ではない。それゆえ，感動詞ではないという意見があるだろう。しかし，空気すすりは，本当に感動詞とみなしえないのだろうか。たとえば，騒がしい子供に向かって発せられる「シーっ！」という摩擦音が感動詞とみなせる（高橋他 2005）のであれば，同じような音を発する空気すすりが感動詞でないとなぜ言えるのだろうか。感動詞（言語）と単なる声（非言語）の境界はそれほど自明ではなく，検討の余地は残されているように思われる。

以上のような検討を，「なんか」，「まあ」，フィラー的な空気すすりという３形式について行っていきたい。

ところで，本研究は，山根（2002）と小磯他（2004）が共通してフィラーとしている，「あ（ー）」，「い（ー）」，「う（ー）」，「お（ー）」をフィラーとはしない。その理由は，これらは「えーと」，「あのー」，「まあ」のような使い分けが問題になる語彙的要素というよりは，延伸，ないしは，つっかえ現象の一種とみなすのが適切だと考えるからである。すなわち，たとえば，「私ハ，アアアア……今日イイイ……ココデ，エエエエ……（三上 1972:61）」のような例において「アアアア」，「イイイ」，「エエエ」は，「私ハ」，「今日」，「ココデ」という前節する語（文節）の一部であり，「アアアア」，「イイイ」，「エエエ」の使い分けといったことは問題にならないと考えるからである。ただし，「え（ー）」は延伸の場合とフィラーの場合の区別がつきにくいため，基本的には，すべてフィラーとする。

小磯他（2004）や山根（2002）の項目の選定について独断的だとか網羅的でないなどと批判したにも関わらず，本研究が挙げる（1.9）の項目の選定もまったく同じ問題を継承しているとの批判が当然のことながらあるだろう。しかし，本研究は現時点で，（1.9）を小磯他（2004）や山根（2002）に替わるような妥当かつ信頼性の高いフィラーの定義として提示しているわけではない。繰り返すが，本研究が今，行おうとしているのは，問題を解決することではなく，むしろ提起することである。つまり，先行研究のように「どこまでをフィラーとするか」という問いに対していきなり解決済みの地点に立つのではなく，これまで「言いよどみ」，「考え中」，「言葉探し」，「場つなぎ」，「時間稼ぎ」などと直感的に説明されてきた形式の一つ一つについて，「話し手はこれらの形式を発することで実際のところ何をしているのか」，「各形式の性質・用法は，どこが似ていてどこが似ていないのか」，「どこまでを同一カテゴリーとして括れそうか」，「感動詞や副詞といった近似概念との関係はどうなっているのか」といった問題を丹念に検討していこうとしているのである。(1.9)に示したのは，さしあたっての叩き台としての「フィラー候補」であり，今後の研究の進

展に応じて修正することを前提とした作業仮説であると理解されたい。

なお，直感的に「言いよどみ」,「場つなぎ」などと呼べそうな形式は他にもいくつか残されているだろう（たとえば「私は，こー，すごく感情的になところがあって…」における「こー」など)。これらを取り上げず，(1.9）の９形式を優先したのは，単純に，筆者の考察がそこまで及んでいないからであるが，もう一つの理由は，まずは既に現行の日本語教育の教材や参考書に取り上げられている項目から優先的に,「どのように使い分けられているのか」,「どのような表現効果を持つのか」を記述することが，日本語教育の現場でのすみやかな応用につながりやすいと考えたことである。今回検討できなかった形式についての考察は今後の課題として持ち越すことにしたい。

1.3　本論文の構成

本論文は，本章（第１章）を含めて，全部で９章からなる。第２章と第３章は第１部を，第４章から第 9 章は第２部を構成する。第１部では，日本語教育におけるフィラー指導を充実させるためにはどのような基礎的研究が必要なのかを明らかにし，第２部において，その基礎的研究を具体的に進めていくという構成である。各章の概略は以下の通りである。

第１章（本章）では，フィラーの定義に関する本研究の立場を示した。

第２章では，日本語教育においてフィラーを指導する必要性・方法論・課題を明らかにする。

第３章では，先行研究において日本語のフィラーについての基礎的研究がどの程度進んでおり，どのような課題が残されているのかを明らかにする。

第４章では，本研究の方法論，データ，理論的前提を説明する。

第５章では，言語形式製作に関わるフィラー「あの（ー)」・「その（ー)」の用法を明らかにする。

第６章では，課題解決行動に関わるフィラー「えー（と)」・「うーん（と)」・「さー」・「そー（ですねー)」・フィラー的な空気すすりの用法を明らかにする。

第７章では,「なんか」の用法を明らかにするとともに,「なんか」のフィラー化という論の妥当性を吟味する。

第８章では,「まあ」の用法を明らかにするとともに,「まあ」の品詞論的位置づけを論じる。

第９章では，各章の要点をまとめ，本研究の意義と今後の課題を論じる。

第１部　本研究の背景

第１章では，研究の全体像を説明するための便宜上，本研究の目的は，日本語教育への応用を前提として個々のフィラーの用法を記述することだと予告したが，第 1 部（第２章と第３章）では，この目的設定の背景を論じ，日本語教育研究，日本語研究における本研究の位置づけと意義を明らかにする。

第２章では，日本語教育におけるフィラーの指導を充実させるためには，「自然会話におけるフィラーの実態の把握」と「個々のフィラーの用法の解明」の 2 つの基礎的研究が必要であることを主張し，続く第 3 章では，現状において，その 2 つの基礎的研究のうち，後者の「個々のフィラーの用法の解明」が遅れていることを明らかにする。

第２章　日本語教育におけるフィラーの指導の必要性と課題

本章では，日本語教育の現場においてフィラーを効果的に指導するためには，その前提として，フィラー自体の性質を解明する基礎的研究を進める必要があることを主張する。

今日，日本語のフィラーの研究が必要とされ，行われている最大の理由として，日本語教育におけるニーズが挙げられるだろう。日本語教育においてフィラーを指導する必要性を説いた先行研究には，尾崎（1981），畠（1982，1988），堀口（1995），庄司（1998），定延（2004），小林（2005），山内（2005a，2005b，2009）などがある[11]。以下では，これらの先行研究の成果をふまえて，なぜ日本語教育においてフィラー指導が必要とされているのか（2.1 節），これまでにどのような指導の方法論が提案されていて（2.2 節），どのような教材があるのか（2.3 節），今後，フィラーの指導をさらに充実させるためには，具体的にどのような課題を解決する必要があるのか（2.4 節）を論じる。

2.1.　フィラーの指導の必要性

先行研究において提示された，日本語教育においてフィラーの指導が必要な理由は，①談話管理，②その他の発話効果，③自然さの３点にまとめられる。

[11] 本稿が「フィラー」と呼ぶ対象についての先行研究における呼称はそれぞれ異なり，「間投詞」（尾崎 1981），「言いよどみ」（畠 1982・1988，堀口 1995），「フィラー」（庄司 1998，定延 2005）などの用語がそれぞれ用いられている。本節では，混乱をさけるために，原則として，用語を「フィラー」に統一する。

2.1.1　フィラーと談話管理

第１に，時間的制約下で進行する話し言葉において，挫折や失敗を防ぐには，話し手が談話をうまく管理する必要がある。それゆえ，「間つなぎ（ターンの維持)」，「ターンの獲得」といった発話効果を持つフィラーを，談話管理に利用可能な資源として，日本語学習者に教えるべきだという主旨の主張がある[12]。

たとえば，畠（1988:109）は，話し言葉の教育においては，「コミュニケーションを行なうために必要でありながら，コミュニケーションの内容に積極的に関与しない部分」である「会話のストラテジー」にこそ焦点を当てるべきだと主張し，会話のストラテジーの具体例として，「言いよどみの技術」，「ターンを取る技術」，「答える時に間をとる技術」などを挙げている。同様に，堀口（1995）は，フィラーの役割として，「沈黙回避」，「発話開始のきっかけをつかむ」，「話を継続する意志を表明する」などを挙げ，日本語教育において「無視して通ることはできない（p.261)」と述べている。さらに，山内（2005a，2005b）は，話し言葉は，瞬時の対応が要求される「出たとこ勝負」であり，「コミュニケーション上の失敗・挫折を避けることができない。それゆえ，学習者は，失敗・挫折を避けるための方策を身につける必要がある（p.148)」と述べている。これも畠や堀口と同旨の主張だと解釈される。

また，庄司（1998）は，日本語学習者が，発話までの時間を稼ぐ，沈黙を埋めるといったフィラーによる談話管理を用いることが流暢な印象を生むのに貢献していることを，アンケート調査と実験によって実証的に明らかにし，「フィラー適切な使用法について，これからの会話の授業が果たすべき役割に寄せられる期待は小さくない(p.32)」と述べている。

2.1.2　その他の発話効果

第２に，フィラーには，談話管理だけにとどまらない多様な発話効果があり，そうした効果を学習者が活用できるように指導するべきだという主張がある。

たとえば，定延（2004）は，丁寧さという面からフィラーの指導の必要性を説いている。定延は，「このあたりに交番はありませんか？」と聞かれて「さー，ちょっとよくわかりません」と答える際の「さー」を「あからさまに儀礼的なフィラー」と呼び，話し手がここで「さー」と言いよどむのが自然なのは，日本語社会では，交番の位置が分かる見込みが

[12] 実際に，フィラーの指導を行った報告として岡崎（1987）がある。岡崎は，米国のミドルベリー大学夏季日本語学校で実施した談話能力養成のための授業における上級の指導内容として，「考えながら話す手段の高度化」（「えーと」「あのー」など)，「言いよどみ」（「それはそのー」「ええまあ」など）を挙げている。

ないながらも，一応相手の質問に答えようと努力してみせた方が，「知りません」と言下に言うよりも，丁寧だからであると説明している。また日本語学習者の中には，「依頼を断る時には少しでも早く断るのが丁寧」と考える者がいるため，日本語教育において「何が丁寧かは，それぞれの言語ごとに違う」ことを教え，日本語の音声コミュニケーションにおけるストラテジーの一つとして，あからさまに儀礼的なフィラーを紹介すべきだと主張している。

また，発話効果の指導は，フィラーの使用が話し手に意図せぬ不利益をもたらさないためにも必要だろう。尾崎（1981）は，学習者のフィラーの使用における不適切な誤りとして，フィラーの多用を挙げ，「ごく単純だと思われるような事柄を述べるときにまで『フィラー』を多く入れると，もったいぶっているとか，耳ざわりだというマイナスの印象を与えることになる（p.50，一部改変）」と述べている。また，「えー」「えーと」は，「中年男性が形式ばったスピーチで使うような音であるため奇異に感じられる（p.49）」場合がある。「うーん」は，「応答を拒否するような響きがあり，場面によっては不適切と評価されるおそれがある（p.49）」と指摘している。

このように，フィラーが生む表現効果は，文脈に応じて，話し手にとってプラスになるものもマイナスになるものもあり，多様である。学習者があるフィラーが特定の文脈においてどのような表現効果や印象を生み出しうるかを理解できるように指導する必要があるだろう。

2.1.3　フィラーと自然さ

第３に，日本語学習者がより「自然な」話し言葉を習得するには，日本語のフィラーを身につける必要があるという主張がある。

尾崎（1981）は，モナシュ大学日本語科に在籍する３人の上級日本語学習者（P，K，R）の話し言葉を分析し，3 人が沈黙を避けるためや，話のリズムをとるために，「あの」「その」「まあ」「なんか」などの日本語のフィラーを用い，〔ah〕，〔um〕などの英語のフィラーをほとんど用いないことが日本語らしさを生み出しているとして，「自然な日本語を教えるためには，日本語の『フィラー』＜中略＞を習得させる必要がある（pp.48-49，一部改変）」と説いている。

また，堀口（1995）は，中級学習者 10 人，上級学習者 13 人の会話を観察し，学習者の中には「クァ（ー）」という日本語らしくないフィラーを用いる者がいたこと，また誤用と

して，「ナントウカ」「ナントー」「ナントイウ」「ナントイウト」があったことなどを報告している。たしかに，どれだけ語彙・文法や発音が正確でも，話している最中に「クァー」のような，日本語にないフィラーが挿入されれば，日本語としての自然さは損なわれてしまうだろう。

もちろん，必ずしも，すべての日本語学習者に「日本人らしく」話すことを要求する必要はないだろう。しかし一方で，できれば自然に，日本人らしく話したいというニーズを持った日本語学習者も少なくはない。そうした学習者のニーズを満たすべく，発音指導や文型指導などにおいて日本語らしさ・自然さが志向されるのであれば，その一要素として日本語のフィラーにも目を向ける必要がある。

2.1.4　本当にフィラーの指導は必要か？

以上のように，日本語教育関連の先行研究では，総じて，学習者が日本語で「上手な話し方」を身に付けるためにフィラーを積極的に指導すべきだと主張されている。しかし，これに対して，次の２つの反論が想定される。

第１に，経験的に，プレゼンテーション，講義・講演，スピーチ，接客などにおいて，フィラーが頻発するのを聞くのは，それほど気持ちのいいものではないし，時に苦痛でさえある。また，そのような話し手に対して「話下手」の烙印が押されることも少なくない。それゆえ，フィラーを発するのは話が下手な証拠である。そんなものをわざわざ教える必要はないという批判である。

このような意見は，フィラーを指導する必要性を主張する先行研究ではほとんど顧みられていないものの，ビジネスや一般向けの話し言葉指南書において，なるべくフィラーを発しないようにと書かれることは少なくなく，むしろ常識的な見解であるように思われる。たとえば，大橋（2009）は，聞き手をいらつかせないために「えー」や「あのー」を極力発しないようにすべきと主張し，そのためにフィラーをポーズで入れ換えることを日々心がけ，練習するように提案している。また，大平正芳元首相に対する「あーうー宰相」というレッテルは決して褒め言葉ではあるまい。このように，日本語母語話者に対してはフィラーを揶揄し，慎むように勧める一方，日本語学習者に対してはフィラーを奨励するというのは，矛盾しているのではないだろうか。

これに対する本研究の答えは，プレゼンテーション，講義・講演，スピーチ，接客など，事前の準備が前提とされる，いわば「話される文章」と，「出たとこ勝負」的性格の強い話

し言葉とは分けて考えるべきだというものである。プレゼンテーションやスピーチなどにおいて，フィラーがしばしば耳障りなものとして疎まれ，嫌われるのは，これらの談話において，話し手はその場で言いよどむのではなく，いわば「事前によどんでおく」（それによって何をどう話すのかを計画し，スムーズに話せるようにリハーサルしておく）ことが可能であり，また，期待されているからである。もちろん，緊張を強いられる場面でそれなりの長さを話すために，フィラーを発することはある程度は許容されるだろうが，基本的には，準備が前提とされる話し言葉において聞き手の前で過度にフィラーを連発することは，「話される文章」に対するわれわれの規範意識に抵触するように思われる[13]。つまり，そうした場におけるフィラーの連発は，「ちゃんと準備してきていない」，「練習不足」といった話し手の怠慢の表れであり，「聴衆やお客様に失礼」な態度に受け取られかねないのである[14]。しかし，そのことは，われわれが日常行っている，事前に準備できない音声コミュニケーションの多くには当てはまらないだろう。むしろ音声コミュニケーションの大半においては，決まったことを決まった調子でしゃべることよりも，相手の出方を観察し，その場その場で柔軟に対応することが要求されているように思われる。そうした柔軟な対応はフィラーなしにはほとんど成り立たないように思われる。

そもそも，話し言葉，書き言葉を問わず，発話産出行為とよどむという現象は不可分の関係にある。たとえば，論文を書くという行為は，よどみなくひたすらに筆を動かす活動ではない。それは，次の（2.1）の下線部のような「書きよどみ」を多分に含み，通常，こうしたよどみなしに論文は完成しないし，書き手は，質の高い論文を書くために積極的によどもうとさえするだろう。

（2.1）　<u>テーマを考える</u>。<u>資料を読む</u>。書く。<u>次の展開を考える</u>。書く。<u>辞書で言葉を調べる</u>。書く。<u>資料を探す</u>。書く。<u>データを取る</u>。書く。<u>仮説を練る</u>。書く。……

「書きよどみ」が書くという行為と不可分であるのと同様，「言いよどみ」も話す行為と

[13] 定延（2005b:15）は，高校球児による選手宣誓や神主の祝詞においてフィラーが許されないことを挙げ，「もしも儀式がおこなわれている場でフィラーが発せられたとすれば，そのフィラーの発し手は儀式を儀式としてとりおこなっていない，たるんでいるということになる」と述べている。程度の差こそあれ，たとえば学会発表などのプレゼンテーションを「自分の研究を聴衆に聞きやすくスムーズに発表できるように準備して望むべき」という暗黙の慣習的規範が存在する一種の儀式と見ることも可能だろう。

[14] もっとも，プレゼンテーションなどでも，「唇でしゃべっている感じ」，「棒読み感」，「人工的な感じ」を嫌い，「ライブ感」や「インタラクション」や「柔軟性」を重視するスタイルもあり得る。全くの印象を述べさせていただけば，そのようなあえて崩した「達人のスタイル」は，少なくとも授業や学会発表などにおいては，より「話上手」，「魅力的」といった印象がある。たとえば，講義ノートを読み上げるような授業は，たとえそれが聞き取りやすい朗読であったとしても，あまり魅力的ではないように思われる。

不可分なものである。書き言葉と話し言葉の違いは，書き言葉の場合，「書く行為そのもの」と「書かれた結果の提示」に時空間的隔たりがあり，書きよどみは文章にその痕跡を残さないが，話し言葉では，通常，「話す行為そのもの」と「話された結果の提示」に隔たりがない。それゆえ，話し手は聞き手の目の前でフィラーを発して言いよどむのである。そこにおいて，フィラーを発する行為は，上手い下手といった評価を超えて，話すという行為そのものの一部である。したがって，話すという行為はフィラーを発することを不可欠な要素として含み，それゆえ，日本語で話すという行為を学ぶことは日本語のフィラーを学ぶことを含むのである。

また，プレゼンテーションなどの「話される文章」においてもフィラーに全く意義がないわけではないだろう。たとえば，「えー」や「えーと」を発することで，話の区切りが分かりやすくなるといった指摘もあり（Watanabe 2002 など），実際，筆者のインフォーマルな聞き取りでは，複数の日本語母語話者が学会などでの口頭発表の原稿に「えー」などのフィラーをあえて書いていると述べた。山根（2002:237）は，フィラーは，適切に使用されれば聞き手が発話内容を理解するのを助け，相手に話し手の心情を伝える「親切信号」として機能するが，逆に多用や誤用によって聞き手が発話内容を理解することを妨害する「迷惑信号」にもなるという二面性があり，可能な限り「迷惑信号」を減らし，「親切信号」を発信することがしゃべりのうまさや好感度を生み出すと主張している。日本語学習者が，フィラーを「迷惑信号」としてではなく，「親切信号」として使用できるようになるためにも，日本語教育におけるフィラーの指導は必要であろう。

第２の批判は，日本語教育的な視点からのもので，「学習者は，話し言葉を教室の外で自然に覚えるのだから，わざわざ教室でフィラーを教える必要はない」というものである。

もちろん，ある程度の環境が整っていれば，話し言葉の習得において自然習得がかなり有効であることを否定するつもりはない。しかし，たとえ話し言葉がかなりの程度自然に習得されるものであるとしても，それが直ちに，教室内における指導の必要性を否定する理由にはならないだろう。なぜなら，たとえ日本語につけ浸される環境に身を置いたとしても，すべての学習者が自然に効率よくフィラーを習得できるとは限らないし，すべての日本語学習者がそのような理想的な日本語学習環境に身を置けるわけではないからである。また自然についてしまった望ましくない癖を意識的に矯正する必要もあるかもしれない。

仮にフィラーがある程度自然に習得されるものだとしても，全て自然習得に委ねてしまうのではなく，必要に応じて教室内でも指導できる体制を整えることの方が，そのような

試みを放棄してしまうよりも，望ましい日本語教育のあり方なのではないだろうか。

2.2.　フィラーの指導の方法論

前節では，日本語教育におけるフィラーの指導の必要性を確認した。次に，実際の教室においてどのようにフィラーを指導すればよいのか，その方法論について考察する。

先行研究においてフィラーを指導する方法論に言及しているのは，尾崎（1981），畠(1988)，堀口（1995），山内（2005b）である。

尾崎（1981:50）は，フィラーなどの技術を「文型練習やモデル会話の暗記によって習得させることは困難であるから，まず第一に，学習者が日本人の話し手と日本語でコミュニケーションを行なえるようなプログラムを日本語教育のカリキュラムに組み入れなければならない。このようなプログラムを学習の最初期から実施し，不適切な誤りを指摘，矯正することが第一段階となろう。中級以上では，テレビドラマ，対談などを教材とし，日本人の話しことばのパターンに学習者の注意を向けることが大切である。そして，上級レベルでは，話し相手や場面によってことばの切り換えが適切にできるところまでもっていきたい」と述べている。

畠（1988:115）は，「会話のストラテジーの練習は教室内あるいは外で実際のコミュニケーションを行い，それを録音し，教師が訂正するという形で行うこと＜中略＞ストラテジー教育の場合は提示→使用→訂正という形で教育せざるを得ない」と述べている。畠の提案は，尾崎（1981）と共通する点が多いが，学習者に会話のストラテジーを「提示」する段階を設けている点が注目に値するだろう。

堀口（1995:264）は，「学習者の会話やスピーチをテープに録音して，再生しながら不適切な言いよどみがあれば指摘する」と述べている。

山内（2005b）は，話し言葉の教育に有効な方法として，「タスク先行型」の授業と「場面を細分化した応答練習」を挙げている[15]。タスク先行型の授業とは，「文法や表現の導入から始めるのではなく，…＜中略＞…学習者に，まずタスクを遂行させることによって，『状況に即して瞬時に判断を行い，瞬時に反応する』という『出たとこ勝負』を経験させ，その後に，タスクを遂行するために必要となる文法や表現を導入する（p.155-156）」というものである。また，場面を細分化した応用練習とは，「タスクを遂行する際に行った会話の

[15] 「出たとこ勝負」の能力を育成する話し言葉教育の具体的方法（ロールプレイなど）については，山内（2005a）においてさらに詳しく説明されている。また，その理念は山内（2000）で教材化されている。

中から，重要だと思われる部分を取り出して，１つ１つの文が発せられる時の状況を，教師がキューとして提示する。学習者はその状況で発するのにふさわしいと思われる文を，瞬時に考えて発話していく（p.160）」というものである。

細部に違いこそあれ，先行研究に共通しているのは，コミュニケーション活動の中で学習者に発話させ，それに対して教師が助言することを指導の中心に据えていることである。

一方，学習者にコミュニケーション活動をさせる前段階として，教師が学習者にフィラーを提示し，説明する導入段階を設定する必要性については，畠（1988）がそれを主張する一方，山内（2005b）はその効果を疑問視している。しかし，これは必ずしも固定的に考える必要はなく，状況に応じて個々の日本語教師が判断すべき事柄だろう。

したがって，フィラーの指導の手順は，理論的には導入段階と運用・調整段階からなる次のようなモデルで表すことができる。

(2.2)　（　導入段階　）　　運用・調整段階

（ 教師による提示・説明 ）　⇒　学習者によるコミュニケーション活動

↑

教師による調整

この指導モデルを効果的に運用するためには，さらに次のような事柄が明らかにされている必要があるだろう。

(2.3)　①　指導項目：何を，いつ，どういう順序で学習者に提示するのか。

②　学習者への対応：学習者のフィラーの使用をどのように評価するのか，すなわち，何を不適切な間違いとして指摘し，それをどのように調整するのか。

③　説明の方法：個々のフィラーの用法を学習者にどのように説明すればよいのか。

まず，①指導項目については，山内（2009:45-46）がコーパスを用いた学習者の習得過程の観察に基づき，次のような学習段階を提案している。

(2.4)　初　級　：あのー，えーと，えー

中級以降：まあ（上級），なんか（上級），こう（上級），そのー（上級）

また，堀口（1995）は，初中級において，学習者にとって自然習得が困難な「ソウデスネ」などについて指導すべきであると述べている。

ここに挙げられていないフィラーもいくつか残されているが，コーパスの分析や指導経

験に裏打ちされたこれらの提言は大いに参考になるものだろう。

一方，先行研究では，②学習者への対応や③説明の方法について，具体的な提言はほとんど行われていない。たとえば，学習者のフィラーの使用の問題点を指摘し，訂正するといっても，そのような指導を行うためには，フィラーの使用の不適切さを判定する基準が必要になるだろう。同様に，学習者にフィラーの正しい使い方を教えると言っても，フィラーを正しく使用するということが，何をどのようにどの程度使用することなのかが示されていない。したがって，現状において，学習者の問題点を指摘し調整する指導は，日本語教師の主観・感覚に依存せざるを得ないだろう。もちろん，そのような指導に全く効果がないわけではない。例えば，「なんか」という形式の代わりに，「なんとか」を使用するといった明らかな誤用[16]や，明らかなフィラーの多用を注意する場合などには，それなりの指導効果が期待できよう。また，「えー」「えーと」は，「中年男性が形式ばったスピーチで使うような音であるため奇異に感じられる（尾崎 1981:49)」場合がある。「うーん」は，「応答を拒否するような響きがあり，場面によっては不適切と評価されるおそれがある（尾崎 1981:49)」といった指摘は，直感的でこそあれ，それなりに納得のいくものである。

しかし，このような指導がより客観的・理論的な裏づけを伴って行われた方が望ましいのは言うまでもない。また，日本語教師のすべてがネイティブ・スピーカーではないということも考慮しなければなるまい。日本語非母語話者の日本語教師が，基準なしに，直感によってフィラーの適正な使用を指導するのはそれほど簡単なことではないだろう。

このように，先行研究におけるフィラーの指導の方法に関する提案は，指導の大まかな方針こそ示してはいるものの，学習者のフィラーの使用をどのように評価するのか，各フィラーの用法を学習者にどのように説明すればよいのかといった具体的な詳細を欠き，十分なものとは言えない。

2.3. 日本語教科書・参考書に見るフィラーの指導の現状

教師の直感に頼ったフィラーの指導は，とりわけ，個々のフィラーの用法や使い分けの

[16] 筆者は，これまでに２名の上級・超級学習者（中国語母語話者，タイ語母語話者）においてこの誤用を目にしたことがある。想像するに，この誤用は，たとえば，『An Integrated Approach to Intermediate Japanese』のような日本語教科書において，「なんとか」が「なんとなく」，「なんだか」とともに”somehow”と英訳されることに起因するように思われる。第７章で明らかにするように「なんか」は「なんとなく」，「なんだか」と意味的に類似しており，そのことが同じく”somehow”と英訳される「なんとか」を間つなぎとして用いるという誤用を生んでいるのではないだろうか。このような誤用を防ぐには，”somehow”で済まさずに，各形式の用法の違いを説明する必要がある。

説明において限界があると言わざるを得ないだろう。たとえば，フィラー「あのー」は誤用が多いので，初級段階で正しい用法を教える必要がある（山内 2005:43）という指摘を受けて，そのような指導を実践しようと思っても，「あのー」の正しい用法とはどのようなもので，それを学習者にどのように説明すればよいのかが分かっていなければ効果的な指導は望めないだろう。あるいは，上級の学習者に「まあ」や「なんか」の教育を「意識して行うべき（山内 2009:62）」と言われても，学習者に「まあ」と「なんか」はどう異なるのかを質問されたら，どのように答えればよいのだろうか。こうした状況を喩えて言うならば，文末表現「のだ」は誤用が多いので，正しい用法を教える必要があると言われて，「のだ」の用法や，「のだ」と「わけだ」の使い分けを理論抜きで教師の直感によって説明するのと同じようなものである。多くの人にとってそれは簡単なことではないように思われる。

ある言語要素の用法を日本語学習者が理解・練習する際に，また，日本語教師が提示・説明する際に，主な拠り所となるのが，日本語教科書や参考書である。先ほどの「のだ」の用法や「のだ」と「わけだ」の使い分けといった問題であれば，現在，学習者や教師が参照できる教科書や参考書はかなり充実していると言える（グループ・ジャマシイ 1998，庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 2000，Johnson 2008 など）。では，フィラーについてはどうだろうか。

本節では，日本語教育の現場レベルにおけるフィラーの指導の現状とその問題点を具体的に明らかにするために，日本語教科書・参考書におけるフィラーの扱いを調査する。

2.3.1　日本語教科書におけるフィラー

本節では，学習者にとって話し言葉の基礎的なインプットになると考えられる初級・中級日本語教科書のモデル会話におけるフィラーの扱いを調査する。

2.3.1.1　初級日本語教科書におけるフィラー

まず，５種類の初級日本語教科書『Basic Functional Japanese』（1987，以下，『BSJ』）の”Dialogue”，『JAPNESE FOR BUSY PEOPLE Ⅰ　KANA VERSION』と『JAPNESE FOR BUSY PEOPLE Ⅱ　KANA VERSION』と『JAPNESE FOR BUSY PEOPLE Ⅲ KANA VERSION』（1995，1996，1997，以下，『JFBP』）の”Dialogue”，『みんなの日本語　初級Ⅰ本冊』と『みんなの日本語　初級Ⅱ本冊』（1998，以下『みんなの日本語Ⅰ，Ⅱ』）の「会話」，『新文化初級日本語Ⅰ』と『新文化初級日本語Ⅱ』（2002，以下『新文化Ⅰ，Ⅱ』）

の「本文」,『A COURSE IN MODERN JAPANESE [REVISED EDITION] VOLUME ONE』と『A COURSE IN MODERN JAPANESE [REVISED EDITION] VOLUME TWO』（2002, 以下『CMJ』）の”Dialogue”を調査し，そこに出現するフィラーの出現回数・種類，および，どのような解説がなされているのかを調べた。

各教科書のフィラーの出現回数をまとめたのが，次の【表 2.1】である。

【表 2.1】 5 種類の初級日本語教科書のモデル会話におけるフィラーの出現数

	あの（ー）	うーん	えー	えーと	さあ	そうですねー	まあ	合計
BFJ	5	0	0	3	0	9	0	17
JFBP	5	1	0	0	0	1	1	8
みんなの日本語	11	2	0	3	0	4	0	20
新文化	22	1	0	10	2	6	0	41
CMJ	32	14	5	8	0	8	0	67

上の表から,『JFBP』におけるフィラーの出現数が他の教科書と比較して,少なく,『CMJ』における出現数が際立って多いことが分かる。

また,フィラーの種類に関しては,『新文化』と『CMJ』が５種類で最も多く,以下,『JFBP』と『みんなの日本語』が４種類,『BSJ』が３種類である。「あの（ー）」と「そうですね（え）」は，どの教科書にも出現しているが，「まあ」は『JFBP』にだけ出現している。

次に，それぞれの教科書において出現するフィラーについて，どのような説明がなされているかを見ていく。『JFBJ』は,「あの（ー）」には”er”（『JFBPⅡ』, p.28）, “well”（『JFBPⅢ』, p.53）,「うーん」には”umm”（『JFBPⅡ』, p.203）,「まあ」には”well” （『JFBPⅡ』, p.203）,「そうですねえ」には，”Let me see” （『JFBPⅢ』, p.41）とそれぞれ英訳が付されている[17]。また,『みんなの日本語　初級Ⅰ翻訳・文法解説　英語版』(1998)では,「あのう」には”well （used to show hesitation）”（p.19）,「そうですね」には”Well, let me see （pausing）”（p.55）,「ええと」には”well, let me see”（p.31）,「うーん」には”Let me see”

[17] ただし,「あのー」の呼びかけの機能ついては,「あのう is an informal expression used at the beginning of a sentence and indicates hesitation or deference. Here it keeps the sentence from sounding brusque.（『JFBP Ⅰ』, p. 30）」と詳しく説明されている。

（p.139）とそれぞれ英訳されている。『新文化』の教師用指導書では，「ええと」には「考える時に使う表現である（『新文化Ⅰ教師用指導手引き書』，p.36）」。「あのう」には，「少しためらいがちに質問したり，聞きにくいことを聞いたりする時に使う表現である（『新文化Ⅰ教師用指導手引き書』，p.38）」。「さあ」には，「はっきりわからない時に使われる表現である（『新文化Ⅰ教師用指導手引き書』，p.82）」。「そうですね（え）」には「相手の質問に対する答えを考えたり，思い出したりしている時に使う表現である（『新文化Ⅱ教師用指導手引き書』，p.54）」とそれぞれ簡単な解説が付されているが，「うーん」については特に解説されていない。

『BSJ』と『CMJ』は，フィラーの用法についてもう少し詳しく説明している。

まず，『BSJ』では，「あのう」は”well, hello”（p.220），「ええと」は”let me see”（p.311）とそれぞれ英訳が付されているだけだが，「そうですねえ」については，”let me see”（p.80），と英訳を付した上で，さらに，用法についての詳しい説明がなされている。例えば，「そうですねえ」は「店で何も買わないことを婉曲に言う表現（p.86）」，「招待を婉曲に断る表現（p.303）」，「許可を求められた場合の否定の返事（p.317）」として紹介されている。

『CMJ』は，フィラーについて，教科書本文中で，かなり詳細に説明している。

「あのう」については，”あのう（anoo）is used as a signal to start a conversation, and is also used as a sign to hesitate to say something because one thinks that what one wants to say may bother the hearer”（『CMJⅠ』，p.108）。

「ええと」については，“ええと（eeto）is used as a phrase to indicate that the speaker is still thinking and as a sign to indicate that the speaker is trying to recollect something”（『CMJⅠ』，p.109）。

「そうですね」については，”そうですね is used in the situation of not only agreement but when the speaker is thinking. The English equivalent is “Let me see.” or “Well….” It is pronounced with a prolonged intonation. “（『CMJⅠ』，p.132）。

「えー」については，”えー dose not have any meaning. It is used to get the attention of listeners just starting an announcement, presentation and so on like “Er” in English. It is also used to take time to begin to say some phrase.”（『CMJⅡ』，p.148）。

ただし，「うーん」については特に説明がない。

2.3.1.2　中級日本語教科書におけるフィラー

次に 5 種類の中級日本語教科書におけるフィラーの扱いを調査する。以下,『わかって使える日本語』(2002, 以下『わかって』) の「導入」,『日本語中級 J301―基礎から中級へ―英語版』(1995, 以下『J301』) の全文,『中・上級日本語教科書　日本への招待　テキスト』(2001, 以下『招待』) の全文,『An Integrated Approach to Intermediate Japanese［Revised Edition］』(2008, 以下『IAIJ』) の「会話」,『A COURSE IN MODERN JAPANESE　VOLUME THREE』,『A COURSE IN MODERN JAPANESE　VOLUME FOUR』(1988, 1989, 以下,『CMJ-I Ⅲ, Ⅳ』) の「会話」を調査し, そこに出現するフィラーの出現回数・種類, および, どのような解説がなされているのかを調べた

各教科書のフィラーの出現回数をまとめたのが, 次の【表 2.2】である。

【表 2.2】 5 種類の中級日本語教科書のモデル会話におけるフィラーの出現数

	あの（ー）	うーん	えー	えーと	さあ	そうですねー	まあ	合計
わかって	3	1	0	0	0	0	0	4
J301	0	2	2	0	0	1	1	6
招待	0	0	0	1	0	0	0	1
IAIJ	9	0	0	5	0	6	4	24
CMJ-I	27	10	4	3	2	2	15	63

【表 2.2】から, 中級教科書におけるフィラーの扱いはおよそ二極化の様相を呈していることが見て取れるだろう。すなわち,『わかって』,『J301』,『招待』のように, 初級で話し言葉を中心に学んだことを前提とし, 中級では文法の定着や書き言葉の能力の養成や日本事情の理解に力を入れ, フィラーがほとんど出現しないものと,「四技能を伸ばす（p.ⅲ)」という目標を掲げる『IAIJ』や,「円滑なコミュニケーションを支える口頭表現能力を養成する（p.ⅰ)」ことを謳う『CMJ-I』のように, フィラーが数・種類ともに多いものである。中級以降においては, そのような方向性の分化がより明確になっていくのだと考えられる。当然のことながら, 日本語教育において何を重視するかは, 教育機関の方針や学習者のニーズなど複合的な要因によって決定される事柄であり, こうした教科書の設計は単純なよい悪いの問題ではない。

これらの教科書におけるフィラーの解説を調べてみると,『わかって』,『J301』,『招待』

にはフィラーについての解説はなされていない。『IAIJ』は，「えーと」には，”Well [used when looking for a right expression]（p.90）”，「まあ」には，”well [used when making a modest or hesitant statement]（p.244）”と英訳を付しているが，それ以外のフィラーには解説がない。

他方，『CMJ-I』は，前節で紹介した『CMJ』の続篇で，本文中でフィラーの用法が２課にわたって主題的に取り上げられ，くわしい解説と練習問題が付けられている。

『CMJ-I』は「そうですねー」について次の（2.5）を挙げて，解説している。

（2.5）A：この論文，どうでしたか。

B：そうですね。とてもわかりやすくて，おもしろかったです。

A：ああ，そうですか。（p.153，傍線引用者）

“Even when one feels quite definite about his/her opinion, one may start with そうですね. そうですね …＜中略＞… shows hesitation, and thus reserve. In this usage it should be said with dangling intonation（p.153）”。また，「そうですね」のくだけた形として「そうだね」（男性），「そうね」（男女）も紹介されている。

また，「さあ」は次のように解説される。”さあ is also used …＜中略＞… to show one's reserve about expression an opinion.…＜中略＞… with a low tone and dangling intonation. …＜中略＞… さあ……is used to imply negation, so さあ……actually conveys the meaning “I'm afraid I don't have any idea,” or “I'm not sure of my opinion.” On the other hand, そうですね conveys the meaning “Let me think,” or “Let me see.”（p.153）”。このように「さあ」は「そうですね」との使い分けが説明されている。

さらに「あの（ー）」と「えーと」も使い分けが意識された記述がなされている。”あのう…… has three functions as follow: (1) as a signal to start a conversation, (2) as a stop-gap phrase when looking for the proper words, and (3) to indicate hesitancy about troubling someone.（p.154）”，”ええと also has three functions as follows: (1) as a signal to start a conversation, (2) as a stop-gap phrase to indicate that the speaker is still thinking, and (3) as a sign to indicate that the speaker is trying to recollect or to count something（p.154）”。『CMJ-I』は（１）と（２）の機能において「あの（ー）」と「ええと」は代替可能だが，（３）の機能は代替できないとして次の例を挙げる。

（2.6）A：　こんどのテストいつだった。

B：　ええと……（×あのう……）来週の金曜日だったと思うけど。

A：　ああ，そう。　（p.154，傍線引用者）

さらに「そう（ですねー）」，「さあ」，「あの（ー）」，「えーと」の使い分けの練習として次の（2.7）のような問題が提示されている。

（2.7）A：　＿＿＿＿＿＿＿＿，ちょっといいですか。

B：　はい。

A：　この絵は，どこにかけましょうか。

B：　＿＿＿＿＿＿＿＿，このへやじゃ，せますぎますね。

A：　ここよりひろいのは＿＿＿＿＿＿＿＿，12 番と 21 番でしたねえ。

B：　ええ。でも，どちらももう絵はかけてありますよ。

A：　そうですか。

B：　ええ，……＿＿＿＿＿＿＿＿，わたしのへやにはなにもないんですけど。

A：　あっ，じゃあ，そこにしましょうよ。

B：　はい。　（p.164）

また，フィラーは控えめに意見を言うためのストラテジーの一つとしても紹介されている。

（2.8）A：　どちらのせつめいのほうがわかりやすいですか。

B：　そうですね。あのう……こちらのほうがわかりやすいんじゃないかと思いますけど。　（p.181，傍線引用者）

“B first uses an expression to show hesitation before stating his/her opinion, that is 「そうですね。あのう……」. Secondly, he/she uses the indirect sentence ending 「……んじゃないかと思いますけど」…＜中略＞…The speaker B in this way gives his/her opinion with reserve（p.181）”。

このように『CMJ-I』は，他の教科書に比べて圧倒的にフィラーへの解説が充実しているが，「えー」，「うーん」，「まあ」には説明が付されていない。

2.3.2　上級・超級学習者・教師用参考書におけるフィラー

次に，上級・超級の学習者や日本語教師などが，ある言語要素の用法を調べたいときに参照することを目的とした参考書におけるフィラーの扱いを調査する。具体的には，グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』，庵他（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』，庵他（2001）『中上級を教える人のための日

本語文法ハンドブック』，メイナード（2005）『［日本語教育の現場で使える］談話表現ハンドブック』，Jhonson（2008）*Fundamentals of Japanse Grammar*，Maynard（2009）*An Introduction to Japanse Grammar and Communication Strategies*の6冊を調査した。

グループ・ジャマシイ（1998:413）では，「なんか」について，次のような例を挙げ，「『なぜかわからないが』『なんとなく』といった意を表す」と解説している。

（2.9）　彼女と話しているとなんかほっとした気持ちになる。　（傍線引用者）

庵他（2000，2001）には，フィラーに関する解説はなされていなかった。

メイナード（2005:303）は，「私達はあるコミュニケーションの場で，何らかの前置きを置くことがよくある。間投詞の「エエー」や「アーアノ」などは，これから話すことを知らせる手段である」と述べているが，これ以上の記述はなされていない。

Jhonson（2008）には，フィラーについての解説は見れらなかった。

Maynard（2009）は，他の参考書に比べ，フィラーに関する記述が比較的充実しており，Managing Conversationの項目において，ターンを取る，維持する技術の一つとして，フィラー（Conversation fillers）が紹介されている。

> Speaker's turns are also interposed by fillers, which are equivalent to *uhh* and *like* in English conversation, as in *uhh*, *you know*, *he's like, he is really crazy*. Conversational fillers may just simply fill in the pause, or they may signal the speaker's hesitation or trouble spots. These openers and fillers are useful because they allow the speaker to hold on to the speaking turn.（Maynard 2009:80）

具体的なフィラーの例としては，「あのう……」には"Well…"，「まあ，そうですね……」には"Oh, I guess so…"，「ええと……」には"Well, let's see…"，「ええ…」には"Uhh"，「まあ」には"Well, say…"，「まあ，それで……」には，"So, then…"，「なんか……」には"Uhh…"とそれぞれ英訳が付されている。

また，メイナードは，単一のフィラーを繰り返し使うことを避けて，「あの…，まあ…，ええと…」のように違う種類を組み合わせることを薦めている。

さらに，フィラーとよく似た機能を持つものとして，「空気すすり」(Inhaling hissing sound)が紹介されている。

Japanese male adult speech (especially when formal) is characterized by an inhaling hissing sound. The inhaling hissing sound functions as an opener and a filler. Observe make speech when you have access to native speakers. There is no need to imitate it, however, unless you are a male and you want to.（p.80）

2.3.3　教科書・参考書におけるフィラーの扱いの問題点

以上，日本語教科書・参考書におけるフィラーの扱いを調査した。本節では，以上の調査結果について考察する。

小林（2005:27）が，近年,「教科書の日本語をより自然な日本語運用に近づけるために」，教科書にフィラーが盛り込まれるようになってきていると指摘するように，今回調査した５種類の初級日本語教科書，５種類の中級教科書にはいずれもフィラーが出現していた。しかし，その種類は，実際の自然会話に比べて少なく，1 種類（『招待』）から 7 種類（『CMJ - I』）である。自然会話において頻出する「その（ー)」「なんか」などは[18]，教科書には全く現れていない。

大野・キンベリー（2001:194）は,「教科書の会話は自然会話とは大きく違っているため，それを話しことばの基本として教えるのは大きな問題がある…＜中略＞…自然会話から本当の基本的な形を見出し，それを導入する方がもっと学習者の日本語習得に効果的なのではないだろうか」と指摘しているが，このような見方に立った場合，現行の日本語教科書のモデル会話は，出現するフィラーの種類が少ないという点において不自然なものであり，インプットとして不十分であると言える。

しかし，単純に教科書のモデル会話を自然なものに書き換えるだけで，効果的な話し言葉の指導になるとも考えにくいように思われる。そもそも，もし自然さだけにこだわるのであれば，わざわざモデル会話を人工的に作ったりしなくても，自然談話を録音・文字化したものを教材にすれば事足りるのではないだろうか。また，あえて文字媒体で話し言葉を学習する必要もないだろう。日本語教科書の役割は，単に学習者に自然な日本語のサンプルを提示することだけではなく，むしろ，学習者が言語要素を効率よく身につけるための「説明」を提供する役割の方が大きいのではないだろうか。

上の検討から見る限り，現行の日本語教科書や参考書は，フィラーについてそのような

[18] 日本語教科書の会話には，対話形式のものが多いが，山根（2002）によると，対話における「フィラー」の出現回数の上位は,「あの（ー)」(37.2%),「ま（ー)」(16.9%),「その（ー)」(7.7%),「も（ー)」(7.4%),「こー」(5.7%),「あ（ー)」(5.0%),「なんか」(4.5%）である（山根　2002，p.232 参照)。

説明の役割を果たす上で十分ではないと思われる。『BSJ』,『CMJ』,『CMJ-Ⅰ』のように，具体的なコミュニケーション場面におけるフィラーの使い分けや表現効果について説明する教科書が現われてきていることは望ましい傾向であると言えるが，全体的に見れば，「えーと」,「あのー」,「まあ」などの形式による用法の違いを考慮せず，”umm”, ”well”, “let me see”といった英訳を付すだけで，「あるフィラーをいつ誰が使えるのか」,「ある場面であるフィラーを使うとどのような表現効果が生じるのか」,「フィラーA とフィラーB の違いは何か」といった情報は盛り込まれていないことが多い。また，フィラーへの使い分けをかなり詳しく説明している『CMJ-Ⅰ』においても「まあ」,「うーん」,「えー」には説明がない。

小林（2005）は，フィラーは，「言語構造が複雑でないからといって，実際のコミュニケーションで適切に用いることは，必ずしも簡単ではない。このような表現が使えるようになるためには，話しことばに欠かせない要素の１つとしてきちんと位置づけ，体系的なシラバスを作っていく必要がある（p.29)」と述べているが，日本語教育におけるフィラーの指導を効果的なものにするためには，まず，日本語教師や学習者がフィラーの表現効果や使い分けに関する情報を知ることができるような環境を整える必要がある。

2.4.　効果的なフィラー指導の実現ために解決すべき課題

以上，話し言葉教育におけるフィラーの指導について，必要性・方法論・現状の順に見てきた。以上の考察を通して明らかになったのは，次の３点である。

第１に，日本語教育においてフィラーの指導は必要である。フィラーは，時間的制約の中で音声コミュニケーションを成立させるのに必要不可欠な要素であり，さまざまな表現効果を持つ。また自然に話したいという学習者のニーズをかなえるのに貢献する。

第２に，フィラーの指導は，学習者に実際にフィラーを使用させて，それに対して教師が助言する活動が中心になる。しかし，現在のところ，何を不適切な誤りとして指摘し，それをどのように調整すればよいのかは明らかでなく，そうした指導は，教師の主観に依存したものにならざるを得ない。

第３に，現行の初級日本語教科書や参考書は，日本語学習者や日本語教師が個々のフィラーの用法や使い分けを知る上であまり役に立たない。

以上から，日本語教育において，フィラーが必要であることは認識されているものの，現状において十分な指導は行われているとは言えないと結論できるだろう。今後，フィラーの指導を効果的なものにしていくためには，次の３つの課題の解決が必要である。

(2.10) ① フィラーの使用の適切さ，不適切さを判断する基準を確立し，日本語教師がある程度客観的に学習者の話し言葉を評価できるようにする。

② 個々のフィラーの使い分けや表現効果を日本語教科書編者や日本語教師が正しく説明できるようにする。

③ 日本語教科書に出現するフィラーの種類を増やす。

しかし，このような課題を解決するには，その前提として，日本語教育研究者や日本語教師が，フィラーそのものの性質を知る必要があるのは明らかである。フィラーの性質とは，具体的に言えば，次の２点を指す。

第１に，自然談話におけるフィラーの使用実態，すなわち，自然談話では，どのような種類のフィラーが，どのような頻度で，どのような位置に出現するのかを知る必要がある。これは日本語教科書・教材を作成する際の重要な資料になる。また，日本語教師が学習者の問題点を指摘・調整する際の一つの目安ともなり得る。

第２に，個々のフィラーの用法について，すなわち，個々のフィラーがどのような表現効果を持つのか，また，どのように使い分けられているのかを知る必要がある。このような知識は，日本語教科書の著者・編者が，教科書本文や教師用指導書を執筆する際や，現場の日本語教師が学習者にフィラーの用法を説明したり，学習者のフィラーの使用の問題点を指摘・調整するために必要である。

では，これまでになされてきた日本語のフィラーに関する先行研究は，この２つの事項を，どの程度明らかにしているのだろうか。また，今後に残された課題は，どのようなものだろうか。次章では，この点について考察する。

第３章　日本語のフィラーに関する先行研究の概観

第２章では，日本語教育の現場におけるフィラーの指導を効果的なものにするためには，基礎的研究として，日本語のフィラーの使用実態の把握と個々のフィラーの用法の解明が必要であることを明らかにした。本章では，先行研究においてこの２つの課題がどの程度達成されているのかを検討する[19]。

3.1.　日本語のフィラーに関する先行研究

近年，音声コミュニケーションへの関心の高まりに伴い，日本語のフィラーについての研究も徐々に増えつつある。本節では，これまでになされてきた日本語のフィラーについての研究を概観し，その成果と課題をまとめる。

これまでのフィラーの研究は，大きく２つのアプローチに分けることができる。一つは自然談話を録音・文字化したものを資料として観察し，そこに出現するフィラーの種類や頻度，機能などを帰納的に解明しようとする研究である。もう一つは，フィラーの働きを人間の心の働きとの関連で仮説演繹的に説明しようとする研究である。以下，前者を外部観察的アプローチ，後者を認知主義的アプローチと呼び，順に概観していく 。

3.1.1.　外部観察的アプローチによる研究

外部観察的アプローチによる研究は，さらに３種類に分けることができる。一つ目はフィラー全体を対象とした談話分析的研究（山根 2002 など）であり，二つ目は個々のフィラーを対象とした談話分析的研究（西坂 1999 など）であり，三つ目は，計量的研究（Watanabe 2009 など）である。以下，順に概観していく。

3.1.1.1.　フィラー全体を対象とした談話分析的な研究

フィラー全体を対象とした談話分析的研究には，塩沢（1979），小出（1983），Maynard（1989），山下（1990），野村（1996），山根（2002）がある。

小出（1983）は「言いよどみ」が起こる原因や表現効果について考察しており，Maynard（1989）は“filler”には，「言語産出に関わるもの（language-production-based fillers）」

[19] フィラーに関する国内外の先行研究の概観は，山根（2002），Watanabe（2009）でも提示されており，重複するため，本研究では概括的なレビューではなく，日本語教育のフィラーの指導において求められる知見をどの程度提供してくれるのかという観点から先行研究を取り上げる。

と「社交上の理由によるもの（socially motivated fillers）」の 2 種類があるとし，後者が対人関係の調整に貢献していると論じている。塩沢（1979）と山下（1990）は自然談話をデータとしてフィラーの機能や談話の属性との関わりを論じている。野村（1996）は，文科系と理科系の講義のデータを数量的に分析し，フィラーの機能を考察している。

これらの研究の中でデータ面，考察面で最も充実しているのが山根（2002）である。山根は，講演の談話，留守番電話の談話，対話，電話の談話という 4 つの性質の異なる談話資料を用いて，そこに出現するフィラーを種類・音声面・出現位置・役割・属性との関わりという観点から分析している。分析の結果，フィラーは発話途中に最も現れやすいこと，留守番電話や電話では発話冒頭に出現しやすいことや，改まり度や話し手の性別といった談話の属性がフィラーの種類や出現頻度に影響を及ぼすなどことが明らかにされている。また山根はフィラーには「話し手の情報処理能力を表出する機能」「テクスト構成に関わる機能」「対人関係に関わる機能」という 3 つの機能があるとし，それぞれの機能を「間つなぎ」「境界指示」「発話の和らげ」などに細分化している。

山根（2002）の研究は，自然談話に出現するフィラーの種類，出現頻度，出現位置などを集計しており，資料的価値は小さくない。しかし一方で残された問題も少なくない。山根の定義の信頼性の問題は 1.2 節で述べたが，山根の「フィラーの機能」に関する記述にも妥当性・信頼性において疑問に思われる点がある。

山根は合計 24 のフィラーの機能を設定しているが，山根が挙げる機能には，十分な根拠付けを欠いているように思われる記述が少なくない。一例として，フィラー「あの（ー）」・「その（ー）」に関する記述を見てみよう。まず，山根（2002:68）は，次の（3.1）を挙げ，「アノ」が助詞の省略を示していると記述している。

（3.1）　目標だから言うて　私　<u>アノ</u>　嫁いらず観音に参っとらんよ。（傍線引用者）

しかし，この例を提示するだけでは，「アノ」が，助詞が省略された箇所にたまたま出現しているだけなのではなく，その位置で助詞の省略を示す機能を果たしているのだという主張を，十分に正当化できないだろう。

同様に，「その（ー）」については，「話し手が話したいことの存在を，あらかじめ聞き手に臭わせておく（山根 2002:147）」機能がある[20]として，次の（3.2）を挙げている。

（3.2）　L：とても　<u>ソノ</u>　強気な人で　命をはってまでねえ　そういうね　政策をやる人ですから　（傍線引用者）

[20] 山根はこの機能を「後方指示」と呼んでいる。

山根（2002:148）は，「ここでの「ソノ」は，「ソノ」の前に出現した事柄を指示しているのではなく，後方の「強気な人」の出現を予告するような役割を担っている」と記述している。しかし，(3.2）において，談話資料上のどのような特徴から「その（ー)」が，「話したいことの存在を，あらかじめ聞き手に臭わせておく（山根 2002:147)」と認定できるのかが十分に説明されていない。

また，こうした記述は「あの（ー)」と「その（ー)」の差異に関しても有効な説明ではないように思われる。たとえば，次の（3.3）には，「アノー」と「ソノ」の２つが同時に出現しており，山根（2002:69）は，「ソノ」にのみ，「次に述べたい語句が出てくることを聞き手に知らせる」機能を認めている。しかし，(3.3）を示すだけでは，「アノー」にはそのような機能がなく，「ソノ」だけにそのような機能があると説得するに足る根拠にはならないように思われる。

（3.3）　木材に限っても　<u>アノー</u>　高級な　<u>ソノ</u>　ブランドで売られている

（山根 2002:69，傍線引用者）

このように「私が談話資料を観察したところ，こうであった」という仕方で，観察の結果だけを示すという問題は，他の研究にも指摘できる。たとえば，小出（1983）は，「言いよどみ」は自分が一番言いたいことの前に最も現われやすく，聞き手は言いよどみの頻度が増すと，話が核心に近づいたと判断できると述べているが，その主張を裏付けるような根拠は示されていない。また，野村（1996:94）は，「フィラーには直前に表現したことを言い換えたり言い直したりする際のマーカーになっているものがある」とした上で，そのような換言・修正をマークするフィラーは聞き手が講義を理解する上で重要な役割を果たすと主張しているが，フィラーが，換言・修正箇所に「出現する」ことと，それが「講義の理解に貢献している」こととが，検討なしに同一視されており，説得力のある論になっているとは言えないように思われる[21]。

このように，談話分析的な方法によるフィラー全体を対象とした研究では，数多くの興味深い指摘がなされてはいるもの，それがほとんど分析者の印象だけを根拠に記述されており，その妥当性を十分に保障できていない場合が多いように思われる。もちろん，言語直感が言語研究に役立つことは否定しない。しかし，そのような直感は何ごとかを主張する動機としては十分であるが，よほど自明な場合を除けば，その主張を正当化する根拠

[21] たとえば，明示的に換言を示す「言い換えれば」などの表現と，「あの」などのフィラーの働きは明らかに同一ではないだろう。

としては十分ではない。とりわけ，個々のフィラーの表現効果の違いのような微妙な問題に関しては，分析者の主観的な印象を記述するだけでなく，さらなる理論的・事実的裏づけを追加する必要があるだろう。

3.1.1.2. 個々のフィラーを対象とした談話分析的研究

個々のフィラーに焦点を当てた談話分析的研究には，「あの（ー）」を対象とした Cook（1993），西坂（1999），「なんか」を対象とした川上（1991，1992），鈴木（2000），エメット（2001），「まあ」を対象とした川上（1993，1994），加藤豊二（1999），川田（2007）がある。これらの研究は主に，一定量の談話資料を観察して，個々のフィラーの使用場面や機能を記述，分類するという方法をとっている。

こうした研究におけるフィラーの用法の分析や分類も非常に興味深いものである[22]が，前節で紹介したフィラー全体を対象とした研究と同様，「私が談話資料を観察したところ，こうであった」という仕方で，観察の結果を示すだけのことが多く，分類の基準や裏づけが不透明な場合が少なくない。たとえば，エメット（2001:213）は，「「なんか」は対話相手を積極的に会話に引き込んだり，話者と協力して一つの発話をするように促すことにもなる」と主張しているがその論拠が十分に示されていないように思われる。また，Cook（1993:21）は，「あの（ー）」は，「話し手と聞き手を後続のやり取りに向けて同列に並べる」（”ano aligns the speaker and addressee for subsequent exchanges”）機能を有すると仮説を立て，それを談話分析により検証するという形式をとっているが，その論証の多くは，談話資料に観察される客観的な事実によって仮説の妥当性を保障するものというよりは，むしろ，仮説が正しいことを前提にして談話資料を解釈しており，循環しているように見える。

談話分析的手法による個々のフィラーの研究のもう１つの問題点は，ほとんどの研究が，ある特定のフィラーの機能を単発的に記述，分類するに止まり，他のフィラーとの比較・検討を行っていないことである。その結果，記述の内容が似通ったものに集中し，個々の形式の特性や他の形式との異同がきわめて見えにくくなっている。たとえば，上に挙げたエメット（2001）の「なんか」についての記述と Cook（1993）の「あの（ー）」についての記述はともに，聞き手を会話に引き込むという主旨のものであり，両者の違いは見えにくい。また，鈴木（2000）は，「なんか」の用法として，「発話内容に対して微妙に距離を

[22] ここで挙げた個々の研究についての評価は第 5 章以下の各論の中で行う。

置いていることを示し，意見を主張することに伴う責任を軽減」する，「つなぎの言葉（filler)」，「新しい話題が導入されることを示す」を挙げているが，川田（2007）は，「まあ」の用法として，「発話行為の程度を和らげるヘッジ」，「フィラー」，「新情報の提供」と述べている。こうした似通った記述からは「なんか」と「まあ」の違いは見えてこない。

そのような中にあって，西坂（1999）は，単に談話資料の分析の結果を示すだけでなく，会話分析の手法に則って機能の認定に至るまでの手続きを丹念に記述している点で評価できる。西阪は，「「あのー」が実際の会話のなかでどのようにもちいられているか，会話のなかでそれをもちいることで会話への参与者たちは何をしているのか（p.74)」を分析し，「あのー」は，自分の発言が「受け手に合わせたデザイン」という観点からそれが適切であるかどうか不確定であることを会話参加者に公然化するための標識として機能していると結論している。しかし，西阪（1999）は，あくまで言葉自体を研究対象としない会話分析であり，「「あのー」の用法にかんする一般的な定式や系統的な分類を提出すること(p.74)」を目的としていない。したがって，西坂自身も認めているように，ここで明らかにされたのは「あのー」の多様な用法の一部に過ぎない。それゆえ，日本語教育への応用を考えた場合，得られる知見が断片的すぎるという問題がある。

3.1.1.3.　フィラーについての計量的研究

談話分析とは研究方法において一線を画した研究に，川田（2008）と，渡辺による一連の計量的研究（Watanabe 2002，渡辺他 2004，2006，Watanabe 2009）がある。

川田(2008)は,フィラー発話時に話し手は聞き手以外に視線を向けやすいという Kendon（1967）の説を日本語について検証するために，視線に関するタグ付きの日本語コーパス（Billboard Corpus）を用いて，フィラーと視線の関係を検討している。その結果，日本語においても Kendon（1967）の説はおおむね支持されるが，「えー型フィラー」(「えー」や「えーと（ですね)」）に比べ，「指示詞型フィラー」(「あの（ー)」，「その（ー)」，「こー」）は聞き手に視線が向けられやすいことを明らかにしている。また，ポスター発表のプレゼンテーション時とその後の質疑応答時におけるフィラーの出現率を調査し，聞き手との相互行為の度合いが低いプレゼンテーション時には「えー型フィラー」が頻繁に発話される一方，相互行為の度合いが高い質疑応答では，「指示詞型フィラー」が多用されることを明らかにしている。こうした結果から，川田は，「えーと」は自己志向的，「あの（ー)」は他者志向的という定延・田窪（1993，1995）記述は支持できると結論している。こうした，

フィラーと身体動作との関連についての研究は，今後のさらなる展開が期待できるだろう。

一方，渡辺の一連の研究をまとめた Watanabe（2009）は，フィラーに関する大規模な研究として注目すべきものである。Watanabe（2009）は，大きく３つの研究からなる。

第１に，渡辺は，『CSJ（日本語話し言葉コーパス）』に収録された講演音声データによって，フィラーの分布と社会言語学的要因（場の改まり度，話者の性別，年齢）との関係を計量的に分析している。その結果，フィラーの出現率は，学術的なプレゼンテーション（学会講演）よりも，カジュアルなプレゼンテーション（模擬講演）の方が高いこと，男性は，「えー」，「まー」，「その」などをよく用いるのに対して，女性は母音の延伸[23]をよく用いることなどが明らかにされている。

第２に，渡辺は，フィラーの出現率に関して「境界仮説」と「複雑さ仮説」の２つを立て，それを『CSJ』のデータによって検証している。まず，境界仮説とは，境界が深いほど，フィラーの出現率が高いというものである。また，複雑さ仮説とは，後続構成素が長く複雑なほど，フィラーの出現率が高いというものである。検討の結果，両仮説をおおむね支持する結果が得られている。また，「境界仮説」に関する研究は，Watanabe（2002）でも行われており，大学の講義のデータを用いた検討の結果，「ええと」が談話の境界（discourse-segment-boundary）に最も頻繁に出現するフィラーであることが明らかになり，渡辺は「ええと」は談話の境界に関する情報を伝えていると結論している[24]。

第３に，渡辺は，「複雑さ仮説」を敷衍して，聞き手は，フィラーがあると後続発話が長く，複雑になることを予測しているかどうかを実験によって検証している。その結果，聞き手はフィラーとポーズの挿入によって，後続発話が長く・複雑になることを予測していることが明らかにされている。また，渡辺は，同様の実験を，中国語を母語とする日本語学習者に対して行い，滞在期間が長い学習者は，日本人の場合と同様に，フィラーを後続発話の長さ・複雑さの予測に活用しているが，滞在日数が短い学習者の場合は，フィラーやポーズの効果は見られなかったと述べている。

以上のように，渡辺の研究はフィラーと社会的位相，フィラーの出現位置，フィラーの

---

[23] この分析において，Watanabe（2009）は，フィラーを「あのー」，「えー」，「えーと」，「まー」，「そのー」，「えー」以外の母音および「んー」の６つのタイプに分類している。また，情報処理のための時間を稼ぐという点がフィラーと似ていることから，「私がー，これをー，」のような母音の延伸を分析に加えている。なお，Watanabe（2009）が，「えー」以外の母音と呼ぶのは，「私が，あー，これを，おー」のような，いわゆる「途切れ延伸型のつっかえ」（定延 2005:63）のことである。

[24] ただし，境界に出現することと，境界を知らせる機能を持つこととは，同一ではないため，Watanabe（2002）の結論はさらなる検証を必要とするだろう。

効果についてそれぞれ非常に興味深い結論を導いており，また，研究方法として，分析者の内省や印象を記述するだけではなくインフォーマント調査や統計的検定といった手法を用いたという点で高く評価できる。しかし，残された問題がないわけではない。

第１に，フィラーの定義の問題がある。1.2 節で指摘したように『CSJ』のフィラーの定義（小磯他 2004）には不透明な部分や恣意的だと思われる部分が少なくない。それゆえ，Watanabe（2009）の統計は，出発点である定義の不透明さや恣意性をそのまま引き継いでしまっているように思われる。たとえば，「まー」がフィラーとされ，「なんか」がフィラーとされない理由は一切説明されていない。Watanabe は，定延・田窪（1995）などの内省に基づく研究に対して，客観的基準がない，実証的でない，包括的でないと厳しく批判する（pp.14-15）一方，『CSJ』のタグを全くを無批判に採用しているが，なぜだろうか。

第２に，『CSJ』には，資料としての限界もある。たとえば，Watanabe（2009）は，『CSJ』に基づいて，学会講演と模擬講演によって改まり度とフィラーの関係を検討しているが，筆者の印象が正しければ，学会講演と模擬講演の対立は，「丁重」（超フォーマル）と「丁寧」（フォーマル）といった程度の対立であり，Watanabe（2009）が言うような「フォーマル」対「カジュアル」の対立として見るのは必ずしも適切ではないように思われる。『CSJ』には，友人同士の会話，家族の会話といった，カジュアルな談話は収録されておらず，これを補うには，別の資料を併用する必要があるだろう。また，事前に準備ができる講演におけるフィラーと，出たとこ勝負で進行する対話におけるフィラーは異なる分布を示すと予想され，今後は，対話におけるフィラーも観察する必要があるだろう。

第３の問題は，渡辺が，個々のフィラーの違いはさして重要ではないという論に傾いているように見えることである。たとえば，「フィラーの種類が異なっても，機能には共通する面が多く，他のフィラーとの代替可能性が高い（渡辺他 2006:371）」と述べ[25]，次の（3.4）において，「○○○」部分に入るフィラーとして，「『アノ（ー）』，『エ（ー）』，『エート』，『マ（ー）』，４種類の高頻度フィラーのうち，『マ（ー）』以外の３種類は問題なく使うことができる。従って，これら３種類のフィラーの，この文脈における機能は等しい（渡辺他 2006:376-377）」と述べている。

（3.4）　＜家族に物を頼む場面＞

あのね，机の上から，青くて，○○○，丸い紙持ってきてくれる？

（例文は，渡辺 2006:374 の記述に基づいて作成した）

[25] 渡辺（2006）は，Watanabe（2009）の内容の一部が論文として日本語で発表されたものである。

だが，代替が「可能か不可能か」というデジタルな違いだけでなく，「代替不可能ではないが，自然さの度合いが違う」，「代替可能だが，ニュアンスが違う」，といったアナログな違いも重要なのではないだろうか。筆者の内省では，(3.4) において「○○○」部分に「えー」や「あの（ー)」を入るのは，不可能ではないが，違和感がある。渡辺自身，実験に用いる例文には「えーと」を選択しており，その理由として，「本実験の文脈において＜中略＞「アノ（ー)」，「エ（ー)」，「エート」，「マ（ー)」の４種類の高頻度フィラーの中でどれが最も自然かを 10 名の日本語母語話者に尋ねたところ，10 名中 8 名が「エート」が最も自然であると答えた（渡辺 2006:374)」と述べている。このように，フィラーの自然さについての内省判断が母語話者の間で高度に一致するという事実は必ずしも無視できるものではないように思われる。それゆえ，ある文脈で，どのフィラーが，なぜ自然・不自然になるのかは依然として解答すべき問題である。

また，特に日本語教育への応用を考えた場合，フィラーの代替が「可能か不可能か」だけを問題にし，ニュアンスの違いを切り捨てるのは得策ではない。たとえば，次の（3.5a）の「あのー」を（3.5b）のように「まー」に入れ換えるのは不可能ではないが，かなり無礼な態度にとられる可能性が高い。

(3.5)　＜学生が指導教員に対して＞

a. あのー，お忙しいところとは存じますが，あのー，論文の添削をお願いできないでしょうか。

b. まー，お忙しいところとは存じますが，まー，論文の添削をお願いできないでしょうか。

このように印象が全く異なる両者を「この文脈における機能は等しい」と割り切れるものなのだろうか。ある文脈において，あるフィラーが，どのようなニュアンスを，なぜ生むのかは依然として解決すべき問題であるように思われる。

さらに，渡辺は（3.4）について「『マ（ー)』以外の３種類は問題なく使うことができる」と述べているが，なぜ，この文脈で「マ（ー)」が使えないのかという問題も解答を要するものであろう。すなわち，ある文脈において，あるフィラーが，なぜ使えないのかも依然として問題として残されている。

3.1.2.　認知主義的アプローチによる研究

認知主義的アプローチとは，言語表現の説明原理として人の心を持ち出すアプローチを

指す[26]。認知主義的アプローチによるフィラーの研究が前提とするのは，話し手の心内行動とフィラーとの対応関係である。喩えて言えば，コンピュータの画面上に表示される「ファイルを検索中」，「データを処理中」といった情報処理状態に関するメッセージとフィラーを類比的に捉えて，「意味製作中である」，「形式製作中である」といった話し手の心的情報処理の状態の違いに応じて，「ええと」「あのー」などの個々のフィラーが使い分けられているという前提に立つのが認知主義的アプローチである。

認知主義的アプローチによるフィラーの研究には，「ええと」・「あの（ー)」を対象とした定延・田窪（1993，1995），定延（2005b），感動詞全般を概観した田窪・金水（1997），「そー」・「んー」を対象とした定延（2002），「まあ」を対象とした冨樫（2002b），「そうですねー」を対象とした小林（2007），空気すすりを対象にした定延（2005，2007）がある。以下では，認知的アプローチの利点と問題点を明らかにするために，定延・田窪（1993，1995）と，冨樫（2002b）を取り上げて，検討する[27]。

定延・田窪（1995）によると，「ええと」は心内の演算領域の確保という行動に対応し，「あの（ー)」は言語形式製作という行動に対応している。言い換えれば，「ええと」は「＜何かをわかる（例えば発言すべき内容を作成する）＞という内向的な営み（定延・田窪 1993:17)」に対応し，「あの（ー)」は，「＜発言すべき内容をうまく(音声)言語で伝える＞という外向的な営み（定延・田窪 1993:17)」に対応している。

（3.6）　一郎：1234 足す 2345 は？

次郎：{ ええと／??あのー }，3579。　（定延・田窪　1995:83）

（3.6）において次郎の返答として，「ええと」が自然で「あの（ー)」が不自然なのは，計算が「何かをわかる」ための行動だからである。ここでは，答えがわかっているが，それを言語化するのに手間取っているとは考えにくいので「あの（ー)」の使用は不自然に感じられる。

逆に「ええと」の使用が不自然で，「あの（ー)」の使用が自然な場合もある。

（3.7）教師：君か，ガラスを割ったのは？

学生：a.??ええと，すみません僕です。

b．あの（ー)，すみません僕です。

（定延・田窪 1993:19，傍線引用者）

[26] ここで言う認知主義的アプローチと，いわゆる「認知言語学」は異なる。認知主義的アプローチとは，人の心を問題とする言語研究全般を指す。詳しくは定延（2000:3-4）を参照。

[27] それ以外の個々の研究についての検討は，第 5 章以下の各論の中で行う。

（3.7）の学生の返答として「ええと」が不自然に感じられるのは，学生にとって「自分がガラスを割った」という事実はあえて分かろうとしなくても分かりきったことだからである。一方，この場面における学生の関心は，自分がガラスを割ったことをいかに適切に言語化して教師に伝えるかにあると考えられるため，「あの（ー）」の使用は自然になる。

このように，認知主義的アプローチでは心内行動との対応をフィラーの根本と見定め，「話し手は心的操作ごとに対応づけられたモニター標識を使い分けて発話することにより，自分のおこなっている心的操作を明確化でき，支援できる（定延・田窪 1995:78）」と主張している。このような考えは，たとえば，一人で図書館で本を探しながら「ええと…301，301 と…」と発話する場合など，発話権の維持，獲得といった表現効果では説明がつかないフィラーをうまく説明してくれる。

一方で，認知主義的アプローチは，フィラーの表現効果を無視するわけではない。認知主義アプローチにおいて，「後続する発話を聞き手に予測させ，談話の進行を円滑なものに（定延・田窪 1995:78）」する，「コミュニケーションの途絶を防ぐ（定延・田窪 1995:78）」，「発話の無礼さを減殺する（定延・田窪 1995:86）」といった効果は，話し手がフィラーを発話することで明らかになる心内状態を聞き手が読みとることで派生的に生じると捉えられている。たとえば，次の（3.8）において，「あの（ー）」は，自分の発言のぞんざいさを抑えるという表現効果をめあてに使用されている。

（3.8）依頼（文頭の＃は相対的に無礼な発話であることを表す）

a.＃窓を開けてもらえますか？

b.＃<u>ええと</u>，窓を開けてもらえますか？

c. <u>あの（ー）</u>，窓を開けてもらえますか？

（定延・田窪 1995:86，傍線引用者）

この場面において話し手は，本当に心内情報処理を行っているかいないかに関わらず，あえて「あの（ー）」を発話することで，「発話形式に気を配っているという態度（定延・田窪 1995:86）」を演出し，発話を丁寧にしていると説明される[28]。一方，この場合，自分自身が＜何かをわかる＞ための標識である「ええと」の使用は，聞き手への配慮に欠けると

[28] 3.1.1.2 節で紹介した西阪（1999）は，定延・田窪（1995）の論に対して，「『あのー』の用法はさまざまであり，そのさまざまな用法すべてに『共通の』特性などない（西阪 1999:74）」と述べているが，その批判の根拠は必ずしも明らかでなく，むしろ会話分析のドグマの表明にすぎないように思われる。実際，「あのー」は，自分の発言が「受け手に合わせたデザイン」という観点からそれが適切であるかどうか不確定であることを会話参加者に公然化するという西阪の記述は，定延・田窪が，発話形式に気を配っている態度の演出として述べていることとほとんど変わりがないように思える。

いう点でややぞんざいになる。

このように，定延と田窪は，心的操作との関わりに注目することで，個々のフィラーの使い分けについての説明に成功している。また，定延と田窪の論は，フィラーの表現効果に関して，その形式がどのような表現効果を持ち得るのかを理論的に演繹し，予測できるという利点がある。

一方，冨樫（2002b）も，定延・田窪（1993，1995）などと同じく，心内情報処理という観点から「まあ」を分析している。冨樫（2002b）は，3.1.1.2.節で取り上げた川上（1993，1994），加藤豊二（1999）らの分析を，「まあ」が用いられる状況の分類に止まり，本質的な機能の究明に至っていないと批判した上で，「まあ」が使用可能になる条件や出現位置などを内省し，「まあ」は，「ある前提から結果へと至る計算処理過程が曖昧であることを示す。あるいは計算に至る際の前提そのものが明確ではないことを示す　（冨樫 2002b:24）」と主張している。また，そのような「まあ」の「本質的機能」から，「なだめる」，「和らげる」，「やんわりと否定する」といった発話効果が派生すると述べている。

冨樫の研究は，独り言を含めた「まあ」のさまざまな用法を統一的に説明することを試みた興味深いものであるが，問題とすべき点も少なくない。その最たるものは，記述の不透明さである。たとえば，冨樫（2002b:19）は「まあ」は，「計算処理過程の曖昧性を示す」のに対し，「たぶん」は「計算処理の結果の曖昧性を示す」と述べているが，「計算処理」という概念や，「過程の曖昧性」と「結果の曖昧性」の違いが詳しく説明されておらず[29]，この記述から「まあ」と「たぶん」の生起環境や表現効果の違いを演繹するのは難しいように思われる。たとえば，次の（3.9）のような「まあ」と「たぶん」の生起環境の違いを「過程の曖昧性」・「結果の曖昧性」と説明されてもよく分からない。また，（3.9）において「計算処理」とは何をどうすることなのだろうか。

（3.9）a.　まあ，座ってください。

b.??たぶん，座ってください。

このように，認知主義的アプローチは，従来の方法では解決困難であったフィラーの使い分けという問題に解決の糸口を与える道具として有効に働くこともあるが，心内領域や

[29] 冨樫（2002:23）は「計算処理過程の曖昧性」とは，「『（前提を含めた）計算処理が 100%確実に行われているものではない』ことと捉えてもらいたい」と解説を加えているが，この解説の意味するところも必ずしも明確ではないように思われる。また，8.2.3.2 節で論じるが，冨樫が「まあ」が「計算処理」の「結果」ではなく「過程」に関わる根拠とする「『まあ』は発話末に現れることができない」という観察も支持しがたい。

計算処理といった観察不可能な理論的対象を持ち込むため，よほど気をつけなければ，言語現象の説明が不透明になる危険性も同時にはらんでいる。

3.2.　先行研究の成果と残された課題

以上，3.1.節では，日本語のフィラーに関する先行研究を概観した。本節では，2.4.節で明らかにしたフィラーの指導を充実させるために解明すべき２つの基本的事項，すなわち，自然談話におけるフィラーの使用実態の把握と個々のフィラーの用法の解明に対して先行研究がどのような知見を与えてくれるのか，また逆に，先行研究ではどのような点が不足しており，今後の研究によって補っていく必要があるのかについてまとめる。

まず，自然談話におけるフィラーの使用実態の把握については，3.1.1.1.節において紹介した山根（2002）の研究や 3.1.1.3 節において紹介した Watanabe（2009）によってかなり前進したと言える。山根や渡辺の研究から得られるフィラーの出現頻度や出現位置に関する知見は，日本語教科書のモデル会話を改善する上で参考になるものであろう。また今後は，コーパスの利用によってさらに多くの量や種類の談話についての分析が進むことが予想され，近い将来，自然談話におけるフィラーの使用実態についてより多くのことが解明されることが期待される。

一方，個々のフィラーの用法の記述についてはどうだろうか。2.3 節で述べたように，日本語教育におけるフィラーの指導で特に期待されるのは，個々のフィラーの用法や使い分けを説明することであろう。つまり，「日本語では，言いよどむときに『ええと』,『あのー』を用います」,「皆さんはもう上級なので,『まあ』,『なんか』,『そのー』なども使ってみてください」といった大まかな指導から一歩進んで,「『あのー』はこのように使うのが適切です」,「この場面で『そのー』を使うとこのような効果が生じます」,「『まあ』と『なんか』はこのような違いがあります」,「そこで『うーん』というのは不自然です。なぜなら…だからです」といったきめ細かな指導を行えることが望ましいし，基礎的研究には，そのような指導に供する知見を蓄積することが求められているだろう。

認知主義的アプローチは，個々のフィラーと心内行動との対応（およびそこから演繹される表現効果）という形で個々のフィラーの違いを記述しており，高く評価できる。しかし，現在までのところ認知主義的アプローチにおいて，心内行動との対応関係が説明されたフィラーは「えー（と)」,「あの（ー)」,「んー」,「そー（ですねー)」,「さー」,「まー」,「空気すすり」に限られており,「そのー」と「なんか」は扱われていない。また，認知主

義的アプローチによる記述のすべてが個々のフィラーの異同の説明に有効なわけではない。たとえば,「あの（ー)」と「その（ー)」の表現効果はどう異なるのか,「えーと」と「うーん」の生起環境はどう異なるのか,「まあ」や「なんか」はいつ使えて，いつ使えないのか，またそれはなぜか，といった知見は得られていない。さらに，認知主義的アプローチによる記述のすべてが教育に応用可能なわけでもないだろう。たとえば,「計算処理の結果ではなく,『計算処理過程の曖昧性を示す（冨樫 2002)』ために,「たぶん」ではなく,「まあ」を使いましょう」と言われても，学習者は何をどうしていいのか分からないように思われる。したがって，これまでになされてきた認知主義的アプローチによる記述を，個々のフィラーの異同の説明に有効か，日本語教育への応用が可能かという視点から再度検討し直す必要があるだろう。

一方，外部観察的アプローチは，ほとんどの記述が「やわらげ」,「間つなぎ」,「新情報導入」といったレベルの大雑把な表現効果の記述に収束してしまっており，個々のフィラーの相違をほとんど記述できていない。もちろん,「やわらげ」,「間つなぎ」,「新情報導入」といった記述は必ずしも間違ってはいないのかもしれないが，個々のフィラーの異同という肝心な点については何も説明してはくれない。日本語教育におけるフィラーの指導を充実させるために今後求められてくるのは，そのようなほとんどのフィラーに共通してあてはまってしまうような一般的記述ではなく，個々のフィラーの特質が明らかになるような記述であろう。

以上のように，日本語のフィラーに関する先行研究は，自然談話におけるフィラーの使用実態の把握に関しては，それなりの成果を挙げているといえる。しかし，もう一つの課題である個々のフィラーの用法については，現時点で教育に応用可能な知見はあまり多くは得られていない。

第２部　個々のフィラーの用法の記述

第１部（第２章と第３章）では，本研究の背景を論じた。本研究がフィラーを扱うのは，日本語教育における話し言葉の指導をより充実したものにするためであり，また，今後，日本語教育においてフィラーの指導を効果的に行うためにもっとも必要とされている知見は，個々のフィラーの用法，使い分けに関する記述である。

そこで，第２部（第４章から第８章）では，日本語教育への応用を前提として個々のフィラーの用法の記述を行っていく。まず，第４章では，本研究の方法とデータ，理論的前提を説明する。第５章では，「あの（ー）」と「その（ー）」を対象し，両者の生起環境や表現効果の違いを明らかにする。第６章では，「えー（と）」，「うーん（と）」，「さー」，「そー（ですねー）」，空気すすりの５形式を扱う。第７章では，「なんか」を，第８章では「まあ」をそれぞれ取り上げる。

また，1.2 節で述べたように，個々の形式の性質を丹念に吟味していくという作業は，日本語のフィラーというカテゴリーそのものの定義や必要性を検討するためにも必要である。

第４章　本研究の目的と方法

本章では，個々のフィラーの用法についての具体的な考察の準備として，本研究の目的と方法を定めるとともに，理論的前提を説明する。

4.1　本研究の目的

第３章では，日本語のフィラーに関する先行研究は，日本語教育におけるフィラーの指導を充実させるために解明すべき２つの基本的事項のうち，個々のフィラーの用法の解明において十分でないことを明らかにした。そこで本研究では，個々のフィラーの用法を明らかにすることを目的とする。ここで言う個々のフィラーの使い分けとは，あるフィラーが「いつ自然に使えて，いつ使えないのか」，「どのような場面で，どのような印象や効果を生じ得るか」，「何種類の用法を区別すべきか」といった日本語教育への応用に供するような具体的な知見である。

4.2　本研究の方法・データ

次に，本研究が用いる記述の方法論とデータについて説明する。

3.2 節では，フィラーに関する先行研究を大きく，外部観察的アプローチと認知主義的アプローチに分けたが，この区分は採用される研究方法にもほぼ対応しており，外部観察的アプローチでは主に「実例・帰納的方法」が採られ，認知主義的アプローチでは主に「作例・演繹的方法」が採られる。

実例・帰納的方法とは，談話の文字化資料を用いて，そこで起こっていることを記述するアプローチである。このアプローチは観察方法に応じて，質的方法（談話分析・会話分析的方法，山根 2002，西阪 1999 など）と量的方法（統計的方法，Watanabe 2009 など）を区別することができる。

一方，作例・演繹的方法は，理想的発話（作例）の自然さやニュアンスに関する内省判断をデータとして，仮説を構築し，それを検証するという方法である。作例・演繹的アプローチおいて，質的方法と量的方法は明確には区分しがたいが，ここでは，分析者の内省にのみ頼る方法を質的方法（定延・田窪 1995，冨樫 2002 など），インフォーマント調査の結果などを補助的に示す方法（大工原 2008 など）を量的方法と呼んでおくことにする。

もちろん，実際には外部観察的アプローチでも内省判断は行われているし，認知的アプローチでも実例の質的観察や統計を仮説構築や検証に用いる場合は多いが，全体的な傾向をつかむ上では「実例・帰納的方法」と「作例・演繹的方法」という区分は有効であろう。

本研究は，認知主義的アプローチの作例・演繹・質的方法を主たる研究方法としつつ，その欠点を補うために量的方法や実例・帰納的方法を適宜補助的に用いるという方針を採ることにする。以下では，記述方式としての認知主義的アプローチの利点と問題点，および，本研究が用いるデータについて詳述する。

4.2.1　認知主義的アプローチ

本研究では，個々のフィラーの用法を記述する方法論として主に認知主義的アプローチを採用する。本節では，その利点と問題点を述べる。

認知主義的アプローチの第 1 の利点は，記述の経済性である。日本語教育において言語要素を教える場合，「典型的な用法」（どんな効果があり，何ができるか）と「使用上の制約」（いつ使えていつ使えないのか）を教えるのが原則だと考えられる。また，「典型的な用法」や「使用上の制約」をバラバラの知識としてではなく，有機的・体系的に理解する

ためには，個々の言語要素の抽象的な「特性」を把握しておく必要がある。フィラーについて言えば，現在のところ，個々のフィラーの「特性」を記述できているのは，認知主義的アプローチだけである。認知主義的アプローチでは，心内行動との対応関係などが個々のフィラーの「特性」として記述され，そこから「使用上の制約」と「用法」が演繹されている。もちろん，どこまでを「典型的な用法」をみなすかについては簡単には決められないが，目下の議論において重要なのは，認知主義的アプローチが，個々のフィラーの「特性」を記述する道筋を示していることであり，そこからどのような用法や制約があり得るのかを見通す可能性を示していることである。

認知主義的アプローチを採用する第 2 の理由は，そもそも外部観察的アプローチがフィラーの用法や使用上の制約を観察・記述する方法として限界を抱えているように思われることである。一見したところ，「この場面でこのフィラーを使うとこんな効果がある，こんなことができる」という用法についての知見を得るには，外部観察的アプローチがもっとも有効・着実であるように思われ，実際，3.1.1.1.節と 3.1.1.2.節で紹介したように，フィラーの用法に関する先行研究は，多くが談話分析的な方法によって行われてきた。しかし，3.2 節で述べたように，こうした記述の多くは「間つなぎ」，「ぼかし」，「やわらげ」，「話題導入」といった主旨の大まかな表現効果に収束しており，各フィラーの異同をほとんど明らかにできていない。また主張も「私が談話資料を観察したら，こうでした」式の記述に終始し，理論的・事実的根拠付けを伴っていないことが少なくない。さらに現実の自然なデータだけを観察しても，あるフィラーが「いつ使えないのか」，「いつ不自然になるのか」といった使用上の制約（負の観察）に関する知見を得るのは難しい。

もちろん，談話分析的手法による研究成果のすべてが間違っているとか，信頼できないなどと言うつもりは全くない。特に，社会学に起源を持つ会話分析（Conversation analysis）は，信頼性・妥当性を確保する独自の方法論を発達させてきている。会話分析は，自然なデータを無心に観察することを重視しており，串田（2006a）によると，その方法には，①分析者の内省や作例では気づかない現象に気づくことができる，②仮説という「色メガネ」をかけることによって見えにくくなる，あるいは，見えなくなってしまう現象を発見できる，という利点がある。こうした主張にはたしかに耳を傾けるべきものがあるだろう。

しかし，これまでの研究成果を見る限り，さまざまな現象が複雑に絡まりあった現実の談話データを理論的に「裸眼」の状態で観察するという素朴な手法だけでは，個々のフィラーの異同という問題を，体系的・有機的に解決するのは難しいように思われる。もちろ

ん裸眼での観察も重要だが，逆に裸眼では見えず，仮説や理論という「色メガネ」を通すことで初めて見えるようになること，見えやすくなることもあるのではないだろうか。フィラーの記述における外部観察アプローチの停滞状況を打破するには，それなりの危険を承知であえて色メガネを着用してみる必要があるように思われる。

一方，認知主義的アプローチに対する批判として，観察不可能な対象を説明に持ち込むべきでないとする経験主義的な立場からのものがあり得るだろう。たしかに，認知主義的アプローチで導入されるさまざまな概念は，その有効性・妥当性をデータによって裏づけたり，概念規定を明確に行わなわなければ，概念だけが一人歩きし，不透明で反証のしようがないトートロジー的な「お話」が氾濫する危険性はある。「心」は，現象を説明するための理論的概念に過ぎず，その内実は自明ではない。それゆえ，「心」なる概念を丁寧に規定し，説明しなければならない。そうでなければ，たとえば，言語表現 A を発話する際，話し手の内なる「神秘の箱」において「何事か」が起こっており，その「何事か」の内実は推して知るべしというような思わせぶりなだけの主張に陥る危険があるだろう。

しかし，こうした問題は，何も認知主義的アプローチ固有のものでなく，すべてのアプローチについて言えることである。たとえば，多くの言語研究が用いる「機能」，「意味」，「意図」，「話し手・聞き手」，「命題」，「情報」，「ポライトネス」，「ヘッジ」などの概念も立派な理論的概念であり，データの裏づけや明確な定義なしに主張がなされれば，やはり反証不能な論に陥る危険性がある。また，直接観察できない概念がただの空想の産物であり，現実に役立たないわけではない。たとえば，物理学の「電子」などの直接観察できない理論的概念ががわれわれの生活において役立っているのは言うまでもない。つまり，これは認知的アプローチ自体の問題なのではなく，主張の根拠や前提，概念の定義を明確にしているかどうかという研究の手続きの上の問題である。

Chafe（1970）は，経験主義的な立場の言語研究について，「牛乳のできるまでを記述するにあたって，牛について何も触れないようなものである（邦訳，p.74）」と批判しているが，言語という人間の営みを説明するには，それを生み出す人間への言及が少なからず必要であるように思われる。認知主義的アプローチは，「心」という理論的装置を通じて人間への言及を可能にする有力な方法の一つである[30]。以下ではこのアプローチが，ともすれば

[30] 他に，言葉を発する際の脳や神経の状態を記述する生理的なアプローチがあり得るが，そのようなアプローチは筆者の力の及ぶところではないし，また，脳や神経の状態の記述から本研究が目指すような知見，すなわち，あるフィラーにどのような表現効果があるのか，いつ使えていつ使えないかといった知見が得られる見通しはほとんどないように思われる。

不透明な記述に陥りやすいことを自覚した上で，適宜そうした危険への対策を講じながら，これを主たる方法として採用する。

4.2.2　本研究のデータ

本研究では，理想発話（作例）を主たるデータとしつつも，その欠点を補うために，実例（音声言語，文字言語）の質的・量的観察とインフォーマント調査を補助的に用いる。

作例を用いる最大の利点は，益岡（2003:10）などで述べられているように，「負の観察」（この状況でこの言い方はできない，しにくいという観察）を得ることができ，「仮説の検証などに有効」なことにある。本研究では，特に断りのない場合，発話，ないし，それを構成する要素の生起の自然さを次の３段階で判定する。

??　：不自然である。あまり自然ではない。

？　：多少違和感がある。

無印：自然である。

文脈を想定した発話（語用論）の研究における内省判断の難しさは，理想化された作例とはいえ，その正誤や自然さが常に明確に判定できるとは限らず，また，場合によっては（聞き手とのインタラクション，言い間違い，個人差などの複合的な要因により），作例においては明確に不自然と判断されるような発話が，実例として観察されることがあり得るという点である。たとえば，次の（4.1）のような「この（ー)」は，筆者の内省では，かなり不自然だが，現実の発話である。

（4.1）　エー マー 回数から言えばちょっと 対話っていうにはあまりにも コノー適当でないですね　　（山根 2002，資料 3，発話 014，傍線筆者）

したがって，本研究における，発話の自然さの判定は内省において，それが不自然に感じられるという傾向・程度を記述したものであり，そのような発話が現実にあり得ないことまでを主張するものではない。

また，文を対象とした文法研究では，しばしば非文法性，すなわち，統語的に規則によって不適格であると判定されることを表す記号として「＊」（アスタリスク）が用いられることがある。しかし現実には，ある文の不自然さが，文法的な規則によるものなのか，語用論的な傾向なのかは簡単には判断できるものではない。たとえば，次の（4.2），（4.3）の不自然さはどちらの要因によるのだろうか。

（4.2）??なんかー，窓を開けていただけないでしょうか。

（4.3）＜卒業名簿を見たら，みちこの姓が変わっていた。＞

??まあ，みちこはもう結婚したらしい。　（川田 2007:183）

したがって，本研究では，非文法性と不自然さの区別はしないことにする。

他方，作例を用いることの問題点は，観察が「偏向する可能性がある」こと，すなわち，第１に，自然さやニュアンスの判断が恣意的になる危険性があること，第２に，現象を見落とす危険性があることである。そうした欠点を補うべく，本研究では談話資料の質的・量的な観察とインフォーマント調査を補助的に用いる。

まず，例文の自然さやニュアンスなどの判定において，筆者ひとりの内省判断を示すだけでは論の説得性が低いと判断した場合は，インフォーマント調査（アンケートやインタビュー調査）を併用することにした。第 5 章では，紙媒体のアンケートを 126 名の日本語母語話者（大学生・大学院生）に配布し，例証に用いるほぼすべての例文の自然さなどを尋ねるという方法をとった。このような規模の大きな調査は恣意性の排除という意味では理想的なのだが，一方で，①被調査者への負担から，扱える用例数が限られ十分なデータを得にくい，②データ収集にかなりの時間と費用がかかる，③紙に書かれた例文を読んでフィラーの自然さを判定するという方法は被調査者にとってそれほど簡単ではない，④フォローアップができないという問題があった。こうした問題点ゆえに，たとえば，本研究の第 7 章や第８章のように，50 から 100 の例文を扱う論証においては，アンケートという方法で質のよいデータを十分に得ることは困難だと判断した。そこで，第６章以下では，原則として筆者の内省を主としつつも，それを補助する必要があると判断した場合（先行研究の判断と筆者の判断が一致しない異なる場合や，筆者が自分の判断に必ずしも自信を持てない場合）に限り，少数の日本語母語話者（２名～５名程度）に口頭でインタビューし，その結果を示すという方法をとった（詳細は各章で述べる）。

次に，必要に応じて，コーパスを用いた量的観察を行うことで，「～に出現しやすい」，「～に出現しにくい」といった記述に量的根拠を与えた。主に使用したコーパスは，国立国語研究所他（2004）の『日本語話し言葉コーパス』（『CSJ』）である。『CSJ』は，データの種類と量が多く，文字化・タグ付けがすでに行われており，統計に用いやすいという利点がある。また，数は多くないが，同一話者について，「学会講演」（現実の学会発表のデータ），「学会講演インタビュー」（学会講演の内容について発表者にインタビューをするデータ。以下，「INT 学会」），「模擬講演」（「人生で一番印象に残っていること」のようなテーマでの模擬的講演のデータ），「模擬講演インタビュー」（模擬講演の内容についての講演者

へのインタビュー。以下,「INT 模擬」),「課題志向対話」(あるタスクを行う際の対話のデータ。以下,「課題対話」) といった複数の談話が収録されており,同一話者の言語行動が談話の性質に応じてどのように変化するのかを観察できるのが大きな魅力である(各談話の特徴は,各章で説明するが,詳しくは籠宮(2004)を参照されたい)。

『CSJ』には収録された対話のデータはそれほど多くはない。本研究では基本的に,対話が収録された 16 名の話者の談話を観察対象とした。具体的には,「模擬講演」(16 ファイル),「INT 模擬」(16 ファイル),「課題対話」(16 ファイル),「学会講演」(10 ファイル),「INT 学会」(10 ファイル) の計 68 ファイルである。「学会講演」と「INT 学会」のファイル数が少ないのは,『CSJ』にこれらのファイルが収録されていなかったためである。具体的な観察対象を次の【表 4.1】に示す。

【表 4.1】 『CSJ』の観察対象

	学会講演	INT 学会	模擬講演	INT 模擬	課題対話
8M	A01M0074	D04M0043	S05M1506	D01M0005	D02M0016
19F	A05F0043	D04F0022	S05F1041	D01F0002	D02F0001
251M	なし	なし	S05M417	D01M0043	D02M0035
68F	なし	なし	S05F0378	D01F0046	D02F0033
373M	A11M0469	D04M0021	S05M1623	D01M0020	D02M0024
423M	A01M0056	D04M0056	S05M613	D01M0019	D02M0028
463F	A01F0122	D04F0044	S05F0463	D01F0030	D02F0031
471M	A11F0369	D04M0010	S05M1666	D01M0009	D02M0051
514F	A06F0128	D04F0050	S05F1600	D01F0023	D02F0025
674F	A01F0861	D04F0011	S05F1385	D01F0003	D02F0032
685M	A11M0846	D04M0052	S05M1236	D01M0047	D02M0052
790M	なし	なし	S05M1406	D01M0012	D02M0014
808F	なし	なし	S05F0899	D01F0055	D02F0027
910M	なし	なし	S05M0956	D01M0042	D02M0026
1125F	なし	なし	S05F1664	D01F0057	D02F0018
1185F	A11F0122	D04F0029	S05F0391	D01F0049	D02F0054

ただし，これまでの論で何度か指摘してきたように，『CSJ』のフィラーの定義は必ずしも明瞭ではなく，(F) というタグも必ずしも「フィラー」という意味で用いられていない。たとえば，『CSJ』の対話データで（F）タグ付きの「えー」を検索した場合，間つなぎ的な「えー」の他に，同意やあいづちの「えー」，聞き返しの「えー？」などが多数含まれる。また，たとえば「なんか」は，名詞「何」と助詞「か」に分離されている。それゆえ，『CSJ』を機械的に検索して集計するのが危険だと判断される場合には，ひとつひとつのデータを聞き直して集計した。観察対象を 68 ファイルに限定したのはそのような理由にもよる。

さらに，分析者の内省だけでは気づきにくい現象を見落とさないために，本研究では，適宜，実例の質的観察を行った。その際，『CSJ』に加えて，日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究（A）「日本語・英語・中国語の対照に基づく，日本語の音声言語の教育に役立つ基礎資料の作成」（課題番号 16202006，研究代表：定延利之）において 2004 年度に収集された神戸大学の大学生・大学院生による対話のデータを用いた（以下では，このデータを，仮に『対話コーパス』と呼ぶ)。『対話コーパス』は，『CSJ』とは異なり，非常にカジュアルでリラックスした雰囲気の談話が収録されており，また，録画された映像を見ることができるという利点がある。また，テレビ番組を筆者が録音し文字化したものもデータとした。

さらに，フィラーは必ずしも音声言語だけの現象ではなく，文字言語にも現れることから，文学作品，新書，インターネットの掲示板などの書き言葉も質的観察のデータとした。こうした文字言語において，「あえて書かれたフィラー」は，個々のフィラーの表現効果の違いを観察する上で話し言葉以上に有効な資料になる。本研究は，文字言語のデータとして，日本語の書き言葉の大規模コーパスである「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』2008 年度モニター版」（通称「BCCWJ2008 モニター版」）に加え，文学作品，新書，インターネットなどで，筆者が収集したデータを用いた。

本研究では実例にはすべて出典を明記している。また，出典が明記されていない例文はすべて筆者による作例である。

4.3　理論的前提

本節では，以下の論を進めるための理論的前提として，本研究が想定する心内情報処理機構と，フィラーの記述における視点と用語の問題について説明しておきたい。

4.3.1　心内情報処理機構

4.2.1 節で述べたように，本研究は，フィラーの用法を記述するために，主に認知主義的アプローチを採用する。すなわち，話し手がフィラーを発する際に，話し手の心内で何が起こっているのかを問題にする。その論をクリアなものとして展開するための準備として，以下では，本稿が想定する心内情報処理機構を提示し，概念を規定する。

3.1.2 節で紹介した認知主義的アプローチによる先行研究では，発話の産出・理解に関わる心内情報処理過程のモデルとして，「心的バッファー」，「心的データベース」，「長期記憶」などの構成要素からなる次の談話管理理論[31]のモデルが用いられることが多い（定延・田窪 1995，田窪・金水 1997，冨樫 2002 など）。

長期記憶⇒データベース⇔バッファー⇔発話

（田窪・金水 1997:259）

しかし，「心的バッファー」，「心的データベース」といった概念は，談話管理理論の発展過程において用語法が必ずしも一定しておらず，その規定はそれほど分かりやすいものではない[32]。また，理論的に不明瞭な部分も少なくない。さらに，先行研究によっては再解釈が行われ，全く異なる意味で用いられていることもあるため[33]，混乱を招く恐れがある。

言語現象の記述のために，心内情報処理という観察不可能な理論的現象を持ち出す以上，それが「神秘的なブラックボックス」にならないよう，少なくとも理論上は，心の中で何が起こっているのかを明確に論じる必要があり，そのためには，理論的道具立てをできるだけシンプルかつ最小限のものにする必要があるだろう。そこで，本研究では，談話管理理論の概念やモデルをそのまま援用するのではなく，定延（2000）や Jackendoff（1994,

---

[31] 談話管理理論は，フォコニエ（1985）の「メンタル・スペース理論」を応用し，すべての言語に共通する普遍的な言語運用モデルの構築を目指した理論で，田窪行則と金水敏を中心に展開されている（金水 1990，1992，金水・田窪　1990・1992，田窪　1989・1992・1995，田窪・金水　1996・1997）。

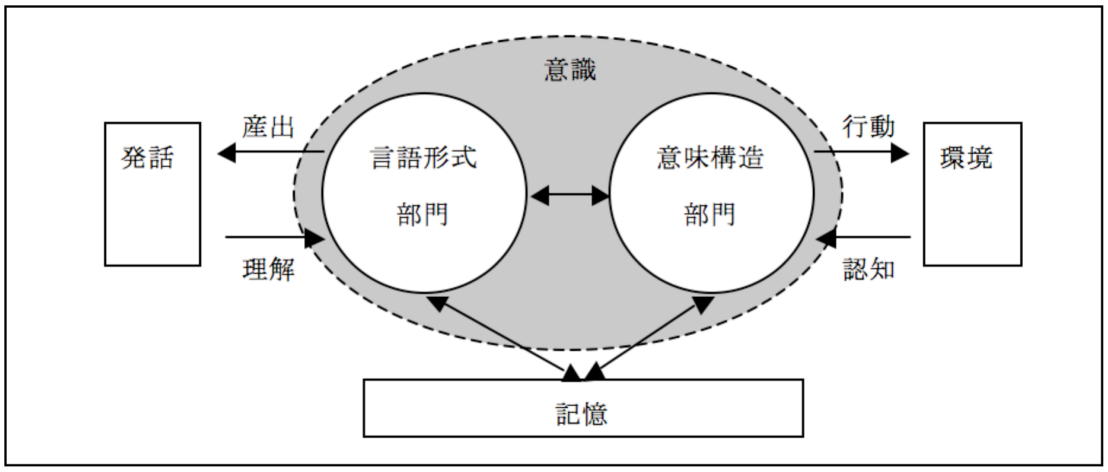
[32] 心的データベースとは，「長期知識の一部を活性化させ，対話者や対話の目的に特化した（田窪・金水 1997:259）」知識を貯蔵する心内領域で，「百科項目的知識，推論規則，過去に体験されたエピソード記憶等が蓄えられており，談話の構築のために随時参照される（金水 1990:61）」。一方，「心的バッファ」とは「心的データベース」への「アクセスパスを定義するインデクス，あるいはポインターの格納場所（田窪・金水 1996:59）」である。両者の関係は図書館の書庫と図書カードのボックスの関係に喩えられる（金水・田窪 1992）。例えば，図書を探すための効率的な手段として，いきなり書庫に向かわずに，まず図書カードによって配架番号を調べるというシステムがあるように，人間が迅速に情報処理を行えるのは，心内にカード・ボックスに相当する情報の整理システムが存在するからだと想定される。そのようなシステムを談話管理理論では「心的バッファ」と呼んでいる。この喩えでは，心的データベースは図書館の書庫に対応する。この図書館の蔵書は，長期記憶などから情報を取り込むことで増やすことができる。なお，談話管理理論の指示詞の説明などにおいて登場する「直接経験領域（D-領域）」，「間接経験領域（I-領域）」という概念は，「心的バッファ」の区分である。

[33] 冨樫（2001b:24）は，談話管理理論のバッファ，データベース，長期記憶という用語を Chafe（1994）による活性（active），半活性（semiactive），不活性（inactive）という情報の活性化の度合いによる区分と対応させている。これはデータそのものかポインタかという田窪・金水（1997）の立場とは異なる。

2002）のモデルなども取り入れながら，理論的に不透明・不十分な部分を補い，不要だと思われる部分を切り捨てて，筆者自身のものとして再構築したい。

本研究では，発話産出における心内過程をごく単純に，思考内容（意味構造）に，言語形式を与え，それを運動パターン（発話）として実現する過程であると規定する。そこで想定される心的機構は次のようなものである。

【図 4.1】　本研究における心内情報処理機構



このモデルを構成する主要な機構は，意味構造部門と言語形式部門の２つである。

意味構造部門とは，意味構造を作成したり，一時的に保存する心内領域である[34]。ここで言う意味構造とは，一般に，思考内容，認知内容，認識などと呼ばれるもので，「言語が伝える意味ないしはメッセージと同じものである（Jackendoff 1994，邦訳 p.223）」と規定する。意味構造は，内的・外的環境[35]から情報を得たり，記憶を想起したり，推測や演繹などの推論によって導入される。また，意味構造は言語に固有のものではなく，「言語がなくと

[34] なお，Jackendoff（2002）のように意味構造の下位領域として，述語論理的・記述的な情報処理の領域と量化的・指示的な情報処理の領域とを設け，前者を「心的データベース」，後者を「心的バッファ」と呼べば，談話管理理論と整合的に接続可能だろう。だが，意味構造に関わる情報には他にも，情報構造（談話構造）などが想定され，そうした領域を個々に規定することは煩雑であり，本稿に関する限り必要でもないので，行わないことにする。同様に，意味構造と記憶に，active，semiactive，inactive といった段階を設けて Chafe（1994）の理論と整合的に接続することも可能だろう（筆者の想定では，意味構造が active と semiactive に下位区分され，記憶が inactive に相当する）が，やはり本稿に関する限り必要ではない。

[35] ここで言う，「内的環境」とは，内臓感覚（胸のドキドキなど），体性感覚（体が熱い，足が重いなど），平衡感覚（フラフラするなど）などを通じて認知される体内環境（意図や感情のもとになると考える）を指し，「外的環境」とは，目の前の木や出来事など，視覚，聴覚，嗅覚，味覚，触覚によって認知される体外環境のことを指す。

も起こりうる（Jackendoff 2002，邦訳 p.322）」と考える。すなわち，たとえば，環境からの知覚によって生じた「あそこにペンがある」という意味構造は，それに手を伸ばして拾ういう行動の入力にもなると考える。このように意味構造を発話産出に固有なものと考えないことは，たとえば，独り図書館で「えーっと…」と言いながら本を探し，それを見つけ（存在情報の獲得＝意味構造の導入），書架から取り出す（行動としてのアウトプット）など，必ずしも発話の後続を予定しないフィラーの使用を捉える上で利点がある。

一方，言語形式部門とは，発話の言語形式を作成，解析したり，一時的に保存する心内領域である。理論的には言語形式を，「統語構造」（句の構造）と「音韻構造」（音節，音韻の構造）などに区分することもできるが，本研究においては特に必要ではないので単純に「言語形式」ですませることにする。言語形式の製作は，意味構造（言いたいこと）を参照して，記憶（心内辞書）から語彙を選び出し，それを統語規則に従って並べ，音形を与えるという形で進行すると想定する[36]。

以上のようなモデルはごく一般的なものであり，本研究では，これ自体にオリジナリティを言い立てるつもりはない。ここで，このようなモデルをあえて提出するのは，ただ，本研究が想定する心内情報処理過程をできるかぎり明確に（つまり，筆者本人が自分で何を言っているのかが分かり，記述内容に責任を持てる形で）論じたいがためである。以下では，このモデルを基本としつつも，各章において，必要に応じて補足を加えながら，心内過程とフィラーとの関係を論じていくことにする。

4.3.2　話し手はフィラーを「用いる」のか？

これまで，いくぶん不用意に「フィラーの用法」や「フィラーの使い分け」という言い方をしてきたが，この言い方において暗黙裡に前提とされる「話し手がフィラーを用いている，使っている」という構図には懐疑的な見方もある。

定延（2005a:35-36））は，ソバ屋の出前持ちが，「よっ」「おっ」「あーっ」等の感動詞を発する時，出前持ちは感動詞を用いて，自分の気持ちを表していると考えるのは適切ではなく，むしろ，「よっ」「おっ」「あーっ」は出前持ちのソバざるを担ぐ行動の一部と考えた方が適切であると述べている。たしかに，われわれは，日常の多くの場面でフィラーを「用いて」などおらず，フィラーは端的にそこに「現れる」だけであるように思われる。たと

[36] ただし，より厳密には，意味構造の製作と言語形式の製作は，「意味処理→統語処理→音韻処理」という直列の処理ではなく，各部門の情報処理が相互に影響し合いながら並列して進行する（Levelt　1989，定延 2000，寺尾 2002 など）と想定する。

えば，図書館で独り本を探しながら，「えーと，810 のサ，810 のサ……っと，うーん，ないなぁ」などとつぶやくとき，われわれは「えーと」や「うーん」を用いているという意識はなく，ただ本を探しているにすぎないだろう。また，話し手が「ここでは『えーと』ではなく，『うーん』と言おう」などという「使い分け」を行っていると想定するのも不自然である。話し手はただ無意識的に「えーと」，「うーん」を発しているにすぎないだろう。

だが，少なくとも日本語学習者にフィラーを教えるという目的において「用いる」構図によるフィラーの記述は必ずしも的外れではなく，むしろ，適切な語り方であるように思われる。野矢（1999）は，ある行為に熟達したベテランと，そうでない初心者とでは，その行為の行い方，記述のされ方に違いがあるとして次のように述べている。

> 例えば，「変化球を投げる」という事例を考えてみよう。初心者は，まずボールの握り方，手首のひねり方，投球のフォーム等々を分解して教わり，それらをいちいち意図的になぞりながら，全体として変化球の投球を試みるだろう。そのような場合には，その人はかくかくにボールを握り，しかじかに手首をひねり等々を為すことによって，変化球を投げる。しかし，この「によって」関係は初心者を記述する仕方であり，熟達者はもはやそのように記述されるべきではない。熟達者は端的に「変化球を投げる」のであり，そのとき自分がどのようにボールを握り，どのようにひねっているのかはむしろ自覚されないだろう。しかしもちろん，彼は変化球を投げることにおいて，特定の仕方でボールを握り，手首をひねっているのである。（野矢 1999:266）

行為への熟達を「A することによって B する」（用いる構図）から「B することにおいて A する」（現れる構図）への移行としてとらえる考え方は，言語行為にも当てはまる。熟達者は端的に発話行為を行っている。そこ「において」言語要素の選択や配列はきちんと行われているが，意識にはのぼらない。一方，熟達の度合いが低い日本語学習者は，意識的に言語要素を選び，それらの語形を変化させたり，配列すること「によって」発話行為を行う。フィラーについても同様で，日本語母語話者は，記憶を検索したり，論文のタイトルを考えたりすること「において」無意識的にフィラーを発し分けている。一方，日本語学習者は，「えーと」や「うーん」を意識的に使い分ける必要がある。

しかし，これに対して，検索，演算，言語形式製作などの行動は，主張や約束や依頼などの発話行為とは異なり，「えーと」や「うーん」や「あのー」などを発せずとも無言でも

行えるものであり，フィラーを使い分けること「によって」そうした行為を遂行するというような語り方はおかしいのではないかという批判があるだろう。

そもそもなぜフィラー（感動詞）に決まった形式があるのだろうか。これに対して「話し手は心的操作ごとに対応づけられたモニター標識を使い分けて発話することにより，自分のおこなっている心的操作を明確化でき，支援できる（定延・田窪 1995:78)」のような行動の明確化という目的・効果による説明がある。たしかに，電車の運転手が，前方を目視しながらあえて「前方よーし」と言ったりするのと同じように，ある行動に際してある言語形式を発することで，その行動の精度を上げるという場合がなくはないだろう。しかし，そのような個人的な理由は，なぜわれわれの社会で共通の形式が用いられるのかということの理由にはならないように思われる。

なぜフィラーに使い分けがあるのかという問いは，私的な認知的行動の側面だけでは答えがたくむしろ，社会的実践としての側面を視野に入れる必要がある。たとえば思考実験として,「フィラーの使い分けなどどうでもいい。明日からみんな勝手にしようではないか」と考え，オリジナルなフィラーを使いはじめた人物 A を想定してみよう。彼と喫茶店で話していると突然「ぷー」とつぶやく（これは彼の「えーと」なのだ)。話の途中で急に黙り込む（彼は「うーん」の代わりに沈黙することにしている)。もちろん，A は,「ぷー」や沈黙において検索や演算といった行為を立派に達成している。また A 自身はこの行動と形式の対応に習熟しているため，自分の行動を明確化し，支援できている。それゆえ，A 自身には何の不自由も不満もない。だが, A と同じ社会に生き, ともに暮らさなければならない人々にとっては，そうではないだろう。突然「ぷー」などと言われても A が何をしているのか理解できず，ただ意味不明で奇妙な行動でしかない。

串田（2006b）は，会話分析の前提として，社会的状況において個人は自分が今何をしているのかを相手にわかるような仕方で行為することが義務づけられている（だからこそ，そのような「われわれの社会のやり方」（エスノメソドロジー）を記述することが可能になり，社会的拘束力の研究としての意味を持つ）という主旨のことを述べている。われわれが，わざわざ特定の形式と行動を対応させているのも，ただ検索や検討や注意喚起といった行為を達成するためだけではなく，むしろ，そうした行為を他者がそれとして同定できるように公然化していると考えるべきではないだろうか。

このように捉えるならば，日本語学習者は，まずは,「えーと」や「うーん」を意識的に使い分けること「によって」，検索や検討などの行為を（他者にそれと理解できるものとし

て公然と）行うことができるようになるという記述は間違ってはいないだろう。もちろん，定延（2005）の言うようなフィラーの身体反応的側面は，母語話者の一人称的な言語生活における意識というリアリティを記述するための重要な視点ではある。だが，フィラーを身体反応的にのみ語るとすればそれもまた事柄の半分を捉えそこねている。フィラーには行為を公然化する（あるいは，公然と行為する）という社会的実践としての側面も備わっており，また，日本語教育という目的においては，むしろこうした三人称的側面の理解が重要だと思われる。熟達者の一人称的体験が，変化球を無意識的に「ピュっと」投げているだけだからといって，学習者に「ピュっと」投げろと指導しても変化球が投げられるようになるわけではない。その「ピュ」とはどういうことなのかを三人称的知識として解説する必要があるだろう。そのような分析的記述として，本研究では，フィラーの「用法」，「使い分け」といった語り方を確信犯的に続けていくことにする。

第５章　言語形式製作に関わるフィラー

本章では，言語形式製作に関わるフィラーである「あの（ー)」と「その（ー)」の使い分けを明らかにする[37]。

本章の構成は以下の通りである。まず，5.1 節においてフィラー「あの（ー)」・「その（ー)」に関する先行研究を紹介するとともに，残された問題点を指摘する。5.2 節では，フィラー「あの（ー)」・「その（ー)」は，ア系・ソ系指示詞が文法化したものであり，その性質を保持していると仮説を立て，それを検証する。5.3 節ではフィラー「あの（ー)」・「その（ー)」の表現効果を論じる。5.4 節では，「その（ー)」をフィラーとみなすのは妥当か，また「この（ー)」はなぜフィラーとみなしえないのかを論じる。

なお，本章の記述は，大工原（2003，2006，2008）に加筆，修正したものである。

5.1　先行研究・問題の所在

定延・田窪（1995）は，フィラーを話し手の心内情報処理行動の外部への表れとみなし，「ええと」・「あの（ー)」それぞれに対応する話し手の心内行動を明らかにしている。

（5.1）　一郎：1234 足す 2345 は？

次郎：{ ええと／??あのー }，3579。　（定延・田窪　1995:83）

定延・田窪（1995）によると，「ええと」は心内の演算領域の確保という行動に対応し，「あの（ー)」は言語形式製作という行動に対応している。これに従えば，（5.1）で「ええと」が自然なのは，次郎が計算のために心内の演算領域を確保しているという想定が自然だからである。一方「あの（ー)」が不自然なのは，次郎が計算の答えは分かっているが，それを言語化するのに手間取っているという想定が不自然だからである。

また，田窪・金水（1997）は，フィラー「その（ー)」も，「あの（ー)」と同じように言語形式製作中に発せられるとしている。たとえば，次の（5.2）において「その（ー)」の使用は自然ではない。したがって，「その（ー)」も話し手の心内で発話内容が用意されていることが使用の条件となるという点で，「あの（ー)」と共通していると言える。

（5.2）　一郎：1234 足す 2345 は？

次郎：{ ええと／??そのー }，3579。

[37] 本稿では「この（ー)」を指示詞系フィラーに含めない。それは，筆者がフィラーの「この（ー)」を内省できないことが主な理由である。この点については 5.4 節で詳しく述べる。

しかし，「あの（ー)」と「その（ー)」の生起環境が全く同じというわけではない。

（5.3）　［一郎は偶然通りかかった見知らぬ男性に声をかけた］

一郎：{ あのー／そのー }，すみません。

男性：はい。

一郎：ちょっと道をお尋ねしたいんですが…。

（5.3）の談話開始時における「あの（ー)」・「その（ー)」それぞれの自然さについて，日本語母語話者 126 名に，「全く自然」，「まあ自然」，「やや不自然」，「全く不自然」の 4 択でアンケート調査を行った[38]。その結果，約 98%（「全く自然」86.5%＋「まあ自然」11.9%）が，「あの（ー)」を自然だと判断したのに対し，98%（「まったく不自然」81.7%＋「やや不自然」16.7%）が「その（ー)」を不自然であると答えた。詳細を【表 5.1】に示す。

【表 5.1】　談話開始時における自然さ

	全く不自然	やや不自然	まあ自然	全く自然	合計
あのー	0(0%)	2(1.6%)	15(11.9%)	109(86.5%)	126(100%)
そのー	103(81.7%)	21(16.7%)	2(1.6%)	0(0%)	126(100%)

この場面で「あの(ー)」が発話できるのは，話し手の念頭に発話したいメッセージ（意味構造）があり，現在それに言語形式を与える作業の最中であるという心内の状態が明らかにされることで，後続発話に対する聞き手の注意を喚起できるからであると説明できよう。では，なぜ同じ言語形式製作に対応する「その（ー)」は，談話開始時に用いることができないのだろうか。次節では，この問題を手がかりに指示詞系フィラーと心内行動との対応を考察する。

5.2　指示詞系フィラーと心内行動

5.2.1　仮説：指示詞系フィラーと指示詞との連続性

（5.3）に挙げたような「あの（ー)」と「その（ー)」の用法の相違を説明するには，こ

[38] アンケート調査は，2005 年に主に東京の大学生・大学院生を対象に行った。目的は，様々な条件下でフィラーの自然さが変化することを筆者 1 人の内省によらず，ある程度客観化した形で示すことで，論をより説得的なものにすることである。ただし，被調査者にとってフィラーの自然さを紙媒体で判断することはそれほど簡単なことではなく，今回の結果がそのまま実際のフィラーの自然さと一致するとは考えていない。あくまで自然さの変化の傾向を客観化して示すのが目的である。

れらのフィラーが指示詞と用法において連続していると考えるのが有望な方策である。指示詞と指示詞系フィラーを連続的なものとみなす発想は先行研究でもなされているが（定延・田窪 1995，堤 2004，定延 2005 など），両者の連続性の本格的な検証や，それを踏まえての指示詞系フィラーの用法の解明は未だ十分に行われているとは言えない。

文法化の原則に「保持（Persistence）」（Hopper 1991:22）がある。これは，ある語が文法化した際，その元々の性質が残存して文法化後の分布に制約を加えることである。指示詞の用法は一般的に，現場の事物を指示する「現場指示用法」と言語的文脈や話し手の記憶内の事物を指示する「非現場指示用法」に大別されるが，話し手が指示詞系フィラーを発している時，現場の事物に注意が向いているとは考えにくいため，本稿では非現場指示用法に限って連続性を考察することにする。そうしてみると，ア系のみが談話開始時の第一声として発話され得るという分布は指示詞にも共通している。

（5.4）　［刑事が犯人を追って，あるアパートの部屋に踏み込む］

刑事：｛ あいつ／??そいつ ｝はどこだ!?　　（上山 2000:172，一部改変）

金水・田窪（1992）は，ア系，ソ系の指示詞の用法について，「談話管理理論」の立場から次のように説明している。指示詞は，心内の情報管理領域に対する検索の指令であり，アは「直接経験領域」（D-領域）を，ソは「間接経験領域」（I-領域）を検索領域として指定する。直接経験領域とは，知覚情報や出来事記憶内の情報が帰属する領域であり，一方，間接経験領域とは，対話中の情報（言語的文脈や推論によって得られた情報）を一時的に格納しておく領域である。これに従えば，（5.4）は，談話開始時であり，間接経験領域はまだ空の状態であるため，ソ系を使用することはできないが，ア系は，話し手の出来事記憶内の犯人を指示することができるため，第一声でも発話し得ると説明される[39]。

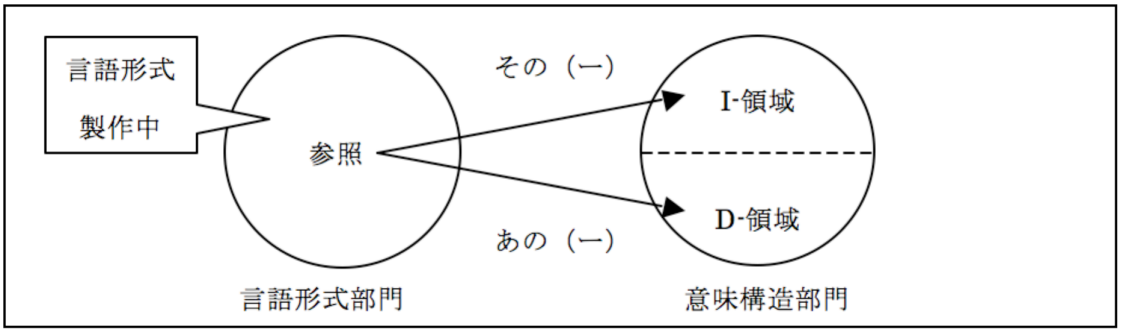
本研究では，この「直接経験領域」（D-領域）と「間接経験領域」（I-領域）を，4.3.1 節で示した【図 4.1】のモデルの意味構造部門を２つに分割した領域として位置づける。すなわち，外的環境の知覚（知覚情報），内的環境の感覚（感情や意図），出来事記憶の想起によって導入される意味構造は「直接経験領域」（D-領域）に，対話の最中に発話や推論によって導入される意味構造は「間接経験領域」（I-領域）にそれぞれ貯蔵されると考える。

[39] ア系は指示対象を，話し手，聞き手ともによく知っている場合に用いられる，ソ系は指示対象を，話し手，聞き手どちらかが知っている場合に用いられるのような旧来の指示詞理論（たとえば，久野 1973:185）に対して，金水・田窪説は，「あの頃はよかったなぁ」のような話し手しか指示対象を知らない場合のアを反例として提出し，指示詞選択の原理から聞き手に関する条件を排除して，ア系列・ソ系列の違いを，話し手が対象を直接的に知っているかどうかという「知識の質」の観点から説明した点に特徴がある。詳しくは，金水・田窪（1992）を参照。

以上を前提に，本研究では，指示詞系フィラーに対応する心内行動について以下の仮説を提出する。

言語形式製作とは，発話の設計図に当たる意味構造を参照しながら，言語構造部門において，記憶（心的辞書）に貯蔵された言語形式を選択し，それを統語規則に従って組み立てる心内行動である。この過程のうち，指示詞系フィラーは，「話し手が意味構造を参照する」という部分に対応している。そして，「あの（ー）」は，直接経験領域内の意味構造の参照に，「その（ー）」は間接経験領域内の意味構造の参照に，それぞれ対応している。具体的に言えば，「あの（ー）」は，話し手自身の意図や気持ち，記憶といった直接経験に基づく意味構造の参照に対応し，おおむね「自分の意図や気持ちを十分にふまえて言語形式を製作する」という行動に対応する。一方，「その（ー）」は，対話中の先行発話や推論などの間接経験によって導入された意味構造の参照に対応し，おおむね「文脈を十分にふまえて言語形式を製作する」という行動に対応する。

【図 5.1】　「あの（ー）」・「その（ー）」における心内行動



これに従えば，(5.3) においてフィラー「その（ー）」が発話できないのは，談話開始時には，まだ間接経験領域に意味構造が導入されておらず，「文脈をふまえる」という行動をとることができないからである。一方，「あの（ー）」によって話し手が参照しているのは，＜通行人に道を聞く＞という自分の意図に対応する意味構造である。

5.2.2　検証 1：「その（ー）」とソ系指示詞の連続性

前節で提示した仮説の妥当性を検証するために，本節では，フィラー「その（ー）」とソ系指示詞との連続性を検討する。前節では，(5.3) の談話開始時にフィラー「その（ー）」が発話できないのは，この時点では間接経験領域が空だからであると説明した。この説明

が妥当なものであれば，逆に，間接経験領域内に参照対象が想定できる状況では，「その（ー)」の自然さが増すことが予測される。これを検証するために，次の（5.5）を作成し，先程の（5.3）と同じ 126 名にフィラーの自然さを尋ねた。その結果は【表 5.2】である。

（5.5）　［喫茶店で太郎と花子が会話をしている。2 人はハリー・ポッターという小説について話をしていた。途中で太郎がトイレに行ったため，1 分間ほど話が途切れた。太郎が席に戻ってきた時，花子が太郎に話しかけた］

花子：{ あのー／そのー }，さっきの話の続きだけどさ，ハリーって何歳のときに魔法の学校に入学したんだっけ？

太郎：あ，たしかね…。

【表 5.2】　談話再開時における自然さ

	全く不自然	やや不自然	まあ自然	全く自然	合計
あのー	2(1.6%)	19(15.1%)	33(26.2%)	72(57.1%)	126(100%)
そのー	23(18.4%)	48(38.4%)	35(28%)	19(15.2%)	125(100%)（無記入 1）

【表 5.2】によると，（5.5）の談話再開時の「その（ー)」を約 43.2%が自然であると判断した。前出の【表 5.1】において談話開始時の「その（ー)」を自然だとした者が 1.6%だったことを考えると，たしかに，言語的文脈の存在によってフィラー「その（ー)」の自然さが増したといえる。これは，（5.5）では，話し手が「その（ー)」によって間接経験領域に貯蔵された言語的文脈の内容を参照し，それを踏まえて言語形式製作を行っているという想定が可能だからであり，本節冒頭の予測を支持する結果である。一方，【表 5.2】で「その（ー)」よりも「あの（ー)」を自然と判断した被調査者が多かった（83.3%）ことにも注意する必要がある。（5.5）で，「あの（ー)」が発話できるのは，話し手が自分の意図に対応する意味構造を参照して，言語形式製作を行っているという想定も十分可能だからであり，今回の場面設定では，被調査者の多くがこちらの想定をより現実的だと感じたものと考えられる。

このように，言語的文脈の存在がフィラー「その（ー)」の出現を促すことは，談話資料の性格に応じた「あの（ー)」と「その（ー)」の出現傾向からも裏付けられる。データとしたのは，国立国語研究所他（2004）の『日本語話し言葉コーパス』に収録された「模擬講演についてのインタビュー」（以下「INT 模擬」）全 16 件，合計約 3.4 時間と，「課題指

向対話」（以下「課題対話」）16 件，合計約 3.1 時間である[40]。

「INT 模擬」はインタビュー形式の資料で，1 人の話者が事前に行った「人生で一番印象に残っていること」というテーマの模擬講演（10～15 分程度）に関して，講演を聴いたインタビュワーが様々な質問を発し，講演者がこれに答える形式の対話である。一方，「課題対話」は，「INT 模擬」と同じ 2 人の話者が，実在の芸能人に講演を依頼した場合のギャラの額を想像し，その多寡の順に芸能人を並べるタスクを行い，そのタスク遂行中の 2 人の会話を録音したものである。「INT 模擬」「課題対話」それぞれにおけるフィラー「あの（ー）」と「その（ー）」の出現数とその比率をまとめると，次の【表 5.3】になる[41]。

【表 5.3】　指示詞系フィラーの出現数と比率

	あの（ー）	その（ー）	合計
INT 模擬	519(79%)	136(21%)	655(100%)
課題対話	152(97%)	5(3%)	157(100%)

【表 5.3】において「あの（ー）」と「その（ー）」の出現比率に注目すると，「INT 模擬」では「あの（ー）」と「その（ー）」の比率が約 4：1 なのに対し，「課題対話」では「あの（ー）」が約 97%と大半を占め「その（ー）」はほとんど出現していない。つまり，「INT 模擬」と「課題対話」は，同じ参加者によってほぼ同じ時間話された資料であるにもかかわらず，「その（ー）」の出現率に大きな差がある。この結果から，事前の言語的文脈（「模擬講演」）を前提に話が展開する「INT 模擬」では「その（ー）」が多く発話され，それを前提としない「課題対話」では「その（ー）」がほとんど発話されていないことが分かる。

これらの談話資料中の「その（ー）」を観察してみると，その用法は大きく 2 種類に分けられる。1 つは，一度言語的文脈に登場した事物，あるいは，それとほぼ同義の事物を再提出する用法で，旧情報を再度提出するこの用法を仮に「再提出型」と呼ぶことにする。

（5.6）　L：事故じゃないけど（F そのー）緊急の着陸の時＜雑音＞っていうのはやっぱりこうこの先どうなるんだっていう不安って言うかどんな感じなんですか　（D01M0020:00145.619-00158.439，表記一部改変）

[40] 『日本語話し言葉コーパス』には「自由対話」という資料も収録されているが，その内容は「模擬講演」や「INT 模擬」を前提とした「インタビューの続き」になっている場合が多い。それゆえ，「INT 模擬」との比較対象として「課題対話」を採用した。

[41] (F) タグの付いたものを集計した。なお，「あの（ー）」には「あのね（ー）」を含む。

（5.6）は，講演者が「飛行機の緊急着陸」という自身の体験を講演した後のインタビューからの抜粋で，講演者（R）とインタビュワー（L）が顔を合わせ，「過去に行ったことがある国」を話題とした雑談を済ませた後で，インタビュワーが話題を「緊急着陸」に戻し，講演者にその時の心境を尋ねる発話の導入として，「その（ー)」が発せられている例である。当然のことながら講演内容の「緊急着陸」は既出要素とみなせる。この「再提出型」の「その（ー)」は，「INT 模擬」には観察されるが，「課題対話」には観察されない。

もう 1 つの用法は，直接的に談話に導入されたわけではないが，推論によってほぼ導入されたとみなしうる事物に言及する用法で，これを仮に「推論型」と呼ぶことにする。推論型は典型的には，「だから，そのー」，「つまり，そのー」，「やっぱり，そのー」のような形式をとる。また，推論型は，再提出型とは異なり，文脈から推論可能であれば新情報でも導入できるため，新情報提示標識と共起した「実は，そのー」等も推論型とみなせる。

（5.7）　R：(F うん）多分そこは（F あの）航空会社の（F その）スチュワーデスの人の技術だと思うんだけどもみんなを（D ふま）（F んー）不安に

L：(F はー)

R：落とし入れない為の話し方ってのが多分あるんだと思うんですね

L：(F うーん)

R：(F ええ）そういう意味で（F そのー）勿論パニックになるようなことはなかったし　（D01M0020: 00164.332-00181.045，一部表記を改変)

（5.7）では，まず「スチュワーデスの人」という要素の導入時に「その（ー)」が出現している。「スチュワーデス」は談話に既出であり，これは再提出型とみなせる。一方，「パニックになることはなかった」という出来事の導入時に現れる「そのー」は推論型である。この出来事自体は新情報だが，「そういう意味で」，「勿論」という談話標識，および，「スチュワーデスが乗客を不安に陥れない技術を持つ　→　乗客はパニックにならない」という推論に支えられており，ほぼ談話に導入されていると考えてよい。

もちろん，資料中の「その（ー)」がすべて再提出型，推論型のどちらかにきれいに分類できるわけではないが，「その（ー)」は「文脈をふまえて言語形式製作をしてみせる」という本稿の仮説から演繹される典型的な用法として，まずこの 2 つを提案しておきたい。

5.2.3　検証 2：「あの（ー)」とア系指示詞の連続性

本節では，フィラー「あの（ー)」とア系指示詞との連続性を検討する。前節の（5.5）お

よび【表 5.2】では，フィラー「その（ー)」の自然さが増すからといって必ずしもフィラー「あの（ー)」が不自然になるわけではないことを観察した。では，「あの（ー)」が不自然になる状況はあるのだろうか。指示詞の非現場指示用法では，次のような場合に，ソ系が自然なのに対し，ア系が不自然になる。

（5.8）　一郎：昨日，山田さんに会いました。

次郎：えっ，山田さん？ 誰，｛ その／??あの ｝人。

（5.8）で，次郎はア系指示詞を使えない。これは，次郎が山田さんと面識がなく，直接経験領域に指示対象が存在しないためである。一方，一郎の発話によって言語文脈に導入された「山田さん」は，間接経験領域に登録されるため，ソ系で指示できる。定延・田窪（1995:83）は，指示詞のこの性質が指示詞系フィラーにも部分的に保持されているとし，対話中に相手の発話によって獲得された新規情報に言及する際には「あの（ー)」が用いにくいと述べている。これを検証するために，次の（5.9）におけるフィラーの自然さを同じ 126 名に尋ねた。

（5.9）　［ゼミで学生が発表した。発表の中で「コネクショニズム」という言葉が出てきたが，教員はその言葉を聞いたのは，それが初めてであった］

学生：以上で発表を終わります。

教員：はい。全体としてよくまとまっていて，いい発表だったと思います。…で，それと，何でしたっけ？　｛ あのー／そのー ｝，コネクショニズム？　次回の発表では，それについての詳しい解説をお願いします。

【表 5.4】　新規獲得情報言及時における自然さ

	全く不自然	やや不自然	まあ自然	全く自然	合計
あのー	11(8.7%)	24(19%)	38(30.2%)	53(42.1%)	126(100%)
そのー	16(12.7%)	22(17.5%)	46(36.5%)	42(33.3%)	126(100%)

【表 5.4】から分かるように，自然さの判断は，「あの（ー)」が約 72.3%，「その(ー)」が約 69.8%で，ほぼ同程度であった。この結果から，（5.9）では「あの（ー)」と「その（ー)」のどちらもかなり自然，あるいは，少なくともどちらも不自然にはならないと判断されたと言えよう。つまり，新規獲得情報言及時における指示詞系フィラーの分布は，指示詞の

分布とは明らかに異なる。

この理由については，例えば，ア系フィラーは意味の希薄化（bleaching）が進んでおり，言語形式製作中であれば基本的に常時発話可能である。それゆえ，（次節で述べるような特別な効果を目的とした場合を別にすれば）「あの（ー）」が誤用になることはない，という解釈がありうる。実際，（5.6），（5.7）で再提出型，推論型とした「その（ー）」を「あの（ー）」に置き換えることは，（含み，効果を別にすれば）不可能でも不自然でもない。ただし，今のところ希薄化を理由として特定する決め手はなく，今後のさらなる検証が必要である。

5.3　指示詞系フィラーのコミュニケーション上の効果

以上，心内行動との対応という観点から指示詞系フィラーの用法を論じた。しかし，フィラーの用法を捉えるには，コミュニケーションという視点もまた重要である（定延 2005）。つまり，話し手が相手の目の前で心内行動を「行ってみせる」ことから生じる特定のコミュニケーション上の効果を目当てに，実際には心内行動を行っていないにも関わらずフィラーを発するということが十分にあり得る。例えば，（5.3）の「あの（ー）」は，聞き手の注意喚起や，発話の印象を丁寧にするために発せられているとも解釈できる。

「発話形式に気を配っているという態度」を演出し，発話を丁寧にする，注意喚起するという「あの（ー）」のコミュニケーション上の効果についての指摘は先行研究でもなされている（定延・田窪 1995 など）ため，ここでは「その（ー）」の効果を中心に考察したい。

まず，再提出型の「その（ー）」は，談話に既出の要素を再提出するという性格上，「話題を戻す」という談話管理的効果を生じうる。つまり，「その（ー）」は，話し手が実際には言語形式製作を行っていなくても「話題を戻す」ことを合図するキューの 1 つとして利用可能である。一方，「あの（ー）」に「話題を戻す」という効果（含み）は認められない。たとえば，次の（5.10）は，ニュース番組で，司会者 A がゲスト B にインタビューをしている場面である。

（5.10）　A：ふんふんふん。あのー，先ほど，<u>その</u>，危ないから行かせるか行かせないかという話ではないんだと，B さんおっしゃった，えー，そういう，状況のところに自衛隊が入るということになりますと，先ほども触れてらっしゃる，PKO とも全く異なる状況ですね。

B：はい。　（2003 年 7 月 1 日放送，TBS 系列「ニュース 23」）

この場面で司会者 A は相手（B）の話に対する応答（「ふんふんふん」）の後，フィラー「あ

の一」を発し自分の質問を始めるが，「先ほど」と言ったところで再び，フィラー「その」を発し，その後，先行文脈における相手（B）の発話を引用して，その真意を確認する作業を行っている。この「その」は，なしで済ませることも「あの」で代用することも不可能ではないが，これが「その」であることによって，「先ほど」とともに「話題を戻す」ことの予測に貢献し，結果として，聞きやすさを生んでいるように思われる。

さらに，「その（一）」に特有のニュアンスとして，「言いにくさ」と「言い訳っぽさ」（堤 2004）がある。

「言いにくさ」とは，話し手が聞き手に対して発話内容を言いにくいと感じているというニュアンスである。堤（2004）が挙げる次例を用いて調査を行った。

（5.11）　A：おい，田中君，最近元気がないじゃないか。何か悩み事でもあるのかね。
　　B：部長，実は，{ あの一／その一 }，…会社を辞めたいと思っているんです。

調査ではまず例文（5.11）を提示し，そもそも「あの一」と「その一」にニュアンスの違いを感じるかを「はい／いいえ」の二択で尋ねた。そしてニュアンスの違いを感じると答えた者にはそのニュアンスの違いを自由に記述するよう求めた。

その結果，126 名中 89 名（約 74.2%）が「あの（一）」と「その（一）」にニュアンスの違いを感じると答えた。また，自由記述において，「その（一）」の方が「あの（一）」よりも言いにくそうだと記述した者は 40 名いた。一方，「あの（一）」の方が「その（一）」よりも言いにくそうだと記述した者は 9 名いた[42]。この結果から，「あの（一）」と「その（一）」の両者に「言いにくさ」のニュアンスがあるが，相対的に「その（一）」の方がそのニュアンスがより濃いと判定できる。

まず両者に「言いにくさ」のニュアンスが伴う理由は，指示詞系フィラーを発して相手の前で「言葉を選んでみせる」ことは，後続発話が言語形式の選択に慎重を期さねばならないような「言いにくい」内容なのだという推測を聞き手に与え得るからだと説明される。

一方，「その（一）」に「言いにくさ」がより濃く感じられるのは，ソ系の参照先である間接経験領域の性質に由来している。3-2 節では「その（一）」の用法として再提出型，推論型の 2 つを提案したが，（5.11）は，田中が先行文脈（部長の発話）の内容を再提出しても質問への答えにはならず，また「実は」という新情報提示のマーカーが前置されているので，推論型であると判定できる。推論型の「その（一）」によって相手の前で言いよどん

[42]自由記述の集計で「言いにくさ」を判定する根拠としたキーワードは，「言いにくい（言いづらい）」，「深刻」，「後ろめたい（罪悪感，ネガティブ）」，「答えにくい」，「申し訳ない」，「ためらい（躊躇，モジモジ，遠慮）」，「問い詰められた」である。

でみせることは，「発話者はこれから文脈から推論されることを言うが，それは言語形式の選択に慎重を期さねばならないような言いにくいことだ」という推測を誘導し得る。そうであれば，この場面でもっともありそうな部長の推測は，「田中は職場で元気がなく悩ましげである∧その理由は自分に対して言いにくいものである　→　田中は仕事上の問題・悩みを抱えている」というものであり，これによって部長は田中の言わんとするところをある程度察することができる。つまり，推論型の「その（ー)」は「言わずとも察してほしい」という発話者の態度に結びつきうる。そして，この態度の表出が「その（ー)」に「言いにくさ」のニュアンスをより濃く感じさせる要因であると考えられる。

推論型の「その（ー)」によって表出される「言わずとも察してほしい」という発話者の態度は必ずしもネガティブな方向にばかり働くわけではない。

（5.12）　やっぱり，今日はオールスターゲームなんで，そのー，ホームランでも狙いたいなと，思います。

これはあるプロ野球選手の発話である。プロであれば晴れの舞台のオールスターゲームで目立ちたいのは当然である。しかし，はっきりと目立ちたいと言ってしまうと少なくとも日本語社会では尊大な印象を与えかねない。そこで推論型の「その（ー)」でよどんでみせることで「そんな出しゃばったことを言わせないでください。オールスターなんだから，ね。」と「口はばったさ」を示し，印象を和らげていると解釈される。

次に「言い訳っぽさ」を見てみよう。次の（5.13）における「その（ー)」は，事実を真摯に打ち明けようとしているというよりは，ごまかそうとして困窮し，黙り込んでしまったというニュアンスがある。一方，「あの（ー)」は，話し手が何か言い出しそうであり，(5.13)のように黙り込んでしまうという状況には適さない（堤 2004)。

（5.13）　［夫の浮気が妻に発覚した場面］

妻：これはどういうことなの？ちゃんと説明しなさいよ！

夫：そ，それは，そのー…。

「その（ー)」に「言い訳っぽさ」をもたらす要因として考えられるのは，ソ系の指示詞の，「曖昧指示用法」との連続性である。曖昧指示用法とは「ちょっとそこまで」のように確たる指示対象を持たない用法で，これがフィラーにも保持されているとすれば，「その（ー)」は，場合によっては「発話者には確たる言い分がない」というニュアンスを派生し得る。この用法を仮に「不定型」を呼ぶことにする。不定型の「その（ー)」を「あの（ー)」に入れ換えることは不可能ではないが，しにくい。その理由は，ア系指示詞が曖昧指示用法

を持たず，何らかの言い分の存在を暗示するからであると考えられる。

この「言い訳っぽさ」のニュアンスは小説，マンガ，ドラマ等の作品の台詞においてしばしば活用される。

（5.14）　［C が事のはずみで女性２人と手をつないだところを書道部の先輩である A と B に見つかった場面］

A：何してんの，ユカリちゃん？

B：てめぇ――両手に花か？

C：あっ，えっと，その，これは…

（河合克敏『とめはねっ！鈴里高校書道部』4 巻，小学館，2008 年）

（5.15）　［A と B が宝探しをしている。A は宝の隠し場所を示す暗号を解いた］

A：「先生，実はこの本の中には，暗号が隠されていると思うんです」

・・・＜中略＞・・・

B：「お前はその暗号を解読したのか？」

A：「いや，その，別に・・・・・・」

B：「おい，呆けるなよ。正直に言え」

A：そりゃ困りますよ。僕もまだどんな宝物か知らないんですが，先生に教えては宝が半分になってしまう」

（泡坂妻夫『亜一郎の狼狽』，創元推理文庫，1994 年）

5.4　フィラー「その（一）」と連体詞「この（一）」の間

最後に，以上の論に対して予想される疑問に答えておきたい。それは「その（一）」は本当に「フィラー」とみなしうるのか，あるいは，「この（一）」は本当にフィラーとみなしえないのかという疑問である。

先行研究では，しばしばフィラーについて，「『意味』をもっているとは言えない（田窪 2005:20）」，「実質的意味を持た（川上 1994:77）」ない，「伝達上重要な意味を持たない（加藤重広（2004:225）」のように「フィラー＝無意味」という主旨の記述がなされることがある。しかし，本章で論じたのは，フィラー「その（一）」に，指示詞「その（一）」の「意味」が残存しているということ（一方，5.2.3 節で見たように「あの（一）」は「意味」の残存が認定しがたい）であり，これは「フィラー＝無意味」という前提に抵触するのではないか，フィラーの「その（一）」と呼ばれるものは実のところ，指示連体詞「その」と同じ

ものなのではないかというような疑問が生じ得る。

しかし，本稿では「その（ー)」はフィラーとみなすべきだと主張する。まず，1.2 節で示した本研究のフィラーの定義は，「感動詞」であること，「何らかの情報処理的心身行動に伴って発せられる」ことのみを条件としており，そもそも「フィラー＝無意味」を前提としていない。それどころか本研究は，「無意味」のような主張の妥当性や根拠を疑問視している。というのも，「無意味」という主張が成立するためには，「意味とは何か」，「有意味と無意味の境界はどう判定できるのか」といった言語哲学的難問をクリアする必要があるからである。筆者の知る限り，「フィラー＝無意味」という主張が何らかの論証を伴って行われたことはなく，ただ自明視されるだけである。しかし，「意味」という概念やその有無の認定は自明とできるようなものではないだろう[43]

もちろん，上のような疑問が全く理解できないわけではない。たとえば，本研究では「この（ー)」を指示連体詞とみなし，フィラーから除外している。しかし，次の（5.16）のように，見方によってはフィラーとも呼べそうな「この（ー)」があり得ないわけではない。

（5.16）　［学会で聴衆が発表者に質問している］

a.　３ページ目で指摘されている，<u>このー</u>，現象ですけれどもー…。

b.　<u>このー</u>，３ページ目で指摘されている現象ですけれどもー…。

c.　３ページ目で，<u>このー</u>，指摘されている現象ですけれどもー…。

このような「この（ー)」はあくまで指示連体詞の延伸（a や b)，ないし，名詞が後続するという統語的制約の一種の「ねじれ」に近いもの（c）として扱うのに対し，次の（5.17）の「その（ー)」は（感動詞）とみなすのはなぜかという疑問は当然のものだと思われる。

（5.17）　a.　○○さんが先ほど指摘された，<u>そのー</u>，現象ですけれどもー…。

b.　<u>そのー</u>，先ほど○○さんが指摘された現象ですけれどもー…。

c.　先ほど○○さんが，<u>そのー</u>，指摘された現象ですけれどもー…。

たしかに指示連体詞「その（ー)」とフィラー「その（ー)」は連続的であり，必ずしも明確な線が引けるわけではない。また，実際の音声コミュニケーションにおいて話し手が，指示連体詞「その（ー)」とフィラーの「その（ー)」を必ずしも別ものとして「使い分けている」とは限らないだろう。その意味においては「この（ー)」も「その（ー)」も同じではないかと思われるだろう。実際，山根（2002）は，次の（5.18）や（5.19）のような

[43] 極端に言えば，大森荘蔵の言語論のように，そもそも言語に「意味」を想定しない立場（大森 1973，1981）もあり得，「意味」の定義やその有無を自明のものとはできないだろう。

「この（ー)」をフィラーと認めている。

（5.18）　エー マー 回数から言えばちょっと 対話っていうにはあまりにも コノー 適当でないですね　　（山根 2002，資料 3，発話 014，傍線筆者）

（5.19）　わたしは モー 体育大学にオリンピックを目指して？？やってきたけれどももう記録は出せなかったけど マー アノー コノ 世界でね エー 非常に優位と言われている背面跳びの技術 マ 背面跳びの跳び方っていうのは アノ 同じ跳躍力だったら 10 センチぐらい コ 重心が高く上がるんです

（山根 2002，資料 5，発話 131，傍線筆者）

しかし，それでも本研究はフィラーの「その（ー)」を認め，フィラーの「この（ー)」を認めないことが言語現象の説明において妥当な措置であることを主張する。

第 1 に，フィラーとみなせるような「この（ー)」の用例は非常に少ない。山根（2002）のデータ（講演，留守番電話，対話，電話の 30 名の話者の発話の合計）においても，「あの（ー)」が 2358 例，「その（ー)」が 374 例あるのに対して，「この（ー)」は 39 例のみである。また，その 39 例のうち，32 例は 4 名の話者によるもので（資料 1 が 3 例，資料 3 が 18 例，資料 4 が 7 例，資料 5 が 4 例)，23 名は「この（ー)」を一度も発していない。一方，「あの（ー)」や「その（ー)」にこのような極端な分布の偏りは見られない。つまり，仮に「この（ー)」をフィラーと認めるとしても，大半の人はそれを使わない。たとえば，少なくとも筆者は，(5.18）のような「この（ー)」は少なくとも意識的には発しえず，仮に（5.18）が作例だとすれば不自然だと判定するだろう。また，音声を聞かなければ判断しがたいが，(5.19) は連体詞としても処理可能ではないかと思われる。また，筆者は，「その (ー)」の場合，連体詞とはみなせず，フィラーとしかみなし得ないような例を内省によって作ることができるのに対し，そのような例を「この（ー)」について作ることができない。

第 2 に，頻度や分布の偏り以上に重要な理由は，文字言語において書かれ，使われるフィラー「その（ー)」の用例が多数あるのに対して，そのような「この（ー)」の用例を見つけることができないことである。たとえば，上の（5.14)，(5.15）において，書き手が，「言い訳」的ニュアンスを持つものとしてフィラー「その（ー)」を，連体詞「その（ー)」とは区別して「使っている」のは明らかであるように思われる。(5.14)，(5.15）のような「その（ー)」は用例として決して珍しいものではなく，連体詞「その」とは別にフィラー（感動詞）の「その（ー)」を認めておく方がこうした現象を説明しやすい。一方，「この」にそのような必要性は認められない。

以上から，本研究では，フィラーの「その（ー)」は認めるべきだが，フィラーの「この（ー)」は認める必要がないと結論する。

5.5　まとめ

本稿では，指示詞との連続性という観点から「あの（ー)」・「その（ー)」という 2 種のフィラーの用法を論じた。その結果，「あの（ー)」・「その（ー)」はともに話し手が適正な言語形式を製作するために言語形式の設計図にあたる意味構造を参照するという心内行動に対応し，「あの（ー)」は直接経験領域内の参照に，「その（ー)」は間接経験領域内の参照にそれぞれ対応していることが明らかになった。また，「その（ー)」には，再提出型，推論型，不定型という用法があり，それぞれ「話を戻す」，「言いにくさ」，「言い訳っぽさ」というコミュニケーション上の効果を派生し得ることが明らかになった。また，「あの（ー)」を発話すること自体が不可能になる状況は，実生活では想定しにくいことが分かった。さらに，フィラーの「その（ー)」は認めるべきだが，フィラーの「この（ー)」は認める必要がないことを論じた。

今後は，「私は，こー，すごく感情的なところがあって…」のような発話における「こー」などの形式についても指示詞（副詞）との連続性や異同を考察していきたい。

第６章　課題解決行動に関わるフィラー

本章では,「計算問題を解く」,「犬の名前を思い出す」,「カバンの中から手帳を探す」,「時計を見る」,「論文のタイトルを考える」,「メニューを見て何を食べるか選ぶ」など，何らかの課題解決のために行われる心身行動（以下,「課題解決行動」）の最中に発せられる「えー（と)」,「うーん（と)」,「さー」,「そーですねー」，フィラー的な空気すすりの 5 形式の使い分けを論じる。

本章の構成は以下の通りである。6.1 節では，考察対象を画定し，問題の所在を明らかにする。6.2 節では「えーと」と「うーん」の使い分けを論じる。6.3 節では「そー（ですねー)」と「えーと」・「うーん」との異同を論じる。6.4 節では，フィラー的な空気すすりと他のフィラーとの異同を論じる。6.5 節では,「えーと」,「うーんと」における「と」の有無による生起環境や表現効果の変化を論じる。

なお，本章において，論証に関わる作例の自然さの判定は,「自然である」（無印),「多少違和感がある」(「？」印),「あまり自然ではない」(「??」印）の３択によって，筆者を含めた３名の日本語母語話者（20 代男性２名，20 代女性１名）が検討したものであり，特に断りが無い例文は，３名の内省が一致したものである。また，３名の判定が分かれた場合には，それを詳述することにする。

6.1　課題解決行動とフィラー

定延・田窪（1995）や定延（2005）は,「あの（ー)」は言語形式の製作時にのみ発話されるが,「えーと」は意味構造の製作にも対応していると述べている。

（6.1）　一郎：1234 足す 2345 は？

次郎：{ えーと／??あのー }，3579。　（定延・田窪　1995:83）

（6.1）で次郎の返答として,「えーと」が自然で「あの（ー)」が不自然なのは，計算が「何かをわかる」ための心内行動だからである。一方，答えがわかっているが，それを言語化するのに手間取っているとは考えにくいため,「あの（ー)」は不自然に感じられる。

しかし，定延・田窪（1995）や定延（2005）は,「えーと」が，意味構造の製作にのみ対応していると主張しているわけではなく,「えーと」は,「心内作業に手間取っている場合，全般に広く発せられる（定延 2005:37)」と記述されている。たとえば，次の（6.2）のようなモノの名前を答える場合には,「えーと」も「あのー」も発話可能であるとされる。

（6.2）　A：田中さんが飼ってる犬って，なんだっけ？

B：{ えーと／あのー }，スコッチテリア。

（定延 2005:40 の記述に基づく）

それゆえ，「えーと」発話時における行動が「言語形式部門」におけるものなのか「意味構造部門」におけるものなのかを明確に決着することは困難だと思われる。そこで，本研究では，「えーと」は，「計算問題を解く」，「犬の名前を思い出す」，「カバンの中から手帳を探す」，「時刻表を見る」，「論文のタイトルを考える」など，何らかの課題解決のために行われる心身行動全般において発せられると考え，以下ではこうした行動を，仮に「課題解決行動」と呼ぶことにする。

「えーと」と同じように課題解決行動に関わると考えられる形式には他にもいくつか種類があるように思われる。たとえば，次の（6.3）の「うーん」は，お歳暮の箱に何が入っているか推測するという課題において発せられている。

（6.3）　［夫婦が，お歳暮の箱の中に何が入っているかを話している］

A：何が入ってるのかな？

B：けっこう重いね。うーん，缶詰じゃないかなぁ。

また，次の（6.4）の「そーねえー」（「そー（ですねー）」のバリエーションとして扱う）は，メニューを見ながら何を注文するか決めるという課題において発せられている。

（6.4）　［喫茶店で女性二人がメニューを見ながら］

A：何にする？

B：そーねえー，（メニューを指差して）このケーキセットにしようかな。

（小林 2005:37，一部改変）

さらに，定延（2005，2007）は，「空気すすり」の中に「えー（と）」や「うーん（と）」とよく似た性質のものがあるとし，それを「フィラー的な空気すすり」と呼んでいる。

（6.5）　男子学生 C：　やっぱ神大に来るのが大阪の人が多いからかな。

女子学生 D：　【スー】そうなんかなーでも，なんか，大阪弁と神戸弁，の，ち，ねーなんか……　（定延 2007:132，表記一部改変）

（6.5）では，神戸大学の男子学生 C が「アルバイト先の塾で大阪人に間違われたのは，神戸大学の学生の多くが大阪人だからだろうか」と問いかけ，それに対して，女子学生 D は視線をそらし，首をかしげながら，空気をすすり，男子学生の仮説の妥当性を吟味している。この場合，【スー】という空気すすりは，「うーん」に近いニュアンスがある。

これらの形式を扱った先行研究には,「えー（と)」(定延・田窪 1993，1995，定延 2005，冨樫 2005),「うーん」(定延 2002),「そー（ですねー)」(定延 2002，小林 2005)，フィラー的な空気すすり（定延 2005，2007）がある。しかし，これらの研究は，それぞれ独立の文脈においてなされており，そもそも「えー（と)」・「うーん（と)」・「そー（ですねー)」・空気すすりの異同の説明を目的になされたものではない。それゆえ，先行研究の記述がこれらの形式の生起環境や表現効果などの違いを説明する上で有効かを検討してみる必要があるだろう。

本節では以下，6.2 節では,「えーと」と「うーん」，6.3 節では,「そー（ですねー)，6.4 節では，フィラー的な空気すすりを扱う。また，6.5 節では「えーと」,「うーんと」における「と」の有無による生起環境や表現効果の違いを考察する。

6.2 「えーと」と「うーん」

本節では，まず「えーと」と「うーん」の使い分けを検討する。まず，6.2.1 から 6.2.4 までは,「えーと」と「えー」,「うーん」と「うーんと」における「と」の有無は考慮せず，日常会話での使用頻度が高く，内省しやすい「えーと」と「うーん」に代表させて両者を比較しながら，論じていく[44]。

「と」の有無に関する問題は,「えー」,「うーん」だけに関わるものではなく，たとえば「あのー」や「そー（ですねー)」に「と」が付かないのはなぜかといったより広い視野に立って取り組むべき問題であると思われるため，本章の最後に，6.5 節でまとめて扱う。

6.2.1 先行研究の問題点

まず，先行研究における「えーと」と「うーん」の特性に関する記述を見ていこう。定延・田窪（1995:78）は,「えーと」について，話し手が「意識を小容量の心的バッファから大容量の心的データベースに戻すことによって演算領域を確保する（つまり心的バッファを占めている様様な情報を一時『頭の片隅』に追いやって集中力を高める)」という心内行動に対応していると述べている。また，冨樫（2005:79-80）は「えー（と)」は「何らかの検索処理のためにデータベース（半活性情報）へアクセスしていることを示す」と述べている。

[44] 筆者は日頃「うーんと」を発することがあまりなく,「うーん」に比べて内省が効きにくい。

一方，フィラーの「うーん」について，定延（2002:100）は，「迷いの『ん～』と結びつき，連続する」と述べている。「迷いの「ん～」とは，たとえば右の道と左の道でどちらに進むかを考えて「ん～」と考え込む場合のように，状況（分かれ道）に即座に対応できないという態度を表す際に発せられる「うん」である（定延 2002:97-98）」。

しかし，こうした記述は，「えーと」と「うーん」の異同を説明する上であまり有効ではないように思われる。

まず，「演算」や「検索」（データベースへのアクセス）といった記述は，少なくとも字義通りに解釈した場合，「ええと」だけでなく，「うーん」にも適用可能であるように思われる。たとえば，先ほどの（6.3）において，お歳暮の箱の重さから中身を推測するという心内行動は一種の「演算」とも言えるように思われるが，「うーん」を発しうる。それどころか，この場合，「えーと」には多少違和感があるが，なぜだろうか（例文(6.3)を再掲する）。

（6.3）　［夫婦が，お歳暮の箱の中に何が入っているかを話している］

A：何が入ってるのかな？

B：けっこう重いね。｛ うーん／？えーと ｝，缶詰じゃないかなぁ。

また，「状況に即座に対応できない」という記述を「答えが出るのに時間がかかる」という意味に解釈するならば，（6.3）において，B は，「何が入っているのかな？」という A の質問に比較的「即座に対応」しているように思われるが「うーん」の方が「えーと」よりも自然である。また，そもそもフィラーは，「状況に即座に対応できない」時に発せられるのであり，すべてのフィラーが「状況に即座に対応できない」という記述の射程に入ってしまうように思われる。

同様に，次の（6.6）のように，ある人の誕生日を思い出すという「検索（データベースへのアクセス）」の典型とも言えそうな状況において「えーと」だけでなく，「うーん」を発することも可能である。

（6.6）　あれ，あの人の誕生日，いつだったっけなぁ。｛ えーと／うーん ｝…。

こうした難点に対して，「演算領域の確保」，「データベースへのアクセス」，「即座に対応」といった概念を改定し，「えーと」や「うーん」における心身行動（何を行っているか）を詳しく記述し分けていくという救済策も考えられなくはない。たとえば，「演算」という記述を，（6.1）の計算問題のような演繹的推論と，（6.3）の箱の中身の推定のような帰納的推論（仮説形成型推論）に分けるというような方向性である。この方向性が成功するかどうかは分からないが，本研究では，少なくとも「えーと」と「うーん」の異同の説明におい

てそのような措置は必要ではないと考える。また，4.2.1 節で述べたように，話し手が心の中で「何を行っているか」を記述することは，言語現象の説明における「必要悪」として最小限にとどめるべきであり，必要以上の抽象化・複雑化は，（特に日本語教育への応用を視野に入れた場合）避けるべきであるように思われる。

次節では，「えーと」と「うーん」の生起環境や表現効果の違いを説明するための本研究の仮説を提示する。

6.2.2　解決の見通し説

本節では，「えーと」と「うーん」の使い分けを説明する上で重要なのは，話し手が「何を行っているか」ではなく，むしろ，「どのように行っているか」であると主張する。

本研究では，「えーと」と「うーん」は，ともに，「カバンの中から手帳を探す」，「ある人の苗字を思い出す」，「計算問題を解く」，「論文のタイトルを考える」などの課題解決行動全般において発せられ得るものであり，話し手が「何を行っているか」において両者に違いはないと考える。両者の違いは，話し手が「どのような見通しを持って，その課題に取り組んでいるか」であると考え，それを次のように仮定する。

（6.7）　「えーと」: 発話者は，この課題はきっと解決できると感じている。

「うーん」: 発話者は，この課題は必ずしも解決できるとはかぎらないと感じている。

※「さー」: 発話者は，この課題はきっと解決できないと感じている。

たとえば，先ほどの（6.6）において話し手は，「あの人の誕生日」を思い出すという課題を解決するために，「検索」を行っており，心内行動という点では「えーと」も「うーん」も違いはない。むしろ両者の違いは，発話者が，「思い出せそうだ」と思って「検索」しているのか，「思い出せないかもしれない」と思って「検索」しているのかの違いであると考える（例文(6.6)を再掲する）。

（6.6）　あれ，あの人の誕生日，いつだったっけなぁ。｛ えーと／うーん ｝…。

ただし，「うーん」が投射するのは，「今取り組んでいる課題は解決できない可能性がある」という見通しであって，それは，「今取り組んでいる課題は解決の可能性がない」という見通しとは異なる。その点で，「うーん」は，「『検討しても，うまくいかない』場合専用（定延 2005:18）」のフィラー「さー」とは異なる。たとえば，定延（2005）は，「このあたりに交番はないでしょうか」という問いに対して，「検討した結果，適当な交番がうまく

思い浮かんだ」場合，次の（6.8a）のように「んー」（「うーん」のバリエーションとして扱う）を発するのは自然だが，（6.8b）のように「さー」を発するのは自然ではないと指摘している。

（6.8）a.　んー，交番ねー，交番はたしかあそこです。

b.??さー，交番ねー，交番はたしかあそこです。（定延 2005:16-18 に基づく）

本研究の仮説では，この違いは，「んー」（「うーん」）において，課題解決は難しいという見通しを示しつつも，なんとか解答を試みるという流れに特に矛盾はないが，「さー」において，課題は解決不可能の見通しを示しつつ，解答を提示するのは矛盾がある，と説明される。

以下では，仮説（6.7）が「えーと」と「うーん」の生起環境や表現効果の違いを説明する上で有効であることを示す。

6.2.3　仮説の検証

たとえば，次の（6.9）のように時間を聞かれて，腕時計を参照するという場面を考えてみよう。この場面で「えーと」は自然だが，「うーん」はあまり自然ではない。

（6.9）　［友人同士の会話］

A：今何時？

B：［腕時計を見て］

｛ えーと／??うーん ｝…，12 時 10 分。

その理由は，腕時計を所有している B にとって「今，何時か」という質問は，当然，解決の見通しがある課題だと想定されるからである。一方，「うーん」が自然になるとすれば，時計の文字がはっきり見えないなど，何らかの障害がある場合であり，通常の文脈では自然になりにくい。

また，次の（6.10）の「1234 足す 2345 は」のような「足し算」に取り掛かる際，「えーと」を発するのは自然だが，「うーん」を発するのはあまり自然ではない。

（6.10）　一郎：1234 足す 2345 は？

次郎：｛ えーと／??うーん ｝……3579。（定延・田窪　1995:83，一部改変）

（6.10）のような単純計算は，ケタが多くて「即座に」は答えられないとしても，「まず 4 と 5 を足して，次に 4 と 3 を足して…」といった具合に決められた手順を遂行していけば，答えにたどりつく見通しがあり，「えーと」が自然になる。一方，「うーん」は足し算の手

順すら分からないといったニュアンスを生み，あまり自然ではない。

以上のように「えーと」と「うーん」の使い分けは，発話者にとっての課題の難易度に依存する。この課題の難易度は，絶対的なものではなく相対的なものである。それゆえ，「えーと」と「うーん」の自然さも，発話者の能力や状況に応じて変化する。たとえば，普通の人（少なくとも筆者）にとって「1234 足す 2345 は」という足し算に比べ，「1234 の平方根は？」という課題を暗算や筆算で解決することは，それほど見通しの明るいものではない。それゆえ，何らかの計算を試みたとしても，その最中に発話するフィラーは「うーん」の方が自然である。

（6.11）　一郎：1234 の平方根は？

次郎：｛ うーん／？えーと ｝…。

この場合，「えーと」を使うと，次郎は数学が得意であるとか，答えを暗記しているとか，電卓を持っているといった課題解決の見通しのある解釈が生じる。

ところで，先ほど，（6.3）において，「演算」を行っているにも関わらず，「うーん」が自然で，「えーと」に違和感があるのはなぜかという問題を提示した（例文(6.3)を再掲する）。

（6.3）　［夫婦が，お歳暮の箱の中に何が入っているかを話している］

A：何が入ってるのかな？

B：けっこう重いね。｛ うーん／？えーと ｝，缶詰じゃないかなぁ。

ここで「えーと」が自然になりにくいのは，通常，箱の重さだけから箱の中身を言い当てられる見通しは，（あらかじめ，答えがいくつかの候補に絞られているのでもなければ）それほど明るいとは言えないからであると説明できるだろう。

また一口に記憶の「検索」といっても，その文脈で想定される話し手の課題解決の見通しに応じて「えーと」，「うーん」のどちらかが自然な場合や，「えーと」も「うーん」もともに自然な場合などがあり得る。たとえば，次の（6.12）は「えーと」だけが自然な例である。これは，２人の大学院生（ともに女性）の会話からの抜粋で，A が今学期新たに履修している演習形式の授業について，その授業を履修していない B に説明している場面である。

（6.12）　01A　で，やりますって言ったん，でー，日も決めたん

02B　発表の

03A　日も決めたん

04B　うん

05B　何曜日の授業

06A　でも

07A　えーとな，火曜日やねんけど，でも

08A　すごいいっぱい，英語の論文，読まなあかんよう，なってぇ

09A　○○○先生も，応用言語学も

10B　あー　　（『対話コーパス』セッション番号１）

01～04 行目において A はその授業で自分が発表する日が決まったと話している。それに対して 05 行目で B がその授業は何曜日に行われているのかと質問し，07 行目で A は「えーとな，火曜やねんけど」と答えている。この 07 行目の「えーとな」は，「うーん」では代替しにくい。それは，A にとって自分が今話している授業が何曜日に行われているかは，記憶を検索しさえすれば，当然思い出せるはずのことだからである。

一方，同じように「思い出し」を行っていても，「えーと」と「うーん」が両方自然に使用し得る例が先ほどの (6.6) である。「古い友人の誕生日はいつだったのか」という課題は，記憶の「検索」という心内作業を行う点では，（6.12）と同じだが，必ずしも「思い出せる」とは限らないという想定も可能なため，「うーん」も自然になる。

さらに，次の（6.13）は，「えーと」が不自然な例である。

（6.13）　［A は自分の部屋で失くした車の鍵を探している。部屋に遊びに来ていた友人 B もそれを手伝い，一緒になって鍵を探している］

A : あれ，俺，鍵どこに置いたっけなぁ。｛ えーと／うーん ｝…。

B : ｛ ??えーと／うーん ｝…。

A と B はともに「鍵を捜索する」という課題に取り組んでいる点で共通している。しかし，A が座布団をひっくり返したり，机の下をのぞきこんだりしながら，「えーと」も「うーん」も発しうるのに対し，B が「えーと」と言いながら，座布団をひっくり返したりするのはあまり自然ではない。それは，自分の部屋におり，鍵を失くした本人でもある A は，いつも自分が鍵を置きがちな場所を探したり，家に帰ってきてからの自分の行動をたどってみるなど，鍵の発見につながりやすい心身行動をとることができるのに対し，B にできるのは手当たりしだいあたりを見回すという必ずしも見通しがあるとはいえない行動だけだからであると説明できる。

以上，話し手がどのような課題解決の見通しを持ちうるかが，「えーと」と「うーん」の生起の自然さを説明する上で有効なことを示した。

6.2.4　「えーと」・「うーん」の表現効果

定延・田窪（1995）などが指摘するように，フィラーは特定の表現効果を目当てに発せられることがあり，「えー（と）」・「うーん」の異同を理解するには，そのような表現効果目当ての使用も視野に入れる必要がある。本節では，「えーと」と「うーん」の表現効果の違いを説明する上でも本稿の仮説が有効であることを示す。

たとえば，次の（6.14）や（6.15）のように，書き言葉において，フィラー「うーん」が「問題の難しさ」を表すために使われることがある。

（6.14）　語学のカッコよさは，一言ではなかなか説明できない。うーむ。

（黒田龍之助『語学はやり直せる！』角川書店，2008 年）

（6.15）　そういえば，「はしか」って，英語で何ていうんだろう？うーん，知らない。

（黒田龍之助『語学はやり直せる！』角川書店，2008 年）

（6.14）における「うーむ」（「うーん」のバリエーションとみなす）の付加は，「語学のカッコよさを，なんとか一言で説明しようとはしているが，やはり難しい。語学とはそれほど奥深いものだ」と，著者の主張を強化する効果を生んでいる。また，（6.15）の「うーん」は，大学の英語教員をしていたほどの著者でも，知らない英単語はたくさんある（だから，読者も肩肘張らずに語学を楽しんでほしい）という主張において効果的に用いられている。このような「うーむ」や「うーん」は，「えーと」（または「えー」）では代用できない。

さらに「うーん」による考え込みは，「まあまあ」，「いまいち」，「もう一歩」といったニュアンスで軽く苦言を呈する場合に用いられることがある。次の（6.16）～（6.18）は，携帯音楽プレイヤー（ipod，iphone）向けのゲームに対する評価（レビュー）である[45]。

（6.16）　うーーーん（v.1.03.00）

☆☆☆☆★　“レビュー：ｔ－１，03-Oct-2009”

まあまあです。

（ゲーム「バイオハザード４」のレビュー，2010 年 1 月 2 日閲覧）

（6.17）　うーん（v.1.03）

☆☆★★★　“レビュー：Aaasaaaaaaaaa，27-Oct-2009”

[45]　これらのレビューはインターネット上のものだが，URL が表示されないため，「internet explorer」などのブラウザでは閲覧できず，「itunes」というフリーソフトで閲覧することができる。なお，例文の傍線は引用者による。

内容は良いんだけど，プロ野球のチームの方が良いと思う。

（ゲーム「パワフルプロ野球 Touch」のレビュー，2010 年 1 月 2 日閲覧）

（6.18）　高い（v.2.0.2）

☆☆☆★★　“レビュー：かんざい，16-Sep-2009”

たしかに面白いけど，難易度高すぎ www

…＜中略＞…

高い金払って DL したので一応残してますが…

うーん，と言った感じ

（ゲーム「CRYSTAL DEFENDERS」のレビュー，2010 年 1 月 2 日閲覧）

（6.16），（6.17）では「うーん」が表題として用いられており，それぞれのゲームの評価は，（6.16）が５つ星満点中４点，（6.17）が２点である。また，（6.18）では，ゲームの評価が「うーん，と言った感じ」と述べられ，星３つの評価である[46]。このような「うーん」の用法は，「いいか悪いか判断するという課題は解決が難しい　→　いいとも悪いとも言えない　→　悪くはないが，もう一歩」のような意味の拡張として説明できるだろう。このような「うーん」は，「えーと」（ないし「えー」）では代用できない。

さらに，次の（6.19）と（6.20）を比べてほしい。

（6.19）［洋服店におけるカップルの会話］

女：ねえねえ，どっちの色が私に似合う？

男：｛ ？えーと／うーん ｝･･･こっち。

（6.20）［カップルが雑誌を見ながら２つのレストランについて話している］

女：ねえねえ，どっちがおいしそう？

男：｛ えーと／うーん ｝･･･こっち。

筆者は（6.19）の「えーと」に多少違和感があり，「偉そう」なニュアンスを感じる。筆者以外の２名のインフォーマントのうち，1 名も多少違和感があると答え，「興味がなさそう」，「男性優位な感じがする」と述べた。残り 1 名は「えーと」を自然であるとしながらも，「いつも彼女の服を男が選んでいる感じがする」と答えた。一方，（6.20）のような「どちらのレストランがおいしそうか」という検討においては，３名とも「えーと」も「うーん」もともに自然であるという判断で一致していた。（6.19）の方が，（6.20）よりも課題が

[46]　「うーん，と言った感じ」における「と」は「うーんと」の「と」ではなく，「～と言った感じ」という構文における引用の「と」である。

難しいとは言い切れないように思われるが，「えーと」の自然さに差が生じたのはなぜだろうか。また「興味がなさそう」，「偉そう」といった印象はなぜ生じたのだろうか。

「うーん」を発話する際，話し手が取り組んでいることになるのは，解決の見通しが必ずしも明るくない課題である。それゆえ，(6.19) での「うーん」の使用は，「君にはどちらの色も似合うから決めがたい」というようなニュアンスや，彼女が難しいと感じている問題を一緒になって難しいものとして捉えるというような共感的姿勢が読みとれる。逆に，「えーと」の使用は，相手に寄り添いともに悩むニュアンスがなく，判断に迷う女性とその判断を容易だと捉える男性のギャップが浮き彫りになる。それゆえ「興味がなさそう」に感じられるのだろう。また，「どちらの服が似合うかを決めるのはそれほど難しいことではない」ということから，「偉そう」（だって，俺，ファッションセンスいいから）や，「いつも彼女の服を男が選んでいる感じ」（だって，いつものことだから）といったニュアンスが生じるのだろう。一方，(6.20) における「どっちがおいしそう？」という問いに女性が迷っている様子は読みとれず，それゆえ，この場合，男性が「えーと」と言いながら，雑誌を見て，自分の好みに合う方を選ぼうとしても特に不自然ではない。

逆に，「えーと」の方が「うーん」よりも表現効果において自然になる場合がある。たとえば，次の (6.21) のような大学院の入試面接を考えてみよう。

(6.21)［哲学科入試面接試験で］

面接官：ウィトゲンシュタインは『哲学探究』において『論理哲学論考』のどのような点を乗り越えたのだと思いますか？

受験者：｛ えーと／??うーん ｝…。

筆者を含めた３名全員がこの場面で最も適切なフィラーは「えー」だと判断したが，あえて「えーと」と「うーん」を比べるならば，「えーと」が自然であり，「うーん」はあまり自然ではないという判断では３名が一致していた。それは，「えーと」を発することで，受験生は，面接官の質問を解答可能な課題として捉えている（つまり，自分はちゃんと勉強している）ことを示すことができるからであろう。一方，この場面で課題が難しいからといって正直に「うーん」を発すると，「どう答えればいいか分からない」というニュアンスがあり，面接という場面では印象があまりよくないように思われる。

6.3 「そー（ですねー）」

本節では，フィラー「そー（ですねー）」の用法を論じる。6.3.1 節では，「そー（ですね

ー)」に関する先行研究を紹介するとともにその問題点を明らかにする。6.3.2 節では，「そー（ですねー)」にはどのような心身行動が対応していると記述すべきかを論じる。6.3.3 節では，「そー（ですねー)」の用法には心身行動との対応関係では捉えきれない面があることを論じる。6.3.4 節では，「そー（ですねー)」と「えーと」，「うーん」の組み合わせについて論じる。なお，「そーですねー」のバリエーションとして「そー」，「そーねー」，「そーだねー」を認め，現時点では，これらの違いには特にこだわらないことにする。

6.3.1　先行研究の問題点

先行研究における「そー（ですねー)」の記述は，「さまざまな候補から最適なものを求める検討の最中であることを表す（定延 2002:93)」と「自分の意見や判断などを述べるときに（小林 2005:41)」，「いま考えている最中であることを示す（小林 2005:41)」というものである。つまり，先行研究において，「そーですねー」は，「えーと」や「うーん」のように課題解決行動全般に用いられるのではなく，より限定的な行動に対応すると考えられている。以下では便宜上，定延（2002）の言う「候補から最適なものを求める」という検討作業を「選択」，小林（2007）の言う「自分の意見や判断」を検討する作業を「意見・判断」と呼ぶことにする。

こうした記述は，「そーですねー」と「えーと」・「うーん」との生起し得る環境の違いをかなりうまく説明してくれる。たとえば，次の（6.22）のような腕時計の「観察」に「えーと」は用いることができるが，「そーですねー」はできない。これは時計を観察して情報を得るという行動が，「選択」ではないから，あるいは，そうした行動によって得られる「現在 12 時 10 分である」という情報が，「単なる事実」であり，「意見・判断」ではないからとも説明できるだろう。

（6.22）　［友人同士の会話］

A：今何時？

B：［腕時計を見て］

｛ えーと／??そー（ですねー） ｝…，12 時 10 分。

同様に，次の（6.23）のように「うーん」は記憶の「検索」に用いることができるが，「そー（ですねー)」はできない。これは「検索」は「選択」や「意見・判断」とは異なる心内行動だからだと説明できるだろう。

（6.23）　あれ，あの人の誕生日，いつだったっけなぁ。｛ うーん／??そう（ねえ） ｝

…。

また，「そーですねー」は，次の（6.24）の数学の計算のような「計算」にも対応していない。これも「選択」や「意見・判断」とは異なる心内行動だからと説明できる。

（6.24）　一郎：1234 足す 2345 は？

次郎：??そーですねー，3579 。

しかし，ここで疑問に思われるのは，上の（6.22）～（6.24）が，「選択」と「意見・判断」どちらの記述でも説明できてしまうことである。これは理論的に余剰なのではないだろうか。「選択」と「意見・判断」という記述は本当に両方とも必要なのだろうか，あるいは，どちらか片方だけで十分なのだろうか。まず，この問題を検討したい。

また，以下で指摘するように，「そー（ですねー）」は，心内行動との対応関係以外にも，記述に加えるべき性質がいくつか残されている。以下では，これらの問題を検討しながら，先行研究の記述の改訂を試みる。

6.3.2　「選択」か「意見・判断」か

まず，「さまざまな候補から最適なものを求める検討の最中であることを表す（定延 2002:93）」という記述と「自分の意見や判断などを述べるときに（小林 2005:41）」使うという記述のどちらがより妥当性が高いのかを検討する。

ここで注目したいのは，「そーですねー」は，（6.25）のように答えが出る場合には自然だが，（6.26）のように答えのでない検討においては多少違和感があることである。

（6.25）A：ロンドンでの新生活はどうですか？

B：{ うーん／そーですねー }，毎日が刺激的ですが，ちょっと物価が高すぎると思います。

（6.26）A：ロンドンでの新生活はどうですか？

B：{ うーん／？そーですねー }，まだよく分かりません。

（6.26）における「そーですねー」の違和感を説明する上で「さまざまな候補から最適なものを求める検討の最中である（定延 2002:93）」という記述の方が有効であるように思われる。その理由は，（6.25）において，話し手が「ロンドンでの新生活のさまざまな側面のどれを答えるのが適切か」を選択していると解釈できるのに対し，（6.26）の「まだよく分かりません」という答えは，選択の対象になるような候補すらないという話し手の心内の状態を言い表しているからである。

また，事実を述べているのか意見・判断を述べているのかが容易には判断できない場合もある。たとえば，次の（6.27）の B の発話は事実だろうか，意見だろうか。

（6.27）　A：モンゴルのお祭りではいつもどんなことをするんですか？

B：そーですねー，たとえば，相撲をとったり，弓矢のコンテストをしたりします。

一方，話し手が，モンゴルの祭りでの催しの代表として何を例示すべきかを選択していると説明すれば，（6.27）において，事実か意見かといった判断は問題にはならない。

また，次の（6.28）のように，意見や判断を述べるように求められているのに「そー（ですねー）」に違和感がある場合もある。（6.28）の「そーですねー」について，筆者を含めた２名があまり自然ではないと判断した。また，残り１名のインフォーマントは自然と判断したが，「偉そうな感じ」がすると述べた。

（6.28）［哲学科入試面接試験で］

面接官：ウィトゲンシュタインは『哲学探究』において『論理哲学論考』のどのような点を乗り越えたのだと思いますか？

受験者：??そーですねー……。

２名が「そーですねー」をあまり自然でないと判断したのは，この場面で受験生の念頭にいくつかの答えの候補が浮上しており，その中でどれを答えるのが適当かを検討しているとは想定しにくいからだと説明できるだろう。また「自然だが偉そう」という答えも，受験生が，「そーですねー」によって，いくつかの答えの候補から適当なものを選択してみせるというのが，自分の知識や能力の誇示につながりうるからであるように思われる。

以上より，本研究では「そー（ですねー）」に対応する心内行動の記述としては「選択」がより適当であると結論する。

6.3.3　「そー（ですねー）」と対人コミュニケーション

「うーん」・「えーと」と「そー（ですねー）」の異同は心内作業の守備範囲の違いだけではない。「うーん」や「えーと」は独り言でも発することができるが，「そーですねー」は対人コミュニケーション専用である。たとえば，次の（6.29）において話し手は「さまざまな候補から最適なものを求める検討」を行っているが，「そー（ですねー）」とは言えない。

（6.29）　［部屋で独り，デートにどの服で行こうかを検討している］

｛ うーん／えーと／??そー（ねー） ｝…，これにしようかな。

「そー（ですねー）」が使えるのは次の（6.30）のような対人コミュニケーションである。

（6.30）　A：どれがいいと思う？

B：{ うーん／そうねえー }，これなんかどうかしら。

しかし，「そー（ですねー）」は，単に対人コミュニケーションが行われていれば使用可能になるわけでもない。「そー（ですねー）」を発するには，「問いが自分に向けられていること」，言い換えれば，「解答者として指名されていること」が必要である。

たとえば，次の（6.31）のように，「みなさん」に向けられた問いに対して，B が唐突に「そうねー」と言うのはあまり自然ではない。一方，「うーん」と言うのは自然である。

（6.31）　［団体旅行の添乗員がバスの中で参加者全員に対して問いかける］

A：みなさん，こちら，昼食会場に忘れてあった傘なんですが，どなたのでしょうか？

B：{ ??そうねー／うーん }，あんな渋い色の傘使うのは，田中さんじゃないかしら。

一方，次の（6.32）のように，問いが B に向けられていれば自然である。

（6.32）　A：B さん，これ，昼食会場に忘れてあった傘なんですが，どなたの持ち物だと思われます？

B：{ そうねー／うーん }，こんな渋い色の傘を使うのは，田中さんじゃないかしら。

つまり，「そー（ですねー）」は，対人コミュニケーションにおいて，話し手が自分に向けられた問いを解決するために，「選択」を行う際に発話される。

これに対して，次の（6.33）のような書き言葉における「そーですねー」が反例として提出されるかもしれない。

（6.33）「いままでになかった論理学の本を」という気持ちももっています。なので，いまちょっと悩んでいます。だって，論理学の本はこれがはじめてというひとは，この本がいままでにないタイプのものだということなんか，分からないでしょうから。そうですね，私としては危険な賭けかもしれませんが，ちょっと他の論理学の本をパラパラをめくってみてくれませんか。それからこの本もパラパラめくって，見比べてみる。

（野矢茂樹『入門！論理学』中公新書，2006 年，傍線引用者）

しかし，これは反例ではなく，定延（2007:141）が提案するような「話し手が心内で意

識する，架空の聞き手」という概念を導入することによって解決できるように思われる。すなわち，(6.33) において書き手は，「では，どうすればいいのか？」のような読者（論理学の本はこれがはじめての人）からの架空の問いを想定して，「そうですね」を発し，読者にこの本の斬新さを納得させる方途を選択してみせていると考えられる。

6.3.4 「そー（ですねー)」と他のフィラーの組み合わせ

「そー（ですねー)」は「うーん」や「えーと」と併用することができる。

(6.34) ［「このスーツに合うネクタイはないか」と尋ねられた洋服店の店員の発話］

a.??えーと，うーん，こちらなんかいかがでしょうか

b.??うーん，えーと，こちらなんかいかがでしょうか。

c. そーですねー，えーと，こちらなんかいかがでしょうか。

d. えーと，そうですねー，こちらなんかいかがでしょうか。

e. そうですねー，うーん，こちらなんかいかがでしょうか。

f. うーん，そうですねー，こちらなんかいかがでしょうか。

「えーと」と「うーん」を組み合わせた（a）と（b）はあまり自然ではないが，「そーですねー」と「えーと」，「うーん」の組み合わせは順序を問わず自然である。これは「えーと」と「うーん」が課題解決の見通しにおいて互いに異なるため，同時に使用することには混乱があるのに対し，「そうですねー」と「えーと」・「うーん」という「選択作業＋見通しの度合い」という組み合わせは，特に矛盾が生じないためだと説明できるだろう。

一方，次の（6.35）のように「さー」と「そー（ですねー)」の共起はあまり自然ではない。

(6.35) ＜友達同士の会話＞

A：ねえねえ，どの色が似合うかな。

B：??そーねー，さー，どれがいいでしょうねえ。

??さー，そーねー，どれがいいでしょうねえ。

これは，課題解決の見通しがまったくないという「さー」の性質と，いくつかの候補が念頭にあるという「そー（ですねー)」使用の前提とがミスマッチだからであろう。つまり，答えの候補が絞れているならば，解決の見通しがまったくないとは言いがたい。

6.4　フィラー的な空気すすり

本節では，「フィラー的な空気すすり」と「えーと」などの他のフィラーとの異同を論じる。まず，6.4.1 節では，先行研究を紹介し，問題の所在を明らかにする。6.4.2 節では，フィラー的な空気すすりは誰が行えるのかについて，本研究の仮説を提示する。6.4.3 節ではその仮説を検証する。6.4.4 節では，フィラー的な空気すすりと他のフィラーとの組み合わせについて論じる。6.4.5 節では，フィラー的な空気すすりを感動詞という品詞，および，「フィラー」というカテゴリーに含めることができるかについて検討する。

なお，【シュー】，【スー】，【スシュー】，【シー】などの摩擦音の質による違いには現時点ではこだわらない。

6.4.1　先行研究の問題点

フィラー的な空気すすりとは，定延（2005，2007）によって指摘されたもので，話し手が空気をすすって「公の会話場から，私的領域（自己の心内・体内）への退却（定延 2005:201）」して，「考えをまとめるために，会話よりも心内の考え事（思い出し，計算など）に集中する時の空気すすり（定延 2007:131）」である。

しかし定延（2005，2007）は，空気すすりとフィラーを全く同じものだとみなしているわけではない。定延は，「空気すすりはフィラーとは別ものである。というのは，フィラーと違って，空気すすりは発言権の確保という効果を必ずしも持たないからである（定延 2005:195）」と述べ，そのような発言権の確保とは無縁な空気すすりの例として，「ポライトネスマーカー的な空気すすり」，「ヘッジ的な空気すすり」を挙げている[47]。だが，この記述は，フィラーが生起し得ない環境でも，空気すすりは生起し得ると述べているのであって，空気すすりとフィラーがともに生起可能な場合における相違を述べたものではない。

たとえば，次の（6.36）は，フィラー的な空気すすりの例として定延（2005）が挙げたものだが，この「スー」という空気すすりは「えーと」，「うーん」，「そーですねー」のいずれとも代替可能であるように思われる。

（6.36）　司会者：これはずいぶん難しい問題ですねー

[47] なお，これと似た観察は，南（1997:411-412）でもなされており，南は，「ていねいまたはかしこまりの態度を表す吸気のスーという音」と「話の中でなにか間を持たせたいようなとき」に発せられる「舌をややうしろに引っ込めて，そのどこかの側面と，左右どちらかの奥歯のこれまたどこかの部分との間で吸気による摩擦音」の２つを認めており，興味深い。しかし，「まったくの想像だが」と南自身が留保するように，この記述はやや不明確な部分があり，定延の言う「空気すすり」と南が指摘する現象とが完全に重なるものなのか判断しにくいため，ここでは取り上げないことにする。

出題者：[腕組みをして眉間にしわを寄せて]

そーなんですよ　私も時間ぎりぎりまで悩んだんですけどねー

[片手を頬に当てて，首をかしげて]

{ 【スー】／えーと／うーん／そーですねー } これ以上ヒント出すと一気にやさしくなっちゃうんでー

（定延 2005:202，一部改変）

したがって，まず（6.36）のような例においてフィラー的な空気すすりが他のフィラーとどう異なるのかを問題として立てることができるだろう。そして，そのような空気すすりと他のフィラーの異同（ニュアンスや生起環境の違い）を具体的に説明する上で，「考えをまとめるための一時退却（定延 2005:201）」という記述は明らかに十分ではない。そこで以下では，フィラー的な空気すすりと他のフィラーとの生起環境や表現効果の異同を観察していく。

6.4.2　課題解決の責任

以下の論をスムーズに進めるための便宜上，先に，フィラー的な空気すすりと他のフィラーの異同に関する本研究の仮説を提出しておこう。

フィラー的な空気すすりは，「えーと」，「うーん」と同じく，「カバンの中から手帳を探す」，「ある人の苗字を思い出す」，「計算問題を解く」，「論文のタイトルを考える」などの課題解決行動全般において発せられる。その点で「選択」にのみ対応する「そーですねー」とは異なる。たとえば，次の（6.37）のように腕時計を観察して現在時刻についての情報を得る行動において，空気すすりは生起し得るが，「そーですねー」は不自然である。

（6.37）　A：今何時？

B：{ 【シュー】／??そーですねー }，12 時 50 分です。

また，「そー（ですねー）」とは異なり，空気すすりは次の（6.38）のような独り言にも生起し得る。

（6.38）　[部屋で独り，デートにどの服で行こうかを検討している]

{ 【シー】／??そー（ねー） } …，どれがいいかな。

一方，フィラー的な空気すすりと「えーと」・「うーん」との違いは，話し手が，どのような立場でその課題に取り組んでいるかである。具体的に言えば，「えーと」・「うーん」は発話権があるものなら誰でも発話できるのに対し，フィラー的空気すすりにおいて，発話

者は当該の課題を自分が解決すべき課題として捉え，「課題解決の責任者」として課題に取り組んでいる。以下では具体例を見ながら，この仮説の内容を説明するとともに検証していく。

6.4.3　仮説の検証

「誰が空気をすすれるのか」という問題は，定延（2005）でも触れられており，「誰でも自由に空気をすすってよいわけではない (p.188)」,「空気をすする権利をもっているのは，その時点で『なにかしゃべりそうな人』である（p.189)」と述べられている。しかし一方で,「『なにかしゃべりそうな人』しかおこなえないというのは，…＜中略＞…『えーと』『あのー』『んー』のようなフィラーにも当てはまることである (p.194)」とも述べられている。つまり，定延（2005）は，フィラー的な空気すすりやフィラーは，発言する権利のある人に許される行動であると位置づけている。だが，発言の権利があれば誰でも空気がすすれるわけではない。たとえば，次の（6.39）を見てほしい。

（6.39）　［ゼミ形式の授業において，教師が出した「言語表現『甲』と『乙』の相違を説明せよ」という課題に，受講者はみな頭を抱えている。A は，教師から解答するよう，指名されたがどう答えるべきか分からずに，考え込んでいる。］

a.　【シュー】・・・。

b.　うーん・・・。

この場面で A が発するフィラーとして自然なのは，空気すすり，または,「うーん」である。「そーですねー」や「えーと」では，続けて A が何らかの答えを述べそうであり,「どう答えるべきか分からない」という文脈に適さない。ここで，解答者として指名されている A は，当然発言権を持っており，それゆえ，空気をすすることも，フィラー「うーん」を発することもできる。ここまでは定延（2005）の記述の通りである。

ここで注目したいのは，A 以外の受講生（仮に B と C）に何ができるかである。ゼミに出席し，課題を共有している以上，B や C に発言権がないとは言えず，実際「うーん」と声を出して考え込んだり，横から,「えーと，○○とは考えられないでしょうか・・・」などと発言することはあり得る。しかし，この場面で，B や C が空気をすすることはできない。この場面で，空気をすすれるのは，A だけである。

受講者 A と B・C との違いは,「言語表現『甲』と『乙』の相違を説明せよ」という課題

の解決における責任の違いである。すなわち，教師から解答者として指名されている A は課題を解決する（何らかの解答を試みる）責任を負っているのに対して，B や C は，課題に取り組む権利はあるが，必ずしもそれを解決する責任は負っていない。

一方，次の（6.40）のように，誰も課題解決の責任を負っていない状況を考えてみよう。

（6.40）　［同じ言語学のゼミの授業で，雑談として，日本国の債務をどう減らしていけばよいかという話題になった。出席者は皆，この難題に頭をかかえている］

a.??【シュー】

b.　うーん…。

c.??えーと…。

筆者を含む２名が，仮に「A 君，どう思う？」などと教師に解答者として指名されても，A が空気をするのはあまり自然ではないと判断した。その理由は，雑談の中で出てきた日本国の債務をどう減らすかという政治的課題を，言語学のゼミ生 A が解決する（何らかの解答を提示する）責任を有するとは想定しにくいからであると説明できるだろう。一方，残り１名は教師から解答するように指名されたならば，A が空気をするのは自然だと答えた。この内省の不一致は，発話者がその課題に対して自分が解決すべき責任を感じるかどうかにはある程度の任意性がある（たとえば，真面目な人なら責任も感じやすい）ということを示しているように思われる。

そこで同型の例をもう一つ挙げよう。

（6.41）　［A は自分の部屋で失くした車の鍵を探している。部屋に遊びに来ていた友人 B もそれを手伝い，一緒になって鍵を探している］

A：あれ，俺，鍵どこに置いたっけなぁ。｛ 【シュー】／えーと／うーん ｝…。

B：｛ ??【シュー】／??えーと／うーん ｝…。

A と B はともに「部屋を探索する」，「鍵を捜索する」という課題に取り組んでいる点では共通している。しかし，A が空気をするのが自然なのに対し，B が空気をすすりながら，座布団をひっくり返したり，机の下をのぞきこんだりするのはあまり自然ではない。鍵を発見するという課題を解決する責任を有しているのは，鍵を失くした本人 A である。本人以外は，鍵を発見するという課題を共有することはできるが，課題解決の責任までは生じない。それゆえ，B は空気をすすりにくい。

一方，次の（6.42）のように，鍵を失くしたのが A ではなく，B であると想定すれば，今度は A が空気をするのが不自然になり，B が空気をするのが自然になる。

（6.4.2）A：　あれ，鍵，ほんとにないぞ。｛ ??【シュー】／??えーと／うーん ｝…。

B：　｛ 【シュー】／えーと／うーん ｝…。

（6.41）（6.42）において３名の判断は一致していたが，ここでも，「お前の課題は俺の課題」のようなチームでの責任の共有（ないし拡張）が生じ，鍵を失くした本人以外が空気をする可能性は残されているだろう。とりわけ（6.42）では，B が失くしたのは A のお母さんの鍵のような文脈を想定すれば, A が空気をするのも自然になりやすいように思われる。

最後に，空気すすりの実例を一つ見ておこう。（6.43）では，２人の大学院生 A（英語教育専攻），B（日本語教育専攻）が修士論文のテーマについて話し合っている。B は，日本語教育において何を教えるべきかを修士論文のテーマにしようと考えており，（6.43）に先行する場面では，非言語行動を教えるべきか，発音の正しさにこだわるべきか等が話題に挙がっている。（6.43）では，きれいな日本語（NHK のアナウンサー的な日本語）と方言のどちらを教えるべきかが話題になっている。

（6.43）　01B：　こないだも，言ったけど，評価が色々じゃん

02A：　うん

03B：　その，地方によって

04A：　うん

05B：　そこに，行こうかな，とも思ったけど

06A：　で，その，きれいな日本語を話すのが，か，かなり，あの

07B：　うん

08A：　ニーズに合うものであっても，評価が低かったら

09B：　そう，そう，そう

10B：　はーあ

11A：　でも，私は，これで行くのか

12A：　なんか，まあ，ちょっとそれは，自分なりに，考えなあかんと思うけど　【シュー】

13B：　今だから，考えてる，だから

14A：　訳わからんやろ

15B：　わからん

16A：　ウフフフ　　（『対話コーパス』セッション番号１）

01～09 行目において，日本語教育では現在，「きれいな日本語」が教えられることが多く，それは学習者のニーズにかなうのかもしれないが，地方によっては必ずしも「きれいな日本語」の印象がいいわけではない。場合によっては，地方の言葉を教える必要もあるのではないか，という主旨のことが述べられ，12 行目で，修士論文をまとめるためには，こうした問題に対して自分の考えをはっきりさせなければならないという主旨の発言の直後に空気がすすられている。この空気すすりはフィラー「うーん」に近いニュアンスを持つ。この場面で，課題解決の責任（修士論文のテーマを自分なりに考える）を有しているのは B であり，B が空気をすするのは自然である。

6.4.4　空気すすりと他のフィラーの組み合わせ

空気すすりは，「えーと」，「うーん」，「そー（ですねー）」と組み合わせて使うことができる。これは「課題解決責任者として課題に取り組む　＋　具体的な課題解決行動を行う」という組み合わせに矛盾がないからだろう。

（6.44）［「このスーツに合うネクタイはないか」と尋ねられた洋服店の店員の発話］

a.　【シュー】，えーと，こちらなんかいかがでしょうか

b.　えーと，【シュー】，こちらなんかいかがでしょうか。

c.　【シュー】，そーですねー，こちらなんかいかがでしょうか。

d.　そうですねー，【シュー】，こちらなんかいかがでしょうか。

e.　【シュー】，うーん，こちらなんかいかがでしょうか。

f.　うーん，【シュー】，こちらなんかいかがでしょうか。

また，空気すすりは「さー」と組み合わせることもできる。

（6.45）a.　【シュー】，さー，どうですかねー。

b.　さー，【シュー】，どうですかねー。

これも解決する責任は感じるが，解決できそうにないというのは論理的に矛盾しないからだろう。

6.4.5　フィラー的な空気すすりを「フィラー」に含めるべきか？

本節では，フィラー的な空気すすりをフィラーに含めるべきかを検討する。

1.2 節で指摘したように，ここで問題になるのは，空気すすりを感動詞に含めるか否かである。おそらく，空気すすりは，非言語行動であって単語ではない。それゆえ，単語の分類である感動詞に含めることはできないというのが常識的な見解だろう。

しかし，空気すすりは，本当に感動詞とみなしえないのだろうか。たとえば，騒がしい子供に向かって発せられる「シーっ！」という摩擦音が感動詞とみなされる（高橋他 2005）のであれば，似たような音を出す空気すすりが感動詞でないとなぜ言えるのだろうか。前者は息を吐いて音を出すのに対して後者は息を吸って音を出す，この発音の仕方が感動詞と非言語行動を分かつのだというのは答えとして十分ではない。たとえば，「ハッハッハ」という笑い声が，息を吐いて出されれば感動詞とみなされるのに対し，息を吸って引き笑いになれば感動詞ではないということはないだろう。

そもそも言語行動（感動詞）と非言語行動の境界はどう画定されるのだろうか。たとえば，「あら」は『女性』的な驚き・気づきの感動詞である。一方，「あー」という嘆息はどうだろうか。あるいは，「ガルルル…」は猛獣のうなり声を模した感動詞（擬音語）であるが，猛獣のうなり声を文字化できないほどリアルにまねた声はどうだろうか。さらに，「おぎゃあ」は赤ん坊の泣き声を模した感動詞だが，本物の赤ん坊の泣き声は，感動詞（言語）だろうか，単なる声（非言語）だろうか[48]。

本節では，次の①，②を満たすことが言語行動と呼ばれる条件であると考える。

① 当該のコミュニケーション行為がある言語文化において定型化していること。

② それを「言語的」とみなすことが言語研究・教育において有益であること。

①の「ある言語文化において定型化している」とは，ある行動（意味）と形との間にある言語文化特有の対応関係が認められるということである。これは，言い換えれば，その言語を学んだことのない人が，それを間違え得るということでもある。たとえば，韓国・朝鮮語の「オモッ」（어머）は驚きや気づきに対応した『女性』の感動詞である。また，「ウルルン」（으르릉）はトラなどの猛獣のうなり声を模した擬音語で，赤ん坊の泣き声は「ウンエー」（응애）である。「オモッ」や「ウルルン」や「ウンエー」の用法は韓国・朝鮮語を学ばなければ分からない。同様のことは日本語の「あら」，「グルルル」，「おぎゃあ」にも当てはまる。したがって，これらは言語行動（感動詞）である。また，「あー」のような嘆息は，”ah”（英語，ドイツ語，フランス語，スペイン語），”ax”（ドイツ語，タタール語），啊（中国語）などほぼ共通した形式が通言語的に観察される（高橋他 2005:176）が，これ

[48] 赤ん坊の泣き声についての問いは，高橋（2005:177）に基づく。

らの形式をいつ用いるか，すなわち，これらの形式が対応するコミュニケーション行動は各言語において異なる。たとえば，日本語でなら「あー」と言うような場面でも英語では”Oh, I see”（あー，そうですか）や”Wow, it’s beautiful”（あー，きれいだなぁ）が用いられるといった違いがある。それゆえ，「あー」もやはり言語行動とみなせるだろう。

他方，赤ん坊の本物の泣き声や猛獣のうなり声をリアルにまねた声は，あくまで自然発生的・個人的なものであり，特定の言語文化において定型化しているわけではない。それゆえ，基本的にはどんな声でも間違いにはならない（ただ，変わった泣き方，似ていない物真似になるだけである）。したがって，これらは，非言語行動とみなせるだろう。

日本語社会において行われる「空気すすり」は，他言語とは異なる日本語固有の用法を有する。たとえば，南（1997：412）によると，チベットでは「空気すすり」に類似した行動があいづちとして用いられる。また，定延（2005）は，スウェーデンにも空気をすするあいづちがあることや，中国では迷惑な気持ちをアピールするのに空気がすすられることがあることなどを指摘している。空気すすりとどのような行為が対応するかは，その言語を学ばなければ分からない。

しかし現実的には，ある言語文化において定型化したコミュニケーション行動がすべて言語行動とみなされ，言語研究の対象となるわけではないだろう。たとえば，「微笑む」などの表情は，文化固有性を持つコミュニケーション行動として社会心理学などにおいてさかんに論じられる（森下 2002）が，言語行動（ないしその周辺的行動）とみなされることはほとんどないように思われる。同様に，「相手の身体に触れる」，「拍手する」といった文化固有性のあるコミュニケーション行動も，通常，言語行動とはみなされないだろう。

しかし，微笑みや身体接触や拍手が言語行動とみなし得いわけでもないように思われる。「いらっしゃいませ」と微笑む。「あらやだー」と相手に触れる。「おめでとう」と拍手するなど，言語行動と不可分な形で一つのコミュニケーション行動を形成する場合も多くある。あるいは，携帯電話などのメールでは，「(^_^)」や「m(__)m」などの顔文字や絵文字（手のひらが動く拍手の絵文字などもある）などを駆使して，表情や動作に関する情報が補われている（井上・荻野・秋月 2007:59-61）。このことはわれわれのコミュニケーションにおいて，表情や動作が言語と不可分に結びついていることを示しているように思われる。また，「笑い」，「うなづき」，「のけぞり」，「つっかえ」，「目線」などの行動は，言語

行動（ないしそれに準ずるもの）として，取り上げられることもある[49]（羅 2008，金田 2008，定延・中川 2005，ザトラウスキー 2005 など）。今日，「いらっしゃいませー」と明るい調子で言った場合，その調子（イントネーションやポーズや声質）は，パラ言語（paralanguage）と呼ばれ，言語行動とみなされるのはもはや常識的だろう。しかし，「かつては，音声そのものは言語ではないから文法学で論ずべき問題ではない，とさえいわれ（音声文法研究会 1996，p. i）」ていたそうである。

大森荘蔵が，言語行動を「声振り」と呼び，「声は人の体の一部，人の身のうちなのである。だから声振ることは尻振りと同様身振りの一部なのである（大森 1981:83）」，「『体振り』『視振り』『声振り』は一体となって『身振り』として働く。…＜中略＞…その一体となった身振りから声振りだけをひきはがして分離することはできない（大森 1973:110）」と述べるように，言語行動と非言語行動の境界は決して自明ではない。

言語行動を定義するとは，地中に埋まった言語行動という宝石を掘り出すような作業ではない。むしろ，自分の目的に合わせて石を削り，言語行動という彫刻を作り出すような作業である。定延（1999:153）が「『言語とは何か？』という問いは，『『言語』という専門用語をどのように定義したら便利か？』という，便利さを追求した定義（学問上の取り決め）の問題ではないだろうか」と述べるように，言語行動の枠を定め，言語研究の対象を決めるのは，②の基準「それを『言語的』とみなすことが言語研究・教育において有益であること」である。①もその一つの典型的基準にすぎない。

仮に「フィラー的な空気すすり」を言語行動に含めるならば，その受け皿となるカテゴリーは，感動詞であり，その下位類として設定したフィラーであろう。本研究は，この措置は，日本語における音声コミュニケーションの実態を体系的に理解し，教育に役立てるという目的を果たす上で有益だとしても有害ではない考える。なぜなら，「話し手が何らかの情報処理的な心身行動を行っている最中に典型的に発話される他の文節から独立した形式」を整理できるからである。一方，この措置による文法理論への影響は，単に感動詞が一つ増えたというだけであり，従来の言語研究の成果を損なうような弊害は何もない。それゆえ，本節では，「フィラー的な空気すすり」はフィラーに含めるのが妥当だと結論する。

[49] もちろん，笑い声や目線には自然発生的な面もあるが，いつどんなふうに笑うのか，目線を向けるのか（意味）には文化固有的な面があるように思われる。

6.5 「と」問題

最後に，「えー（と)」・「うーん（と)」における「と」について考察する。6.2 節では内省のしやすさを理由に「えーと」と「うーん」を比較したが，現実の談話には，「えーと」の「と」が欠落した「えー」，「うーん」に「と」が付加した「うーんと」も観察される。

「えー」は，(6.46）のような改まったプレゼンテーションやスピーチにおいて頻繁に発話され，日常の会話でもしばしば発話される。

（6.46） えーっと，この，あの，スライドは，あの，えー，専門の方には子供騙しのような，え，絵ですけれども，えー，ま，最近の音声認識の，ま，現状と問題点を，ま，ちょっと，書いてみたものでございます。

（『日本語話し言葉コーパス』A11M0463，下線筆者）

逆に，「うーんと」は，改まったプレゼンテーションなどには生起しにくく，どちらかと言えばくだけた対話に生起しやすい。

（6.47） 01L きっと
02L この（D い）
03L （F んーっと）
04L にしゃんたって人が一番(D し(?た))(F あー)どうかな
05L （F んー)分かんないですね

（『日本語話し言葉コーパス』D02F0015，下線筆者）

本節では「えーと」，「うーんと」における「と」の不可が何を意味するのかを明らかにするために，まず，「と」の性質や効果を示唆する現象を５点指摘する。

第１に，「と」が付加するのは「えー」と「うーん」だけであり，その他のフィラー「あのー」，「そのー」，「そー」，「さー」，「まー」，「なんか」には付加しない[50]。

（6.48） ??あのーと／??そのーと／??そー（ですねー）っと／??さーっと／??まーっと
??なんかーっと

なぜ，「と」は「えー」と「うーん」にしか付加しないのだろうか。

第２に，「と」の有無は用法に影響する。たとえば，書き言葉などで「使われるフィラー」において，「うーん」は先述の（6.14）や（6.18）のような考え込み用法（それによって，

[50]「【シュ】っと」のように空気すすりの後に「と」が付加しているように見える場合がある。筆者を含む２名が，これは「空気すすり＋えっと」で，「え」の発音が不明瞭なケースだと答え，もう１名は「空気すすり＋と」なのか「空気すすり＋えっと／んと」なのかよく分からないという答えであった。筆者の内省もはっきりしないため，ここではこの問題についての判断は保留したい。

問題の難しさを暗示したり，苦言を呈するなどの表現効果が生じ得る）があるが，「うーんと」にそのような用法はない。

（6.49）　語学のカッコよさは，一言ではなかなか説明できない。??うーんと。

（6.50）??うーんと，といった感じ　☆☆☆★★

「うーんと」と言うと，その後に何か続けてしゃべりそうであり，そのまま黙り込むのには適さない。なぜだろうか。

第３に，「ですね」，「ね」などの末尾的成分が「えーと」，「うーんと」には付加し得るが「と」の付加していない「えー」，「うーん」に直接付くことはない[51]。

（6.51）　a.　えーと（です）ねー，うーんと（です）ねー

b.　??えー（です）ねー，??うーん（です）ねー

また，「だか『ら’あ，あたし『は’あ，イヤなの！」（＜『＞は音調の上昇を，＜’＞は下降を表す）のような「戻し付きの末尾上げ」イントネーション（定延 2005）は，「えーと」や「うーんと」には適用できるが，「と」がない「えー」や「うーん」には適用できない。定延（2005）によるとこのイントネーションは，「『自分がしゃべることばはこれで終わりだ』という終了のきもちとむすびついた【末尾上げ】」と次の音節の発音に備える【戻し】からなる。なぜ，末尾的成分が「えーと」，「うーんと」には適用し得るのに対し，「と」の付加していない「えー」，「うーん」には適用できないのだろうか。

第４に，「と」の有無は印象に影響する。たとえば，「えーと」・「うーんと」は「えー」・「うーん」に比べて，子供っぽい印象を伴う。たとえば，典型的な『子供』っぽいキャラクタ（たとえば，「クレヨンしんちゃん」のしんちゃん）と『大人』っぽいキャラクタ（たとえば，「サザエさん」の波平）を想像してみると，『子供』キャラは「えー」を発しにくく，『大人』キャラは「うーんと」を発しにくいように思われる。もちろん，現実には，「えー」を発する子供や「うーんと」を発する大人はいるだろう。しかし，「と」が付いた方がイメージとして相対的に子供っぽくなるとは言えるだろう。なぜ「と」の付加が子供っぽさを生むのだろうか。

第５に，「と」の付加されやすさは，談話の種類（スピーチ型か対話型か）に影響を受ける。次の【表 6.1】，【表 6.2】は，『CSJ』の学会講演（スピーチ型）と学会講演についてのインタビュー（対話型，以下，「INT 学会」）について 10 名の話者が発した「えーと」と

[51] 先述のように「うーんと」は用例が少なく，内省も利きにくいため，筆者は「うーんとですねー」に若干違和感がある。しかし，それは「えーですねー」や「うーんですねー」のような不自然さとは異なる。また，筆者以外の２名のインフォーマントは「うーんとですねー」を自然だと答えた。

「えー」の数を数えたものである。表の最上段（ID 欄）の数字は話者番号を，アルファベットは話者の性別（M は男性，F は女性）を表す[52]。

【表 6.1】　学会発表と学会ＩＮＴにおける「えー」の生起数

ID	8	19	373	423	463	471	514	674	685	1185	
	M	F	M	M	F	M	F	F	M	F	合計
学会講演	97	168	388	48	12	134	171	62	133	108	1321
INT 学会	7	3	54	26	1	10	0	24	20	1	146

【表 6.2】　学会発表と学会ＩＮＴにおける「えーと」の生起数

ID	8	19	373	423	463	471	514	674	685	1185	
	M	F	M	M	F	M	F	F	M	F	合計
学会講演	1	14	28	12	6	3	37	2	36	13	152
INT 学会	1	1	6	24	17	15	6	3	1	3	77

【表 6.1】,【表 6.2】を見ると，学会発表では「えー」と「えーと」の生起数の比が，およそ 9 対 1（1321 対 152）なのに対し，学会 INT では，およそ 2 対 1（146 対 77）である。この結果から，学会発表では，「と」のない「えー」が圧倒的に発話されやすく，学会 INT では，相対的に「と」の付いた「えーと」も発話されやすくなると言えるだろう。従来，「えー」と「えーと」の関係は改まり度の違いとして説明され（Watanabe 2009 など），「えー」は改まっている，「えーと」はくだけているとされてきた。この説明は必ずしも間違っていないのかもしれないが，筆者の印象では「INT 学会」は，必ずしもくだけているとは言い切れず，なぜ，ここまで極端な分布の違いが生じのかを説明するには「スピーチ型か対話型か」という談話の種類も要因として検討すべきだと思われる。

以上，「えー（と）」，「うーん（と）」における「と」に関する５つの問題を説明するために，本節では「と」は「独りで行う作業の区切り」に対応するという仮説を提案する。

[52] スピーチ型の資料である学会発表における「えー」と「えーと」は大半が「言いよどみ」的な「えー」であるため，『CSJ』の（F）タグを用いた機械的な検索によって集計したが，対話型の学会 INT には，聞き返しの「え？」や応答・あいづちの「えぇ」が多数含まれ，機械的な検索は危険だと判断し，「言いよどみ」，「考え中」といった筆者の印象に頼って集計した。なお，インタビュイー（R）の発する「えー」，「えーと」のみを集計し，インタビュワー（L）の発話は集計から外している。

この仮説では，「えーと」や「んーと」における「と」を，重いものを持ち上げる際の「よいしょっと」の「と」や，選択する際の「私，これにしよーっと」の「と」，アドレス帳で田中の住所を探して「田中…，田中…と」と言う際の「と」，作業終結宣言の「おーしまいっと」の「と」，独り歌を打ち切る際の「みーやーこーのせーいーほーぉくー♪，わせだーのもりにーぃー，っと♪」の「と」など同じものであると仮定している。これらの「と」が付加し得る発話に共通しているのは，いかにも独り言的であり，聞き手に向けられていないことである。たとえば，独り言で「私，これにしよーっと」とは言えるが，「あなた，これにしなさいっと」とは言えない。

先ほど「と」が「あのー」，「そのー」，「そー」，「まー」，「なんか」に付加しないのはなぜかという問題を提起した。それは，「あのー」などの形式が単独で独り言で発することはできないからであると説明できる。たとえば，図書館で一人本を探しながら「えー」と言ったり，論文執筆中に「うーん」と考え込むことはあり得るが，独り言で「あのー」や「まあ」だけを発することはない。

また，「と」が作業の区切りに対応するとは，言い換えれば，「と」は，話し手の「ひと仕事終えたという意識」に対応するということである。たとえば，（6.52）のように重いものを持ち上げるという作業終了時に発話可能になる。

（6.52）　［重いものを上にある棚に持ち上げる］

a.　よいしょっ。

b.　よいしょっ，と。

一方，次の（6.53）のように作業が継続中の場合，通常「と」を付けることはできない。

（6.53）　［重いものを隣の部屋まで持っていく］

a. よいしょっ，よいしょっ，よいしょっ…

b.??よいしょっと，よいしょっと，よいしょっと…。

（6.53b）が可能になるのは，「よいしょっと」で一歩進み，そこで【フー】と一息つき，さらに「よいしょっと」でもう一歩進むというような場合であり，一息入れずに一気に持っていく場合は自然ではない。

これに従い，「さー」に「と」は付加できない理由は次のように説明される。「さー」において，話し手が取り組んでいる課題は基本的には解決しない。それゆえ，「ひと仕事終えた意識」が生じにくい。さらに，談話の種類にもよるが，「えーと」はかなり頻繁に発話され，用例の発見が容易なのに対し，「うーんと」は数が少なく，用例を見つけるのはそれほ

ど簡単ではない（一方，「うーん」は容易である）。筆者のこの印象が正しければ，この分布は，「えーと」は見通しの明るい課題解決行動に対応しているため，結果として「ひと仕事終える」確率が高いのに対し，解決の見通しが必ずしも明るくない「うーん」は，結果として結果として「ひと仕事終える」確率が低いからだと説明できるだろう。

また，先ほど，「うーん…」と発して黙り込み，考え込むのは自然だが，「うーんと…」で黙り込むのはあまり自然でないことを指摘したが，これも同様に説明できる。つまり，「と」によって「ひと仕事終えた意識」を表明した以上，問題に対して何らかの答えが出たことが予想され，それを言わずに黙っているという想定がしにくいからである。もちろん，現実の話し言葉では，さまざまな事情で「えーと……」，「うーんと…」の後に言葉を発することなく黙り込むということがないわけではないだろう。しかし，少なくとも印象の違いとして上の記述は間違っていないように思われる。

冨樫（2005:91）は，次の（6.54）を挙げ，「えーと」と「えー」における「と」の効果について「『と』が付いたほうが，検索処理後の確定というニュアンスが強い。…＜中略＞…検索標示後の情報『3579』を話し手が強く確定しているか否かが『と』の有無に関わっている」とコメントしている。，

（6.54）　一郎：1234 足す 2345 は？

次郎：{ えー／えーと }，3579。

この記述は，情報を「強く確定する」という部分の意味があまりはっきりしないが[53]，「えー」・「うーん」が「課題解決行動が続く感じ」，「えーと」・「うーんと」が「区切る感じ」という本節の立場に近い記述と見ることができるように思われる。

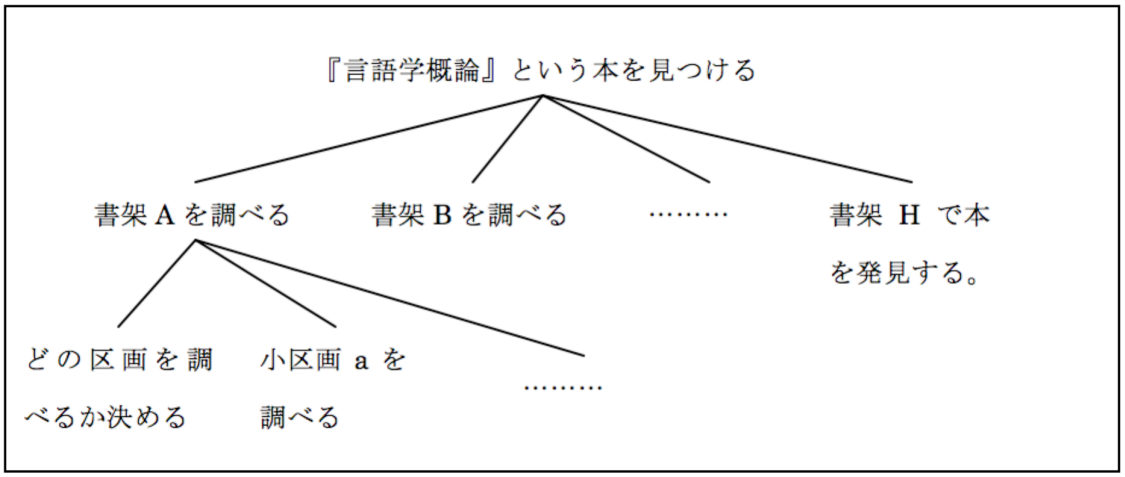
また，「ですね」，「ね」，「戻し付きの末尾上げ」などの末尾的成分が「えーと」，「うーんと」には現れ得るが，「と」の付加していない「えー」，「うーん」には現れないというのも，話し手が「と」の位置を一つの区切りとみなしているかどうかということで説明できるように思われる。

ただし，「ひと仕事終えた意識」は，必ずしも，当該課題全体の解決を意味するわけではない。たとえば，図書館で『言語学概論』という本を探す際に発せられる「えーと」は，本の発見を必ずしも意味しない。これは，『言語学概論』捜索という作業は，次の【図 6.1】のような書架 A の捜索や書架 A の一区画 a の捜索のような下位作業に分解でき，そうした

[53] たとえば，「強く確定する」の対概念は，「弱く確定する」か，ただ「確定する」か，「確定しない」か。あるいは，単に「確定する」のと「強く確定する」のはどう異なるのかといった点が不明である。

下位作業も一つの課題解決行動とみなせ，その区切りにも「えーと」が対応し得ると考えることで説明できるだろう。たとえば，小区画 a を調べる作業を「えー……と，ないなぁ」で区切って，続けて区画 b に捜索に移って再び「えー…，ああ，あったあった。」などと発するということがあり得る。

【図 6.1】　課題解決行動の階層性



このように課題解決行動を下位行動に分解できるということは，どこまでを作業の区切りとみなすかにはある程度の任意性があるということである。この「ひと仕事のみなし」の任意性が，「えーと」，「うーんと」における「と」の「子供っぽさ」の発生源だと考えられる。たとえば，重い荷物を 10 メートル先の隣の部屋に持っていくという作業を考えてみよう。力のある大人なら，隣の部屋への到達をひと仕事とみなし，隣の部屋に到着し荷物を置いた時点で「と」を発し，一息つくだろう。

（6.55）　よいしょっ，よいしょっ，よいしょっ，……，よいしょっと。【フー】。

他方，一度に 30 センチしか進めない力のない子供であれば，30 センチ進むことをひと仕事とみなし，その度に「と」を発し一息つくと想定することができる。

（6.56）　よいしょっと。【フー】。よいしょっと。【フー】。…

これと同じように，「と」を連発することは，小さな作業を「ひと仕事」とみなしている（それゆえ，作業者のキャパシティーが小さい）ように解釈され，それが「子供っぽさ」の印象を生むのではないだろうか。

また，スピーチ型の学会発表では「えー」が出現しやすいのは，事前の準備が前提とさ

れるスピーチ型の談話は，遠いゴールが意識されやすいからと説明できるように思われる。すなわち，スピーチ全体の終了やひとまとまりの内容を話し終えること（隣の部屋まで荷物を運搬すること）が一仕事の終わりとみなされやすく，たとえば，単語を思い出す，文を作るといった小さな課題（荷物を持って一歩進むこと）は一仕事とはみなされにくいのだと説明できる。

6.6　まとめ

先行研究において，個々のフィラーの差異は，「言語形式製作」，「検索」，「計算」といった話し手の心内行動の違いに対応づけられ，説明されてきた。しかし本研究では，「えー（と）」，「うーん（と）」，「そー（ですねー）」【シュー】の使い分けにおいては，そのような「どのような心内行動を行うか」という What の側面だけではなく，「どのような見通しを持って課題に取り組むか」，「どのような立場で課題に取り組むか」といった「課題への取り組み方」，言い換えれば， How の側面もまた重要であることが明らかにした。

具体的には「えーと」は話し手が今取り組んでいる課題は解決できそうだと思っている時に，「うーん」は話し手が今取り組んでいる課題は解決できないかもしれないと思っている時に，「そーですねー」は，対人コミュニケーションにおいて自分に向けられた問いを解決するために選択を行っている時に，フィラー的空気すすりは話し手が責任者として課題に取り組む際にそれぞれ発話されることを明らかにした。また「えーと」，「うーんと」における「と」は「独りで行う作業の区切り」に対応することを明らかにした。

今後の課題は，本研究で提示した仮説を敷衍し，「えー（と）」，「うーん（と）」，「そー（ですねー）」，【シュー】のコミュニケーション上の効果の差異を実証することである。たとえば，課題の解決の見通しが明るいことを投射する「えーと」はターンの維持に利用されやすく，逆に，解決の見通しが暗いことを投射する「うーん」は「ターンの譲渡」に利用されやすいといった違いが予測される。こうした予測を実際の談話資料において検証していきたい。

第７章　「なんか」とエビデンシャリティ

以上の論では，暫定的に「なんか」をフィラーと呼んできたが，本章では，「なんか」が本当にフィラーと呼びうるのかを検討したい。

「なんか」の扱いは，先行研究において一致していない。1.2 節で述べたように，「なんか」を①すべて副詞とする立場（加藤重広 2006 など），②すべて感動詞とする立場（山根 2002 など），③副詞と感動詞が混在しているとする立場（田窪 2005 など）がある。しかし，いずれの立場においてもその根拠が明確には示されていない。したがって，①～③のどの立場が妥当なのかを検討する必要がある。

本章では，まず，作業仮説的に「なんか」を副詞とみなし，その意味や文法的性質を明確にしていく。というのも，もし現象の説明において，この作業仮説が問題なく維持できるならば，①の立場が妥当ということになるし，逆に，全く維持できないのであれば，②の立場が妥当ということになる。また，部分的に説明できない現象が残るのであれば③の立場を検討するという形で決着をつけることができると思われるからである。

本章は以下のように構成されている。まず 7.1 節では，考察対象を画定する。7.2 節では，「なんか」に関する先行研究の問題点を指摘する。7.3 節では，副詞「なんか」の意味と生起環境を説明する上で有効な仮説として「エビデンシャル仮説」を提出し，その妥当性を主張する。7.4 節では，副詞「なんか」の韻律に関する問題を説明するために，「反復認知仮説」を提出し，その有効性を論じる。7.5 節では，先行研究にしばしば見られる「なんか」のフィラー化という説の当否を検討する。最後に 7.6 節では，本章の結論をまとめる。

なお，本章は，大工原（2009）に加筆・修正したものである。

7.1　考察対象

本章で考察対象とするのは，川上（1991）が副詞的用法と呼ぶ，次の（7.1）のような「なんか」である。（7.2）のような不定代名詞的用法，および，（7.3）のようなとりたて詞（副助詞，後置詞）的用法は考察対象に含まない。

（7.1）　副詞的用法

a.　<u>なんか</u>これおいしそうだね。

b.　<u>なんか</u>責任重大だなー。

（7.2）　不定代名詞的用法（≒something, someone）

a.　妹が何か（を）食べていた。

b.　なんかおいしいものが食べたい。

（7.3）　とりたて詞的用法（≒など）

a.　あんたなんか嫌い。

b.　野球のチケットならコンビニなんかでも売ってますよ。

（7.2b）の「なんかおいしいもの」のような不定代名詞と名詞の並列用法は，（とりわけ実例において）副詞的用法と混同されやすいため注意を要する。本研究が副詞的とみなす「なんか」は，「特定できないモノ」（おいしい何か）を表す不定代名詞ではなく，英語に訳した場合，”something”や”someone”にならないことが一つの認定の基準になる。

7.2　先行研究とその問題点

「なんか」の用法に関する先行研究（森川 1991，川上 1991，1992，鈴木 2000，エメット 2001）は，多くが談話分析的視点からなされており，その成果は例えば，「意見を主張することに伴う責任を軽減（鈴木 2000:70）」する，「控えめな態度を示す（エメット 2001:209）」，「間つなぎの言葉（川上 1992:80）」といった表現効果の記述に集中している。もちろん，こうした分析は必要であり重要であるだろう。しかし，こうした記述だけでは，「なんか」の特性を捉える上で十分でないように思われる。例えば，「ぼかす」，「やわらげる（ヘッジ）」，「丁寧にする」，「間をつなぐ」といった記述は，「まあ」や「ちょっと」などの他の形式の説明においてもしばしば持ち出されており，これらの形式間の意味や生起環境の相違を明らかにしてくれない。それゆえ，こうした大まかな表現効果の記述から一歩進んで，各形式の特性を明らかにする必要があるように思われる。

とりわけ，先行研究では，「なんか」の構文・文法レベルの分析が十分ではなく，少なくとも，以下の 2.1 から 2.4 の 4 つの問題が解決されていない。以下，それぞれの事例を検討する。

7.2.1　「なんか雨降ってきたよ」の「なんか」はどんな意味か？

先行研究では，「なんか」は，「そうだ」，「らしい」など非断定的な文末表現と共起し，命題の真実性に対する話し手の確信度の低さを表すとされる（川上 1992 など）。この説に従えば，次の（7.4）の「なんか」は，本当に＜これがおいしい＞のかどうか確信できていない，不確かだという話し手の気持ちに対応することになる。

（7.4）a.　なんかこれおいしそうだよ。

b.　なんかこれおいしいらしいよ。

しかし，「なんか」は，次のように断定的な文末表現とも自然に共起する。

（7.5）　なんかこれすっごいおいしいよ。

（7.6）　なんか雨降ってきたよ。

（7.5）は，話し手が食べ物をほおばっている最中でも発話でき，（7.6）は降雨を前にしての発話と捉えられる。このようなケースで命題の真偽が不確かだとは考えにくい。では，「なんか」はどのような意味を表すのだろうか？

この問題に対する先行研究の解答は，「なんか」が断定的な文末表現と共起した場合，「当該事態は認知できるが，その背後にある根拠・理由・意図などがわからない（川上 1992:77）」ことを表すというものである。川上は，（7.6）の「なんか」は，ニュースで雨が降るとは言っていなかったにも関わらず，突然雨が降ってきたという状況で，「これはいったいどういうことなのか」という気持ちで発せられると説明している[54]。しかし，この説にも疑問が残る。例えば，ニュースで「夕方から雨が降る」という予報を見た人が，夕方になってから空模様を調べて，次のように発話しても特に不自然ではないだろう。

（7.7）a.　なんかいよいよ降ってきたね。

b.　なんかやっぱり雨降ってきたよ。

この場合，「いよいよ」や「やっぱり」と共起していることからも分かるように，話し手は降雨を予想通りの事態として捉えている。また，この「なんか」は，原因・理由不明を表す「どういうわけか」や「なぜか」ではパラフレーズしがたいだろう。では，（7.7）の「なんか」はどのような意味を表すのだろうか？

7.2.2　「なんか明日は雨が降るだろう」はなぜ不自然か？

「なんか」が非断定的な文末表現と共起し，確信度の低さを表すという説明自体にも疑問が残る。推量の文末表現「だろう」は，次の（7.8）のように，副詞「たぶん」と共起して命題の真実性への確信度の低さを表すことができるが，「なんか」とはそもそも共起し得ない。これはなぜだろうか？

（7.8）a.　たぶん明日は雨が降るだろう。

[54] この川上の説明では，「事態の原因・理由の不確かさ」と「事態の意外性」が混同されている点にも注意が必要だが，ここでは立ち入らない。

b.??なんか明日は雨が降るだろう。

7.2.3 「なんかー，窓を開けてください」はなぜ不自然か？

「なんか」はしばしば単なる「間つなぎ」（川上 1992:78）として発せられるとされる。例えば，鈴木（2000:74）は，「なんか」には，「言いたいことが頭に浮かんでいるにも関わらず適切な言葉がすぐに出てこないときなどにみられる，つなぎの言葉（fillers）」としての用法があると記述している。またエメット（2001:215）は，フィラー「あのー」との類似性を指摘している。

だが，こうした記述にも問題が残る。もし，「なんか」が「あのー」のように，言葉を探すためだけに使われているのであれば，なぜ次の（7.9）の「窓を開けていただけますでしょうか」のような，いわゆる「行為遂行的発話」（performative utterance）と共起し得ないのかという疑問が残る。

（7.9）a. ??なんかー，窓を開けていただけますでしょうか。

b. あのー，窓を開けていただけますでしょうか。

7.2.4 特殊な韻律の「『なーん’かうさんくさいなー」はどんな意味か？

「なんか」はしばしば，次の（7.10a）のように，「なん」の部分が極端に高く発音されたり，高いまま引き伸ばされることがある。（7.10b）は通常の発音の「なんか」と比較されたい（以下，通常の音調上昇を＜「＞で，極端な音調上昇を＜『＞で，音調の下降位置を＜’＞で表すことにする）。

（7.10）a. 『な（ー）ん’かうさんくさいなー。

b. 「な’んかうさんくさいなー。

興味深いのは，この韻律の生起が自由ではないことである。たとえば，（7.11）のように，「雨降ってる」という文は，通常の音調の「なんか」とは自然に共起するが，特殊な韻律の「なーんか」とは共起しない。では，この韻律はどのような意味で，またどのような環境で生起するのだろうか？

（7.11）a.?? 『なーん’か雨降ってるよ。

b. 「な’んか雨降ってるよ。

以下，これらの問題に解答しながら，「なんか」の特質を明らかにする。

7.3　エビデンシャル仮説

本節では，通常の発音の「なんか」の意味と生起環境を説明するための仮説を提出する。それは，「なんか」は「エビデンシャル」（evidential）の一種であるというものである。エビデンシャルとは，「話し手がいかにして命題情報を得たか」を特定する言語形式であり，現代日本語（共通語）では，「～そうだ」，「～らしい」などの文末表現がその典型である。たとえば，文「彼は結婚したそうだ」において文末表現「そうだ」は＜彼が結婚した＞という命題情報が伝聞によって得られたことを特定している[55]。

また，文末形式以外にもエビデンシャルは存在し，森本（1994）は副詞「どうも」がエビデンシャルであることを明らかにしている。実は，後で検討するように，「なんか」と「どうも」は生起環境が類似しており，エビデンシャルとしての「なんか」の性格を浮き彫りにするには，「どうも」と対照するのが有効である。そこで，以下，両者を対照しながら論じることにする。

7.3.1　前提：認知者と環境とのインタラクション

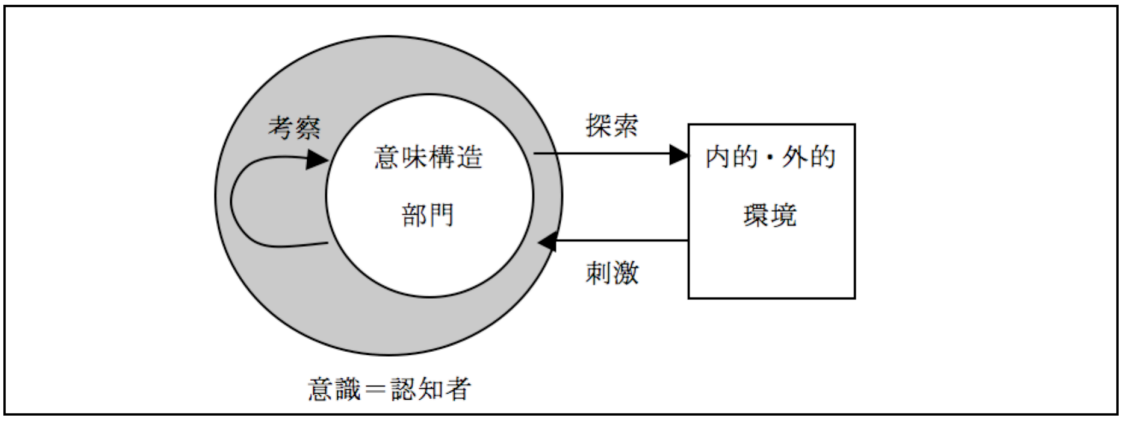
「なんか」の意味を説明するための前提として，「認知者と環境とのインタラクション」という観点を導入しておきたい。定延（2002）は，認知者と環境とのインタラクションが言語表現に大きく影響することを示し，言語研究における「能動的な認知観」の意義を明らかにしている。一般に，認知者が心内に情報を得ることを「認知」というが，能動的認知観において，認知とは，認知者が環境から受動的・一方的に情報を受け取ることではなく，環境とのインタラクション（働きかけ合い）の中で能動的に情報を作り出すことであるとされる[56]。この認知観に基づき，本稿では，認知過程を次の【図 7.1】のようにモデル化する。これは【図 4.1】において単純に「認知」と呼んだものをより詳細化したものだと

[55] エビデンシャルはしばしば，命題の真実性に対する確信度の低さを表すように誤解されるが，エビデンシャルが第一義的に表すのは「いかにしてその命題情報を得たか」であり，確信度との結びつきはあくまで間接的・派生的なものにすぎない。むしろ「エビデンシャルは，その情報をいかにして得たかを特定することで，命題の真実性を根拠付ける（Foley and Van Valin 1984:218)」と捉えるのが適当である。例えば，命題＜彼が結婚した＞を主張する場合，「何を根拠にそう主張できるのか」が聞き手の側から問われ得る。そうした潜在的な問いに先回りし，「だって，そう聞いたんだもの」と情報源を特定しておくことで，主張を根拠付けるのである。

[56] いわゆる認知言語学（cognitive linguistics）も，認知者が環境を主体的に解釈することを重視する点で，ここで言う「能動的認知観」を共有していると言える。例えば，認知者が環境のどこに注意を向けるかが言語表現に反映される（図地反転）ことなどが知られている（Talmy 1983)。しかし，今のところ，認知言語学的枠組みにおける研究のほとんどは，スキーマ（記号）の形成や構造の分析に集中しており，「探索」のような日常的なインタラクションと言語表現との関わりにはあまり注意が向いていない（この点については，定延 2002 を参照)。

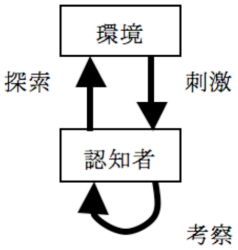
理解されたい。

【図 7.1】　認知過程のモデル



ここで，認知者から環境に向かう右向きの矢印は，認知者が未知の環境について，どんな様子なのか調べる行動を指し，これを「探索」と呼ぶことにする。一方，環境から認知者に向かう左向きの矢印は，環境から認知者への情報の流れを表し，これを「刺激」と呼ぶことにする。また，認知者を始点とした再帰的な矢印は，判断・推論などの思考活動による高次の情報の作り出しを表すものとし，これを「考察」と呼ぶことにする。

なお，大工原（2009）において提示した以下の図は【図 7.1】を単純化したものである。



7.3.2　副詞「なんか」・「どうも」の意味

7.3.2.1　「なんか」の意味

「なんか」は，「今語られる命題情報は，探索によって得られたものだ」ということを表すエビデンシャルで，おおむね「環境の様子を調べて，＜命題情報＞を得た」のようにパラフレーズできる。

例えば，次の（7.12）は，認知者がカーテンを開けるなどして空模様はどうであるのかを調べて，情報＜雨が降っている＞を得たという意味になる。

（7.12）　なんか雨降っているよ。

同様に，次の（7.13）はいずれも認知者が「新製品のチョコポテトはどんな味なのか」を探索した結果を表している。

（7.13）a.　なんかこれおいしいよ。

b.　なんかこれおいしそうだよ。

c.　なんかこれおいしいらしいよ。

（7.13）a～c の各文は，新発売のお菓子の味を調べるための探索方法において異なり，（7.13a）は実際に味わった結果を，（7.13b）は見た目を観察した結果を，（7.13c）は雑誌などで調べた結果を，それぞれ報告している。

また，次の（7.14）の小説の例は，２人の女性が喫茶店の壁にかけられた絵画を眺めながら話している場面で，絵がどんな様子なのかを述べる文の冒頭に「なんか」が出現していることが確認される。

（7.14）　「でも，この絵ってさァ，なんか気味わるいね」「そおう？」「女の人がじーっと花を見てるけど，目つきが変よ。花の下に死体が埋めてあるんじゃない。それで見つめてるのよ」＜…中略…＞「うーん。言われてみれば，なんか，変ね。異常な目つきで見てるもん。見てるのも花じゃなく，その下の土みたい」（阿刀田高『鈍色の歳時記』[57]，2002 年，傍線引用者）

本稿が，「なんか」の意味の規定に「探索」が不可欠だと考える根拠は２つある。第１に，次の（7.15）のように，環境からの「刺激」が一方的で，認知者が探索を行うまでもなく否応なしに知覚される情報の表現に「なんか」が付加できないことである。

（7.15）??なんか痛っ！

??なんか熱っ！

第２に，「どうなっているのか調べてみよう」という「探索意識」（定延 2002）の想定しやすさに応じて，「なんか」の自然さが変化することである。先述の通り，「夕方から雨が降る」という天気予報を見た人が，あとで窓を開けて空模様を調べて，次のように発話するのは自然である。

（7.16）　なんかやっぱり雨降ってきたよ。（＝（7.7））

これは「空模様を調べてみたところ，予報通り雨が降ってきた」という解釈が自然にできるからである。一方，例えば，駅前で待ち合わせをし，約束通りやってきた友人を見て

[57] 「現代日本語書き言葉コーパス」モニター公開データ（2008 年度版）から引用。

次のように発話するのはあまり自然ではない。

（7.17）??なんかやっぱり田中来たよ。

これは，空模様は，気まぐれであり，探索してみなければ結局のところ，どうなっているのか分からないという意味で探索意識を活性化しやすいのに対し，人の行動は約束通りなされる可能性が高く，探索意識を活性化しにくいためである。ただし，（7.17）も探索意識が活性化しやすい文脈（田中は平素から約束を守らないことが多いとか，約束の時間を過ぎてもいっこうに田中が現れない等）を想定すれば自然さが増す。

7.3.2.2　「どうも」の意味

一方，「どうも」は「今語られる命題情報は，考察によって得られたものだ」ということを表すエビデンシャルで，おおむね「環境の様子から考えて，＜命題情報＞と判断する」のようにパラフレーズできる。

例えば，次の（7.18）は，「認知者が彼の様子（指輪をしていない，身なりがだらしない等）から考えて，＜彼は独身だ＞と判断した」という意味になる。

（7.18）　どうも彼は独身のようだ。

7.3.3　副詞「なんか」・「どうも」の生起環境

本節では，前節で示した仮説が「なんか」・「どうも」の生起環境を予測・説明する上で有効に働くことを示す。まず，「なんか」・「どうも」の生起環境はエビデンシャル一般の性質からおおまかに予測することができる。

Givón（1982:24）は，エビデンシャルとの関係に応じて命題を次の３種に分類している（以下，引用者による要約）。

(a)　当然のこと，分かりきったことを語る命題において，エビデンシャルによる根拠付けは必要ない。

(b)　それなりの自信を持って語られた命題は，「なぜそう主張できるのか」をエビデンシャルによって根拠づける必要がある。

(c)　疑問を持って仮説として提示された命題は，そもそも，真実性が問題にならず，エビデンシャルは付加できない。

すなわち，「なんか」・「どうも」が共起するのは，(b) のタイプの命題であり，(a) や (c) の命題とは共起しないことが予測される。

7.3.3.1　経験命題

前節（b）のタイプの命題を仮に「経験命題」と呼ぶことにする。「なんか」・「どうも」はともに経験命題と共起するが，それぞれの意味の違いに応じて，生起環境にも違いが見られる。以下，具体的に検証していく。

7.3.3.1.1　視聴覚命題

経験命題のうち，視覚または聴覚によって得られた命題を仮に「視聴覚命題」と呼ぶことにする。視聴覚命題は「なんか」と共起するが，「どうも」とはしない。これは，視覚によって得た情報，聴覚によって得た情報を言うのに高度な考察は必要とされないからである。

（7.19）視覚命題（降雨を見ながらの発話）

a.　なんか雨が降ってきたよ。

b.??どうも雨が降ってきたよ。

（7.20）聴覚命題（音を聞きながらの発話）

a.　なんか隣の部屋でゴソゴソいってるなぁ。

b.??どうも隣の部屋でゴソゴソいってるなぁ。

（7.21）過去の視聴覚命題

a.　昨日ね，なんか急に雨降ってきたのよー。

b.??昨日ね，どうも急に雨が降ってきのよー。

さらに，次の（7.22）のような直接引用的な伝聞も，話し手の判断・推論を加えずに聴覚情報を言うという意味において視聴覚命題に含められる。

（7.22）直接引用的伝聞

a.　なんかアメリカでは今この歌がはやっているそうだ。

b.??どうもアメリカでは今この歌がはやっているそうだ。

7.3.3.1.2　体感命題

経験命題のうち，嗅覚，触覚，味覚，その他の感覚によって得た命題を，仮に「体感命題」と呼ぶことにする。「なんか」はほぼ全ての体感命題と共起するが，「どうも」は体感命題の一部としか共起しない。

まず，「なんか」と「どうも」がともに自然な場合を見てみよう。

（7.23）　a.　なんか気分が悪いなー。

b.　どうも気分が悪いなー。

（7.24）　a.　なんかこの音楽は退屈だな。

b.　どうもこの音楽は退屈だな。

一方，次の（7.25）～（7.27）のように，体感の度合いが大きく，高度な判断を経ずに瞬間的・直感的に得られる命題は「どうも」と共起しない。

（7.25）a.　なんかこれすっごい辛いよ。

b.??どうもこれすっごい辛いよ。

（7.26）a.　なんか今チクッとしたよ。

b.??どうも今チクッとしたよ。

（7.27）a.　なんかがっかりだなー。

b.??どうもがっかりだなー。

こうした分布の違いは，「なんか」が直感を表し得るのに対し，「どうも」は，ある程度時間をかけて考察した上での判断を表すことに由来する[58]。

7.3.3.1.3　推定命題

経験命題のうち，知覚情報からの帰納的推論（アブダクション）によって得られた命題を「推定命題」と呼ぶことにする。推定命題は，シソウダ・ラシイ・ヨウダ・ミタイダ・ッポイ構文が典型である。「どうも」は，ほぼ全ての推定命題と共起するが，「なんか」と推定命題の相性はあまりよくない。

（7.28）［花子が床のコーヒーを拭いているのを見て］（簡単な推定）

a.　なんかコーヒーこぼしちゃったみたいだね。

b.？どうもコーヒーこぼしちゃったみたいだね。[59]

（7.29）［庭の小さな水たまりを見て］（やや高度な推定）

---

[58] 小池（2006）も「なんか」と「どうも」の違いを「直感性」によって説明している。また，小池は「なんか」の類義表現「なんだか」，「なんとなく」について，「なんだか」は「直感性」において「なんか」より弱く，「なんとなく」は「認識の度合い」において「なんだか」よりも弱いと記述している。これを本稿のモデルに即して言えば，「なんだか」は「なんか」より認知主体の「考察」の関与度が高い（「どうも」よりは低い），「なんとなく」は環境からの「刺激」が「なんか」よりも少ないということになるだろう。したがって，「なんだか」は「なんか」よりも推定命題と共起しやすいが視聴覚命題とは共起せず，「なんとなく」は基本的に微妙な体感を表す命題としか共起しないという分布の違いが生じる。

[59] ここでの不自然さは語用論的なものであり，文自体が非文というわけではない。たとえば，服のシミから原因を推定するというようなやや高度な推定では自然さが増す。

a.？なんか昨日雨が降ったらしいな。

b.　どうも昨日雨が降ったらしいな。

（7.30）［パソコンの不調の具合を調べて］（かなり高度な推定）

a.??なんかマザーボードに不具合があるようですね。

b.　どうもマザーボードに不具合があるようですね。

「なんか」は（7.28）のような簡単な推定とは共起するが，（7.29）や（7.30）のように推定が高度であればあるほど，すなわち，認知過程における考察の関与が大きければ大きいほど推定命題と共起しにくくなる[60]。

また，次の（7.31）のような伝聞のラシイは，「なんか」と共起した場合，聞いて得た情報に話し手の判断を加えずに言うという直接引用的解釈がしやすく，「どうも」の場合，聞いた情報をもとに話し手が判断したという間接引用的解釈がしやすい。

（7.31）a.　なんか中国ではこの歌がはやっているらしいよ。

b.　どうも中国ではこの歌がはやっているらしいよ。

7.3.3.2　自明の命題

次に Givón（1982）が「エビデンシャルは必要ない」とする（a）のタイプ（以下，「自明の命題」と呼ぶ）について見ていこう。このタイプの典型は，次の（7.32）のような，いわゆるア・プリオリな命題である。

（7.32）a.｛ ??なんか／??どうも ｝独身者とは結婚していない人のことだ。

b.｛ ??なんか／??どうも ｝１足す１は２だ。

また，「なんか」・「どうも」は，話し手自身の意志的行為およびその結果を表す命題とも共起しない。これらの命題が真であることは行為者自身にとって自明であり，わざわざ探索したり考察したりする必要がないからである。

（7.33）a.｛ ??なんか／??どうも ｝（私は）今，三宮で買い物をしている.

b.｛ ??なんか／??どうも ｝（私は）昨日，三宮で買い物をした。

---

[60] これに関連して興味深いのは，ヨウダ・ソウダ・ラシイ等の構文は，文脈や音声を考慮しなければ，「なんか」と共起した場合，推定よりも様態や比況（体感命題）の解釈がしやすく，逆に「どうも」の場合は推定の解釈がしやすいことである。

（例）　a.　なんかあの人男らしいね。（たくましい→様態）

b.　どうもあの人男らしいね。（女性に見えるけど実は男性→推定）

（例）　a.　なんかそれダイヤモンドみたいだね。（まるでダイヤのようだ→比況）

b.　どうもそれダイヤモンドみたいだね。（ガラス玉でなくダイヤ→推定）

さらに次の（7.34），（7.35）のように，すでに一般的事実とみなし得るものや話し手が熟知した環境を語る命題も自明の命題に含めることができる。

（7.34）｛ ??なんか／??どうも ｝地球は丸い。

（7.35）｛ ??なんか／??どうも ｝うちの庭には柳の木がある。

7.3.3.3　疑問・仮説

次に Givón（1982）が「命題の真実性が問題にならず，エビデンシャルは付加できない」とする（c）のタイプ（以下，「疑問・仮説」と呼ぶ）を見てみよう。その典型は，次の（7.36）のような疑問文である[61]。

（7.36）a.｛??なんか／??どうも ｝三宮に東急ハンズはありますか？

b.｛??なんか／??どうも ｝北海道では雪が降っていますか？

また，「だろう」や「でしょう」といった想像形でマークされる推量命題も「なんか」・「どうも」と共起しない[62]。

（7.37）｛ ??なんか／??どうも ｝明日は雨が降るだろう。

こうした結果は，疑問を持って仮説として提示された命題はエビデンシャルが付加できないという Givón（1982）の説に合致するものである。

7.3.3.4　行為遂行的発話

Givón（1982）の分類において問題とされているのは，命題を陳述する発話，いわゆる，「事実確認的(constative)」発話に限られていた。では，もう一方の発話の類型である「行為遂行的(performative)」発話と「なんか」・「どうも」の関係はどうなっているのだろうか。実は，行為遂行的発話にエビデンシャルが付加しないことは定義上明らかである。なぜなら，行為遂行的発話は，依頼や約束などを行う発話であって，真偽が問題になる命題を陳述する発話ではないからである。それゆえ，その命題をいかにして得たかを特定することは意味をなさない。次の（7.38）は依頼，（7.39）は約束の発話である。

---

[61] 命題が真であることを前提にし，その確認を求めるタイプの疑問文には，「なんか」や「どうも」を付加し得る。例えば，雨音を聞いた話し手が窓際にいる人に向かって「あれ，なんか雨降ってきました？」のように尋ねることは可能であろう。

[62] 「なんか雨降りそうだね」は，真偽不確定な未来の出来事を語っているのに「なんか」が付加できるとの批判があるかもしれない。しかし，「雨が降りそうだ」は現在の空模様について降雨の兆候があると描写しているのであって，直接未来に言及しているわけではない。たとえば，「あの木は倒れそうだ」が現在の木の様子を描写しているのと同じである。

（7.38）｛ ??なんか／??どうも ｝，窓を開けていただけますでしょうか。

（7.39）｛ ??なんか／??どうも ｝，私は明日は三宮に行きます。

ただし，次のような間接発話行為はその限りでない。

（7.40）　あれ，なんかチャック開いてますよ。（主張→助言）

7.4　反復認知仮説

以上，副詞「なんか」の意味と生起環境を説明する上でエビデンシャル仮説が有効に働くことを示した。しかし，副詞「なんか」のふるまいの中には，エビデンシャル仮説だけでは説明しきれない部分がある。それが本節で扱う「なんか」の韻律に関する問題である。冒頭に述べたように，「なんか」は，次の（7.41）のように，「なん」の部分が極端に高く発音されたり，高いまま引き伸ばされることがある。またその場合，文末も引き伸ばされることが多く，腕組み，首かしげ，眉ひそめなどの非言語的行為を伴いやすい。

（7.41）　『なーん’か調子悪いなー。

問題は，この韻律の生起が自由ではないことである。例えば，次の（7.42）の場合，（a）の通常の音調は自然だが，（b）の特殊な韻律は不自然である。

（7.42）［目の前で雨が降っている］

a.　「な’んか雨降ってるよ。

b.??『なーん’か雨降ってるよ。

では，この韻律はどんな意味で，どんな環境に生起するのだろうか。

直感的に，この韻律は，話し手の「いぶかしい気持ち」（事態に対する不審感や受け入れがたさ），ないし，「知覚の微妙さ」に対応するように思われる。しかし，単純に話し手のいぶかしい気持ちを表すと言うことはできない。例えば（7.42）において降雨を不審がったり，受け入れがたく感じることは論理的にも経験的にも可能であるが，（7.42b）は不自然である。同様に，この韻律の生起は，必ずしも微妙な知覚に限られるわけではなく，次の（7.43）の「すごいヒリヒリする」のように，微妙とは言えない知覚を表す文も発話し得る。

（7.43）　（この薬を塗ると）『なーん’かすごいヒリヒリするんだよねー。

つまり，「いぶかしい気持ち」や「知覚の微妙さ」は，この韻律の生起と密接に関係するが，直接的に意味される事柄ではない。

本稿では，この韻律が表すのは，「認知体験が複数回反復されたこと」であるという仮説（以下，「反復認知仮説」）を提案したい。この仮説に従えば，＜『なーん’か＋命題情報

＞は，「何度環境を探索し直しても，しかじかの命題情報が得られる」ことを表す。例えば，（7.41）の「なーんか調子悪い」は，今日のコンディションを何度探索し直しても情報＜調子が悪い＞が得られることを，（7.43）の「なーんかすごいヒリヒリする」は薬を塗った後に，何度皮膚感覚を探索し直しても情報＜すごいヒリヒリする＞が得られることを表す。さらに（7.42b）の「なーんか雨降ってる」が不自然なのは，＜雨が降っている＞ことは通常一目で確信されることであり，本当に雨が降っているか否かをわざわざ何度も探索し直すという想定が不自然だからであると説明できる。

さらに，この韻律がいぶかしい気持ちや知覚の微妙さに結びつきやすいのは，事態に対する不審感（あれ，変だな？）や受け入れがたさ（そんなはずはない！），あるいは，知覚の微妙さ（はっきりしないな…）は，「もう一度調べてみよう」と認知をやり直す強力な動機になるからであると説明できる。

認知体験の反復を表す「なーんか」はカジュアルな文体の書き言葉に出現することもある。次の（7.44）では，運転免許証の更新のたびに安全協会への寄付を要求され，体感＜バカらしい＞が繰り返し認知されることが述べられている。

（7.44）　更新料を支払う時に『協会に寄付を』って言われますよね??私はいつも拒否してるんですが，皆さんは支払いますか??なーんか警察（まぁ安全協会とは別ものだとは思いますが）に寄付するなんてバカらしいと思うのは私だけなんでしょうか??（Yahoo!知恵袋[63]，傍線引用者）

反復認知仮説は「どうも」にも適用可能である。その場合，おおむね「何度考え直しても，しかじかと判断される」という意味になる。

（7.45）　『どー’も調子悪いなー。

この韻律は「どうも」において，「なんか」の場合ほどは大きな分布の変化を起こさないが，それでも，次の（7.46）のように何度も認知をやり直すという想定がしにくい状況では，生起しにくくなる。

（7.46）a.　どうも中国ではこの歌がはやっているらしいよ。

b.??『どー’も中国ではこの歌がはやっているらしいよ。

さらに反復認知仮説は「いぶかしさ」や「知覚の微妙さ」を表す副詞的成分の多くにも適用可能である。例えば，次例はいずれも認知体験が一度だけでなく，何度か反復されているという含意がある。

[63] 「現代日本語書き言葉コーパス」モニター公開データ（2008 年度版）から引用。

（7.47）　『みょー’に亭主がやさしいんです。（最近妙に亭主がやさしい）

（7.48）　び『みょーにズレてるね。（何度確認しても微妙にズレている）

（7.49）　な『んとなー’くさみしいんだよね。（近頃なんとなくさみしい）

これらの用例の観察から，「アクセント句の上昇を極端なものにし，句の最終モーラの手前にアクセント核を移動する（「微妙に」のように核がない場合は下降なし）。また下降の手前のモーラ（下降がない場合は，後ろから２番目のモーラ）を延伸してもよい」という，この韻律の一般的形式が抽出できる。

7.5　「なんか」のフィラー化を認めるべきか？

前述のように，「なんか」の用法の一部を「ええと」や「あのー」と同列に扱い，それを「間つなぎ」（川上 1992）や「フィラー」（鈴木 2000，エメット 2001，田窪 2005，Maynard 2009）といった用語で記述する先行研究は少なくない。たしかに，次の（7.50）のような「なんか」が連発される例を見つけるのは，それほど難しくない。

（7.50）で，何か，あーのー，何年も前に，何か初めて，フランスに，あの一人で留学ーした時，に，フランスに行った時よりも何か新大阪の駅に，降りた時の方が，凄い怖くて，何か，えーと多分，何か，日本語だということで，後テレビとかでも，あーのー大阪弁とか流れてるんで，何か，ん身構えーがなかったからかもしれませんけれど，何か言われたこと自体は，別に，えー，字面としてはそんな大したこと言われてないんですけど，何かあーのー，物凄く，何か怒られたような感じで，で何か，ちょっとあーのー，いまだに何か大阪はちょっと，えー，偏見が抜けてません

（『日本語話し言葉コーパス』S05F1041，表記一部改変）

こうした実例を見ると感覚的に，「なんか」は，「ええと」や「あのー」などと同じフィラーだと言いたくなるのも理解できないことではない。しかし，本章で検討してきたように，命題情報が探索によって得られたことを特定するという副詞「なんか」の働きは，今まさに探索や検索，演算，言語形式製作などの心身行動を行いながら発せられる感動詞「えーと」，「うーん」，「あのー」などとは異なっている。

これに対して予想される反論は，副詞の「なんか」とは別ものとして，無意味化・感動詞化したフィラーの「なんか」があるというものだろう。たとえば，田窪（2005:16）は，「なんか」を「副詞など特定の意味や文法的性質を持っていたものが意味を失って生じた」

感動詞の一つとして紹介している。

しかし，このようなフィラー化の主張にはいくつかの疑問が残る。たとえば，上の（7.50）に出現する「なんか」のうち，どれが副詞で，どれがフィラーなのだろうか。両者を見分ける基準が明らかでない。一方，第 5 章で検討した指示詞系フィラーの場合，実例においておいて連体詞と感動詞を見分けることは，常に明瞭にではないにせよ，おおむね可能であるし，フィラーとみなさざるを得ないような例を内省して作ることもできる。したがって，フィラー化した「あの（ー)」,「その（ー)」の存在は認めざるを得ないだろう。一方，「なんか」の場合，副詞とはみなし得ず，フィラーとしか考えられないような理想発話を少なくとも筆者は内省することができない。

また，仮にフィラー化した「なんか」があるとすれば，それは「ええと」や「あのー」などの他のフィラーとどのように異なるのだろうか。「見分ける基準もなく，内省もできず，フィラーとしての特性もよく分からないが，とにかくフィラー化した『なんか』があるのだ」というのは，それほど説得力のある主張ではないように思われる。

フィラー化に訴える前にまず，副詞「なんか」が連発されていると考えてなぜいけないのかを検討してみる必要があるように思われる。そもそも現実の談話において，特別な準備でもしない限り，「整然とした文」が発話されることの方が珍しく，言い換え，言い直し，言い足し，繰り返しなどを含んだ「整然としていない文」が産出されることのほうが普通である。そうした話し言葉的な文に起こる現象の一つとして，次の（7.51）のように，「整然とした文」においては文末に出現するはずの「です」,「ね」,「た」,「でしょう」などの要素が，文節末にも出現する現象がよく知られている。

（7.51）　その穴からね，燃料がね，噴き出したんだ。
　　その穴からですね，燃料がですね，噴き出したんです。
　　その穴からでしたよね，燃料でしょうけど，噴き出したんです。

（定延 2005:113）

定延（2005:113）は，この現象について，話し手の意識の滞留によって「本来なら文節にすぎないものが『発話の中でなしとげた，一つの大きな単位』として，文に似た装いを帯びる」と説明している。意識の滞留によって文と似た装いを帯びるのが必ずしも文節末に限られず，文節頭や文節中にもそうした変化が起こり得ると考えれば，（7.50）や次の（7.52）のように文節頭や文節中において「なんか」が発話され，結果として一文中に「なんか」が多数含まれるという事態は，それほど想定できないことではないように思われる。

（7.52）　なんかその穴からね，なんか燃料がね，なんか噴き出したの。

なんかその穴からー，なんか燃料がー，なんか噴き出したのー。

ここで重要なのは，文節頭や文節中に出現する「なんか」も，副詞「なんか」のエビデンシャル的性格から自由ではないことである。上の（7.52）を「なんか，その穴から燃料が噴き出したの」のように整形すると，それ自体が自然な文（その穴の様子の探索談）として成立する。また（7.50）も「フランスに行った時よりも，はじめて大阪に行った時の方が，なんかすごい怖かった。大阪弁を聞くと，なんか怒られているような気分になった。だから，なんか，いまだに大阪には偏見が抜けていないんです」のように整形できる。

一方，次の（7.53a）の自明の命題，（7.53b）の推量命題，（7.53c）の行為遂行的発話のように，そもそも副詞「なんか」が付加し得ないタイプの文であれば，文節頭などに「なんか」が生起するものやはり不自然である。

（7.53）a.??なんか私はね，なんか昨日ね，なんか三宮で買い物をしました。

b.??なんか明日ー，なんか東京でー，なんか雨が降るでしょう。

c. ??なんか窓をですね，なんか開けていただけますでしょうか。

他方，「えーと」や「えー」や「あのー」の連発は，非流暢な発話として可能である。

（7.54）a.　えーと私はね，えーと昨日ね，えーと三宮で買い物をしました。

b.　えー明日ー，えー東京でー，えー雨が降るでしょう。

c.　あのー窓をですね，あのー開けていただけますでしょうか。

つまり，こうした文節頭や文節中に出現する「なんか」も，副詞としての意味や文法的性質を失っているとは言い切れないように思われる。

ここで注目したいのは，「なんか」が談話の種類に応じて極端な分布の偏りを示すことである。次の【表 7.1】は，『日本語話し言葉コーパス』に収録された学会発表と模擬講演における「なんか」の出現数を 10 名の話者についてまとめたものである。表の最上段（ID 欄）の数字は話者番号を，アルファベットは話者の性別（M は男性，F は女性）を表す。

【表 7.1】　学会発表と模擬講演における「なんか」の出現数

ID	8 M	19 F	373 M	423 M	463 F	471 M	514 F	674 F	685 M	1185 F	合計
学会発表	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
模擬講演	6	40	2	7	0	8	15	2	1	12	93

【表 7.1】から，学会発表において「なんか」はほとんど出現しない（合計 1，話者平均 0.1）[64]のに対して，模擬講演においては，出現数が急増している（合計 93，話者平均 9.3）ことが分かる。

一方，次の【表 7.2】,【表 7.3】は，比較のために「えーと」と「あのー」の出現数をまとめたものである。

【表 7.2】　学会発表と模擬講演における「えーと」の出現数

ID	8	19	373	423	463	471	514	674	685	1185	
	M	F	M	M	F	M	F	F	M	F	合計
学会発表	1	14	28	12	6	3	37	2	36	13	152
模擬講演	0	9	7	14	53	25	4	5	12	3	132

【表 7.3】　学会発表と模擬講演における「あの（ー）」の出現数

ID	8	19	373	423	463	471	514	674	685	1185	
	M	F	M	M	F	M	F	F	M	F	合計
学会発表	16	3	5	0	1	0	8	2	38	165	238
模擬講演	33	64	4	7	1	31	63	29	43	45	320

【表 7.2】を見ると，「えーと」の出現数の合計は，学会発表と模擬講演でそれほど差がなく（153:132），分布にも個人差が大きく談話の種類に応じた傾向は見いだしがたい。また，【表 7.3】を見ると，「あの（ー）」の出現数は，学会発表より模擬講演のほうが多い（238:320）が，「なんか」の場合ほど極端な違いではないし，分布には個人差もある。

「なんか」の分布の極端な偏りは，命題情報が探索によって得られたことを特定するというエビデンシャルとしての意味から比較的簡単に説明できる。学会発表は基本的に，公

---

[64] 次の（ア）は，学会発表において唯一発話された「なんか」である。

（ア）　(F え）以上を〈雑音〉(F えーと）絵にしますと　何かあちこち文字が抜けてて(F えー）判じ物みたいで申し訳ありませんが(F えー）大規模話し言葉コーパスをまず構築します
（A11M0469，傍線は引用者）

話の内容から推測すると，この場面で話者は，大規模コーパスを構築し，情報のモデル化を行い，話し言葉の認識・要約技術の構築をするというプロジェクトの展開をまとめたスライドを提示している。そのスライドは，最初の段階では虫食い状態になっていて，クリックするたびに文字（たとえば,「大規模コーパスの構築」）が挿入されるようになっている。（ア）の「なんか」は,「あちこち文字が抜けていて，判じ物みたいだ」という体感命題が，スライドの様子の探索に基づいていると解釈できるだろう。

共性・再現性がある誰にでもアクセス可能な事実（本章の用語で言えば「自明の命題」），および，そこから導かれる論理的帰結を提示する場であり，「私が探索してみたら，こうでした」という個人的体験談を語る場ではない。それゆえ，「なんか」の付加は適さない。一方，模擬講演は基本的に，話し手の個人的体験を語る場であり，「なんか」を使うことに問題は生じない。

他方，「なんか」がフィラー化していると想定した場合，「なんか」の極端な分布の偏りを説明しにくいように思われる。少なくとも，副詞の「なんか」とフィラーの「なんか」を分ける明確な基準・根拠がない状況で，「なんか」の無意味化・感動詞化を言い立てるのは論理的ではなく，また，現象の説明においても不利であるように思われる。

先行研究における「なんか」の無意味化・感動詞化という主張自体は，十分な正当化を欠くように思われる。アナロジーによって説明すれば，筆者の実家では，野球のバットを大豆の脱穀に用いる。おそらく他にもそうしている家庭はあるだろう（仮に全国 1 万の家でそうだとしよう）。しかし一般的には，バットはあくまで野球の用具であり，農具ではない。一方，ゴルフ練習用のバットというものがあり，実際に市販されている。これは，設計がゴルフの練習に特化されているため，野球では使えない。したがって，これはもはや野球の用具ではなく，ゴルフ練習器具である。このように一般に，本来の働きを離れてあるモノが使用される場合，そのカテゴリーの移動は「もとの働き A が果たせず，B にしか使えない例」の存在によって決定される。

この基準を「なんか」にも敷衍すれば，「なんか」を発して間をつなぐことはできるし，実際そうしている人もいるだろう。しかし，「フィラーのように用いられている例」を示すことは「なんか」をフィラーに帰属させる上で十分ではなく，「副詞とはみなしえず，フィラー（感動詞）としかみなしえない例」を示すこと必要だということである。少なくとも，先行研究がフィラー化の根拠として提示する例は前者であるし，筆者は「なんか」について後者のような例を見つけることができていないし，内省もできない[65]。

ところで，「なんか」が感動詞とはみなしえないのであれば，フィラーの定義の方を変更すればいいという意見があるかもしれない。すなわち，フィラーを感動詞の下位類とはせず，純粋な談話論的・機能的カテゴリーとして設定し，感動詞・副詞・接続詞といった文論における品詞や意味の有無を問わず，「間をつなぐ」（無音時間を埋める）機能を持つ語

[65] もちろん，ゴルフ練習専用のバットのように，将来的に，フィラー化した「なんか」が出現する可能性は否定しないが，現時点でそのようなものを認める必要性も根拠もないように思われる。

はなんであれフィラーとみなすという定義の改定に訴える道筋である。これならば，「なんか」を副詞としても論理的に矛盾せず，一方で「なんか」が間をつなぐ際にも発せられるという直感もすくい取ることができると思われるかもしれない。

しかし，この代案は必ずしも魅力的ではない。仮に「間をつなぐ」，「言いよどむ」といった印象だけでフィラーを認定するならば，フィラーの種類は膨大なものになるように思われる。話し言葉において，「やっぱ（り）」，「ちょっと」，「とりあえず」，「一応」，「すごい」，「けっこう」，「もう」，「だから」，「で」，「ホント（ホンマ）に」，「非常に」，「要するに」，「普通に」，「私は」，「私としては」，「言ってみれば（言うたら）」，「何だろ」，「何ていうか」などの表現が一文中に不必要なまでに連発されることはそれほど珍しいことではなく，たとえば，次の（7.55）のような「ホントに」もフィラーとみなさざるを得ないだろう。

（7.55）＜プロゴルファーが最終日への抱負を聞かれて＞

ホントにこれで，ホントに，あのー，最後なのでー，ホントに悔いの残らないように，ホントに全力で，あのー，がんばろうと思います。

このようなフィラーの膨張路線においては，もはやフィラーというカテゴリーを設けること自体の意義が薄れてしまうように思われる。たとえば，接続詞・副詞・感動詞といった品詞を横断する談話論的・機能的カテゴリーとして「談話標識」（discourse marker）という用語が用いられることがしばしばあるが，フィラーを感動詞の下位類とはせず，拡張していくのであれば，談話標識という概念とどう住み分ければいいのだろうか。明確な基準を示さなければ，結局は，どちらの用語も意味はっきりしない不透明なカテゴリーとして共倒れになりかねない。

加藤重広（2004:225）が指摘するように「ことばが出ていない《無言語の時間》を埋めるという働きは，すべての発話や単語が持って」いる。その中であえてフィラーというカテゴリーを設けるのであれば，それなりの認定基準が必要であるように思われる。そのような基準として本研究では，まず「感動詞か否か」という形による分類を先行させ，その後，「考え中」，「言いよどみ」，「間つなぎ」といった働きによる（主観的な）分類を行うという手順を提案したい。

7.6 まとめ

以上，「なんか」の意味と生起環境を説明するために，「エビデンシャル仮説」，「反復認知仮説」を提出し，その有効性を示した。この 2 つの仮説は文法研究全般において一定の

意義を持つものであろう。「エビデンシャル仮説」は，能動的認知観の観点から日本語におけるエビデンシャルの範囲を拡張するものであり，また「反復認知仮説」は，音声現象と文法との密接な関係を示唆するものである。

また，7.6 節では，先行研究においてしばしば見られる「なんか」のフィラー化（感動詞化・無意味化）という論の妥当性を検証した。その結果，「なんか」のフィラー化という主張は必ずしも基準や根拠が十分ではなく，むしろ，フィラー化していないと考えた方が現時点において有利であることを示した。(7.50) のように，「なんか」の連発されることがあるという事実を説明するために，修正されるべきなのは，「なんか」自体の意味や品詞論的位置づけではなく，むしろ，「整然とした文」を前提として話し言葉における現象を解釈しようとするわれわれの先入観の方なのではないだろうか。

今後は，「エビデンシャル仮説」を表現効果の面から捉え，「なんか」の表現効果を明らかにすること，話し手が「どのような意識で『なんか』を発しているのか」という話し手の第 1 人称的視点からの記述を補っていきたい。

第８章　「まあ」と「内心のわだかまり」

山内（2009:58）は，OPI において「『まあ』という語を使うことができていたら，その被験者は『上級－中』以上です！」という牧野成一氏の発言を紹介し，牧野氏の発言は，学習者の発話データの観察からも支持できると述べている。これが正しいとすれば,「まあ」は，日本語学習者が,「しゃべるのが上手い，流暢だ」といった印象を獲得するために，ぜひとも習得すべき項目の一つであり，日本語教育には,「まあ」の意味や用法を適切に説明することで，学習者の成長を手助けすることが望まれるだろう。

「まあ」の記述を試みた先行研究は少なくない（森山 1989，川上 1993，1994，加藤豊二 1999，尾上 1999，冨樫 2002b，川田 2007 など)。しかし，それらの記述は,「まあ」の用法や生起環境に関する疑問に必ずしも答えてくれるものではない。また,「まあ」の品詞論的な位置づけもはっきりしていない。

そこで本章では，先行研究の記述の問題点を検討し，代案を提示していくことにする。まず 6.1 節では，本章の考察対象を画定する。6.2 節では，先行研究の問題点を具体的に指摘する。6.3 節では，本研究が但し書き的用法と呼ぶ「まあ」の用法の特徴を詳述する。また，その中で「まあ」をフィラーとみなすのが妥当かを検討する。6.4 節では，本研究が強調的用法と呼ぶ用法の特徴を詳述する。

8.1.　考察対象

本研究が，先行研究による記述が特に十分ではないと考えるのは次の（8.1)，(8.2）のような用法である。

（8.1）　日本でリンゴといったら，まあ青森ですよ。

（8.2）　日本でリンゴといったら，まぁー青森ですよ。

説明をスムーズに進めるための便宜上，論点を先取りするが，(8.1）の「まあ」は典型的には高低の音調で発音され，話し手の内心のわだかまり（たとえば,「細かいことを言えば，長野や岩手などの他のリンゴの名産地もあるけど」）をほのめかす。一方，(8.2）の「まぁー」のように低高の音調で延伸を伴って発音された場合，内心のわだかまりに関する含意はなく，むしろ「ともかく青森だ」という強い主張に解釈される。

以下では，(8.1）の用法を仮に「但し書き的用法」と呼び,「まあ」と表記する。一方，

（8.2）の用法を仮に「強調的用法」[66]と呼び，特別な場合を除いて，「まぁー」と表記する。また，発音や用法上の区別をしない場合や（8.1），（8.2）以外の用法を「マア」と表記することにする。

なお，但し書き的用法の「まあ」は，「ま」と短く発音され音調の下降が明瞭でなかったり，「まー」と低く延伸される場合もある。

（8.3）a.　日本でリンゴといったら，ま，青森ですね。

b.　日本でリンゴといったら，まー，青森ですね。

もちろん，こうした韻律にも，細かなニュアンスの違いはあると思われるが，それは（8.1）対（8.2）のような明瞭な意味の違いではなく，（8.3a）の「ま」も（8.3b）の「まー」もほぼ（8.1）の「まあ」と同じように解釈できる。それゆえ以下では，これらを但し書き的用法のバリエーションとして扱い，「まあ」に代表させて論じることにする。

ところで，「マア」には，次の（8.4）のように，相手の行為を制したり，なだめたりする用法もある。このような「マア」は，「『マ’ア『マ’ア」（＜『＞は音調の上昇を＜’＞は下降を表す）や「ママママ…」のように連続して発し得ることに特徴がある。

（8.4）＜興奮している相手に向かって＞

｛マア／マアマア／ママママ｝，落ち着いてください。

先行研究（冨樫 2002，川田 2007 など）では，（8.1）と（8.4）を用法として特に区別していないが，本研究では，8.3.4 節において両者を連続的ながら文法的性質において異なる別の用法として峻別すべきだと主張する。以下では，その立論を背理法的に行うことにする。すなわち，ひとまずここでは（8.1）と（8.4）の用法を区別しないという先行研究の前提を受け入れて論を進め（それゆえ以下 8.3.4 節までは，両者を区別せず，「まあ」と表記する），その立場が現象の説明に窮することを示すことで，両者の峻別の必要性を説く。

なお，次の（8.5）の「マ『アマ’ア」は，＜十分ではないが，それなりに満足できる程度を表す程度副詞＞という辞書的記述にほぼ尽きていると思われるため，本研究では考察対象とはしない[67]。

（8.5）a.　｛まあ／マアマア｝強いです。

---

[66] 強調的用法をイメージしにくい場合，「日本でリンゴといったら，もー青森ですよ」，「今年の阪神はもー強いですよ」のように「もー」でラフに置き換えられる場合がそれに該当すると捉えていただきたい。ただし，「まぁー」と「もー」にも意味の違いはあると考えられ，その点は今後の課題とする。

[67] もちろん，「まあまあ」と「そこそこ」の違いのような問題がないわけではないが，本研究では，より重要度が高いと考えられる他の問題を優先したい。

b.　日本でリンゴといったら，{ まあ／??マアマア }青森です。

c.　調子は，{ ??まあ／マアマア }ですね。

d.　{ ??まあ／マアマア }の調子

「マアマア」は，（8.5a）のように，（8.1）の「まあ」と意味的に区別しがたい場合もあるが，（b）～（d）のように両者は文法的性質において異なっている。

同様に，次の（8.6）のような「マア」も，＜主にドラマ・漫画等の『お嬢様』的キャラクタが，驚き・気づきといった文脈で発する感動詞＞という記述に大きな問題はないと考え，（8.1）や（8.2）の用法との違いに言及するにとどめる。

（8.6）　マア，素敵！

8.2.　問題の所在

前述のように，「まあ」に関する先行研究は，「まあ」には，どのような用法があり，それぞれどのような特徴があるのか，「まあ」はいつ使えるのか，といった疑問に必ずしも答えてくれるものではない。以下，先行研究の問題点を具体的に指摘していく。

8.2.1　但し書き的用法と強調的用法の相違

日本語学習者が，（8.1）の「まあ」と（8.2）の「まぁー」のような意味的にほとんど真逆とも言えるような用法を区別できるようになるためには，両用法の意味，構文，音声などの特徴の違いを把握しておく必要があるだろう。

尾上（1999:93）は，先行研究で唯一，強調的用法を取り上げており[68]，「ややこしい話はおいといて」という意味が，「ある場合には主張や提案，要望の不完全さを自ら認める方向にも働き，またある場合には，逆に話し手の決めつけの強さを表現する」と述べている。

だが，「ある場合」とはどのような場合なのだろうか。尾上（1999:92）によると，「マア」が強調的に解釈されるのは「否定的な意味の言葉と一緒に使われた場合」である。しかし，この指摘は十分ではない。というのも，「まぁー」のように低高の音調で延伸を伴って発音された場合，上の（8.1）の「青森ですね」ような否定とも肯定とも言えない述語や，次の（8.7）の「強いです」ような肯定的意味の述語とも共起した場合でも，強調的に解釈されるからである。

[68] 川上（1993:76-77）にも，強調的用法への言及はあるが，それは尾上（1999）の母体となった『朝日新聞・大阪市内版（1992 年 9 月 20 日）』を引用したものであり，特に新たな観察や見解は加えられていない。

（8.7）　今年の阪神は，まぁー強いですよ。（非常に強い）

また，次の（8.8）の構文において「マア」は音調に関わらず強調的にしか解釈できない。

（8.8）　今年の阪神のマア強いこと強いこと。（非常に強い）

こうした強調的用法の韻律的特徴や構文的特徴に関する記述は先行研究には見られない。

また，尾上（1999:92）は，強調的用法を「大阪弁」として紹介しているが，これも必ずしも支持できるものではない。次の（8.9）～（8.11）は，テレビで共通語を話す関東出身のタレントが強調的用法を発した例である[69]。

（8.9）　富田靖子さんは，まぁー他のアイドルとは違ったね。（断然かわいかった）

（関根勤・男性・1953 年生まれ・東京都育ち）

（8.10）　（恋人から等身大のクマのぬいぐるみをもらったが）6 畳ぐらいの私の部屋に，まぁー邪魔。（全く邪魔）

（SHEIRA・女性・1973 年生まれ・神奈川県育ち）

（8.11）　設楽さんが注文したやつは，まぁー流行るんです。（すごく流行る）

（日村勇紀・男性・1972 年生まれ・神奈川県育ち）

このように強調的用法は共通語でもしばしば観察され，無視できるものではないだろう。また，8.3 節で述べるように，強調的用法に注目することは，決してマイナーな用法を掘り起こすだけのものではなく，但し書き的用法の特徴を精密に記述するためにも必要である。

8.2.3　「まあ」の生起環境

先行研究では，「まあ」について多くの考察がなされているが，「まあ」の生起環境，すなわち，「まあ」がいつ使えて，いつ使えないのか，また，それはなぜなのかという問題にはいまだ十分な答えが与えられていない。以下では，8.1.3.1 節において，川田（2007）による「まあ」の共起制限についての考察を，8.1.3.2 節において，冨樫（2002）による「まあ」の生起位置についての考察を，それぞれ紹介し，問題点を指摘する。

8.2.3.1　「まあ」の共起制限

川田（2007）は，「まあ」が出現しない文環境をいくつか挙げ，それについて，①丁寧さ，②知識状態，③情報の共有可能性の観点から説明を試みている。

[69] 例文の出典は以下の通りである。(8.9)2008 年 6 月 26 日放送・テレビ朝日系列・「アメトーーク！」，(8.10) 2008 年 11 月 6 日放送・フジテレビ系列・「ごきげんよう」，(8.11) 2009 年 12 月 18 日放送・フジテレビ系列・「ごきげんよう」。

まず，①丁寧さについて，川田（2007）は，「まあ」は，ヘッジ[70]として発話をやわらげ，”negative politeness strategy”として働くとし，次の（8.12）において「まあ」が不自然な理由を，この文脈では「”negative politeness strategy”が要求されない（川田 2007:178)」からだと説明している。

（8.12）＜隣の家が火事になったことを知り＞

??まあ，早く逃げろ！　（川田 2007:178）

だが，仮に隣家が火事という状況でも，来客（たとえば恩師）に対して「早く逃げろ！」とは言いがたく，「早くお逃げください」などと敬語化するのが自然だし，少なくとも可能である。ネガティブ・ポライトネスストラテジーの一種である敬語化が可能だということは，この状況では「”negative politeness strategy”が要求されない」ため，「まあ」が不自然になるという論理は成り立たないように思われる。

次に，②知識状態について，川田は，「まあ」が（8.13）のような質問文に付加できないことを挙げ，「まあ」は「話し手が持っていない情報」には言及できないと述べている。

（8.13）??まあ，太郎は東大に行っていたのですか？　（川田 2007:181）

「話し手が持っていない情報」とは，真偽が不確定な命題を意味すると推測されるが，「まあ」と真偽が不確定な命題が共起できないという説明が常に成り立つわけではない。それは，川田自身が認めるように，「まあ」が文末表現「だろう」や「でしょう」とは共起するからである。

（8.14）　君と父親とはどうかしらんが，母親とはまあうまく行くだろう。

（『築地河岸』，川田 2007:183 から引用）

命題＜今後，君と母親はうまく行く＞は発話時点では真偽不確定である。さらに，「まあ」は，そもそも命題の真偽が問題にならない行為遂行的発話とも自然に共起する。

（8.15）　まあ，座ってください。（勧め）

（8.16）　まあ，がんばって。（応援）

（8.17）　まあ，いいか。（あきらめ）

以上のように，川田の説明は，少なくとも「情報を持っている／いない」という部分の規定が不透明であり，いつ「まあ」が使えて，いつ使えないのかをうまく予測できない。

最後に，③情報の共有可能性について，川田は，次の（8.18）のように，「まあ」が終助

[70] 川田の言う「ヘッジ」と本研究が言う「但し書き的用法」の意味するところは同じではないが，本節では，両者を同一視しても特に問題は生じないため，その違いにはこだわらないことにする。

詞「ね」と共起した場合，ヘッジと「解釈することはむずかしい（川田 2007:184）」と述べ，「『まあ』は話し手が聞き手と情報を共有できる環境には生起できない」，「『まあ』を用いて言及可能な情報は話し手だけが持つ情報に限られる」と結論している。

（8.18）＜机の上のパソコンを見て＞

??まあ，新しいパソコンを買いましたね。　　（川田 2007:183，一部改変）

しかし，たとえば，次の（8.19）において「まあ」は「ね」と共起しているが，この「まあ」を主張や同意を弱めるヘッジと解釈するのは特に難しくないだろう。また，この状況で＜日本でリンゴといったら，青森だ＞という命題は「話し手だけが持つ情報」ではなく，話し手と聞き手は「情報を共有」しているように思われる。

（8.19）　A：　日本でリンゴといったら，まあ，青森だよね？

B：　まあ，そうだね。

つまり，（8.18）の不自然さは「まあ」と「ね」の共起制限に起因するとは言いがたい[71]。

このように，川田（2007）による「まあ」の生起制限の指摘は興味深いものだが，その説明の妥当性は必ずしも支持できるものではない。それゆえ，「まあ」がどのような環境になぜ生起できないのかという問題は依然解答を要するものとして残されている。

8.2.3.2　「まあ」の生起位置

冨樫（2002:20-21）は，「『まあ』は発話末に現れることができない」，「『まあ』の後には何らかの発話が必要となる」と述べ，これを根拠に「『まあ』が直接関わっているのは計算処理過程である」と結論している。これは，「まあ」を，「ええと」や「あのー」などの心内情報処理過程と対応した形式と同列に置こうとする主張だと見ることができる[72]。

たしかに，こうした記述は，「ええと」や「あのー」には問題なく該当するだろう。たとえば，次の（8.20）（8.21）において，「ええと」・「あのー」が，発話頭や発話中に出現する（a）は自然だが，発話末に位置する（b）は，発話が後続しなければかなり不自然である。

（8.20）A：あの居酒屋で飲んだら，いくらすると思う？

---

[71] 川田（2007）は，「まあ」と「『らしい』との共起は不自然になる場合がある（川田 2007:183）」とも述べているが，8.3.3 節で述べるように，これも「まあ」と「らしい」の共起制限とは言いがたい。また，川田の論は，「解釈することは難しい」，「不自然になる場合がある」といった前提から，「『まあ』は話し手が聞き手と情報を共有できる環境には生起できない」のような一般化した結論を導いている点にも問題がある。

[72] 冨樫（2002）は「まあ」を「談話標識」と呼び，「談話標識」という用語の意味するところは，「定延・田窪（1995）で用いられている心的操作標識とほぼ同じである（冨樫 2002:15）」と述べている。この記述からも冨樫（2002）が「まあ」を「あの（ー）」や「ええと」と同列に扱おうとしていることが伺われる。

B：a.　えーと，2500 円くらいかな。

b.??2500 円くらいかな，えーと。

（8.21）A：　最近話題の iphone って何なの？

B：a.　iphone っていうのは，あのー，電話もできる音楽プレイヤーですね。

b.??iphone っていうのは，電話もできる音楽プレイヤーですね，あのー。

だが，「ええと」・「あのー」を「まあ」に代替した次の（8.22b）（8.23b）は不自然ではない。

（8.22）　a.　まあ，2500 円くらいかな。

b.　2500 円くらいかな，まあ。

（8.23）　a.　iphone っていうのは，まあ，電話もできる音楽プレイヤーですね。

b.　iphone っていうのは，電話もできる音楽プレイヤーですね，まあ。

「まあ」は，（8.22）では「断定はできないけど」，（8.23）では「他にも特徴はあるけど」のような含意があり，そのことは位置を問わず，同じであるように思われる。

さらに，次の（8.24）のように「まあ」が発話末に出現する実例も存在する。

（8.24）　01A：あの，いつものー会議室に，こー選挙の時だったんでー，政見放送，で，会議中です，みたいな，そういうの，貼り紙が貼ってあったんですけどー，あたしは，それをディレクターの人に，マサミ放送って何ですかって，（笑い）

02B：そうですってね。（笑い）

03A：大恥をかいたっていう，ことがあったんですねー。

04B：はじめてだとね，まあ。

05A：はい。

06B：うん。

07B：マサミ放送って，政見だったのね，それがね。

08A：そうなんですよ。

（テレビ朝日「徹子の部屋」2004 年 12 月 22 日放送）

01～03 行目までの発話で，タレント A が「政見放送」を「マサミ放送」と読んで大恥をかいたことがあるというエピソードを話し，それに対して 04 行目で司会者 B が「はじめてだとね」（はじめて見る漢字なら読み間違えるのも理解できる）と同情を示しつつ，発話末

に「まあ」を加えている[73]。この「まあ」は，たとえば「もっとも，それくらいの漢字は知っていてほしいが」といったニュアンスで，同情に但し書きを加えていると解釈できる。

以上から，「『まあ』は発話末に現れることができない」という冨樫（2002）の主張はそのままでは支持しがたい。一方，これを弱めて，「『まあ』は発話末に生起しにくい場合がある」とするならば，それなりに支持できるように思われる。たとえば，冨樫（2002:20）が「まあ」が不自然な例として挙げる次の（8.25）における発話末の「まあ」は，（8.22）や（8.23）における発話末の「まあ」に比べて許容度が落ち，筆者の内省でも多少違和感がある。

（8.25）A：　締切過ぎてるんだけど。

B：a.　まあ，明日までには完成させますよ。

b.??明日までには完成させますよ，まあ。

つまり，明らかにすべきは，どのような場合に，なぜ「まあ」が発話末に生起しにくくなるのかである。

8.2.4　「まあ」は副詞か感動詞か？

さらに「まあ」をどの品詞に位置づけるかについて，先行研究の見解は一致していない。たとえば，中田（1991）や加藤重広（2006）は副詞として扱っているが，小磯他（2004）では感動詞として扱われている。さらに，田窪（2005）や川田（2007）のように「まあ」には副詞的用法と感動詞的用法が混在していると捉える立場もある。しかし，いずれの立場においても，認定の根拠はほとんど示されていない。どの品詞に位置づけるかということは「まあ」の特性を捉える上で重要であり，それゆえ検討を要する問題であろう。

以上の問題を解決するために，次節以降では，「マア」の用法を大きく，但し書き的用法（8.3 節）と強調的用法（8.4 節）に分けて，それぞれの特徴を詳述していく。さらに，8.3.4 節では，但し書き的用法とは異なる第３類として「なだめ用法」を認める必要性を論じる。

8.3　但し書き的用法

本節では，但し書き的用法について，意味（8.3.1 節），構文的特徴（8.3.2 節），生起制限

[73] この「まあ」が発話末に生起しているように見えるのは，05A の「はい」にさえぎられたためではないかと疑問をもたれるかもしれないが，04 行目の「まあ」の終わりと 05 行目の「はい」のはじまりの間には若干の時間があり，また筆者の聴覚印象では，この「まあ」は，いかにも発話末らしい下降調で発せられている。

（8.3.3，8.3.4 節），品詞（8.3.5 節），英語との対照の問題（8.3.6 節）を論じる。

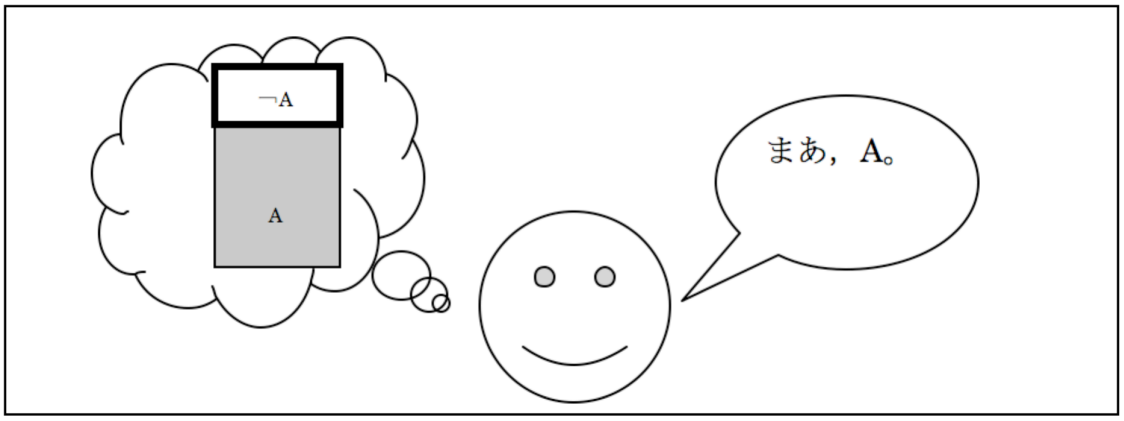
8.3.1　「まあ」の意味の相対性

先行研究には「まあ」の意味を，「色々な問題にこだわらない（森山 1989:73）」，「いろいろ問題はあるにしても，ここではひとまず大まかにひきくくって述べる（川上 1993:72）」，「ややこしい話はおいといて（尾上 1993:93）」のように，「内心にわだかまりがあるが，それにはこだわらない」という主旨で記述しているものがある。

本研究ではこのような記述は，但し書き的用法や強調的用法を包括した抽象的な意味の記述としてならば支持できるが，8.2 節で指摘してきた諸問題を解決するには十分でないと考える。というのも，一口に「内心のわだかまりにこだわらない」といっても，「どの程度こだわらないのか」には段階があり得，それを特定することが「まあ」や「まぁー」の性質の説明に必要だと考えるからである。

本研究が但し書き的用法と呼ぶのは，話し手が内心のわだかまりに「ある程度のこだわり」を残した用法である。たとえば，下図【8.1】のように，コップに水が８割入っていると仮定する。話し手が，水が入っていない部分があることを気にしながら，＜水がいっぱいある＞と主張する時，但し書き的用法を用いて，「まあ，いっぱいあります」と発話される（下図では，内心のわだかまりにこだわりが残っている様子を太線で表す）。

【図 8.1】但し書き的用法

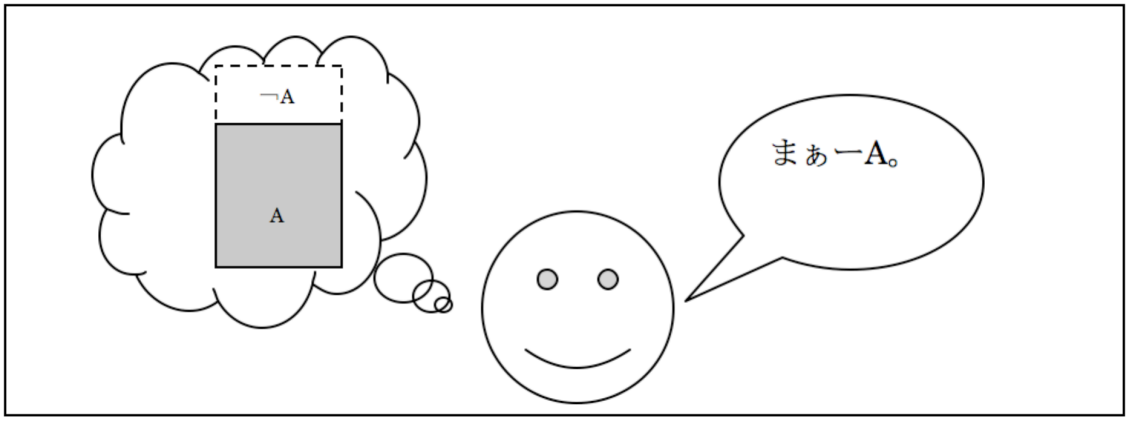


それゆえ，先ほどの（8.1）の「今年の巨人はまあ強いですよ」において「まあ」は，話し手の内心に若干のわだかまりが残っている（たとえば，「投手陣には若干不安が残る」）ことをほのめかし，いかにも「仔細ありげ」なニュアンスを生む。

一方，強調的「まぁー」とは，話し手がいろいろな問題に「全くこだわっていない」用

法である。すなわち，話し手が，水が入っていない部分など気にせず，＜水がいっぱいある＞と主張する時，強調的用法の「まぁー」を用いて，「まぁーいっぱいあります」と発話される（下図では，内心のわだかまりに全くこだわっていない様子を点線で表す）。

【図 8.2】強調的用法



それゆえ，先ほどの（8.2）の「今年の阪神はまぁー強いですよ」において「まぁー」は，「今年の阪神は，ともかく強いのだ」のように「委細かまわず」というニュアンスで強く言い切っているように解釈される。

言い換えれば，但し書き的用法とは「内心にわだかまりがあるが，それにはこだわらない」という記述のうち，前件「内心にわだかまりがある」により焦点があり，強調的用法とは，後件「それにはこだわらない」により焦点がある用法である。

こうした「こだわりの程度」の違いは，両用法の生起環境の違いにも反映される。たとえば「まあ」は，（8.26）のような「A。まあ B けど。」（以下，「B＝¬A」とする）のようなパターンに生起するのに対し，「まぁー」はそのようなパターンで用いることはできない。

（8.26）a.　今年の巨人は強いですよ。<u>まあ</u>，投手陣に若干の不安はありますけど。

b.??今年の阪神は強いですよ。<u>まぁー</u>打線に若干の不安はありますけど。

仮に（8.26a）の「まあ」をパラフレーズするならば，先行文脈に留保・例外・譲歩などの情報を但し書きする接続詞「もっとも」，「ただし」，「といっても」などが適当だろう。

（8.27）　今年の巨人は強いですよ。{ <u>まあ／もっとも／ただし／といっても</u> }，投手陣に若干の不安はありますけど。

この生起環境の相違は，「こだわりの程度」の違いとしてうまく説明できる。すなわち，「まあ」において話し手は内心にわだかまりを残している。それゆえ，「水はいっぱいある。まあ，入ってない部分もあるけど。」のように，それを後ろから言い添える用法がある。一

方，「まぁー」において，話し手は内心のわだかまりに全くこだわっていない。それゆえ，言い添えの用法がない，と。

これに対して，「A。まあ B けど。」は，「まあ B けど，A。」の倒置であり，後ろから但し書きを加えているわけではないとの批判が予想される。たしかに，「まあ，投手陣に不安はありますけど，今年の巨人は強いですよ」のように B 節を前方に移動できる場合もある。しかし，次の（8.28）～（8.30）の「まあ～けど」節は前方に移動することができない。

（8.28） わたしはクールが好きなのだ。涼しいのが気持ちいい。温暖化の進む地球では，涼しいということがそれだけで価値がある。まあ，単に暑がりなだけなんですけど。　（黒田龍之助『語学はやり直せる！』角川書店，2008 年）

（8.29） 「どこかオレにチームを任せてくれれば，プロになっていない選手だけを集めても優勝できるくらいだ」しばらくおいて「ま，これはジョークだけど」と，もうこちらは十分に分かっているのに誤解を懸念してつけ加えるのが，ジョアンの生真面目なところだ。（ジョアン・サルバンス『史上最強バルセロナ世界最高の育成メソッド』，可部究氏による「あとがき」，小学館，2009 年）

（8.30） 『徒然草』は…＜中略＞…よく読んでみると「なるほどなるほど」と思わせる記述もあってなかなかに面白い（まあ，兼好法師みたいに生きたいとは思わないけどね）。　（吉野敬介『紫式部にケンカは売るな！』講談社）

それゆえ，これは単純な倒置とは言いがたく，情報の付加とみなさざるを得ないだろう。

このように，「まあ」には，接続詞に近い用法がある。しかし，「まあ」と補足の接続詞が全く同じというわけではない。たとえば，次の（8.31）はいずれも「今年の巨人は強い」という主張に「投手陣に若干の不安がある」という但し書きを加えているが，その「投手陣の不安」をどの程度重大な問題と捉えているかに違いがある。

（8.31）a.　今年の巨人は強いですよ。まあ，投手陣に若干の不安はありますけど。

b.　今年の巨人は強いですよ。もっとも，投手陣に若干の不安はありますけど。

「まあ」による但し書きは，「もっとも」に比べて，補足としての重大性が低く，気になるので一応言い添えておくという程度のものである[74]。

[74] 「まあ」における但し書きの追加は「A。まあ B けど。」のように，通常「～ケド」，「～ガ」節によって行われ，次の（ア a）のように「A。まあ B。」と言い切るのは，但し書きの追加としては自然ではない。一方，「もっとも」は（ア b）のように「A。もっとも B。」の言い切りによる追加も自然である。

（ア）a.？今年の巨人は強いですよ。まあ，投手陣に若干の不安はあります。

以上のように，「まあ」の性質は，強調的用法や補足の接続詞との対比においてはじめて正しく捉えることができる。以下で論じるように，「まあ」のニュアンスや生起制限を説明するには，「内心のわだかまりにこだわりを残し，それを但し書きする用法である」という記述が有効である。しかし，補足の接続助詞などとの違いを問題にするならば，「まあ」における「こだわり」は，あくまで「ある程度」のものだという相対性を捉えなければならない。

8.3.2　明示的但し書きと非明示的但し書き

前節では，「まあ」は，言語行為に対する話者の内心のわだかまりを但し書きする用法であると述べた。このような考えは，加藤重広（2006:133）の「まあ」は，「なんらの留保や補足や修正を抜きに言い切る状況になりという認識を標示する」という記述と方向性を同じくすると言えるだろう。しかし，加藤は，この記述の敷衍や論証を特に行っていない。そこで本節では以下，「明示的但し書き」と「非明示的但し書き」の順にその特徴を論じる。

8.3.1.1　明示的但し書き

明示的但し書きとは，主節における言語行為 A に対する話し手の内心のわだかまりが従属節（ケド・ガ節）B として明示的に述べられる場合を指す。たとえば，次の（8.32）（8.33）は，波線部の主節が言語行為 A（陳述，提案），破線部の従属節が B に相当する。

（8.32）　今年の巨人は強いですよ。まあ，投手陣に若干の不安はありますけど。

（8.33）　花でも贈ってみたら？まあ，許してくれるかどうか分からないけど。

明示的但し書きは，「まあ」が B 節に係って，B 節を「但し書き」として位置づける用法であり，３つのパターンに下位分類できる。

第１に，上の（8.32）や（8.33）のように「A。まあ，B けど」で，言語行為 A に後から

---

b.　今年の巨人は強いですよ。もっとも，投手陣に若干の不安はあります。

他方，「A。まあ B。」の言い切りが自然になるとすれば，次の（イ）のように「A。まあ，B。しかし C。」という展開においてである。

（イ）　今年の巨人は強いですよ。まあ，投手陣に若干の不安はあります。たとえば…。しかし，打線はそれを補って余りある力を持っています。

だが，この「まあ」は言い添え（但し書きの追加）ではなく，むしろ，8.3.1.1 節で説明する但し書きの先行（「まあ B けど，C。」）の変形として解釈すべきであるように思われる。

なお，次の（ウ）のように「まあ」と「もっとも」の併用もあり得る。

（ウ）　今年の巨人は強いですよ。まあもっとも，投手陣に若干不安はありますけど。

この併用は筆者の内省では不自然ではないが，多少冗長に感じられる。ここでは，本研究を「しかし，それでも」，「まず最初に」，「そしてまた」のような類義表現の二重使用（石黒 2008b:222）と解釈しておく。

但し書きBを加えるパターン（仮に「但し書きの追加」）がある。

第２に，(8.34)，(8.35) のように「まあ，Bけど，A」で，前もってBと但し書きした上で言語行為Aを行うパターン（仮に「但し書きの先行」）がある。

(8.34)　まあ，投手陣に若干の不安はありますけど，今年の巨人は強いですよ。

(8.35)　まあ，許してくれるかどうか分からないけど，花でも贈ってみたら？

第３に，次の (8.36)，(8.37) のように「Bけどまあ，A。」で，「まあ」をB節の後に置くパターンがある。

(8.36)　投手陣に若干の不安はありますけどまあ，今年の巨人は強いですよ。

(8.37)　許してくれるかどうか分からないけどまあ，花でも贈ってみたら。

この第３のパターンにおける「まあ」は発音の仕方によって解釈が変化し得る。単純な例を使えば，次の (8.38) のように「高いけど」という節と「まあ」が同じイントネーション・ユニット内[75]で発音された場合，「あの店」について，あらかじめ，「高いけど」と否定的側面を但し書きした上で，「おいしいよ」と肯定的に評価する「但し書きの先行」と同じように解釈される。

(8.38)　（あの店は）高いけどまあ，おいしいよ。（≒まあ，高いけど，おいしい。）

一方，次の (8.39) のように「高いけど」で一端切れて，「まあ，おいしいよ」で新たにイントネーション・ユニットが立ち上がる場合，「まあ」は，後続の「おいしいよ」に係って，「最高とまでは言えないが」のような限定を加えていると解釈される。

(8.39)　（あの店は）高いけど，まあおいしいよ。（≒高いけど，そこそこおいしい。）

ラフに言えば，(8.38) が「おいしいよ。もっとも，高いけど。」でパラフレーズされるのに対し，(8.39) は「高い。しかし，そこそこおいしいよ。」となり，両者は解釈が異なる。(8.39) のように，「まあ」が主節Aに係るのは，明示的但し書きとは異なる別の用法，すなわち，次節で説明する非明示的但し書き用法である[76]。

---

[75] イントネーション・ユニットとは，Chafe (1994) などで採用されている発話の単位で，「一かたまりのイントネーションの型（岩崎 2007:31)」である。イントネーション・ユニットの始まりには「通常『ポーズ』が現れ，またいったん下がってきたピッチが急に高くなる『ピッチの切り替え』が起こり，終わりには『最終母音の長音化』が見られる（岩崎 2007:31)」。

[76] このパターンの変形として，「高い。まあでも，おいしい」(「B。まあでもA。」＝「Bけどまあ，A。」)，「高い。でもまあ，おいしい」(「B。でもまあA。」＝「Bけど，まあA。」) の違いも同様に説明できると思われる。

8.3.1.2　非明示的但し書き

（8.39）や次の（8.40）のように，「まあ」が直接主節 A に係る場合，主節 A に対する但し書き B は明示的には述べられず暗示される。このようなケースを仮に非明示的但し書きと呼ぶことにする。

（8.40）a.　まあ，今年の巨人は強いですよ。

b.　まあ，おいしいよ。

c.　日本でリンゴといったら，まあ，青森ですね。

非明示的但し書きの「まあ」は話し手の内心に何らかのわだまりが残っていることを含意し，ラフには，「もっとも…だが」でパラフレーズされる。「…」の内容は，文脈から推測するしかないのだが，たとえば，（8.40）の場合，次のような解釈があり得る。

（8.40）a.　まあ，今年の巨人は強いですよ。（もっとも，不安材料はあるけど）

b.　まあ，おいしいよ。（もっとも，最高とまでは言えないけど）

c.　まあ，青森ですね。（もっとも，長野や岩手も有名だけど）

また，次の（8.41）～（8.43）も，たとえば，カッコ内のような但し書きが想定される。

（8.41）　まあ，花でも贈ってみれば。（もっとも，うまくいくとは限らないけど。）

（8.42）　まあ，2500 円くらいかな。（もっとも，ざっと計算しただけだけど。）

（8.43）　まあ，そうだね。（もっとも，全面的に賛成というわけではないけれど。）

もちろん，実際のコミュニケーションにおいて，聞き手は「まあ」によって暗示される話し手の内心のわだかまりの具体的内容をいちいち推論して補充したりせず，「何か但し書きになるようなわだかまりがあるらしい」といった程度のラフな理解で済ます場合も少なくないだろう。しかし，次節（8.3.3 節）で説明するように，ラフにであれ，但し書きの内容を想像できることは，「まあ」の生起の自然さを説明する上で重要である。

ところで，「まあ」の意味を，「概言」（川上 1993），「とりあえずの反応…＜中略＞…『ぼかし』表現（加藤豊二 1999:21）」，「処理過程の曖昧性を標示する（冨樫 2002:15）」，「発話行為の程度を和らげるヘッジ（川田 2007:177）」のように記述する先行研究がある。しかし，こうした記述は，「だいたい」，「とりあえず」，「たぶん」，「ちょっと」など他の表現にも当てはまり得るものであり，「まあ」特性を説明する上で十分ではないように思われる。たとえば，先行研究の記述で，次の（8.44）の「とりあえず」と「まあ」の違いを説明するのは難しいように思われる。

（8.44）＜居酒屋入店直後の発話＞

a.　とりあえず，ビールください。

b.？まあ，ビールください。

c.　まあとりあえずビールください。

一方，本研究の立場では（8.44）は次のように説明される。まず，（a）は，おおむね「後でいろいろ注文するつもりだが，まずは乾杯するために，ビールをください」のような意味を表す。一方，（b）の「まあ」は，ビールを注文することへの内心のわだかまり（それほどビールを飲みたくない）をほのめかす。それゆえ，（b）は，「仕方なくビールを注文している」ようなニュアンスがあり，あまり自然ではない。一方，（c）のように「まあ」と「とりあえず」が併用された場合，仕方なくビールを注文する事情が「とりあえず」によって説明され，おおむね「そんなにビールが飲みたいわけではないけど，各々が好きな酒を選ぶのにも時間がかかるので，乾杯するためにまずはビールをください」のように解釈でき，自然になる。

また，「概言」，「とりあえずの反応」，「曖昧性」，「ヘッジ」といった記述はどれも次の（8.45）のような「A。まあ B けど。」の但し書き追加のパターンには該当しないように思われる。

（8.45）　日本でリンゴといったら青森ですね。{ まあ／??だいたい／??とりあえず／??たぶん／??ちょっと }，長野や岩手も有名ですけど。

川田（2007:188）は（8.45）のような「まあ」は前言の主張を弱める働きをしている（それゆえ，自身の「ヘッジ」という記述の射程内にある）という主旨の記述をしているが，一方で「『ちょっと』と『まあ』の分布が重なる（p.178）」ことを根拠に「まあ」をヘッジとみなすという論証も行っている。だが，（8.45）のような「まあ」は「ちょっと」では言い換えられず，それゆえ，単に「ヘッジ」と言うだけでは説明として十分ではないように思われる。

もちろん文脈によっては，「まあ」が，「だいたい」（≒もっとも，正確じゃないけど），「とりあえず」（≒もっとも，後で他のこともあるけど），「たぶん」（≒もっとも，断定できないけど），「ちょっと」（≒もっとも，強制はしないけど）などとラフにパラフレーズできる場合がないわけではない。しかし，常にその種の言い換えが可能なわけではなく，「概言」，「とりあえずの反応」，「曖昧性」，「ヘッジ」などの記述はどれも包括的なものとは言いがたい。むしろ，これらは「まあ」自体の意味というよりも非明示的な但し書き「もっとも…」の文脈依存的な解釈の一部と考えるべきだろう。

また，川田（2007:177-178）は，「まあ」は”negative politeness stragtegy”として働くと

しているが，「まあ」の発話効果もこのように固定的に捉えることはできない。たとえば，次の（8.46）や（8.47）において「まあ」は，発話を丁寧にするどころか，聞き手を不愉快にさせる可能性が高い。

（8.46）　（上司に仕事を頼まれて）まあ，やっておきます。

（8.47）　（オリンピック選手団に向かって）まあ，がんばってください。

これらの発話において「まあ」は，「といっても，本当はやりたくないけど」，「もっとも，がんばったところで結果は知れているけど」といった発話者の内心のわだかまりを浮かび上がらせ，（8.46）は，不本意ながらしぶしぶ請け負っているように，また，（8.47）は相手にあまり期待していないように聞こえる可能性が高い。

このように，非明示的但し書きの「まあ」の解釈や発話効果は固定的なものではなく，文脈依存的なものとして捉える必要がある。

8.3.3　但し書きを加えるのが自然か否か

8.2.3.1 節で指摘した，「まあ」の生起制限，すなわち，どのような環境でなぜ「まあ」が不自然になるのかという問題に対する解答として，本節では，「まあ」の生起の自然さは，当該の文脈において話し手が言語行為に但し書きを加えるという想定が自然かどうかに依存するという仮説を提出する。

川田（2007:178）は，次の（8.48）の「まあ」が不自然である理由を，この文脈では「”negative politeness strategy”が要求されない（川田 2007:178）」からであると説明していた。

（8.48）＜隣の家が火事になったことを知り＞

??まあ，早く逃げろ！＝（8.12）

しかし，8.2.3.1 節で指摘したように，これは丁寧さの問題ではない。（8.48）の「まあ」が不自然なのは，隣家が火事という状況では通常一刻も早く逃げるべきであり，「もっとも，しばらくしてからでもいいけど」などの但し書きを想定するのが不自然だからである。

冨樫は，「正確な情報」の提示に「まあ」が生起しないとし，次の（8.49）の B のような発話を不自然だと判定している。

（8.49）　＜B が太郎のことをよく知っている場合＞

A：　太郎って，今何しているの？

B：??あいつは，まあ，大学生やってるよ。　（冨樫 2002：18）

しかし，冨樫自身が認めるように，（8.49）は，たとえば「もっとも，大学にはほどんど

来ていないけど」といった含みを想定するならば特に不自然ではなく，この場合，命題＜太郎は大学生である＞は，事実としては「正確な情報」（命題は真）であるが「まあ」と共起している。つまり，「正確な情報」の提示という発話行為は，「もっとも…」という但し書きが想定しにくい場合があるだけであり，必ずしも想定が不可能なわけではない。

一方，（8.50）の質問や次の（8.51）の煩悶の自問においては，話し手が何を但し書きしているのか想像できず，それゆえ，文も不自然になる。

（8.50）??まあ，太郎は東大に行っていたのですか？＝（8.13）

（8.51）??まあ，俺はこれからどうやって生きていけばいいんだ。

（8.50）や（8.51）を「太郎は東大に行っていたのですか？もっとも…」，「どうやって生きていけばいいんだ。といっても…」のように展開しても，「…」に何が入るのか解釈できない。そもそも但し書きつきの質問，但し書きつきの煩悶といった行為が不自然である。

一方，命題の真偽が不定の場合でも，（8.52）のように「だろう」で予想を述べる文において，「もっとも，断言はできないが」のような但し書きを解釈することは容易である。また（8.53）は終助詞「か」を含んでいても，「もっとも，もう少し休んでいてもいいけど」のような但し書きが想定できる。同様に（8.54）も変項を含んでいるが，「もっとも，具体的にどうするかはまだ分からないけど」のような但し書きを解釈しやすい。

（8.52）　君と父親とはどうかしらんが，母親とはまあうまく行くだろう。＝（8.14）

（『築地河岸』，川田 2007:183 から引用）

（8.53）　まあ，そろそろ行きましょうか。

（8.54）　まあ，どうにか生きていくよ。

さらに，「まあ」は，次の（8.55）や（8.56）のような気づきや驚きを表明する発話（感動詞「あ」，「え」，「お」，「げ」などを伴い得る発話）にも付加できない。これも「但し書きつきで気づく」，「但し書きつきで驚く」という行為が想定できないことに起因する[77]。

（8.55）　｛ ??まあ／あ ｝，雨降ってきたよ！

（8.56）　A：明日，田中さんも来るかもしれないってさ。

B：｛ ??まあ／え ｝，そうなんですか。

川田（2007:183）が「まあ」と文末表現との共起制限を示す例として挙げている次の（8.57），（8.58）が不自然なのは，いずれも感動詞「あ」や「お」を伴い得る文脈における発話だか

[77] このような気づきや驚きの文脈での「まあ」は『お嬢様』的な驚きの感動詞には解釈できるが，発話内容に但し書きを加える「まあ」には解釈できできない。

らであり，文末表現「ね」や「らしい」との共起の問題ではない。

（8.57）　＜机の上のパソコンを見て＞

｛ あ／??まあ ｝，新しいパソコンを買いましたね。＝（8.18）

（8.58）　＜卒業名簿を見たら，みちこの姓が変わっていた。＞

｛ お／??まあ ｝，みちこはもう結婚したらしい。

たとえば，次の（8.59）のように「まあ」は，「ね」や「らしい」とも共起し得る。

（8.59）A：　みちこって，もう結婚したのかな？

B：　うん，まあ，そうらしいね。（もっとも，確かじゃないけど）

このように，「まあ」の生起制限は，文末表現との共起制限や命題の真偽というような文法的・意味論的・固定的な問題としてではなく，当該文脈で当該行為に話し手が但し書きを付加するのが自然かどうかという語用論的な問題として捉える必要がある。

8.3.4　なだめの「まあ」

8.2.3.2 節で述べたように，「まあ」は発話末に生起しにくい場合がある。そこで明らかにすべきなのは，どのような場合になぜ「まあ」が発話末に生起しにくいのかである。

これに対する本研究の解答は，但し書き的「まあ」とは文法的性質の異なる，「マア」の用法（以下，なだめ用法と呼び，「マア」と表記する）が存在し，前者の但し書き的「まあ」は発話末にも生起し得るが，後者のなだめの「マア」は発話末には生起しにくいというものである。

但し書き的「まあ」は，「今から言おうとしていること」あるいは「今言い終えたこと」に但し書きを加える際に発話される点で発話内容志向的である。一方，なだめの「マア」は，相手の行為を制したり，なだめる際に発せられ，行為遂行的・聞き手志向的な性格を有し，手のひらを前後させて軽く相手を押さえつけるような動作を伴うのが普通である。

但し書き的用法となだめ用法を見分ける簡単なテストは，なだめ用法の「マア」は，次の（8.60）のように，「マアマア」や「ママママ…」のような「マ（ア）」の連続と代置できることである。

（8.60）＜興奮状態にある相手をなだめて＞

A：こんな会社もう辞めてやる！

B：a.　｛ マア／マアマア／ママママ ｝，落ち着いてください。

b.？落ち着いてください，マア[78]。

（8.60）の発話は「あなた気持ちは分かるけど，ひとまず気を静めてください」といったニュアンスがある。その点で，なだめの「マア」は意味的に，但し書き的「まあ」と連続している。しかし，なだめの「マア」は，「マアマア」や「ママママ…」のように連続して発話され得るものであり，また，発話末に生起しにくいという点において異なっている。

冨樫（2002）が，次の（8.61b）～（8.63b）における発話末の「まあ」を不自然だと判定したのは，これらの「まあ」をなだめ用法として解釈したからではないかと推測される。

（8.61）　a.　まあ，いいじゃないですか，そんなことは。

　　b.　いいじゃないですか，そんなことは，まあ。

（8.62）　a.　まあ，話の続きは，今度会ったときにでも。

　　b.　話の続きは，今度会ったときにでも，まあ。

（8.63）　a.　まあ，明日までには完成させますよ。

　　b.　明日までには完成させますよ，まあ。＝（8.25）

しかし，筆者を含む６名の日本語母語話者（男性４名，女性２名）が，（8.61）～（8.63）の自然さを「自然」，「多少違和感あり」，「不自然」の３択で判定したところ，（8.62b）について 1 名が，（8.63b）について 2 名が「多少違和感あり」とした以外はすべて「自然」という判定であった。つまり，（8.61）～（8.63）は，少なくとも非文ではなく，発話内容志向的な但し書き的「まあ」として解釈する余地も残されている。

冨樫の記述の問題は，発話内容志向的な但し書き的「まあ」と聞き手志向的ななだめの「マア」を区別せず，すべて「発話末に現れることができない」と結論したことにある。それゆえ，「まあ」が発話末に出現し得ないことを前提にした「『まあ』が直接関わっているのは計算処理過程である（冨樫 2002:21）」という結論も見直さなければならないだろう。

但し書き的「まあ」は，「今から言おうとしていること」あるいは「今言い終えたこと」に対して，明示的ないし非明示的に但し書きを加える際に発話される。そこで必要とされる心内行動は，話し手が心内で「今から言おうとしていること」あるいは「今言い終えたこと」を観察し，それを「但し書き付き」と評価することである。しかし，「まあ」はこのような評価行為そのものに対応しているわけではない。なぜなら，話し手が「まあ」を発する時点で，但し書きがほのめかされるということは，その時点で評価は終わっており，

[78] ただし「落ち着いてください」と「マア」の間にポーズを長めに取るなどして，両者を別の発話として分離すると許容度が増す。

評価の結果押される「但し書き付き」の烙印が「まあ」だと考えられるからである。つまり，少なくとも心内行動という点において，「あのー」や「えーと」のように言語形式製作，意味製作といった心的過程・心内行動そのものに対応する形式と，但し書き的「まあ」のような評価の結果を表す形式とを同じように捉えることはできない。

一方，なだめの「マア」は，相手への理解を示しつつ相手の行為・状態を制するという行為そのものに対応している。しかし，これも「計算処理」のような内的情報処理ではなく，行為遂行的である点において，「あのー」や「えーと」とは異なっている。

8.3.5　「まあ」の品詞論

本節では，「まあ」の品詞論的位置づけを検討する。まず，8.3.5.1 節では，但し書き的「まあ」となだめの「マア」の品詞論的位置づけを論じる。また，8.3.5.2 節では，「まあ」とフィラーの関係を論じる。

8.3.5.1　但し書き的「まあ」となだめの「マア」の品詞論

一般的な副詞と感動詞の違いとして，①副詞は，述語や文全体を修飾すること，②感動詞は，独立していることが挙げられる（益岡・田窪 1992 など）。これは，より具体的には，①文や述語の意味を限定するか否か，②（前後の文脈を想定せずとも）一語で一行為としてなりたつか否か，と言い換えることができるだろう。たとえば，次の（8.64）の（a）の「たぶん」，（b）の「一応」が副詞，（c）の「あ」，（d）の「えーと」は感動詞である。

（8.64）　A：忘年会いつだっけ？

B：a.　たぶん 23 日だよ。

b.　一応 23 日だよ。

c.　あ，23 日だよ。

d.　えーと，23 日だよ。

まず，①の「文の意味を限定するか否か」という基準について，「たぶん」は「忘年会は 23 日に決まりそうである」（蓋然性），「一応」は「今後，変更の可能性もあるが現時点では 23 日に決まっている」（暫定性）のように意味を限定するのに対し，「あ」や「えーと」は，＜忘年会は 23 日である＞という命題の真偽の確信度や確定性に影響していない。

一方，②「文脈を想定せずとも，一語で一行為としてなりたつか否か」とは，たとえば，見知らぬ人が目の前で当然「あ」や「えーと」と発した場合，「あの人は何かに気づいたよ

うだ」,「あの人は何かを探しているようだ」のように，それだけで一つの完結した行為として理解可能だということである。これに対して,「たぶん」,「一応」は，先行文脈や後続発話がなければ，一語では発話行為として完結しない。それゆえ，目の前でいきなり「たぶん」,「一応」とだけ発せられても，何をしているのか分からない。

さらに，①と②の基準に関連して，副詞は文の意味を変えずに発話末にも移動し得るが，感動詞は（少なくとも同じものとしては）発話末には移動できないというテストを行うこともできる。

（8.65）　23 日だよ，{ たぶん／一応／??あ／??えーと }。

文の意味の限定は基本的には位置を問わず可能であり,「たぶん」,「一応」は≪忘年会は 23 日である≫という命題を後ろからでも修飾できる。一方,「あ」や「えーと」のような感動詞はそれ自体が一語で行為として成立している。それゆえ,「いつそれが行われるのか」という行為のタイミングが変わると，同一の行為（出来事）とは解釈できず，不自然になる場合が多い。

この基準に照らすならば，但し書き的用法の「まあ」は明らかに副詞的である。「まあ，23 日だよ」といえば，たとえば「もっとも，その日に予約が取れればだが」のような含意があり，＜忘年会は 23 日だ＞という命題の真偽の確信度や確定性に影響し得る。また,「23 日だよ，まあ。」という発話末の生起も可能である。さらに，文脈なしに「まあ」とだけ発せられても，（驚きでなく但し書き的用法と解釈するならば）不審である。

一方，前節で検討したなだめ用法の「マア」は，むしろ感動詞的である。意味的には但し書き的「まあ」と連続するため，修飾の有無を判定するのは困難だが，少なくとも，発話末に生起しにくいということは，なだめ用法の「マア」が文や述語の修飾にではなく，単独で「気持ちは分かるが，ひとまず押さえろ」のような，なだめ行為そのものを形成していることが推測される。また，ゆっくりとした発音で動作とともに発せられたり,「マアマア」とか「ママママ」のように連続させると，後続発話や文脈を想定せずとも，なだめ行為として理解できる。

この「連続し得る」,「発話末に生起しにくい」という性質は，子供などを叱る際に発せられる「こら」や，誰かを誘う際に発せられる「さあ」など聞き手志向的・行為遂行的な感動詞の多くに共通している。

（8.66）a.　{ こら／こらこら／こらこらこらこら }，廊下を走っちゃいけません。

b.？廊下を走っちゃいけません，こら。

（8.67）a.　{ さあ／さあさあ／ささささ }，寄ってらっしゃい，見てらっしゃい。

b.？寄ってらっしゃい，見てらっしゃい，さあ。

したがって，やはり，なだめの「マア」は，但し書き的「まあ」とは文法的性質において異なる別の用法とするのが妥当だと言える。前者は感動詞，後者は副詞である。

8.3.5.2　フィラーの「まあ」？

しかし，一概に，但し書き的「まあ」を，「たぶん」や「一応」と同じだとみなすこともできないように思われる。それは，「まあ」の係り先が必ずしも文や述語に限定されず，語や文節などの小さな単位にも但し書きを加えることができるからである。すなわち，但し書き的「まあ」において，但し書きを付ける対象になる言語行為 A は，「助言」や「陳述」などのいわゆる発話行為（発語内行為，文レベルの言語行為）に限られず，たとえば，次の（8.68）や（8.69）のように，より小さなレベルの言語行為（節・句・語レベル）に対しても働くこともある。

（8.68）　語用論では，聞き手による inference，まあ，解釈，の過程を解明することが重要なわけです。

（8.69）　前頭前野というの，頭の中の，まあ，CEO が，いろんな，まあ，意思決定を行っているわけです。

（8.68）において「まあ」は，話し手が，英語の inference の訳語として日本語の「解釈」を選択した行為（用語行為ないし意味行為）に対して，「もっとも，これは厳密な訳とは言えないが」のような但し書きをほのめかしていると解釈できる。また（8.69）は一文中に「まあ」が２つ出現しており，最初の「まあ」は，脳の前頭前野の役割を説明するための比喩として「CEO」という単語を選択した行為に「もっとも，全く同じではないが」のような但し書きを，２番目の「まあ」は，前頭前野の仕事を意思決定とくくった行為について「もっとも，そう単純ではないが」のような但し書きをほのめかしていると解釈できるだろう。

このような語や句レベルの但し書きもケド節によって明示的に述べることができる。

（8.70）　語用論では，聞き手による inference，まあ厳密な訳ではないですけれども，解釈，の過程を解明することが重要なわけです。

また，このような明示的但し書きは，挿入節と主節のつなぎ目を多少変更すれば，後ろから但し書きを追加することもできる。

（8.71）　語用論では，聞き手による inference，つまり，解釈，まあ厳密な訳ではな

いですけれども，この過程を解明することが重要なわけです。

しかし，次の（8.72）のように非明示的な場合は，対象の後ろに置くことができない

（8.72） 語用論では，聞き手による inference，つまり，解釈，まあ，この過程を解明することが重要なわけです。

上の（8.72）のように後置すると「まあ」の係り先が前接の「解釈」の部分ではなく，後接の「この過程を解明することが重要なわけです」になってしまう。

このような，小さな言語行為に係る「まあ」の後置制約を見ると，これを次の（8.73）の「えー」のようなフィラーと同じように扱いたくなるかもしれない。

（8.73）a. 語用論では，聞き手による inference，えー，解釈，の過程を解明することが重要なわけです。

b. 語用論では，聞き手による inference，つまり，解釈，えー，この過程を解明することが重要なわけです。

（8.73a）において，英語の”inference”の訳語を思い出す最中に発話される「えー」は，（8.73b）のように後置した場合，後続の「この過程を解明することが重要なわけです」という発話を作り出す作業に関わることになり，同じ心内過程に関わるものとしては後置できない。

しかし，（8.72）の「まあ」の後置制約は，必ずしもフィラーとの類似性を示しているわけではないように思われる。というのも，（8.74）のように「まあ」の出現箇所を発話末として区切り，係り先の曖昧さをなくせば，後置修飾は可能だからである。

（8.74） 語用論では，聞き手による inference，つまり，解釈ですね，まあ。この過程を解明することが重要なわけです。

一方，フィラー「えー」は，このような後置ができない。

（8.75）??語用論では，聞き手による inference，つまり，解釈ですね，えー。この過程を解明することが重要なわけです。

また，「まあ」の働きはあくまで但し書きをほのめかすという「意味的」なものであり，心内「作業そのもの」に対応する「えー」などとは異なっているだろう。したがって，「まあ」は，文や述語だけでなく，文節や単語にも係る場合があると記述すればよく，わざわざ感動詞化した「まあ」があると考える必要はないように思われる。

もし但し書き的「まあ」とは別にフィラー化（感動詞化・無意味化）した「マア」があると主張するのであれば，両者を見分ける基準を提出する必要がある。そのような基準と

して，川田（2007:179）は，次の（A）～（C）を提出している。

（A）　すでに真であることが確定しており，それを話し手が知っているような事実の叙述に主観的な判断を示す標識が介在する余地はない。

（B）　対人的なポライトネスの一戦略として機能しているようにみえない。

（C）　一文中に「まあ」が複数現われている場合もあるが，その数が解釈に影響を与えることがない。　川田（2007:179）

しかし，本章でのこれまでの検討から明らかなように，「まあ」は，必ずしも命題の真偽や知識状態に関わるものではなく，また，常に発話を丁寧にするわけでもない。さらに，上の（8.69）のように一文に複数の「まあ」があった場合でも，「その数が解釈に影響を与えることがない」とは言い切れないように思われる。

また川田（2007:184）が，「発話内容に一切影響を与えない」フィラー化した「マア」とみなす次の（8.76）は，表現選択行為に対する但し書きの「まあ」としても十分解釈できるように思われる。

（8.76）　（講演で）私があの一高田馬場に住むようになったかと言いますとえー田舎から あの一 上京してきまして ま 大学の受験のために あの一 最初にあの 早稲田というところに住みました。

（『日本語話し言葉コーパス』S03M0403，川田 2007:184 から引用）

（8.76）において話し手は「ま」によって「大学の受験のために」という部分に「もっとも，それが唯一の理由ではないが」のような但し書きを加えていると解釈することは十分に可能であり，また，自然であるように思われる。非明示的であるため想像するしかないのだが，わざわざ上京して早稲田に住まなければ大学受験ができないというわけではなく，都会での生活への単純な憧れも動機のひとつであったなどというのは大いにありそうなことである。

また，たとえば，次の（8.77）は，「不正入学事件」というタイトルの模擬講演からの抜粋で，この場面で話者は事件の現場となった学校について説明しており，一文中に「まあ」が２つ出現している。

（8.77）これは，あの一国立の教育大学の付属小学校，ま中学校もある訳ですけども，その一福岡の地元では，まー言わばエリート校な訳です。（『CSJ』S05M1506）

最初の「ま」は，「教育大学の付属小学校」と述べたことに対して，後ろから「中学校もある訳ですけども」と明示的に但し書きを加え，２番目の「まー」は「エリート校」とい

う言い方について，「もっとも，一概にそうとも言えませんが」のような限定を暗示していると特に問題なく解釈できる。

もちろん，実際の談話において，話し手が「まあ」によって，どのような内容の但し書きをしているのかが常にはっきり分かるわけではないだろう。だが，研究者が，内心のわだかまりの具体的内容を解釈しにくいからといって，話し手自身が内心においてわだかまりを抱いていないことにはならないのではないだろうか[79]。

さらに，川田は，フィラーの「マア」は音声的に「短く発音される傾向がある（川田 2007:179）」とも述べているが，この記述にも疑問が残る。というのも，「えー」，「あのー」，「うーん」などの他のフィラーは典型的には延伸されて発音される傾向があり，短く発音された場合，むしろフィラーらしくなくなるからである。

このように，但し書き的「まあ」とは別にフィラー化した「マア」を立てるという論は，少なくとも，現時点で両者を明確に区別できるような基準を示しておらず，「どう区別するのかは分からないが，とにかく，フィラー化している」という不透明な主張になってしまっているように思われる。本章で検討してきたように，但し書き的「まあ」は，心内行動との対応づけができず，副詞的であり，また，「フィラーへの文法化（川田 2007:190）」を見分ける基準もないことから，少なくとも現時点において，但し書き的用法とは別のものとして，フィラー的用法を認める必要はないように思われる。

8.3.6 「まあ」と英語の下降上昇調との対照

日本語教育において，ある日本語の語彙や文法項目が，たとえば，英語の何に該当するのかという対応関係を示すことは，両者の意味や用法が完全に一致するわけではないにせ

---

[79] 戸田山（2002:252-253）は，書き言葉においてカギ括弧が表現選択行為に対する但し書きを暗示する効果を持つ場合があるとし，次の（ア）を挙げている。

（ア） 時間が恣意的に「構成」されたものにすぎないとするならば…これが，自己というもののある「位相」を鮮やかに照らしだすことになる。

戸田山（2002）は，（ア）のカギ括弧は，「オレサマって，この言葉をちょっとふつうとは違った深い意味で使ってんのよ。わかるかな。わかんね～だろうなあ」のようなニュアンスがあると指摘している。筆者の直感では，「まあ」を連発する話し手は，時として「偉そう」に感じられることがある。また，次の（イ）のようなブログの記事もある。

（イ） 福田康夫新首相の発言。その意味内容は当たり障りのないモノだが，語感に注目してみると彼の人間像が見えてくる。・・・＜中略＞・・・耳につくのは「まあ」が多いことである。・・・＜中略＞・・・不遜な性格を浮き彫りにしてしまったのである。語感が性格を決めていく
(http://blog.goo.ne.jp/hoboike_diary/m/200711/1z)

時として「まあ」が生む偉そうな印象は，戸田山の指摘と無関係ではないように思われる。すなわち，内心のわだかまりをほのめかし，ある種の「深遠さ」をかもしだす態度が「偉そう」と解釈されるのではないだろうか。ただし，この点は印象・推測の域をでず，検証は今後の課題としたい。

よ，学習者にラフなイメージをつかませるための導入として便利な方法だろう。

『An Integrated Approach to Intermediate Japanese』（2008）や『JAPNESE FOR BUSY PEOPLE Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ KANA VERSION』（1995，1996，1997）といった日本語教科書では，「まあ」の訳語として英語の”well”が挙げられている。また，川田（2007:189）は，「まあ」と英語の”I mean”, ”well”とを対照し，ヘッジの「まあ」は「I mean と well が持つ機能を兼ね備えている」と述べている。しかし，「まあ」≒”well”ないし”I mean”という記述は「まあ」の特性を理解させる上であまり有効ではないように思われる。

たとえば，次の（8.78）の「まあ」は「ええと」や「うーん」で代替できないことはないが，＜内心では，試験日の変更は望ましくないと思っていることを示しつつ，しぶしぶ承諾する＞という「まあ」のニュアンスとは異なる。

（8.78）＜キャロル・ベーカー，日本語の見た先生の研究室へ行く＞

キャロル：日本語の試験の日に，ほかの試験が二つもあって……。

三　田　：一日に試験が三つですか。

キャロル：ええ，そうなんです。日本語の試験をその前の日に受けさせていただけないでしょうか。

三　田　：<u>まあ</u>，そういうことなら仕方ありませんね。

（『An Integrated Approach to Intermediate Japanese』2008:45，傍線引用者）

さらに，次の（8.79）のような「まあ」は，「ええと」・「うーん」や「つまり」・「要するに」などではパラフレーズしがたいだろう。

（8.79）　私たちが使ったテキストは，日本の小学一年生の教科書だった。<u>まあ</u>小学一年生としてはかなり面白い内容だったと思うが，それにしても私はもう小学一年生とはかなり齢が違っていたし，趣味も異なっていた。（ドナルド・キーン『日本を理解するまで』，新潮社，『An Integrated Approach to Intermediate Japanese』2008:240 から引用，傍線引用者）

本節では，但し書き的「まあ」の意味や用法は，”well”や”I mean”よりむしろ，英語の下降上昇調（fall-rise intonation）に類似していることを指摘したい。

Wells（2006）は，次の（8.80），（8.81），（8.82）等を挙げ，「下降上昇調を用いる話し手は，発話内容に対して留保を有する」，「留保の内容は明示的に述べることも，述べずに暗示することもできる」（括弧内を明示的に述べるか否かは任意）と説明している。

（8.80）　A: Can we fix a date for the meeting?

B: Well we could try ∨Monday（｜though not if that's ∨difficult for you.）

（Wells 2006:28 に基づく）

（8.81） A: What's she like as a colleague?

B: Well she ∨works very hard.（｜but she has no imagination.）

（Wells 2006:28-29 に基づく）

（8.82） A: Is this the way to Holborn?

B: I ∨think so.（｜but I'm not quite sure.） （Wells 2006:30 に基づく）

こうした用例は下降上昇調の部分を「まあ」に置き換えて，日本語に訳すことができる。

（8.83） 田中：打ち合わせ，いつにしましょうか。

山田：えーと。まあ月曜あたりどうかなと思うんですが（もっとも，田中さんのご都合が悪くなければですが)。

（8.84） 鈴木：彼女どう？

遠藤：うーん。まあがんばってるよ。(でも，もうちょっと頭使ってくれるといいんだけどね)

（8.85） A：池袋ってこっちですか？

B：まあ，そうだと思いますよ（といっても，確かじゃありませんが)。

ただし，日本語の「まあ」と英語の下降上昇調の意味が完全に一対一で対応するわけではない。「まあ」の含意が，「A。もっとも B だが」のように，主たる言語行為 A に，従たる B 節を但し書きするという関係に限られるのに対して，下降上昇調の働きはより広く，命題 A と命題 B の対比的関係まで表すことができるという。

（8.86） ∨Guns don't kill people. （Wells 2006:28，引用者訳）

Wells（2006:28）によると，(8.86）の「銃が人を殺すのではない」における下降上昇調は，「人が人を殺すのだ」(people kill people）という対比的な命題を含意する。一方，これを次の（8.87）にように日本語で言い換えた場合，「まあ」の含意として可能なのは，「銃が人を殺すんじゃない」という主張への但し書き（たとえば，「もっとも，暴発などの例外もあるが」等）であり，「まあ」自体が対比的命題を含意するとは言いがたいだろう。

（8.87） まあ，銃が人を殺すんじゃないんですよ。

このように両者が意味する範囲は完全に一致するわけではないが，日本語では「まあ」として語彙化された意味と似たものが，英語では韻律に担われているという点は興味深い。

8.4　強調的用法

前節では，「まあ」の含意や生起環境を説明するには，＜話し手が内心のわだかまりにこだわり，それを明示的ないし非明示的に但し書きする＞用法であると記述するのが有効なことを論じ，これを但し書き的用法と呼んだ。また，8.3.4 節では，但し書き的用法と意味的に連続するが文法的性質において異なる別の用法としてなだめ用法を認めた。

本節では，但し書き的用法，なだめ用法とは意味的にまったく異なる用法について論じる。それは，＜話し手が内心のわだかまりには全くこだわらず，それを切り捨てる＞用法で，本研究では，これを強調的用法と呼ぶ。

まず，強調的用法の「まぁー」と但し書き的用法の「まあ」の意味の違いを再度説明しておく。

（8.88）　日本でリンゴといったら，｛ まあ／まぁー ｝青森ですよ。

（8.89）　宮島のあなごは，｛ まあ／まぁー ｝おいしかったですよ。

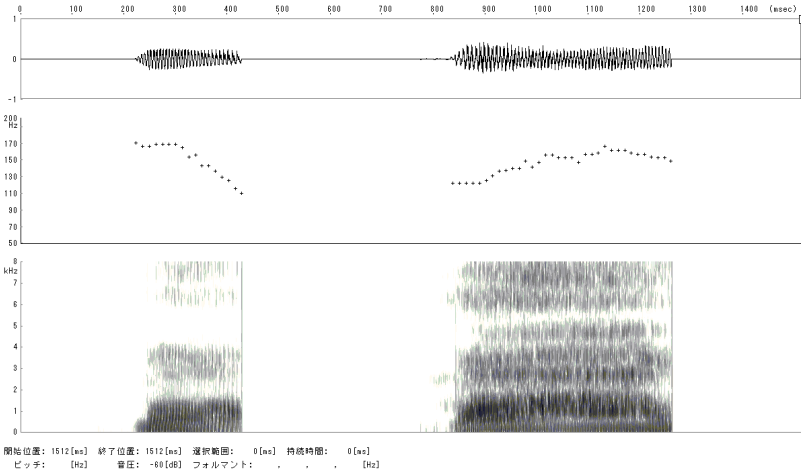
（8.88），（8.89）において「まあ」は，「青森だ」，「おいしかった」と主張しつつも，「もっとも，長野や岩手などの他の産地もあるが」，「もっとも，明石には及ばないが」のような内心のわだかまりをほのめかす。他方，「まぁー」は，「青森だけ押さえておけば間違いない」，「とにかくおいしかった」のように内心のわだかまりに関する含意はなく，むしろ主張を強めるような働きをする。

強調的用法を取り上げた先行研究は，これまで尾上（1999）のみであり，その記述も意味的特徴についての簡単な指摘にとどまっている。そこで以下では，但し書き的用法と強調的用法は，どのように区別できるのか（8.4.1 節，8.4.2 節），また，強調的用法の「まぁー」はいつ使うことができるのか（8.4.3 節，8.4.4 節）を明らかにしていく。また，8.4.5 節では，強調的用法「まぁー」の品詞論的位置づけと驚きの「マア」との文法的性質の違いを論じる。

8.4.1　「まぁー」の音声的特徴

但し書き的用法の「まあ」と強調的用法の「まぁー」は，多くの場合，音声的特徴において区別できる。下の図は，それぞれ「まあおいしかったですよ」（但し書き的用法）と「まぁーおいしかったですよ」（強調的用法）という文を筆者が発音し，それぞれ『まあ』の部分を SUGI スピーチ・アナライザーで音響分析したものである。

まあ　　まぁー



【図 8.3】　但し書き的用法と強調的用法の韻律

両者が明確に異なるのは語の長さとピッチパターンである。典型的には,「まあ」は短く発音されやすい（上図では約 210ms）のに対して,「まぁー」は長く引き伸ばされやすい（上図では約 410ms)。またピッチ曲線のパターンは,「まあ」が高低のパターンなのに対し,「まぁー」は低高のパターンである。

また，両用法は，後にポーズを置けるかどうかにおいても異なる。「まあ」は「まあ，おいしかったですよ」のように直後にポーズが置くことができるが,「まぁー」は「まぁーおいしかったですよ」が続けて発音されなければならず,「まぁー，おいしかったですよ」のようにポーズを置くことができない。

韻律的特徴は但し書き的用法と強調的用法の区別においてもっとも分かりやすいものだが,「低高の音調で延伸を伴うならば，強調的用法である」とは言えるが，その逆「強調的用法であれば，低高の音調で延伸を伴う」は必ずしも成り立たない。強調的「まぁー」と但し書き的「まあ」を見分けるには，次節（8.4.2 節）で扱う構文的特徴も考慮する必要がある。

8.4.2　「まぁー」の構文的特徴

但し書き的用法の「まあ」と強調的用法の「まぁー」は構文的特徴においても違いがある。まず強調的用法は，下の（8.90）のような「A。マア B けど。」，および,「マア B けど，A。」のような「マア」が B 節に先行するパターンに現れることができない。これは内心のわだかまりに全くこだわらず，それを切り捨てるという「まぁー」の意味と，内心のわだ

かまりをB節としてわざわざ言い添えるという行為が矛盾するためであると説明できる。

（8.90）a.　日本でリンゴといったら青森ですね。｛ まあ／??まぁー ｝長野や岩手も有名ですけど。

b.　日本でリンゴといったら，｛ まあ／??まぁー ｝長野や岩手も有名ですけど，やっぱり青森ですね。

一方，次の（8.91）のような「Bけど，マアA」のパターンは可能である。これは「たしかにBもある。しかし，そんなことはともかくAだ」という流れに矛盾がないからだと説明できる。

（8.91）　日本でリンゴといったら，長野や岩手も有名ですけど，｛ まあ／まぁー ｝青森ですね。

また両用法は，言語行為Aが，ケド節（B）を伴わず単独で現れる場合にも違いがある。「まあ」は，次の（8.92）のように，a.発話頭，b.発話中，c.発話末のどこにでも生起し得るのに対して，「まぁー」は，次の（8.92c）のように，述語の後ろには基本的に生起しない。

（8.92）a.　｛ まあ／まぁー ｝日本でリンゴといったら青森ですね。

b.　日本でリンゴといったら｛ まあ／まぁー ｝青森ですね。

c.　日本でリンゴといったら青森ですね｛ まあ／??まぁー ｝。

さらに，話し手が感嘆する際に発せられる次の（8.93）のような「～の～こと」の文型に生起した「マア」は音調に関わらず，強調的に解釈され，但し書き的には解釈できない。

（8.93）　a.　あの芝居のマアおもしろくないこと。

b.　あの芝居のマアおもしろいことといったらないね。

c.　今年の阪神のマア強いこと強いこと。

これらの構文に生起する「マア」が但し書き的用法に解釈できないのは，8.3.3節で述べた原則によって「但し書き付きで感嘆する」という行為が不自然だからだと説明できるだろう。また，この構文において強調的用法の音調における条件が緩和するのは，但し書き的な解釈があり得ず，曖昧性がないからだと考えられる[80]。

[80] ただし，この構文においても強調的用法の音調以外の韻律的特徴に関する制約は残っているようである。たとえば，次の（ア）のように「マ」と短く発音するのは，筆者の内省ではあまり自然ではない（ただし，短くても自然だと判断する母語話者もいた）。

（ア）a.??あの芝居のマ面白くないこと。
b.??あの芝居のマ面白いことと言ったらないね。
c.??今年の阪神のマ強いこと強いこと。

また，次の（イ）のように「マア」の後にポーズが続くのも（歌舞伎の口上のような特殊な発音でなければ）あまり自然ではない。

また，上では，強調的「まぁー」は発話末に生起しないと述べたが，この制約も「～の～こと」文型においては若干緩和する。(8.94) のように「マア」が発話末に生起しても強調的用法として解釈できる[81]。

(8.94) a.. あの芝居のおもしろくないことマア。

b. あの芝居のおもしろいことといったらないね，マア。

c. 今年の阪神の強いこと強いことマア。

このように，但し書きか強調かという解釈に曖昧さがない環境では，強調的用法も発話末にも生起し得る。

8.4.3 「まぁー」と発話行為

但し書き的「まあ」と強調的「まぁー」は共起し得る発話行為においても異なる。強調的「まぁー」は，次の (8.95) ～ (8.97) のように，指示や約束などの行為を行なう行為遂行的発話 (performative) とは共起しない。

(8.95) { まあ／??まぁー }お座りください。(指示)

(8.96) { まあ／??まぁー }私がやっておきます。(申し出)

(8.97) { まあ／??まぁー }いいか。(あきらめ)

一方，命題を陳述する形式の文でも，(8.98) のような話し手の主観的な意見を述べる文としか共起せず，(8.99) のように客観的な事実を記述したり，説明する文とは共起しない[82]。

(8.98) 日本でリンゴといったら{ まあ／まぁー }青森ですね。

(8.99) iPhone というのは，{ まあ／??まぁー }電話もできる音楽プレイヤーですね。

このように，強調的用法の「まぁー」は，行為遂行型の文や事実を記述する文とは共起せず，また，前節で指摘したように「～の～こと」のような心情表出の構文に生起した「マア」が強調的用法にしか解釈できないことを考えると，強調的用法は，話し手の主観的な意見を委細かまわず表明するという発話行為に特化していると言うことができる。

(イ) a.??あの芝居のマア，面白くないこと。
b.??あの芝居のマア，面白いことと言ったらない。
c.??今年の阪神のマア，強いこと強いこと。

[81] これらを不自然と感じる人もいるようだが，少なくとも筆者と日本語母語話者のインフォーマント２名はこれらを自然と判断した。

[82] ここでは仮に，他者による反論の余地が残された主張を「主観的な意見」，反論の余地がほぼない主張を「客観的事実」と呼ぶ。

8.4.4 「まぁー」と体験

だが，主観的意見を述べていれば，常に強調的用法が使えるわけではない。たとえば，今まさにあなごを食べている話し手が次の（8.100a）や（8.100b）のように発話するのは自然だが，（8.100c）のように強調的用法の「まぁー」を用いるのは自然ではない。その点で「まぁー」は「めちゃくちゃ」や「すっごい」のような程度副詞とは異なる。また，情報獲得直後に発話される（8.100d）のような『お嬢様』的な驚きの感動詞「マア」とも異なる。

（8.100）＜あなごを一口食べて＞

a.　うわー，このあなご，めちゃくちゃおいしい！

b.　うわー，このあなご，すっごいおいしい！

c.??うわー，このあなご，まぁーおいしい！

d.　マア，おいしい！

8.3.3 節において，但し書き的用法の「まあ」が，気づきや驚きの発話とは共起しないという制約を述べたが，ここで問題にしている強調的用法の「まぁー」の生起制約はこれとも異なる。たとえば，次の（8.101）のように「まあ」が生起し得る環境においても，「まぁー」を発することはできない。

（8.101）＜A と B があなごを食べている＞

A：　どう？おいしい？

B：a.　うん。まあ，おいしいよ。（そこそこおいしい）

b.??うん。まぁーおいしいよ。（非常においしい）

c.??マア，おいしい！（驚きの感動詞）

強調的用法の「まぁー」が用いられる典型的場面は，あなごを食べている現場ではなく，次の（8.102）のように，あなごのおいしさを体験談として回顧的に語る場面である。

（8.102）　A：　広島旅行いかがでした？

B：　宮島であなご食べたんですけど，それが，まぁーおいしかったんですよ。

しかし，あなごを食べている現場でも，電話などでその現場にいない人にあなごのおいしさを伝える場合ならば，「まぁー」を発話し得る[83]。

（8.103）　今，宮島でね，あなご食べてるんですけど，これがまぁーおいしいんです

[83] 例文（8.103），（8.104）は，波多野顕博氏（神戸大学大学院生）との私的談話から示唆を得た。

よ。

また，同じくあなごを食べている現場でも，次の（8.104）のように，「まぁー」を発話し得る場合もある。

（8.104）　田中さん田中さん，俺，今，発見しちゃったんですけど，このあなごにね，こう，マヨネーズつけたら，｛ まぁーおいしいですよ／まぁーおいしくなりますよ ｝。

以上のような強調的用法の「まぁー」の生起における制約を説明する上で有効なのが，「まぁー」が「体験の文法」に属すると考えることである。定延（2002，2008）は，言語によって表現される情報（以下，「言語情報」）を他者との共有可能性の程度に応じて，「知識」（共有可能性が高い）と「体験」（共有可能性が低い）に連続性を認めつつも二分し，「知識の文法とは別に，体験の文法がある（定延 2008:40）」と述べている。

（8.100），（8.101）において，「まぁー」の生起が不自然なのは，目の前のテーブルにあなごがあるという状況において，＜あなごのおいしさ＞という情報は，「ちょっと一口」という行動によって容易に共有することが可能な情報であり，これを体験として語るのが適当ではないからである。他方，程度副詞「めちゃくちゃ」や但し書き的「まあ」は知識の文法に属し，（8.100）や（8.101）において＜あなごのおいしさ＞は，他者と共有可能な知識として語られている。

一方，（8.102）において強調的「まぁー」が生起できるのは，広島旅行の体験談として語っているからであり，＜あなごのおいしさ＞という情報は話し手の個人的体験として位置づけられている。また（8.103）のように，その場にいない聞き手に向かって＜あなごのおいしさ＞を語るならば，それは容易に「ちょっと一口」というわけにはいかず，共有可能性の低い体験になりやすくなる。

さらに（8.104）の自然さは，探索意識（「どんな様子だろう。見てやろう」という意気込み）が高ければ，情報を「知識として語るのではなく，体験として語ることが，それだけ自然になる（定延 2008:184）」という考えで説明がつく。つまり，（8.104）において話し手は，「このあなごにマヨネーズをつけたら一体どんな味になるのだろう。やってみよう」という実験（探索）の体験談として，＜あなごのおいしさ＞を語っている。

8.4.5　「まぁー」の品詞論

最後に，8.3.5 節で提示した①文や述語の意味を限定するか否か，②（前後の文脈を想定

せずとも）一語で一行為としてなりたつか否かという基準によって，「まぁー」の品詞論的位置づけを検討しよう。

まず，「まぁー」は，①文や述語の意味に限定を加える。たとえば，次の（8.105）において「まぁー」のある（a）は，「すごくおいしかった」という意味に解釈される。

（8.105）a.　宮島のあなごはまぁーおいしかったですよ。

b.　宮島のあなごはおいしかったですよ。

また，「まぁー」は，②一語で一行為にはならない。単独で「まぁー」とだけ発せられてもどう解釈すればいいのか分からない。この点において，「まぁー」は，感動詞の「マア」とは異なる[84]。

これに対して「まぁー」が単独で使われた場合が，感動詞の「マア」なのであり，両者は実は同じものなのではないかという反論があるかもしれない。しかし，次の（8.106）のように感動詞「マア」と「あら」は，同じ状況で似たような意味で発することができるが，「マア」が（8.107a）のような強調的用法を持つのに対し，「あら」は，そのような用法を持たない。

（8.106）＜あなごを一口食べて＞

a.　マア，おいしいこと！

b.　あら，おいしいこと！

（8.107）a.　日本でリンゴといったら，まぁー青森ですね。

b.??日本でリンゴといったら，あら青森ですね。

また，感動詞「マア」と強調的用法の「まぁー」は，それぞれ連想される発話者像（「発話キャラクタ」[85]）が異なる。感動詞「マア」の発し手として想像されやすいのが『上品な女性』なのに対し，強調的用法の「まぁー」を発し手として想像されやすいのは『あまり上品でない中年』であり，感動詞「マア」と強調的用法の「まぁー」を両方とも使う話し手はあまり想像できない。それゆえ，感動詞「マア」と強調的用法の「まぁー」を同じも

[84] なお，8.3.5 節では，副詞は発話末にも生起し得るが，感動詞は同じものとしては発話末には生起できないという原則を示した。これに従えば，「まぁー」は原則として発話末には生起せず，それゆえ，感動詞的だとの反論があるだろう。しかし，8.4.2 節で論じたように「まぁー」は絶対に発話末に生起できないわけではなく，また，①他の要素を修飾するか有無，②一語文になるか否かを満たすことから，総合的に副詞と判断するのが妥当だと思われる。

[85] 金水（2003:205）は，ある特定の言葉づかいを聞くと，特定の人物像（年齢，性別，性格など）を思い浮かべられる時，その言葉づかいを「役割語」と呼んでいる。役割語から連想される人物像は必ずしも現実の反映とは限らず「ヴァーチャル」である。このヴァーチャルな人物像を定延（2006）は「発話キャラクタ」と呼んでいる。

のとみなす解釈には無理があるように思われる。

以上から，本研究では「まぁー」は感動詞ではなく副詞とするのが妥当だと結論する。

これに対して，なお次のような反論があるかもしれない。すなわち，強調的用法の「まぁー」には，話し手の感動や感嘆（たとえば，(8.105) なら「あなごのおいしさ」への感嘆）が込められていると解釈できる。感動や感嘆といった気持ちに対応するのだから，感動詞とすべきではないかという反論である。たしかに，「まぁー」には，話し手の感動や感嘆が込められているように感じられるし，8.4.3 節で述べたように，「まぁー」は話し手の主観的意見を陳述する発話行為を行う文にのみ生起する。しかし，そうしたことと感動詞という品詞に属することとは同じではない。少なくとも一般的（学校文法的）な意味において，品詞とは，文の成り立ちの観点（述語になるか否か，修飾するか否かなど）からの単語の分類であり，そこにおいて感動詞とは，自立語で活用がなく，主語・述語・修飾語にならない，他の文節から独立した語と定義される。そこには，話し手の感動・感嘆が込められているか否か，主観的か否かといった基準は，いわゆる内容語（詞）と機能語（辞）を分かつことはあっても，感動詞自体の認定には関与しない。

8.5. まとめ

以上，「マア」の用法を大きく，但し書き的用法と強調的用法に分け，それぞれの特徴を記述してきた。但し書き的用法の「まあ」は，言語行為に対して，内心のわだかまりを明示的・非明示的に但し書きする際に用いられる。一方，強調的「まぁー」は，内心のわだかまりを含意せず，「ともかく…だ」のように主張を強調する働きをする。両者は典型的には，「まあ」が高低の音調なのに対し，「まぁー」は低高の音調で延伸を伴って発音される。構文的にも，「まあ」が自由な位置に生起するのに対し，「まぁー」は基本的に発話末には生起しない。また，「まぁー」には主観的な意見を陳述するタイプの発話行為としか共起せず，体験を語る場合においてのみ用いることができるといった違いがある。

また，8.3.4 節では，但し書き的用法，強調的用法とは異なる第３類としてなだめ用法を認めた。なだめ用法の「マア」は相手の行為を制したり，なだめる際に発せられ，「マアマア」，「ママママ」などと連続し得る点に特徴があり，発話末に生起しにくい。

つまり，本研究では，「マア」の用法として，次の５つを認めたことになる。

(8.108)【但し書き的用法・副詞】

a. 日本でリンゴといったら，<u>まあ</u>，青森ですね。

b.　日本でリンゴといったら青森ですね。まあ，長野や岩手も有名ですけど。

(8.109)【強調的用法・副詞】

日本でリンゴといったら，まぁー青森ですね。

(8.110)【なだめ用法・感動詞】

{ マア／マアマア／ママママ }，落ち着いてください。

(8.111)【驚き用法・感動詞】

マア，素敵！

(8.112)【程度副詞】

宮島のあなごはマアマアおいしかった。／マアマアだった。

本章で観察した但し書き的用法の「まあ」と強調的用法の「まぁー」においても，第7章の考察において提示した「反復認知仮説」と同様に，音声現象と文法との密接な関係を見て取ることができた。今後は，「まぁー」と「もー」の異同を考察していきたい。

第９章　結論

本研究では，日本語教育におけるフィラーの指導をより効果的なものにするための基礎的研究として，個々のフィラーの用法，すなわち，個々のフィラーがどのように使い分けられているのかを明らかにすることを目指し，考察を行ってきた。本章では，結論として，以上で論じてきたことをまとめ（9.1 節），本研究の意義と発展の可能性について大局的な視点から論じる（9.2 節）。

9.1　各章のまとめ

第１章では主に，「フィラー」の定義における問題を論じた。具体的には，先行研究におけるトップダウン型のフィラーの定義が「どこまでをフィラーとするか」という外延の認定の基準において不透明であることを明らかにした。それをふまえ，本研究では，先行研究とは逆に，フィラーというカテゴリーをボトムアップに作っていく，すなわち，ひとまず曖昧さを承知で「フィラーらしきもの」を集めておいて，それらの形式の性質・用法を一つ一つ吟味しながら，漸進的にフィラーの内包と外延を精緻化していくという方針を示し，作業仮説的なフィラーの定義として次の（9.1）を提示した。

（9.1）　フィラーとは，「考える」，「思い出す」，「言葉を選ぶ」など，話し手が何らかの情報処理的な心身行動を行っている最中に典型的に発話される感動詞の下位類である。

第２章，第３章では，第１部として，本研究の背景を論じた。

第２章では，本研究の背景として日本語教育におけるフィラーの指導の必要性や方法論に言及した先行研究を概観するとともに，日本語教科書等の調査によってフィラーの指導の現状を調査した。その結果，近年，フィラーの指導の必要性が盛んに主張される一方で，具体性のある教材や指導の方法論は提案されておらず，現状においてフィラーの指導は十分なものとは言えないことが明らかになった。また，今後フィラーの指導を効果的なものにしていくためには「日本語のフィラーの実態の把握」と「個々のフィラーの用法の解明」が必要であることを明らかにした。

第３章では，日本語のフィラーに関する先行研究を概観し，現状において「日本語のフィラーの実態の把握」と「個々のフィラーの用法の解明」がどの程度進んでいるのかを検討した。その結果，前者の，自然談話におけるフィラーの実態の把握はそれなりに進んで

おり，今後のさらなる展開も予想できるが，後者の「個々のフィラーの用法の解明」が現状において十分に進んでいないことを明らかにした。

第４章から第８章は，第２部として「個々のフィラーの用法の解明」を具体的に進めた。

第４章では，本研究の目的，方法論，理論的前提を論じた。本研究では，あるフィラーが「いつ自然に使えて，いつ使えないのか」，「どのような場面で，どのような印象や効果を生じ得るか」，「何種類の用法を区別すべきか」といったフィラーの用法を記述し，個々のフィラーの使い分けを明らかにすることを目的として定めた。また，研究方法・データとして，認知主義的アプローチによる作例・演繹・質的方法を主たる方法として採用し，その欠点を補うために量的方法や実例・帰納的方法を適宜補助的に用いることを述べた。

第５章から第８章までは個々のフィラーの用法の分析を行った。

第５章では，言語形式製作に関わるフィラー「あの（ー）」・「その（ー）」の用法を論じた。まず，これらのフィラーはア系・ソ系指示詞が文法化したものであり，その性質を保持していると仮説を立てた。具体的には「あの（ー）」・「その（ー）」はともに話し手が適正な言語形式を製作するために言語形式の設計図にあたる意味構造を参照するという心内行動に対応し，「あの（ー）」は直接経験領域内の参照に，「その（ー）」は間接経験領域内の参照にそれぞれ対応している，と仮説を立て，アンケート調査およびコーパスの調査の結果によって，それを検証した。その結果，「その（ー）」はソ系指示詞の性質の保持により生起環境が制約されること，「あの（ー）」とア系指示詞との連続性はそれほど強固ではなく生起環境の制約がほとんどないこと，「その（ー）」の用法には，再提出型，推論型，不定型があり，それぞれ特有の効果を派生すること，不定型の「その（ー）」は「あの（ー）」に置き換えにくいこと，が明らかになった。また，「その（ー）」はフィラーとみなすべきだが，「この（ー）」をフィラーと認める必要はないことを論じた。

第６章では，「計算問題を解く」，「犬の名前を思い出す」，「カバンの中から手帳を探す」，「時計を見る」，「論文のタイトルを考える」，「メニューを見て何を食べるか選ぶ」など，何らかの課題解決のために行われる心身行動（以下，「課題解決行動」）の最中に発せられるフィラー「えー（と）」・「うーん（と）」・「そー（ですねー）」・フィラー的な空気すすりの使い分けを論じ，これらのフィラーの使い分けにおいては，「どのような心内行動に対応するか」という What の側面だけではなく，「どのように心内行動に取り組むか」という How の側面もまた重要であることを明らかにした。具体的には，「えーと」は話し手が今取り組んでいる課題は解決できそうだと思っている時に，「うーん」は話し手が今取り組んで

いる課題は解決できないかもしれないと思っている時に，「そー（ですねー）」は，対人コミュニケーションにおいて自分に向けられた問いを解決するために選択を行っている時に，空気すすりは話し手が責任者として課題に取り組む際にそれぞれ発話されることを明らかにした。また，「えーと」，「うーんと」における「と」は「独りで行う作業の区切り」に対応すること，「フィラー的な空気すすり」を感動詞とみなし，フィラーに含めることは，理論的に不可能なことではなく，むしろ日本語における音声コミュニケーションの実態を体系的に理解し，教育に役立てるという目的において有益であることを論じた。

第７章では，「なんか」の用法を論じた。先行研究において「なんか」をフィラーとみなすか，副詞とみなすかについてはさまざまな立場があり，明確な結論は出ていない。そこで本研究では，作業仮説的に「なんか」を副詞とみなし，現象の説明において，この作業仮説が問題なく維持できるかどうかを検討することで，この問題への決着を試みた。その結果，「なんか」の意味や生起環境を説明するには，「なんか」を「今語られる命題情報が，探索によって得られたものだ」ということを表す副詞とみなすのが妥当であることを明らかにした。また「『なーん’か」という特殊な韻律にも言及し，この韻律は認知体験の反復を表しており，「『なーん’か」は「何度探索し直しても，しかじかの情報が得られる」という意味であることを論じた。さらに，先行研究にしばしば見られる「なんか」のフィラー化（無意味化・感動詞化）という主張は根拠が不十分であり，むしろ現象の説明において不利であることを示した。

第８章では，「まあ」の用法を論じた。「まあ」についても，これをフィラーとみなすか，副詞とみなすかについてはさまざまな立場がある。そこで第８章では，「まあ」には，どのような用法があり，それぞれどのような特徴があるのか，「まあ」はいつ使えるのか，「まあ」をどの品詞に位置づけるのが妥当かを検討した。本研究では，「マア」の用法を大きく，但し書き的用法と強調的用法に分けた。但し書き的用法の「まあ」は，言語行為に対して，内心のわだかまりを明示的・非明示的に但し書きする際に用いられる副詞である。一方，強調的「まぁー」は，内心のわだかまりを含意せず，「ともかく…だ」のように主張を強調する働きをする副詞である。両者は典型的には，「まあ」が高低の音調なのに対し，「まぁー」は低高の音調で延伸を伴って発音される。構文的にも，「まあ」が自由な位置に生起するのに対し，「まぁー」は基本的に発話末には生起しない。また，「まぁー」には主観的な意見を陳述するタイプの発話行為としか共起せず，体験を語る場合においてのみ用いることができるといった違いがある。また，但し書き的用法，強調的用法とは異なる第３類と

してなだめ用法を認めた。なだめ用法の「マア」は相手の行為を制したり，なだめる際に発せられる感動詞で，「マアマア」，「ママママ」などと連続し得る点に特徴があり，発話末に生起しにくい。先行研究において「まあ」は，しばしば「えーと」などと類比的にとらえられ（富樫 2002），「発話内容に一切影響を与えない（川田 2007:184）」フィラーの「まあ」の存在が主張されることがあるが，こうした主張は根拠が必ずしも十分ではなく，先行研究においてフィラーと呼ばれてきた「まあ」は但し書き的用法（副詞）として十分解釈可能なことを論じた。

以上の検討を通じて，本研究では以下の（9.2）に示す 7 形式を（9.1）の定義を満たすフィラーとしてみとめ，「まあ」，「なんか」はカテゴリーから除外するのが妥当であると結論した。

（9.2）　「あの（ー）」，「その（ー）」，「えー（と）」，「うーん（と）」，「さー」，「そー（ですねー）」，フィラー的な空気すすり

本研究の（9.1），（9.2）の定義に対して，フィラーを感動詞の下位類とはせず，純粋な談話論的・機能的カテゴリーとして設定し，感動詞・副詞・接続詞といった文論における品詞や意味の有無を問わず，「間をつなぐ」（無音時間を埋める）機能を持つ語はなんであれフィラーとみなすという代案が提出されるかもしれない。しかし，7.5 節で述べたように，仮に「間をつなぐ」という印象だけでフィラーを認定するならば，フィラーの種類は膨大なものになり，フィラーというカテゴリーを設けること自体の意義が薄れてしまうように思われる。加藤重広（2004:225）が指摘するように「ことばが出ていない《無言語の時間》を埋めるという働きは，すべての発話や単語が持って」いる。その中であえてフィラーというカテゴリーを設けるのであれば，それなりの認定基準が必要だろう。そのような基準として本研究では，まず「感動詞か否か」という形による分類を先行させ，その後，「考え中」，「言いよどみ」，「間つなぎ」といった働きによる（主観的な）分類を行うという手順を提案した。

今後は，本研究では検討できなかった形式「こー」や「もー」の性質を検討し，フィラーの定義をさらに精緻化するとともに，本研究で取り上げた形式についての記述をさらに精錬していきたい。

9.2　「話し言葉の文法」にむけて

本節では，本研究の意義と今後の発展の可能性を論じる。

本研究では，日本語教育におけるフィラーの指導をより効果的なものにするためには，基礎的研究として，個々のフィラーがどのように使い分けられているのかを記述することが必要であることを明らかにし，現行の日本語教科書・教材に取り上げられている９形式の用法を記述してきた。なお検討すべき問題は多く残されているものの，本研究における記述が検証や修正を経た上で，日本語教育に応用され，「『まあ』には，…つの用法があり，それぞれ…という特徴がある」，「そこで『なんか』を使うのは不自然である。なぜなら…」，「『あの（一)』と『その（一)』は…といった違いがある」といった指導に供するならば，本研究の目的の大半は果たされたことになる。

しかし，より大局的な視点から本研究の意義を述べるならば，本研究は，日本語の音声コミュニケーションをいかに理論化するか，言い換えれば，日本語の「話し言葉の文法」をいかにして作るかという問題に対しても，本研究なりの立場を提案したつもりである。

そうした本研究の立場がもっとも明確に現れているのが，まず「感動詞か否か」という形による分類を先行させ，その後，「考え中」，「言いよどみ」，「間つなぎ」といった働き（印象）による下位分類を行うフィラーの定義である。

本研究では，「その（一)」をフィラーとみなし，「この（一)」は除外するのはなぜか，「なんか」や「まあ」が副詞か感動詞か，あるいは，空気すすりを感動詞とみなし得るか否かという問題の検討に多くの紙面を費やしてきた。おそらくこうした検討にどれほどの意義があるのか疑問を抱く人が少なからずいるだろう。たとえば，日本語教育への応用だけを目的とするならば，さしあたって重要なのは個々の形式の使い分けを説明することであり，カテゴリーへの帰属などはそれほど問題にならないように思われる。また，現実の談話そのものを直視する会話分析的立場において，「その（一)」，「この（一)」，「なんか」，「まあ」，空気すすりなどの当該文脈における働きそのものこそが重要なのであって，それが「フィラー」，「副詞」，「感動詞」などという人工的なカテゴリーのどれに属するかなど全く問題ではないだろう。

しかし，そうしたことを承知で，本研究はあえてカテゴリーの定義や帰属にこだわった。まず，本研究が「フィラー」というカテゴリーの定義にこだわったのは，今日の日本語研究・日本語教育研究における「フィラー」という用語のあり方に少なからぬ疑問があったからである。管見の限り，先行研究において「日本語のフィラーをいかに定義すべきか」という問題に正面から取り組んだものはない。それにも関わらず，今日の日本語研究・日本語教育において「フィラー」という用語は当然のように用いられ，多くの場合，その定

義や前提があたかも自明であるかのように扱われているのである。

たとえば，近年の日本語のフィラーに関する大規模な研究においても，山根（2002）は，「その（ー）」や「この（ー）」や「まあ」や「なんか」を「フィラー」とみなす一方，Watanabe（2009）は「その（ー）」と「まあ」はフィラーだが，「この（ー）」や「なんか」はフィラーではないとしており，どちらの研究もその措置が何の説明もなく正当化されている。また，「フィラーへの文法化（川田 2007:190）」のような主張が「フィラー」の定義を伴わずに行われ，フィラーの特徴として，「『意味』をもっているとは言えない（田窪 2005:20）」，「実質的意味を持た（川上 1994:77）」ないといったことが明示的な判定基準なしに前提とされている。さらには，そもそもなぜ「フィラー」という新たなカテゴリーを日本語の文法に取り入れる必要があるのかさえ十分には論じられていないように思われる

本研究が疑問を抱き，解消を目指したのは，日本語研究・日本語教育研究における，このような「寄る辺なき『フィラー』の流通」状態である。少なくとも，本研究をなすにあたって，筆者をもっとも苦しめたのは，先行研究のフィラーの定義において暗黙裡に前提とされ，判断される「意味の有無」や「修飾関係の有無」，および，そうした暗黙裡の前提や判断における研究者間の齟齬であった[86]。このような状態を放置することは，やがて「日本語のフィラー」に関する議論の混乱や空転を生み，日本語の音声コミュニケーションへの理解を深める上での少なからぬ弊害になり得るように思われた。

現実の音声コミュニケーションにおいて，言葉の働きはしばしば不透明であり，整然としていないことが多い。しかし，その不透明で整然としていない現象から，可能なかぎり明晰で整然とした秩序，論理を見つけ出し，整理する（それによって，教育に応用したり，機械を作ったり，理解を深めたりする）ことが，理論（文法）の仕事である。だとすれば，理論（文法）で用いられる概念も，可能なかぎりの明晰さ，整然さを持つものでなければならない。不透明で整然としていない現象を，不透明で整然としていない概念で記述しても，不透明で整然としていない理論（文法）ができるだけである。

> およそ語られうることは明晰に語られうる。そして，論じえないことについては，ひとは沈黙せねばならない。　　（Wittgenstein 1918，野矢［訳］2003:9 から引用）

[86] 日本語研究・日本語教育研究のみならず，工学や心理学などの研究者などの隣接分野も含めるならば「実質的意味」や「修飾関係」の有無に関する研究者間の判断は相当の齟齬をきたすように思われる。しかし，それは必ずしも隣接分野の研究者が批判されるべきことではなく，日本語研究・日本語教育研究における暗黙の前提がいかに当たり前のものではないのかを示しているように思われる。

ここで本研究には２つの選択肢があった。1 つは，「フィラーという不透明なカテゴリーの根絶を説き，沈黙する」方向性，もう１つは「フィラーというカテゴリーを明確化し，生き残る道を探る」方向性である。本研究は後者を選んだ。それは，「間をつなぐ」，「考え中」，「言葉を選んでいる」「言いよどみ」といった直感は，われわれの言語生活における紛れもないリアリティであり，それをくみ取れるようなカテゴリー（概念）を設けることが言語理論として望ましい発展の方向性だと思われたからである。本研究が提案するフィラーの定義は，一方では明晰さを志向しつつも，他方では言語生活における実感をくみ取ることを目指したものである。

その定義において，本研究は，副詞や感動詞といった従来の文法概念を尊重し，品詞への帰属の問題にこだわった。それは，こうした概念を生かすことが「あの（ー）」，「えーと」，「なんか」，「まあ」の性質を記述する上で必要だと考えたからである。たとえば，第７章で見たように，「なんか」の生起環境はエビデンシャルの副詞ととらえることできわめて理解しやすくなる。また，フィラーを感動詞の下位類としたのは，これがフィラーの定義を明確化する上で有効だと判断したからにほかならない。

こうした措置は，決して，従来の文法理論を完全なものと認め，是が非でも保持しようとするものではない。むしろ，本研究は，話し言葉の文法においては，従来の書き言葉の文法における前提は適宜見直されるべきだと考える立場を貫いたつもりである。たとえば，7.5 節では，「なんか」の連発を説明するために「修正されるべきなのは，…＜中略＞…『整然とした文』を前提として話し言葉における現象を解釈しようとするわれわれの先入観の方なのではないだろうか」と，「一文に副詞は一つ」という前提を自明視し，その理屈に合わない「なんか」（あるいは「まあ」）に，「無意味」，「フィラー」といった未定義のラベルを貼って，安易に例外とみなす態度を批判した。また，6.4.5 節では，「空気すすり」が感動詞とみなし得ると論じ，「言語行動（単語）と非言語行動（声）の区別」が自明視できないことを論じた。そもそも本研究においてフィラーというカテゴリーを設けること自体が，従来の感動詞という概念の修正の試みでもある。

> 実際の言語を詳しく見れば見るほど，この言語とわれわれの要求するものとの衝突は激しくなる。（論理に結晶のような純粋さを見るのは，調べて分かったことではなく，要求だったのだ。）この衝突は耐え難くなり，われわれの要求はもはや空虚なものになろうとしている。――われわれはツルツルした氷の上に入り込み，摩擦がなく，それ

ゆえある意味で条件は理想的なのだが，まさにそのために歩くことができない。われわれは歩きたいのである。だから，摩擦が必要なのだ。ザラザラした大地へ戻れ！

（Wittgenstein 1953，野矢 2006:351 から引用）

実際の言語，現実の談話は，「明晰」であることや「結晶のような純粋さ」を求める理論化の要求において都合の悪い「摩擦」だらけである。たとえば，ある種の副詞（ないし，副詞的成分）が一文中にいくつも発せられることは決して珍しいことではない。しかし，それは，「例外」，”broken”，”ill-formed”な現象ではなく，「自然」で「普通」の話し言葉の姿である（キャンベル 2006）。むしろ，日常の自然な話し言葉においては「整然とした文」の方がよほど例外的な文の姿だろう。また，「一体となった身振りから声振りだけをひきはがして分離することはできない（大森 1973:110）」と指摘されるように，現実のコミュニケーションにおいて言語行動と非言語行動の境界は必ずしも明瞭ではない。だとすれば，現実のコミュニケーションの姿を正確に描き出し，理解するために，修正されるべきは，理論（文法）の方であり，検討され，明らかにされるべきは，どのような副詞がなぜ連発されるのか，あるいは，何を基準に言語行動とみなすのがなぜ有効か，また，それにどのような限界があるのかである。そうでなければ，われわれの理論はいずれ「ツルツルした氷の上」に迷い込み，空回りしてしまうだろう。「私たちの周りには現実の談話が満ちあふれているだけです。現実の談話以外には，なにも最初から私たちに与えられてはいません（串田・定延・伝 2005，p.i.）」と述べられるように，現実のコミュニケーションの理論化を進め，理解を進めるために必要なのは，今，手持ちの理論の「結晶のような純粋さ」を守ることではない。正しいのは常に，現実の日本語の音声コミュニケーションという「ザラザラした大地」の方だということを忘れるべきではない。

このように，文法の構築においては，一方では，明晰で整然とした理論化を志向しつつも，他方では，不透明で整然としていないように見える現実の談話をそれとして受け入れるというある種の相反した態度が要求されるように思われる。本研究は，従来の理論の成果を可能な限り生かし，接続を図りつつも，現実の談話の観察により適宜修正を加えるという形で，その態度の一つの実践を試みたものであり，本研究におけるフィラーの定義，すなわち，まず，「感動詞か否か」という形による理論的な分類を先行させ，その後，「考え中」，「言いよどみ」，「間つなぎ」といった働き（印象，リアリティ）による下位分類を行うという定義は，「フィラー」という概念によって，われわれ言語生活における実感（リ

アリティ）をくみ取りることを目指しつつも，感動詞や副詞といった従来の概念と共に生き残る道を，本研究なりに模索し，提案したものである。

もちろん，これが磐石の足場とみなせるようなものではないことは十分自覚している。しかし，少なくとも，この定義には，フィラーの定義や前提を自明視してブラックボックス化せずに，議論をオープンなものにするという意義は認められるのではないだろうか。今後，多くの研究者が，これをたたき台に，フィラーの定義を精緻化するという作業に乗り出すことを期待したい。

キャンベル（2006）は，自然な音声コミュニケーションの中で連発される「うーん」,「なんか」,「あの」,「まあ」,「うん」,「あ」,「ふん」,「え」,「ああ」,「ほんま」などの形式は，従来の文法においては，”ill-formed”な現象として周辺的に扱われ，さして重要なものとみなされてこなかったが，頻度において全発話中の約半分を占め,「話し言葉の文法」においては，むしろ中心的で重要な位置を占める，”informed”な要素なのだと主張している[87]。また，音声を媒体としたコミュニケーションにおいて，こうした形式は，声（韻律や声質）によって「意味や意図が大きく変わる（p.25）」。本研究では,「なんか」と「なーんか」（第７章),「まあ」と「まぁー」（第８章）の考察において，これらの形式の”informed”な姿の一端を見た。また，それが文末表現との共起や生起し得る構文などの従来の文法とも無関係ではないことを示した。

今後は，本研究で考察しきれなかった形式の用法，使い分けの記述をさらに進め,「話し言葉の文法」の姿を可能な限り明晰に描き出していきたい。

[87] キャンベル（2006）は,「あんな，明日な，九州に行くんよ」のような発話における「あんな」,「な」,「んよ」などの要素の情報として重要性を強調するために,「明日，九州に行く」の部分を「フィラー（filler）」と呼びさえする。

謝辞

私が日本語のフィラーの研究をはじめたきっかけは，2002 年 12 月頃にボランティアとして参加していた上級の日本語クラスの一人の日本語学習者でした。彼のスピーチは，「なんとか」，「うー」，「おー」などの形式が頻繁に発せられ，とても聞きやすいものではありませんでした。あるボランティアが「えー」，「えーと」，「あのー」などを使った方がいいとアドバイスしたところ，彼はどうやって使い分ければいいのかと質問しました。クラスの誰もが彼が満足するような説明ができず，当時，レポートのテーマに困っていた私は，これを調べて彼に教えたいと思いました。しかし，本や論文からはそのような情報はあまり得られませんでした。そこで，自分で考えてみることにしました。

博士論文を書き上げて，何より驚いたのは，この論文の姿が 2003 年春頃に提出した卒業論文の研究計画書ほとんどそのままだということです。石の上にも３年（×２）。日本語クラスで会った「あなた」。お名前は思い出せないのですが（ごめんなさい），今ならあなたを少しは満足させられるかもしれません。本研究があるのはあなたのご質問のおかげです。

また，本研究は，多くの方々のご助言・ご指導・お励ましに支えられたものです。とりわけ，３人の恩師，松木正恵先生（卒業論文，早稲田大学），佐久間まゆみ先生（修士論文，早稲田大学），定延利之先生（博士論文，神戸大学）には，たいへん多くのことを教えていただきました。フィラーの研究は開始１ヶ月ほどで早くも頓挫しましたが，松木先生の「あなたならできる」の一言にプライドをくすぐられ，みごと復活を果たしました。佐久間先生は，初めての学会発表を前にビビる私に「ケンカしてくればいいんですよ」という主旨のアドバイスをくださり，意見の衝突を恐れず，自分の考えを言う勇気と根性がなければ研究なんかできないということを私に教えてくださいました。そして定延先生。研究をはじめて以来，他分野の研究者と連携しながら「ザラザラした大地」で格闘する先生の「男の背中」はたえず私を鼓舞し，「研究は一人ではなく，みんなで楽しくやるものだ」ということを教えていただきました。気がつけば私は神戸で楽しく阿波踊りを踊っていました。

なお，本研究は，日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究（A）「人物像に応じた音声文法」（課題番号：19202013，研究代表者：定延利之），基盤研究（B）「現代日本語感動詞の実証的・理論的基盤構築のための調査研究」（課題番号：19320067，研究代表者：友定賢治）のご支援を受けています。ここに記して感謝申し上げます。

2010 年 1 月

【参考文献】

【学術論文・著書】

石黒圭（2008a）『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房

石黒圭（2008b）『文章は接続詞で決まる』光文社新書

井上史雄・荻野綱男・秋月高太郎（2007）『デジタル社会の日本語作法』岩波書店.

岩崎勝一（2007）「会話にとって＜文＞とは何か」『言語』36-3，pp.30-35，大修館書店

岩崎勝一・大野剛（2007）「『即時文』・『非即時文』―言語学の方法論と既成概念―」，串田秀也・定延利之・伝康晴（編）『シリーズ文と発話３　時間の中の文と発話』, pp.135-157, ひつじ書房

上山あゆみ（2000）「日本語から見える「文法」の姿」『日本語学』19-5，pp．169－183, 明治書院

エメット啓子（2001）「「なんか」―会話への積極的参加を促すインターアクショナルマーカー」，南雅彦・アラム佐々木幸子編（2001）『言語学と日本語教育Ⅱ』，pp.201-217, くろしお出版

大野剛・キンベリー　ジョーンズ（2001）「会話における認知的側面と話者間の相互作用　日本語教育への提言」，南雅彦・アラム鈴木幸子編（2001）『言語学と日本語教育Ⅱ』, pp.181-196，くろしお出版

大橋照子（2009）『大橋照子の話し方教室』日本経済新聞出版社.

大森荘蔵（1973）「ことだま論―言葉と『もの-ごと』」,『物と心』（大森荘蔵 1976）, pp.103-154, 東京大学出版会

大森荘蔵（1981）『流れとよどみ―哲学断章―』，産業図書

岡崎敏雄（1987）「談話の指導―初～中級を中心に―」,『日本語教育』62，pp.165-178

尾崎明人（1981）「外国人の日本語の実態　（2）上級日本語学習者の伝達能力について」, 『日本語教育』45 号，pp.41-52，日本語教育学会

尾上圭介（1999）『大阪ことば学』創元社（文庫版 2004 年講談社）

籠宮隆之（2004）「音声収録作業の概要 version1.0」,『日本語話し言葉コーパス』Disk1.

加藤重広（2004）『日本語語用論のしくみ』研究社

加藤重広（2006）『日本語文法入門ハンドブック』研究社

加藤豊二（1999）「談話標識「まあ」についての一考察」『日本語・日本語教育論集』６, pp.21-36，名古屋学院大学

金田純平（2008）「発話中の話者による頭の動き―のけぞりと顎刻み―」,『日本語・英語・中国語の対照に基づく，日本語の音声言語の教育に役立つ基礎資料の作成　平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究(A)）研究成果報告書』，pp.109-118.

川上恭子（1991）「「何か」の不定対象と文形式」『園田語文』６，pp.101 - 121

川上恭子（1992）「談話における『なにか』について」『園田国文』13，pp.73-82

川上恭子（1993）「談話における『まあ』の用法と機能（一）―応答型用法の分類―」,『園田国文』14，pp.69-78

川上恭子（1994）「談話における『まあ』の用法と機能（二）―展開型用法の分類―」『園田国文』15，pp.69-79

川田拓也（2007）「日本語談話における「まあ」の役割と機能」，南雅彦（編）『言語学と日本語教育Ｖ』くろしお出版，pp.175-192.

川田拓也（2008）「ポスター会話におけるフィラーと視線の同期について」『京都大学言語学研究』27，pp.151-168.

金水敏（1990）「指示詞と談話の構造」,『言語』19-4，pp.60-67，大修館書店

金水敏（1992）「談話管理理論からみた『だろう』」『紀要』19，pp.41-59，神戸大学文学部

金水敏（1999）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6-4，pp.67-91，　自然言語処理学会

金水敏（2000）「直示再考」，中村明編『別冊国語学 No.53　現代日本語必携』，pp.160-163，学燈社

金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』岩波書店

金水敏・田窪行則（1990）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」,『認知科学の発展』３，pp.85-116，講談社

金水敏・田窪行則（1992）「日本語指示詞研究史から／へ」，金水敏・田窪行則編（1992）『日本語研究資料集１指示詞』，pp.151-192，ひつじ書房

串田秀也（1999）「助け舟とお節介　会話における参与とカテゴリー化に関する一考察」，好井裕明・山田富秋・西坂仰編（1999）『会話分析への招待』，pp.124-147，世界思想社

串田秀也（2006a）「会話分析の方法と論理」，伝康晴・田中ゆかり（編）『講座社会言語科学６　方法』，pp.188-206，くろしお出版

串田秀也（2006b）『相互行為秩序と会話分析　「話し手」と「共 - 成員性」をめぐる参加

の組織化』世界思想社
串田秀也・定延利之・伝康晴［編］(2005)『シリーズ文と発話１　活動としての文と発話』，ひつじ書房
串田秀也・定延利之・伝康晴［編］(2007)『シリーズ文と発話３　時間の中の文と発話』，ひつじ書房
串田秀也・定延利之・伝康晴［編］(2008)『シリーズ文と発話２　「単位」としての文と発話』，ひつじ書房
久野暲（1973）『日本文法研究』，大修館書店
小池康（2006）「モダリティ副詞としてのドウモ　―ドウヤラ・ナンカ（ナニカ）・ナンダカ・ナントナクとの関連において―」『日本語教育論集』21，pp.1-18，筑波大学留学生センター.
小磯花絵・間淵洋子・西山賢哉・斉藤美紀・前川喜久雄 (2004)「転記テキストの仕様 Version 1.0」，『日本語話し言葉コーパス』Disk1
小出慶一（1983）「言いよどみ」，水谷修編（1983）『講座日本語の表現［３］話し言葉の表現』，pp.81-88，筑摩書房
小林ミナ（2005）「コミュニケーションに役立つ日本語教育文法」，野田尚史編（2005）『コミュニケーションのための日本語教育文法』，pp.23-41，くろしお出版.
小林ミナ（2007）『外国語として出会う日本語』岩波書店.
国立国語研究所他（2004）『日本語話し言葉コーパス』
国立国語研究所他（2008）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』2008 年度モニター版」
佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編（1997）『文章・談話のしくみ』，おうふう.
定延利之（1999）「語られるスキャニング，語るためのスキャニング」，『国際文化学』創刊号，pp.151-154，神戸大学国際文化学会.
定延利之（2000）『認知言語論』，大修館書店
定延利之（2002）「「インタラクションの文法」に向けて――現代日本語の擬似エビデンシャル――」，『京都大学言語学研究』21，pp.147-185
定延利之（2002）「「うん」と「そう」に意味はあるか」，『「うん」と「そう」の言語学』，pp.75-112，ひつじ書房
定延利之(2004)「音声コミュニケーション教育の必要性と障害」,『日本語教育』123, pp.1-56, 日本語教育学会

定延利之（2005a）「「表す」感動詞から「する」感動詞へ」,『言語』34-11，pp.33-39，大修館書店

定延利之（2005b）『ささやく恋人，りきむレポーター　　口の中の文化』，岩波書店

定延利之（2006）「ことばと発話キャラクタ」,『文学』7 - 6，pp.117-129，岩波書店

定延利之（2007）「日本人が空気をするとき」，定延利之・中川正之（編）『音声文法の対照』，pp.129-147，くろしお出版

定延利之（2008）『煩悩の文法―体験を語りたがる人々の欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話』筑摩書房

定延利之・澤田浩子（2007）「発話キャラクタに応じたことばづかいの研究とその必要性」,『2007 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』，pp.83-88.

定延利之・田窪行則（1993）「談話における心的操作モニター機構―心的操作標識「ええと」と「あの（一）」―」,『音声文法の試み』，pp.15-33，文部省重点領域研究「日本語における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」

定延利之・田窪行則（1995）「談話における心的操作モニター機構―心的操作標識「ええと」と「あの（一）」―」,『言語研究』108，pp.74-93

定延利之・中川明子（2005）「非流ちょう性への言語学的アプローチ―発音の延伸，とぎれを中心に―」，串田秀也・定延利之・伝康晴（編）『シリーズ文と発話 1　活動としての文と発話』，pp.209-228，ひつじ書房

塩沢孝子（1979）「日本語の Hesitation に関する一考察」，F.C.パン編『ことばの諸相』言語社会学シリーズ No.2，pp.151-166，文化評論出版

庄司惠雄(1998)「流暢さとは何か　考察その 1：反応速度について『反応速度が遅い』と判定される発話の特質」,『岡山大学留学生センター紀要』第 5 号，pp.17-33

鈴木佳奈（2000）「会話における『なんか』の機能に関する一考察」,『大阪大学言語文化学』9，pp.63-78，　大阪大学言語文化学会

泉子・K・メイナード（2005）『［日本語教育の現場で使える］談話表現ハンドブック』くろしお出版

大工原勇人（2003）『日本語教育のためのフィラー研究―その方向性の模索―』，早稲田大学教育学部平成 15 年度卒業論文（未公刊）

大工原勇人（2006）「日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究―指示詞系フィラー「あの（一）」・「その（一）」を中心に―」，早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文（未公刊）
大工原勇人（2008）「指示詞系フィラー『あの（ー）』・『その（ー）』の用法」,『日本語教育』138，pp.80-89.
大工原勇人（2009）「副詞『なんか』の意味と韻律」,『日本語文法』9-1，pp.37-53.
大工原勇人（2009）「副詞『まあ』の 2 用法―但し書き的『まあ』と強調的『まぁー』」,『日本語学会 2009 年度春季大会予稿集』，pp.37-44.
高橋太郎・金子尚一・金田章宏・齋美智子・鈴木泰・須田淳一・松本泰丈（2005）『日本語の文法』ひつじ書房
田窪行則（1989）「文脈理解－文脈のための言語理論」『情報処理』30-10，pp.1191-1198，情報処理学会
田窪行則（1992）「談話管理の標識について」,『文化言語学―その提言と建設―』，pp.1097-1110，三省堂
田窪行則（1995）「音声言語の言語学的モデルをめざして―音声対話管理標識を中心に―」『情報処理』36-11，pp.1020-1026，情報処理学会
田窪行則（2005）「感動詞の言語学的位置づけ」,『言語』34-11，pp.14-21，大修館書店
田窪行則・金水敏（1996）「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3，pp.59-74
田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」,『音声と文法』，pp.257-279，くろしお出版
堤良一（2004）「アノー・ソノー」，岡山国語談話会発表資料（未公刊）
寺尾康（2002）『言い間違いはどうして起こる？』岩波書店
時枝誠記（1941）『国語学原論』，岩波書店
時枝誠記（1950）『日本文法　口語篇』，岩波書店
時枝誠記（1955）『国語学原論　続篇』岩波書店
冨樫純一（2001a）「あいづち表現形式に見る心内の情報処理操作について」『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書』，pp.27-41，筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究組織
冨樫純一（2001b）「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語研究』6，pp.19-41，筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
冨樫純一（2002a）「談話標識「ふーん」の機能」『日本語文法』2-2，pp.95-111，日本語文法学会

冨樫純一（2002b）「談話標識「まあ」について」『筑波日本語研究』７，pp.15-31，筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
中田智子（1991）「談話における副詞の働き」，『日本語教育指導参考書 19　副詞の意味と用法』，pp.81-107，国立国語研究所
西坂仰（1999）「会話分析の練習　相互行為資源としての言いよどみ」，好井裕明・山田富秋・西坂仰編（1999）『会話分析への招待』，pp.71-100，世界思想社
ニック・キャンベル（2006）「音声コミュニケーションによる気持ちのやり取り」，『音声と文法Ｖ』，pp.19-29，くろしお出版.
日本記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法７　談話・待遇表現』くろしお出版.
野田尚史（編）（2005）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
野村美穂子（1996）「大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語―『フィラー』に注目して―」，『文教大学教育研究所紀要』第 5 号，pp.91-99
野矢茂樹（1999）『哲学・航海日誌』，春秋社
野矢茂樹（2006）『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』，筑摩書房
畠弘巳（1982）「コミュニケーションのための日本語教育」，『月刊言語　十周年記念臨時増刊』Vol.13No.11，pp.56-71，大修館書店
畠弘巳（1988）「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」『日本語学』Vol.7No.3，pp.100-117，明治書院
林宅男編著（2008）『談話分析のアプローチ　理論と実践』研究社
堀口純子（1995）「話しことばに迫る」，林四郎編『応用言語学講座第 1 巻　日本語の教育』，pp.250-268，明治書院
ポリー・ザトラウスキー（1993）『日本語の談話の構造分析―勧誘のストラテジーの考察』，くろしお出版
ポリー・ザトラウスキー（2005）「情報処理，相互作用，談話構造からみた倒置と非言語行動との関係」，串田秀也・定延利之・伝康晴（編）『シリーズ文と発話１　活動としての文と発話』，pp.159-208，ひつじ書房
益岡隆志（2003）『三上文法から寺村文法へ　日本語記述文法の世界』くろしお出版
三上章　（1972）『現代語法新説』くろしお出版
南不二男（1997）『現代日本語研究』三省堂
森川結花（1991）「不定表現について―「なにか」を中心に――」『日本語・日本文化』17，

pp.145-160，大阪外国語大学留学生別科・日本語学科
森下朝日（2002）『感情と感情を規定する社会文化的要因についての対人相互作用的アプローチ』，神戸大学大学院総合人間科学研究科博士論文
森本順子（1994）『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
森山卓郎（1989）「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1，pp.63-88
山内博之（2005a）『OPI の考え方に基づいた日本語教授法―話す能力を高めるために―』ひつじ書房
山内博之（2005b）「話すための日本語教育文法」，野田尚史（編）『コミュニケーションのための日本語教育文法』pp.147-165，くろしお出版
山内博之（2009）『プロフィシェンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房
山下暁美（1990）「話し言葉におけるいわゆる“無意味語”」,『講座日本語教育』25, pp.108-118, 早稲田大学日本語研究教育センター
山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
羅米良（2008）「キャラクタと『笑い』のオノマトペ」,「日本語音声コミュニケーション教育研究科ワークショップ」（2008 年 7 月 24 日，於神戸大学）発表資料（未公刊）
渡辺美知子・伝康晴・広瀬啓吉・峯松信明（2004）「節境界の種類とフィラーの出現頻度」,『日本音声学会第 18 回全国大会予稿集』，pp.65-70，日本音声学会
渡辺美知子・広瀬啓吉・伝康晴・峯松信明（2006）「音声聴取時のフィラーの働き―『エート』による後続句の複雑さ予測」『日本音響学会誌』62-5，pp.370-378.
Austin, J.L. （1962）*How to Do Things with Words*. Oxford University Press.［邦訳：オースティン『言語と行為』坂本百大訳，大修館書店，1978 年］
Brown, G. (1977) *Listening to spoken English.* Longman.
Brown and Levinson （1987）*Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University press.
Chafe, Wallace L.（1970）*Meaning and Structure of Language*. The University of Chicago Press.［邦訳：ウォーレス・チェイフ『意味と言語構造』青木晴夫訳，大修館書店，1974 年］
Chafe, Wallace L.（1994）*Discourse, Consciousness, and Time*. Chicago: University of Chicago Press.
Cook, H. M. (1993) Functions of the filler ano in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics*,

3. pp.19-38.

Coulthard, M. (1977) *An Introduction to discourse analysis.* Longman.［邦訳：マルコム・クールタード『談話分析を学ぶ人のために』吉村昭市・貫井孝典・鎌田修訳，世界思想社，1999 年］

Fauconnier, Gills.（1985）*Mental Spaces*. Cambridge: Cambridge University Press.［邦訳：ジル・フォコニエ『メンタル・スペース（新版）』，坂原茂・水光雅則・田窪行則・三藤博訳，白水社，1996 年］

Foley, William, A. and R.D. Van Valin. (1984) *Functioal Syntax and Universal Grammar*: Cambridge: Cambridge University Press.

Givón, Talmy (1982) Evidentiality and epistemic space, *Studies in Language* 6:1, pp.23-49.

Grice, H. P. （1989） *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press. ［邦訳：グライス『論理と会話』清塚邦彦訳，勁草書房，1998 年］

Halliday, M. A. K. and R. Hasan（1976） *Cohesion in English.* London: Longman.

Hopper, Paul J. (1991) On some principles of grammaticization. Traugott, Elizabeth Closs and Bernd Heine (eds.) *Approaches to grammaticalization Vol. 1*. pp.17-35. Amsterdam: Jhon Benjamins.

Jackendoff, Ray. （1994） *Patterns in the Mind: Language and Human Nature*. New York: Basic Books.［邦訳：レイ・ジャッケンドフ『心のパターン――言語の認知科学入門』水光雅則訳，岩波書店，2004 年］

Jackendoff, Ray. （2002） *Foundations of Langua*ge. Oxford University Press. ［邦訳：レイ・ジャッケンドフ『言語の基盤　脳・意味・文法・進化』郡司隆男訳，岩波書店，2006 年］

Kendon, A.（1967）Some functions of gaze-direction in social interaction. *Acta Psychologica*, 26, 22-63.

Langacker, Ronald W.（2001）Discourse in Cognitive Grammar. *Cognitive Linguistics* 12:2. pp.143-188.

Levelt, W. J. M.（1989） *Speaking: From intention to articulation*. MIT Press.

Maynard, K. S.（1989）*Japanese conversation*. Norwood, NJ: Ablex.

Maynard, K. S.（2009）*An Introduction to Japanese Grammar and Conversation*

Strategies [Revised Edition]（邦題『日本語の文法とコミュニケーションストラテジー［改定版］』, The Japan Times.

Schegloff, E.（1968）Sequencing in Conversational Openings, *American Anthropologist*. 70(6), pp.1075-1095.

Searle, J. R. (1969) *Speech Acts: An Essay in Philosophy of Language*. Cambridge University Press.［邦訳：サール『言語行為―言語哲学への試論』坂本百大・土屋俊訳，勁草書房，1986 年］

Searle, J. R. (1975) "A Taxonomy of Illocutionary Acts", in Searle, J.P. (1979) ,pp.1-29.

Searle, J. R. (1979) *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*, Cambridge University Press.

Sperber, D. and Wilson, D. (1986 [Second Edition 1995]) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. ［邦訳：スペルベル，ウィルソン『関連性理論―伝達認知（第 2 版）』内田聖二・中逵俊明・宋南先・田中圭子訳，研究社出版，1999 年］

Talmy, Leonard.（1983）How language structures space, Spatial orientation: Theory, research and application, H. Pick nd L. Acredolo（eds）, pp.225-282. New York:Plenum Press.

van Dijk, T.（1972）*Some Aspects of Text Grammar*. The Hague: Mounton.

Watanabe, M.（2002）Fillers and Connectives as Discourse Segment Boundary Markers in an Academic Monologue in Japanese,『東京大学留学生センター紀要』12, pp.107-119

Watanabe, M.（2009）*Features and Roles of Filled Pauses in Speech Communication,* Hituzi Syobo Publishing.

Wells, J. C. (2006) *English Intonation An introduction,* Cambridge University Press.

Wittgenstein（1918）*Tractatus Logico-Philosophicus*, Dover Publication, (published in 1998). ［邦訳：ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』野矢茂樹訳，岩波書店，2003 年］

Wittgenstein（1953）*Philosophical Investigation*, Basil Blackwell.. ［邦訳：ウィトゲンシュタイン『ウィトゲンシュタイン全集８　哲学探究』藤本隆志訳，大修館書店，1976 年］

Yngve, V. H. （1970） On Getting a Word in Edgewise. Paper from the 6th Regional Meeting of Chicage Linguistics Society. pp.567-578.

Yukinori, Takubo & Satoshi, Kinsui（1997） Discouse management in terms of mental spaces. *Journal of pragmatics* 28. pp.741-758.

【日本語教科書・教材等】

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版

社会法人国際日本語普及協会（1995）『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE Ⅰ KANA VERSION（コミュニケーションのための日本語Ⅰ かな版）』，講談社インターナショナル株式会社

社会法人国際日本語普及協会（1996）『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE Ⅱ KANA VERSION（コミュニケーションのための日本語Ⅱ かな版）』，講談社インターナショナル株式会社

社会法人国際日本語普及協会（1997）『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE Ⅲ KANA VERSION（コミュニケーションのための日本語Ⅲ かな版）』，講談社インターナショナル株式会社

スリーエーネットワーク編著（1998）『みんなの日本語 初級Ⅰ本冊』スリーエーネットワーク

スリーエーネットワーク編著（1998）『みんなの日本語 初級Ⅱ本冊』スリーエーネットワーク

スリーエーネットワーク編著（1998）『みんなの日本語 初級Ⅰ翻訳・文法解説 英語版』スリーエーネットワーク

スリーエーネットワーク編著（1998）『みんなの日本語 初級Ⅱ翻訳・文法解説 英語版』スリーエーネットワーク

東京大学 AIKOM 日本語プログラム 近藤安月子・丸山千歌［編］（2001）『中・上級日本語教科書 日本への招待 テキスト』東京大学出版会

土岐哲・関正昭・平高史也・新内康子・鶴尾能子（1995）『日本語中級 J301―基礎から中級へ―英語版』スリーエーネットワーク

名古屋大学日本語教育研究グループ編（2002）『A COURSE IN MODERN JAPANESE ［REVISED EDITION］VOLUME ONE.』名古屋大学出版会

名古屋大学日本語教育研究グループ編（2002）『A COURSE IN MODERN JAPANESE ［REVISED EDITION］VOLUME TWO』名古屋大学出版会

名古屋大学日本語教育研究グループ編（1988）『A COURSE IN MODERN JAPANESE VOLUME THREE』（現代日本語コース中級Ⅰ）名古屋大学出版会

名古屋大学日本語教育研究グループ編（1989）『A COURSE IN MODERN JAPANESE VOLUME FOUR』（現代日本語コース中級Ⅱ）名古屋大学出版会

名古屋 YMCA 教材作成グループ（2002）『わかって使える日本語』スリーエーネットワーク

文化外国語専門学校（2000）『新文化初級日本語Ⅰ』凡人社

文化外国語専門学校（2000）『新文化初級日本語Ⅱ』凡人社

文化外国語専門学校（2000）『新文化初級日本語Ⅰ　教師用指導手引き書』凡人社

文化外国語専門学校（2000）『新文化初級日本語Ⅱ　教師用指導手引き書』凡人社

Miura, A. & McGloin, N. H.（2008）『An Integrated Approach to Intermediate Japanese ［Revised Edition］』（中級の日本語［改定版］）The Japan Times

山内博之（2000）『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』アルク

Johnson, Y.（2008）*Fundamentals of Japanese Grammar* University of Hawai Press.